岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第366集

東舘Ⅱ遺跡発掘調査報告書

水沢家畜保健衛生所建設事業関連遺跡発掘調査

㈶岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

東館Ⅱ遺跡発掘調査報告書

水沢家畜保健衛生所建設事業関連遺跡発掘調査

序

豊かな自然に恵まれた岩手県には、縄文時代をはじめとする数多くの遺跡や重要な文化財が残されております。これら多くの先人たちの創造してきた文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民一人ひとりに課せられた責務であります。

一方では、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な施策であります。発掘により遺跡が消滅することはまことに惜しいことではありますが、その反面、それまで闇につつまれていた先人の営みに光明があたるのも事実であります。

このような埋蔵文化財の保護や保存と開発との調和も今日的課題であり、財団法人岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センター創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する処置をとって参りました。

本書は、岩手県農政部畜産課による水沢家畜保健衛生所建設事業に関して、平成11年度に発掘調査を実施した水沢市東舘Ⅱ遺跡の調査結果をまとめたものです。遺跡は胆沢扇状地における水沢高位段丘の末端上に立地しており、今回の調査では古代の竪穴住居跡をはじめ中世城館跡に伴う堀跡や掘立柱建物跡などが検出され、またそれに伴う遺物も出土し、古代及び中世を主とする遺跡であることが明らかになりました。

本書が広く活用され、考古学の研究に寄与するとともに埋蔵文化財に対する関心と理解を一層深め、また役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にご協力とご援助を賜りました岩手県農政部畜産課や水沢市教育委員会をはじめとする多くの関係機関・関係各位に深く感謝申し上げます。

平成12年10月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　　千　葉　浩　一

例　　言

1．本報告書は、岩手県水沢市佐倉河字東舘39番地ほかに所在する東舘Ⅱ遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。

2．本調査は、水沢家畜保健衛生所の建設に伴い遺跡の一部が消滅するため、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。調査は岩手県農政部畜産課と岩手県教育委員会事務局文化課との協議を経て、㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。

3．岩手県遺跡登録台帳に記載される遺跡番号・遺跡略号はＮＥ16－0315・ＨＤⅡ－99である。

4．発掘調査期間、発掘調査面積、調査担当者は次のとおりである。

　発掘調査期間　平成11年４月９日～６月28日

　発掘調査面積　1,340㎡

　調査担当者　　文化財専門調査員　朝倉雄大・吉田充

5．室内整理期間と整理担当者は次のとおりである。

　室内整理期間　平成11年11月１日～平成12年２月15日

　整理担当者　　文化財専門調査員　朝倉雄大

6．本報告書の執筆は、Ⅰ．調査に至る経過は委託者が担当し、その他は朝倉雄大が担当した。

7．遺物の分析・鑑定は次の方々及び機関に依頼した。(敬称略)

　石質鑑定　　花崗岩研究会（会長：矢内桂三　岩手大学工学部教授）

　鉄関連遺物の分析　赤沼英男（岩手県立博物館主任専門学芸調査員）

8．野外調査及び報告書作成にあたり、次の方々にご協力・ご指導いただいた。(順不同・敬称略)

　水沢市教育委員会　伊藤博幸・千田幸生・佐藤良和（財団法人水沢市埋蔵文化財調査センター）千葉周秋（金ヶ崎町中央生涯教育センター）　及川洵（江刺市教育委員会）　寺島文隆・能登谷宣康（財団法人福島県文化センター）　及川源悦郎（及源鋳造株式会社）　廣瀬愼（工房ヒロ）　及川浩二（東北電力株式会社原町火力発電所建設所）

9．野外調査では水沢市の他、胆沢町や金ヶ崎町の作業員21名、室内整理では当センターの期限付職員４名のご協力をいただいた。

10．土層の観察には、『新版標準土色帖』（小林・竹原：1989）を使用した。

11．遺跡内の基準点測量・基準杭の設置は、㈱アクト技術開発に委託した。

12．野外調査終了直前に行った航空写真撮影は、㈱パスコに委託した。

13．調査成果の一部を発表した現地公開資料や調査略報と本報告書における記載事項が異なる場合は、全て本報告書が優先する。

14．調査で得られた出土遺物や整理に関わる諸記録等については、岩手県埋蔵文化財センターで保管・管理している。

目　　次

序
例言

〔本　　文〕

Ⅰ．調査に至る経過 …… 3
Ⅱ．遺跡の立地と環境 …… 3
　1．位置及び立地 …… 3
　2．地理的環境 …… 3
　3．地形・地質 …… 5
　4．基本土層 …… 7
　5．周辺の遺跡 …… 9
Ⅲ．野外調査と室内整理の方法 …… 22
　1．野外調査 …… 22
　2．室内整理 …… 23
Ⅳ．検出された遺構と遺構内出土遺物 …… 25
　1．竪穴住居跡 …… 25
　2．竪穴状遺構 …… 43
　3．掘立柱建物跡 …… 44
　4．柱穴列 …… 54
　5．土坑 …… 57
　6．溝跡 …… 68
　7．堀跡 …… 70
　8．橋脚跡 …… 74
　9．塀跡 …… 75
　10．円形周溝 …… 75
　11．溝状遺構 …… 78
　12．その他の遺構 …… 80
　　(1)　集石遺構 …… 80
　　(2)　柱穴 …… 80
Ⅴ．遺構外出土遺物 …… 110
Ⅵ．まとめ …… 121
　1．奈良・平安時代の遺構と遺物 …… 121
　2．中世の遺構と遺物 …… 127
　3．おわりに …… 131
付篇　分析鑑定 …… 135

〔表〕

第1表　周辺の遺跡一覧表 …… 10
第2表　水沢市の中世城館一覧表 …… 15
第3表　柱穴一覧表 …… 82
第4表　出土遺物観察表 …… 115
第5表　遺構別出土土器分類表 …… 125

〔図　　版〕

第1図　遺跡位置図(1) …… 1
第2図　遺跡位置図(2) …… 2
第3図　地形図 …… 4
第4図　胆沢扇状地における段丘区分図 …… 6
第5図　基本土層 …… 8
第6図　周辺の遺跡 …… 13
第7図　水沢市の中世城館跡 …… 16
第8図　絵図 …… 17･18
第9図　地籍図 …… 19
第10図　グリッド配置図 …… 22
第11図　凡例 …… 24
第12図　第1号竪穴住居跡(1) …… 26
第13図　第1号竪穴住居跡(2) …… 27
第14図　第2号竪穴住居跡 …… 28

第15図　第３号竪穴住居跡 …… 29
第16図　第４号竪穴住居跡(1) …… 31
第17図　第４号竪穴住居跡(2) …… 32
第18図　第５号竪穴住居跡 …… 33
第19図　第６号竪穴住居跡 …… 35
第20図　第７号竪穴住居跡 …… 36
第21図　第８号・９号竪穴住居跡(1) …… 39
第22図　第８号・９号竪穴住居跡(2) …… 40
第23図　第８号・９号竪穴住居跡(3) …… 41
第24図　第10号竪穴住居跡 …… 42
第25図　第１号竪穴状遺構 …… 43
第26図　第１号掘立柱建物跡(1) …… 45
第27図　第１号(2)・２号掘立柱建物跡 …… 46
第28図　第３号・４号掘立柱建物跡 …… 48
第29図　第５号・６号掘立柱建物跡 …… 50
第30図　第７号・８号掘立柱建物跡 …… 51
第31図　第９号・10号掘立柱建物跡 …… 53
第32図　柱穴列(1) …… 56
第33図　柱穴列(2) …… 57
第34図　土坑(1) …… 60
第35図　土坑(2) …… 63
第36図　土坑(3) …… 66
第37図　土坑(4) …… 69
第38図　溝跡 …… 71
第39図　第１号堀跡 …… 73
第40図　第２号堀跡 …… 74
第41図　第１号橋脚跡 …… 76
第42図　第１号塀跡 …… 77
第43図　第１号円形周溝 …… 78
第44図　溝状遺構 …… 79
第45図　集石遺構 …… 81
第46図　遺構内出土遺物(1) …… 93
第47図　遺構内出土遺物(2) …… 94
第48図　遺構内出土遺物(3) …… 95
第49図　遺構内出土遺物(4) …… 96
第50図　遺構内出土遺物(5) …… 97
第51図　遺構内出土遺物(6) …… 98
第52図　遺構内出土遺物(7) …… 99
第53図　遺構内出土遺物(8) …… 100
第54図　遺構内出土遺物(9) …… 101
第55図　遺構内出土遺物(10) …… 102
第56図　遺構内出土遺物(11) …… 103
第57図　遺構内出土遺物(12) …… 104
第58図　遺構内出土遺物(13) …… 105
第59図　遺構内出土遺物(14) …… 106
第60図　遺構内出土遺物(15) …… 107
第61図　遺構内出土遺物(16) …… 108
第62図　遺構内出土遺物(17) …… 109
第63図　遺構外出土遺物(1) …… 112
第64図　遺構外出土遺物(2) …… 113
第65図　遺構外出土遺物(3) …… 114
第66図　奈良・平安時代の遺構変遷図 …… 126
第67図　中世遺構分布図 …… 130

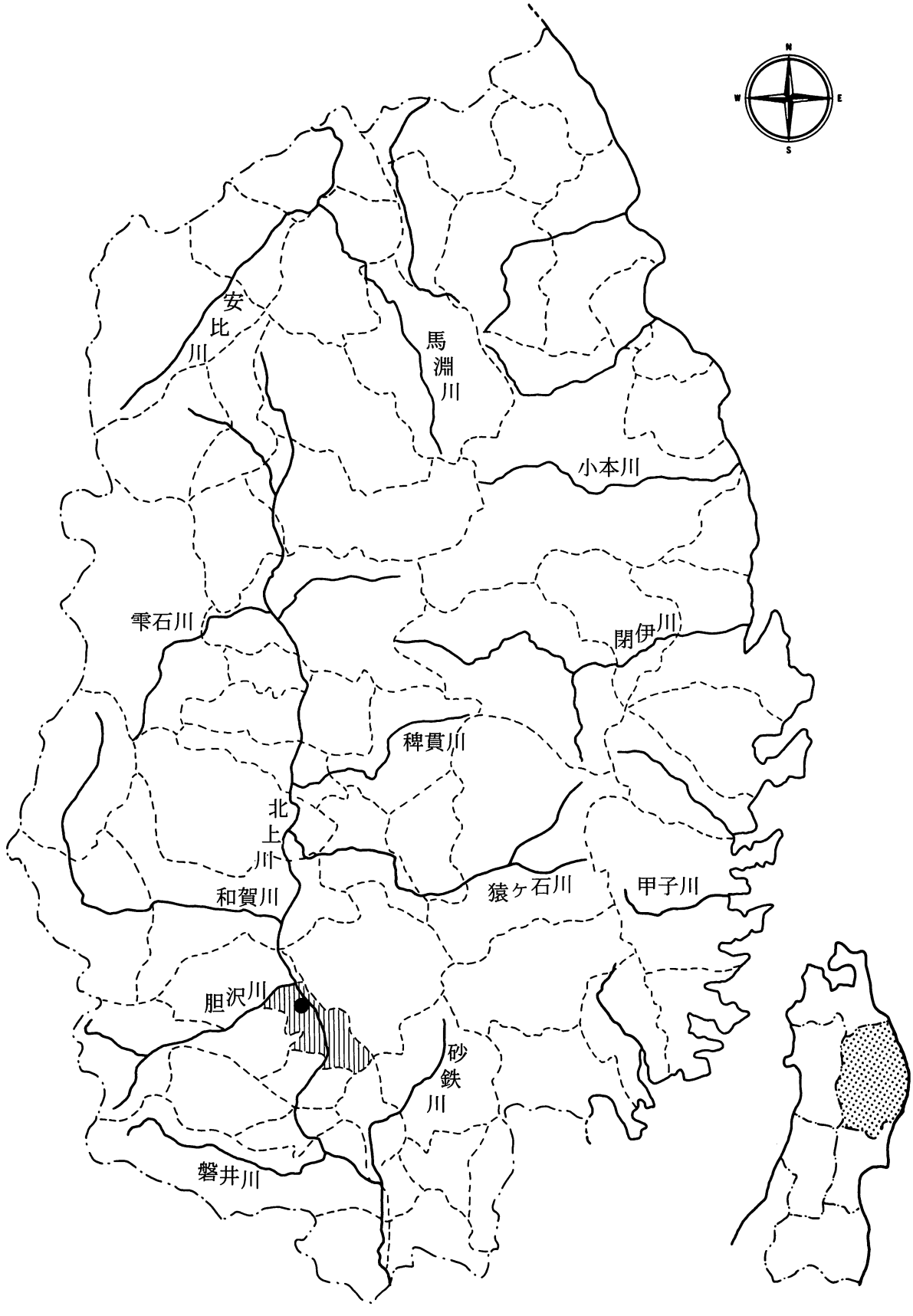
〔付　　図〕

付図　遺構配置図

〔写真図版〕

写真図版１　遺跡遠景・遺跡全景① …… 146
写真図版２　遺跡全景②・基本土層 …… 147
写真図版３　第１号竪穴住居跡 …… 148
写真図版４　第２号竪穴住居跡 …… 149
写真図版５　第３号竪穴住居跡 …… 150
写真図版６　第４号竪穴住居跡 …… 151
写真図版７　第５号竪穴住居跡 …… 152
写真図版８　第６号竪穴住居跡 …… 153
写真図版９　第８号竪穴住居跡 …… 154
写真図版10　第９号竪穴住居跡 …… 155

写真図版11　第1号竪穴状遺構 …… 156
写真図版12　第１号掘立柱建物跡 …… 157
写真図版13　第２号掘立柱建物跡 …… 158
写真図版14　土坑(1) …… 159
写真図版15　土坑(2) …… 160
写真図版16　土坑(3) …… 161
写真図版17　土坑(4) …… 162
写真図版18　土坑(5) …… 163
写真図版19　溝跡(1)・溝状遺構 …… 164
写真図版20　溝跡(2) …… 165
写真図版21　第１号堀跡 …… 166
写真図版22　第２号堀跡 …… 167
写真図版23　第１号橋脚跡・
　　柱穴遺物出土状況 …… 168
写真図版24　第１号塀跡 …… 169
写真図版25　第１号円形周溝 …… 170
写真図版26　集石遺構 …… 171
写真図版27　遺構内出土遺物(1) …… 172
写真図版28　遺構内出土遺物(2) …… 173
写真図版29　遺構内出土遺物(3) …… 174
写真図版30　遺構内出土遺物(4) …… 175
写真図版31　遺構内出土遺物(5) …… 176
写真図版32　遺構内出土遺物(6) …… 177
写真図版33　遺構内出土遺物(7) …… 178
写真図版34　遺構内出土遺物(8) …… 179
写真図版35　遺構内出土遺物(9) …… 180
写真図版36　遺構内出土遺物(10) …… 181
写真図版37　遺構内出土遺物(11) …… 182
写真図版38　遺構内出土遺物(12) …… 183
写真図版39　遺構外出土遺物(1) …… 184
写真図版40　遺構外出土遺物(2) …… 185



第1図　遺跡位置図(1)

水沢市
水沢工業団地
水沢J.C.
水沢測候センター
高野長英旧宅
水沢工業試験場
龍馬場
桜屋敷西
附野
尼沼
大檀
向田
水口前
車堂
殿野起
稗田下
上長根
真城
高
北
上
小山
笹森
北笹森
森
森下
沢子沢
蓬田
谷地
明神
天明神
福原
前谷地
袖谷地
濁川
鶴田
西光田
板谷
界田
千刈田
田中
造道
寺領
前田袋
聖天
堀内
勝手町
名残
五千刈
北半郷
田堰
西高山
佐倉河
幅
元宿
坂町
嶋館
仙人
館
東大畑
文字
羅漢
面塚
北宮田
古屋敷
喜性坊
宿
富田
東八反町
堂西
佐倉河
高田
元蔵田
玉鉾
卸町
金ヶ崎大橋
金ヶ崎
逢小路
下庄
鐘水
金ヶ崎
沼尻
三丁目
二丁目
六本松
水端
ケ尻
羽衣
大文字
広岡
広岡前
沼尻
土手外
沼館
沼上
宝録
関根
別当
駒込
北天間
天間沖
愛宕
百連寺
樋渡
新川
日市
梁川
宿
西下川原
藤古
桜木
桜木橋
後中野
橋本
百刈田
西丸
海老島
中谷木
大畑
金谷
土花
荒谷
桜崎
富堂
東沖
東袖
前田中
野田
並柳
小谷木
小谷木橋
沼尻
北鶴
赤羽根
鶴木新田
内堀
若草
寺畑
南塩加羅
東鶴巻
石名坂
大内田前
稗田
観音堂沖
栄町
下物田
寺田
稗田
後田
前田
西前田
川崎
蟹沢
向畑
御山
中堀
橋本
五位塚
下苗代沢
南町
重林寺
名丸
前田
上堀
中野
館下
山崎
高畑
根岸
工利中核工業団地
館
六日町
八日町
小境
本木
樋渡
宮

第2図　遺跡位置図(2)

Ⅰ．調査に至る経過

水沢家畜保健衛生所は、昭和44年に国の「家畜保健衛生所整備方針」を受けて、旧江刺家畜保健衛生所と統合され、昭和45年度家畜保健衛生所施設整備事業により、現在地に新庁舎を建設し、２市３町１村を管轄区域とする家畜衛生の拠点として、長年にわたって地域の畜産振興に貢献してきた。

この間、畜産および家畜衛生を取りまく情勢は大きく変化しており、これに的確に対応するために、家畜保健衛生所機能の充実強化を図ることが必要であることから、平成10年度に家畜保健衛生所の再編が行われた。

その結果、水沢家畜保健衛生所には、旧３家畜保健衛生所が統合され、県南全域を管轄とする広域家畜保健衛生所として新たな出発をすることとなった。

一方、家畜保健衛生所の再編により、施設が著しく狭隘となり、組織的機能発揮に支障を来すことから、平成10年３月に策定された家畜保健術生所庁舎等整備基本構想に基づいて、平成11年度に隣接地を購入し、新庁舎を建設することとなったものである。

Ⅱ．遺跡の立地と環境

１．位置及び立地

東舘Ⅱ遺跡は、岩手県南部の水沢市に所在し、東日本旅客鉄道株式会社東北本線水沢駅の北北東約３㎞、胆沢川が形成した胆沢扇状地における水沢高位段丘の末端上に位置する。遺跡の東約1.5㎞には北上川が南流しており、遺跡と北上川の比高差は約10ｍである。また、遺跡の北北東約2.5㎞には胆沢城跡がある。調査前の状況は水田及び畑である。

本遺跡は、建設省国土地理院発行の５万分の１地形図「水沢」（ＮＪ－54－14－14）及び２万５千分の１地形図「水沢」（ＮＪ－54－14－14－１）の図幅に含まれ、北緯39度９分38秒、東経141度９分７秒付近にある。遺跡の標高は49ｍ前後である。

２．地理的環境

水沢市は岩手県南内陸部のほぼ中央部に位置しており、県庁所在地盛岡市へ約65㎞、宮城県仙台市へ約128㎞、東京都へ約470㎞の距離にある。北は金ヶ崎町、東は江刺市、南は東山町、前沢町、西は胆沢町と境を接している。市域のほぼ中央部を北上川が縦断するように南流しており、また、市域の北部、金ヶ崎町とのほぼ境界線沿いに胆沢川が東流し北上川に注いでいる。水沢市を含め、近隣の江刺市や胆沢郡金ヶ崎町、同胆沢町、同前沢町、同衣川村を一般に胆江地区と呼称するが、水沢市はその中心的役割を果たしている。

面積は96.92㎢と県内13市中最小であるが、人口は60,362人（平成10年９月30日現在）と県内５番目である。人口密度は622.8人となり盛岡市をしのぎ県内で最も高い。地目別面積は、田畑36.6％、宅地12.2％、池沼0.1％、山林原野22.3％、雑種地その他28.8％となっている。

交通体系は、南北に東北新幹線と東北本線、それに東北縦貫自動車道、国道4号線が走っている。東西には、太平洋と日本海を結ぶ国土横断道として国道343号と国道397号線が走り、さらに水沢市を中心に一般県道が放射状にのび交通の要衝となっている。

水沢市　地形図（X-NE06-4・X-NE16-2）

0　200m

第3図　地形図

産業構造は、小売業・飲食店・サービス業等の第三次産業が59.6％と高く、建設・製造業等の第二次産業は30.0％、農林業等の第一次産業は10.4％となっており、水沢市は商業都市的特徴をもつと言える。また、その一方で胆江地区は県南の穀倉地帯としても有名である。

気候は東日本型に属し、平均気温（昭和53～平成９年までの過去20年間の年毎の平均気温の平均値）は、10.6℃と低いが、４月から徐々に気温も上がり10月まで温暖な天候が続き、比較的過ごしやすい。冬季間の最深積雪も近年は20～30㎝台の年が多く、県内でも少ない方である。年平均降水量は（昭和53～平成９年までの過去20年間の総降水量の平均値）は、1156.5㎜である。

因みに、「水沢」の地名は、既に南北朝頃の文献に見出すが、呼び名の由来は明らかではない。徳川中期の「封内風土記」には「むかしこの地無限の大淋（しゅう・水たまり）あり、而して沢水巻に満つ、故にこの地を水沢という」とあるが、定かではない。

３．地形・地質

胆沢川・北股川～衣川間には北上川全流域を通じて最も広大な扇状地形が発達し、一般に胆沢扇状地と呼ばれている。本遺跡の立地に関しては、この胆沢扇状地の影響を強く受けていることから、ここでは胆沢扇状地について主に述べることとする。

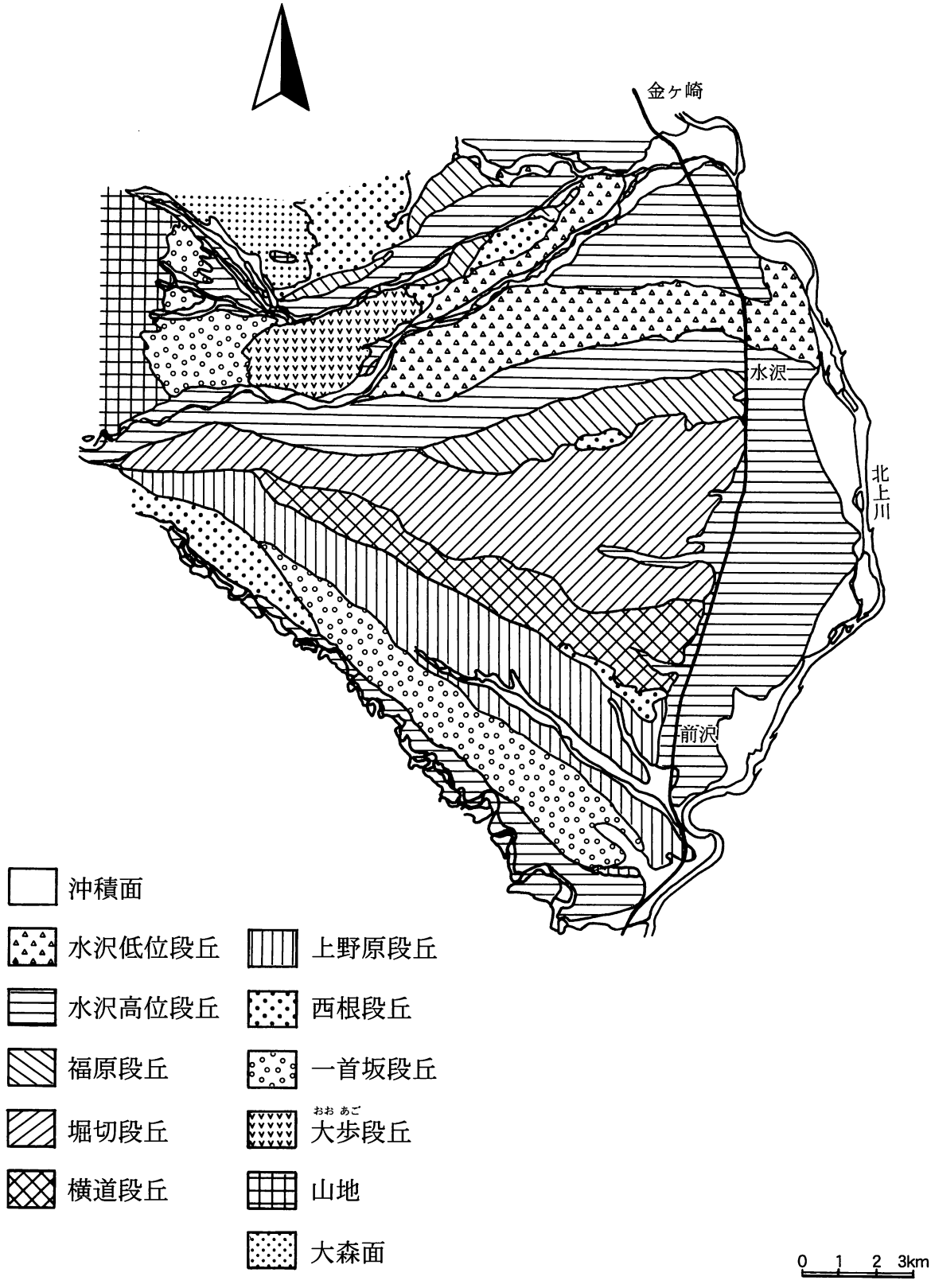
胆沢扇状地は、大別すれば高位から順に大歩（おおあご）段丘・一首坂段丘・胆沢段丘・西根段丘・水沢段丘が配列する。これらを細分すると約９群に分けられる。これらの段丘面群は全体として胆沢川上流市野々付近を頂点として東方に広がるが、各段丘は南から北へ順次新期のものが配列し、最も広範囲に発達するものは胆沢段丘である。以下、大別した各段丘について略記する。

〈大歩段丘〉　胆沢川北岸の金ヶ崎町永栄付近に分布する。標高は240～200ｍで段丘面は開析が進み、小丘陵となっている。本段丘は西方で一首坂段丘と交差しており、胆沢川右岸の水沢高位段丘とは比高差約100ｍある。段丘構成層は、10ｍ内外の礫層からなり、その上位を後述の一首坂火山灰と呼ばれる浮石質火山灰が覆う。一首坂段丘とは、一首坂火山灰層の下位に永栄火山灰が入層することで区別される。

〈一首坂段丘〉　一首坂段丘は胆沢扇状地最南部の衣川・北股川北岸に沿って分布する。標高は南東方向にむかって220～150ｍと変化する。段丘面は開析が進み、原面を残す部分は少ないが、扇状地内では小丘陵地として連続して追跡できる。段丘構成層は、鮮新世を基盤として風化した礫層と、その上位を整合的に覆う浮石質火山灰からなる。この火山灰を胆沢郡衣川村一首坂付近を模式地として一首坂火山灰と呼ぶ。模式地付近における層厚は約３ｍで、とくに下半部に浮石粒が多い。本段丘は上野原段丘とは比高差40ｍ前後あり、扇状地北西部では西根段丘と交差している。

〈胆沢段丘〉　胆沢段丘は主に扇状地内に分布し、高位のものから順に上野原（標高250～80ｍ）、横道（標高200～80ｍ）、堀切（標高240～70ｍ）、福原（標高130～60ｍ）の４つの段丘に細分される。これらの段丘は同じ順序に南から北へ配列する。段丘構成層はいずれも礫を主とし、砂・粘土を伴う。これらは一括して胆沢礫層と呼称する。胆沢礫層は各段丘とも４ｍ前後であるが、上野原付近の上野原段丘で厚さ10ｍ以上、最上部に粘土層をもつ。段丘面はほとんど開析されていない。比高差はそれぞれ15～５ｍで、上野原・横道・堀切の高位3段丘の比高差は扇状地末端部で差がなくなるか区分が不明瞭化するのに対して、低位の福原段丘では逆に末端部で比高差が大きくなっている。

上野原・横道・堀切の３段丘では、胆沢礫層の上位に厚さ数10㎝ないし数ｍの前沢火山灰が整合的にのり、さらにその上位を黒沢尻火山灰がほぼ整合的に覆う。前沢火山灰の層厚は高位の段丘ほど厚くなり、模式地



第4図　胆沢扇状地における段丘区分図

となっている胆沢郡前沢町二十人町付近では約500㎝の層厚をもつ。下底部と中央部よりやや上方に黄色浮石粒集中部をもつ赤褐色粘土質火山灰である。最下段の堀切段丘では層厚100㎝以下で暗茶褐色を呈したり砂質となる部分がある。

福原段丘では、胆沢礫層の上位に整合的に黒沢尻火山灰がのる。福原付近で厚さ150㎝あり、下半を村崎野浮石が占める。

〈西根段丘〉　胆沢扇状地の扇頂南端部（標高290～220ｍ）や低地段丘分布地内に残丘状（標高140～110ｍ）の他、金ヶ崎町西方の山地東麓部に丘陵性台地（標高190～180ｍ）として分布している。やや開析が進んでいるものの段丘面は認識可能である。段丘構成層は、３～５ｍの礫層からなり、前沢火山灰以上の火山灰がのることで区分される。

〈水沢段丘〉　水沢段丘は、扇状地北端部である胆沢川南岸及び北上川沿いに発達している。高位（標高290～40ｍ）と低位（標高120～38ｍ）に区分される。両者の比高差は胆沢町出店及び水沢市街地で10～４ｍである。段丘面はきわめて新鮮な面を保つ。

段丘構成層は、胆沢町出店・駒籠～一関市南方油島付近を結んだ胆沢－油島撓曲線を挟んで東西で異なり、東方で層厚化している。水沢高位段丘においては撓曲線の西方で３ｍ前後、東方では８ｍ前後となっている。水沢付近では層厚約５ｍが露出し、最上部１ｍ余は火山灰質砂、他は礫より成るが、基盤は見られない。

以上、胆沢扇状地について大別した段丘毎に分布及び段丘構成層を中心に述べた。本遺跡は、胆沢扇状地扇端部における水沢高位段丘の西端上に立地していると言える。

４．基本土層

調査区内2カ所における土層（Ａ－Ａ’地点、Ｂ－Ｂ’地点）を図示した。基準となる基本土層はローマ数字とし、両地点とも対応させた。その他の土層についてはアラビア数字で表現した。地点により細かな違いはあるが、本遺跡内における基本土層は次のとおりである。

Ａ－Ａ’地点

Ⅰ層　7.5YR3/1黒褐色土と7.5YR5/6明褐色土の混合土　　締まりあり・粘性ややあり
　　小石・礫・草木根含む　近世～近現代の陶磁器少量　盛土　現表土

Ⅲ層　7.5YR3/1黒褐色土　締まりやや軟　粘性あり
　　グライ化　小石若干含む　旧水田耕作土

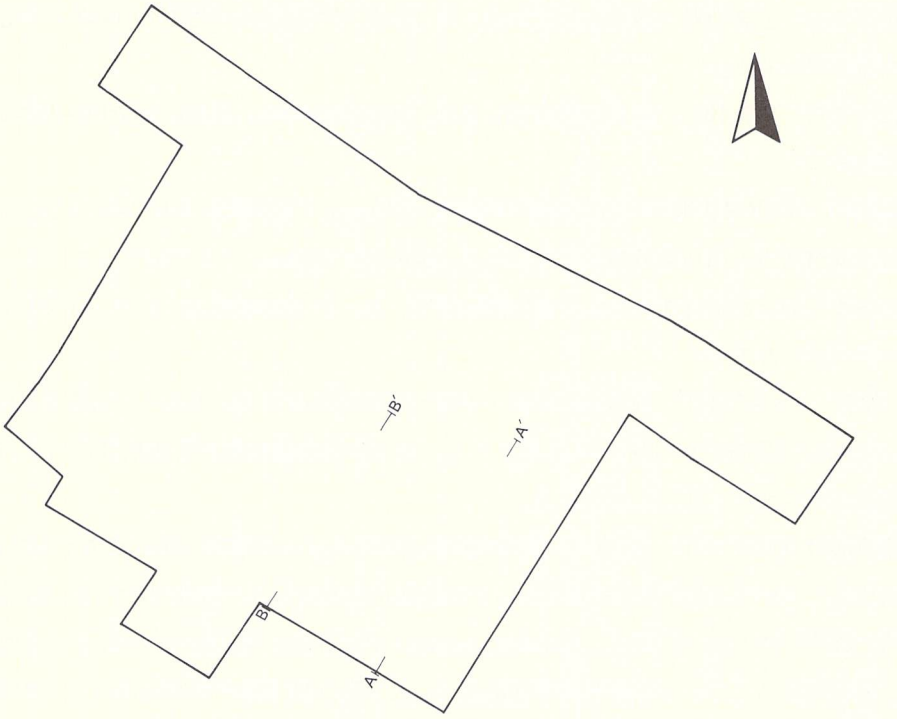
Ⅳ層　7.5YR2/1黒色土　締まりあり・粘性あり
　　水田の床土である赤褐色の酸化鉄及び水気を含む　旧水田耕作土

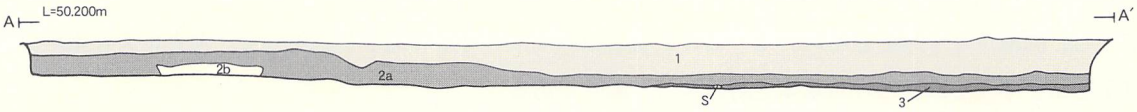
Ｂ－Ｂ’地点

Ⅰ層　10YR3/1黒褐色土（上位）・10YR6/6明黄褐色土（下位）　締まりあり・粘性ややあり
　　小石・礫・草木根含む　盛土　現表土

Ⅱ層　10YR3/2黒褐色土　締まりあり　粘性あり
　　酸化鉄分集積　小石・礫若干含む　調査区南側でみられる畑作土

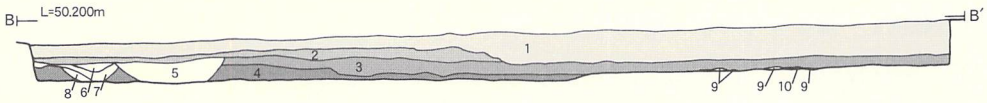
Ⅲ層　7.5YR4/2灰褐色土　締まりやや軟　粘性あり
　　小石・礫若干含む　酸化鉄分集積顕著　旧水田耕作土





基本土層　A-A′

1.　7.5YR3/1黒褐～7.5YR5/6明褐の混合土　盛土　小石・礫・草木根等多く含む　粘性ややあり・締まりややあり　基本土層Ⅰ層
2a. 7.5YR3/1黒褐　粘土質シルト　グライ化　小石若干含む　土器片微量含む　基本土層Ⅲ層
2b. 7.5YR4/3褐　粘土質シルト　粘性あり・締まりあり
3.　7.5YR2/1黒　粘土質シルト　粘性あり・締まりあり　水田耕作土　水気が徐々にしみ出す　基本土層Ⅳ層
4.　10YR6/6明黄褐　粘土質シルト



基本土層　B-B′

1.　10YR3/1黒褐(上位)～10YR6/6明黄褐(下位)　シルト　２度にわたる盛土　小石・礫・草木根等多く含む　基本土層Ⅰ層
2.　10YR3/2黒褐　粘土質シルト　酸化鉄分の集積微量　小石・礫を若干含む　締まりあり・粘性あり　調査区南側で見られる畑作土。基本土層Ⅱ層
3.　7.5YR4/2灰褐　粘土質シルト　酸化鉄分の集積(Ⅱ層より多め)　小石・礫を若干含む　締まりやや軟・粘性あり　水田耕作土。基本土層Ⅲ層
4.　7.5YR3/1灰褐　粘土質シルト　粘性大・締まりやや軟　水田の床土に見られる赤褐色の酸化鉄分集積。基本土層Ⅳ層
5.　10YR3/1黒褐　粘土質シルト　10YR5/6黄褐10%　粘性あり・締まりあり
6.　10YR3/3暗褐　粘土質シルト　10YR5/4にぶい黄褐20%　小石等含む　粘性あり・締まりあり
7.　7.5YR3/2黒褐　粘土質シルト　粘性大・締まりやや軟
8.　7.5YR3/2黒褐　粘土質シルト　10YR6/6明黄褐30%　粘性大・締まりやや軟
9.　10YR2/1黒　粘土質シルト　粘性あり・締まりあり
10. 2.5Y4/1黄灰　粘土質シルト　粘性あり・締まりあり

0　4m

第5図　基本土層

Ⅳ層　7.5YR3/1黒褐色土　締まりやや軟　粘性大

水田の床土である赤褐色の酸化鉄を含む　旧水田耕作土

また、主たる遺構検出面はⅤ層であり、次のような特徴を有する。

Ⅴ層　黄褐色土　締まりあり・粘性ややあり　地山

なお、調査区全体的な各土層の層厚は次のとおりである。

Ⅰ層　20～55cm　　Ⅱ層　0～20cm　　Ⅲ層　10～35cm　　Ⅳ層　0～25cm　　Ⅴ層　70cm以上

5．周辺の遺跡

水沢市の遺跡は、約280箇所が確認されている。本遺跡周辺の遺跡については、第６図、第1表に示した。また調査の結果、古代及び中世の遺構及び鋳物関連遺物が検出・出土したことを踏まえ、(1)胆江地区における時代別遺跡分布、(2)水沢市の中世城館及び東館について、(3)水沢市における鋳物関連遺跡と関係地名、として項目分けを行い記載した。

(1)　胆江地区における時代別遺跡分布

胆江地区を中心として、これまで発掘された主な遺跡を時代毎に並べてみると、次のようになる。

〈旧石器時代〉

前期（７万年前～）　水沢市柳沢館跡、金ヶ崎町柏山館跡。

後期（３万年前～）　胆沢町上萩森遺跡、金ヶ崎町柏山館遺跡、北上市和賀仙人遺跡、江刺市大名野遺跡。

〈縄文時代〉

草創期（１万3000年前～）　胆江地区ではまだ報告例がない。

早期（8500年前～）　水沢市馳上遺跡・大曽根遺跡・鵜ノ木住吉神社遺跡、胆沢町浅野遺跡・尼坂遺跡

前期（5200年前～）　水沢市鵜ノ木住吉神社遺跡・中島遺跡、胆沢町大清水上遺跡、北上市鳩岡崎遺跡

中期（4500年前～）　水沢市中島遺跡・巾下遺跡、胆沢町宮沢原遺跡、北上市樺山遺跡、前沢町田高遺跡

後期（3800年前～）　水沢市鵜ノ木遺跡、北上市八天遺跡

晩期（3000年前～）　水沢市鵜ノ木遺跡・里槍遺跡・杉の堂遺跡、前沢町川岸場遺跡

〈弥生時代〉

前期（2300年前～）　北上市兵庫館跡、金ヶ崎町長坂下遺跡、江刺市沼の上遺跡

中期（紀元前後）　一関市谷起島遺跡、水沢市橋本遺跡、胆沢町清水下遺跡

後期（３世紀）　水沢市常磐広町遺跡、江刺市兎Ⅱ遺跡

〈古墳時代〉

前期（４世紀）　水沢市高山遺跡・西大畑遺跡

中期（５世紀）　北上市猫谷地遺跡、金ヶ崎町高谷野原遺跡、水沢市面塚遺跡・中半入遺跡

後期（６世紀）　胆沢町角塚古墳（中期末～後期初頭頃）、水沢市中半入遺跡

終末期（７・８世紀）　金ヶ崎町上餅田遺跡、水沢市膳性遺跡・今泉遺跡。

〈飛鳥・奈良時代〉

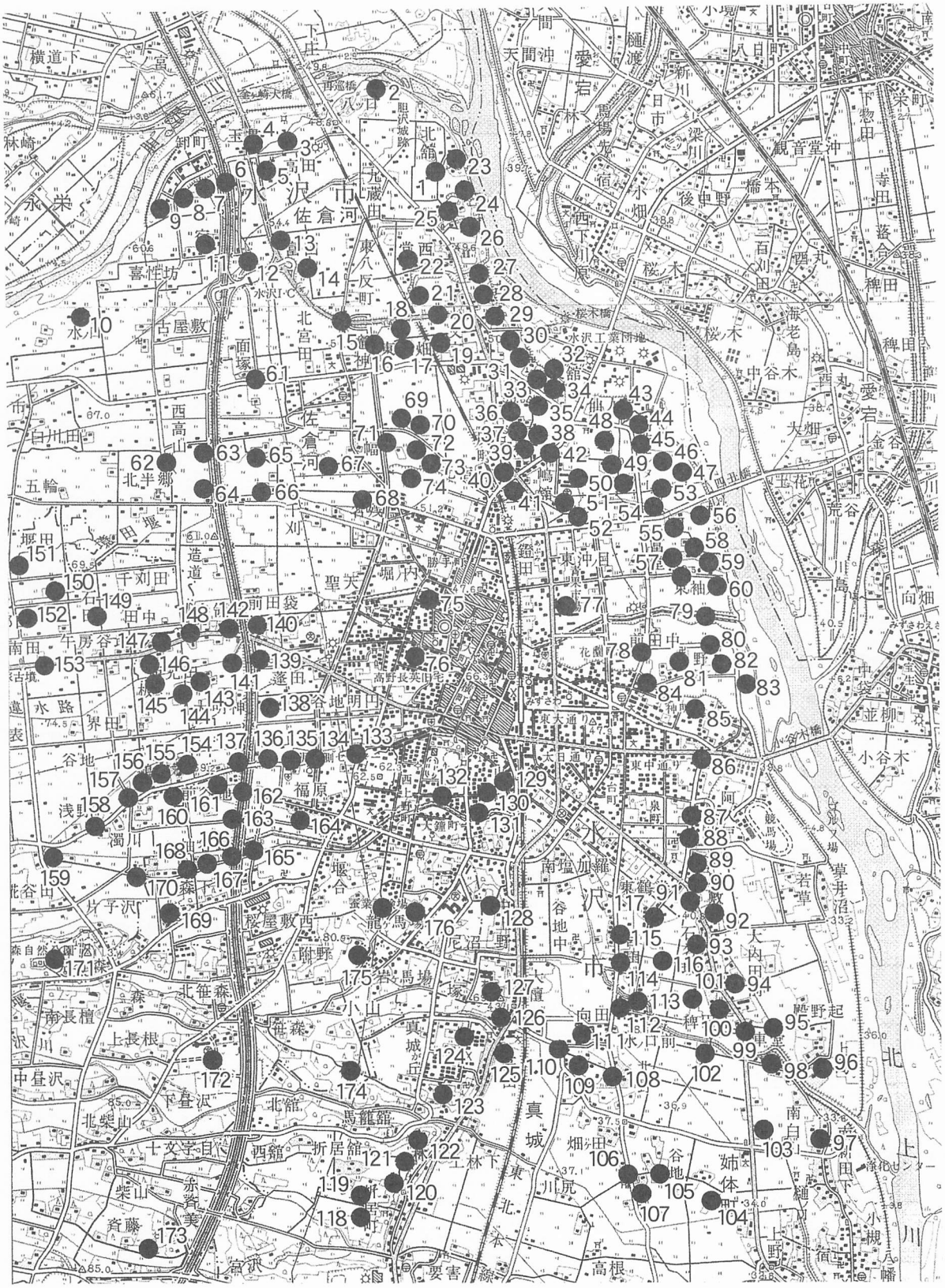
８世紀末　水沢市杉の堂遺跡・熊の堂遺跡・石田Ⅱ遺跡

第１表　周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	所　在　地	時　代	種　別	遺構・遺物等
1	胆沢城	水沢市佐倉河字八幡	平安	城柵跡 国指定遺跡	
2	八ツ口	水沢市佐倉河八ツロ	奈良・平安	集落跡	土師器・須恵器
3	玉貫前	水沢市佐倉河字玉貫	奈良	集落跡	土師器・須恵器
4	玉貫	水沢市佐倉河字玉貫	奈良	集落跡	土師器・須恵器
5	膳性	水沢市佐倉河字膳性	古墳～平安	集落跡	土師器・須恵器等
6	今泉	水沢市佐倉河字今泉	古墳～平安	集落跡	土師器・須恵器等
7	今泉Ⅱ	水沢市佐倉河字今泉	奈良・平安	集落跡	土師器・須恵器
8	今泉Ⅲ	水沢市佐倉河字今泉	奈良・平安	集落跡	土師器・須恵器
9	喜正坊	水沢市佐倉河字喜正坊	奈良・平安	集落跡	土師器
10	崩田	水沢市佐倉河字崩田	奈良・平安	散布地	土師器・須恵器
11	宿	水沢市佐倉河字宿	奈良・平安	集落跡	土師器・須恵器
12	富田(A)	水沢市佐倉河字富田	縄文・平安	散布地	縄文土器・土師器等
13	富田(B)	水沢市佐倉河字富田	縄文	散布地	縄文土器・石器
14	獅子鼻	水沢卑佐倉河字御子鼻	平安	散布地	土師器・須恵器
15	大曽根	水沢市佐倉河字大曽根	縄文	散布地	縄文土器・石器等
16	東大畑Ⅰ	水沢申佐倉河字東大畑	縄文・平安	集落跡	土師器・須恵器
17	東大畑	水沢申佐倉河字東大畑	平安	散布地	土師器・須恵器・石器等
18	東大畑Ⅱ	水沢市佐倉河字東大畑	平安	散布地	須恵器
19	竈堂Ⅱ	水沢市佐倉河字中田	中世	集落跡	
20	竈堂	水沢市佐倉河字竈堂	平安	散布地	祠社土師器
21	杉本Ⅰ	水沢市佐倉河字杉本	縄文	散布地	縄文土器（晩期）等
22	伯済寺	水沢市佐倉河字薬師堂	平安	集落跡	土師器・須恵器
23	北館	水沢市佐倉河字北館	奈良・平安	散布地	土師器・須恵器
24	祇園	水沢市佐倉河字祇園	平安	集落跡	土師器・須恵器
25	権現堂	水沢市佐倉河字権現堂	奈良	集落跡	土師器
26	八幡巾	水沢市佐倉河字八幡巾	縄文	集落跡	縄文土器（後期）等
27	藤古	水沢市佐倉河字藤古	縄文・平安	集落跡	須恵器
28	白井坂Ⅰ	水沢市佐倉河字白井坂	中世	城館跡	空堀・複郭
29	白井坂Ⅱ	水沢市佐倉河字白井坂	中世	城館跡	空堀・複郭
30	吹張Ⅰ	水沢市佐倉河字吹張	平安	散布地	土師器
31	吹張Ⅱ	水沢市佐倉河字吹張	平安	散布地	土師器
32	下河原館	水沢市佐倉河字下河原館	平安	散布地	縄文土器（晩期）
33	東館Ⅰ	水沢市佐倉河字東館	中世	散布地	陶器
34	東館Ⅱ	水沢市佐倉河字東館	平安	散布地	土師器
35	根岸	水沢市佐倉河字根岸	縄文	散布地	縄文土器（晩期）等
36	天井ノ町	水沢市佐倉河字天井ノ町	縄文	散布地	縄文土器
37	瓦ヶ田	水沢市佐倉河字瓦ヶ田	縄文	散布地	縄文土器（晩期）
38	仙人西	水沢市佐倉河字仙人	平安	集落跡	土師器・須恵器
39	車堂	水沢市佐倉河字車堂	縄文	散布地	縄文土器
40	下河原釜石	水沢市佐倉河字釜石	平安	散布地	土師器
41	嶋館西	水沢市佐倉河字嶋館	縄文・平安	散布地	土師器・須恵器等
42	佐野原	水沢市佐倉河字佐野原	縄文・平安	集落跡	土師器・須恵器等
43	仙人東	水沢市佐倉河字仙人	弥生・平安	集落跡	土師器・須恵器等
44	沢田	水沢市佐倉河字沢田	縄文・平安	散布地	
45	東鍛冶屋	水沢市佐倉河字東鍛冶屋	縄文・平安	散布地	土師器・石器
46	蟹沢	水沢市佐倉河字蟹沢	平安	集落跡	須恵器
47	蟹沢Ⅱ	水沢市佐倉河字蟹沢	縄文	散布地	フレーク
48	南桜沢	水準市佐倉河字南桜沢	平安	散布地	土師器・須恵器
49	高谷	水沢市佐倉河字高谷	縄文・平安	散布地	土師器・須恵器等
50	道下東	水沢市佐倉河字道下東	縄文	散布地	縄文土器・石器
51	嶋館東	水沢市佐倉河字嶋館	縄文	散布地	縄文土器
52	嶋館	水沢市佐倉河字嶋館	中・近世	城館跡	堀・土塁
53	矢中	水沢市佐倉河字矢中	平安	散布地	土師器・須恵器
54	矢中Ⅱ	水沢市佐倉河字矢中	縄文	散布地	フレーク
55	惣前町	水沢市佐倉河字惣前町	弥生・平安	散布地	土師器
56	杉ヶ崎	水沢市佐倉河字杉ヶ崎	縄文・平安	散布地	土師器・フレーク
57	横枕	水沢市佐倉河字横枕	縄文・平安	散布地	土師器・須恵器等
58	中前田	水沢市佐倉河字中前田	弥生・平安	集落跡	弥生土器・土師器等
59	東袖ノ目	水沢市佐倉河字東袖ノ目	平安	集落跡	土師器

No.	遺跡名	所　在　地	時　代	種　別	遺構・遺物等
60	久根妻	水沢市佐倉河字久根妻	奈良	散布地	非ロクロ土師器等
61	面塚	水沢市佐倉河字面塚	古墳・奈良	散布地	土師器・須恵器
62	高山	水沢市佐倉河字高山	古項	集落跡	竪穴住居跡・土師器
63	西大畑	水沢市佐倉河字西大畑	古墳・平安	集落跡	土師器・須恵器
64	五千刈	水沢市佐倉河字五千刈	縄文	散布地	縄文土器
65	西館	水沢市佐倉河字西館	平安	散布地	土師器
66	稲荷田	水沢市佐倉河字稲荷田	平安	散布地	土師器
67	幅下	水沢市佐倉河字幅下	縄文	散布地	縄文土器（中期）
68	里槍	水沢市佐倉河字里槍	縄文	集落跡	縄文土器（晩期）等
69	西光田Ⅰ	水沢市字西光田	平安	集落跡	土師器・須恵器
70	道本	水沢市佐倉河字道本	平安	散布地	土師器・須恵器
71	東幅	水沢市佐倉河字東幅	縄文	散布地	縄文土器
72	久田	水沢市佐倉河字久田	平安	散布地	土師器・須恵器
73	南久田	水沢市佐倉河字久田	平安	散布地	土師器・須恵器
74	中城	水沢市字中城	縄文	散布地	縄文土器
75	女子高校跡地	水沢市字溺手町	平安	散布地	土師器・須恵器
76	新小路	水沢市字新小路	縄文	散布地	縄文土器（晩期）等
77	石橋	水沢市佐倉河字石橋	平安	集落跡	土師器・須恵器
78	常磐広町	水沢市佐倉河字広町	弥生・奈良・平安	散布地	弥生土器・石鏃・管玉
79	北田Ⅰ	水沢市佐倉河字北田	平安	集落跡	須恵器
80	北田Ⅱ	水沢市佐倉河字北田	弥生・奈良・平安	散布地	土師器・鉄滓
81	野田	水沢市佐倉河字野田	縄文・平安	散布地	土師器・石鏃
82	北田Ⅱ	水沢市佐倉河字北田	弥生・平安	集落跡	弥生土器・土師器等
83	跡呂井御蔵場	水沢市佐倉河字瀬ノ上	縄文	集落跡	縄文土器（後期）等
84	蛇塚	水沢市佐倉河字中陣馬	不明	塚跡	メノウ勾玉
85	跡呂井	水沢市神明町	中世	城館跡	空堀・複郭
86	杉の堂	水沢市佐倉河字杉の堂	縄文・平安	散布地	縄文土器（後・晩期）
87	沼尻	水沢市真城字沼尻	平安	散布地	土師器
88	大学Ⅰ	水沢市真城字大学	縄文・平安	集落跡	土師器・須恵器等
89	大学Ⅱ	水沢市真城字大学	縄文・平安	散布地	土師器・フレーク
90	垣ノ内Ⅱ	水沢市真城字垣ノ内	縄文・平安	散布地	縄文土器・土師器等
91	垣ノ内Ⅰ	水沢市真城字垣ノ内	中世	散布地	陶器
92	石名坂	水沢市姉体町字石名坂	縄文	集落跡	縄文土器・石鏃
93	上姉体館	水沢市姉体町字寺田	中世	城館跡	空堀・複郭
94	大内田前	水沢市姉体町字大内田	平安	散布地	土師器・須恵器
95	姉体車堂Ⅲ	水沢市姉体町字車堂	平安	散布地	土師器・須恵器
96	北白山	水沢市姉体町字北白山	平安	散布地	土師器・須恵器
97	目細	水沢市姉体町字目細	平安	散布地	環壕・須恵器等
98	元天神前Ⅱ	水沢市姉体町字天神前	平安	散布地	土師器・須恵器
99	姉体車堂Ⅱ	水沢市姉体町字車堂	平安	散布地	土師器・須恵器
100	小水ノロ	水沢市字水ノロ	平安	散布地	土師器・須恵器
101	水の口	水沢市柿体町字水の口	平安	散布地	須恵器
102	水ノロ前東	水沢市字水ノ口	平安	散布地	土師器
103	根無	水沢市姉体町字根無	平安	散布地	土師器・須恵器
104	島田Ⅰ	水沢市真城字島田	平安	散布地	土師器・須恵器
105	寺ヶ前Ⅲ	水沢市真城字谷地田	平安	散布地	土師器
106	寺ヶ前Ⅱ	水沢市真城字谷地田	平安	散布地	土師器
107	寺ヶ前Ⅰ	水沢市真城字谷地田	平安	散布地	土師器
108	北野Ⅱ	水沢市真城字北野	平安	集落跡	土師器・須恵器等
109	北野Ⅲ	水沢市真城字北野	平安	集落跡	土師器・須恵器
110	金田Ⅰ	水沢市真城字金田	平安	集落跡	土師器・須恵器
111	日立構内	水沢市真城字北野	縄文	集落跡	縄文土器
112	向田	水沢市姉体町字向田	平安	散布地	須恵器
113	林前Ⅱ	水沢市姉体町字林前	平安	散布地	土師器・須恵器
114	林前南館	水沢市姉体町字林前	縄文・平安	城館跡	土師器・石器
115	林前Ⅰ	水沢市姉体町字林前	平安	集落跡	土師器・須恵器
116	林前館	水沢市姉体町字林前	中世	城館跡	単郭
117	北余目	水沢市姉体町字北余目	平安	散布地	土師器
118	堤ヶ沢Ⅰ	水沢市真城字堤ヶ沢	平安	集落跡	土師器・須恵器
119	堤ヶ沢Ⅱ	水沢市真城字堤ヶ沢	平安	集落跡	土師器・須恵器

No.	遺跡名	所　在　地	時　代	種　別	遺構・遺物等
120	中林Ⅲ	水沢市真城字中林	平安	散布地	土師器・須恵器
121	中林B	水沢市真城字中林	平安	集落跡	土師器・須恵器
122	中林A	水沢市真城字中林	平安	集落跡	土師器・須恵器
123	黒田助	水沢市真城字黒田助	縄文	散布地	縄文土器・石鏃
124	雷神Ⅰ	水沢市真城字雷神	平安	集落跡	土師器・須恵器
125	高田	水沢市真城字高田	平安	集落跡	土師器・須恵器
126	大壇	水沢市真城字大壇	平安	集落跡	土師器・須恵器
127	上野	水沢市真城字上野	平安	散布地	土師器・須恵器
128	須江	水沢市真城字須江	平安	集落跡	土師器・須恵器
129	梨畑	水沢市東上野町	縄文・平安	散布地	縄文土器（中期）等
130	小山崎	水沢市真城字小山崎	縄文・平安	散布地	縄文土器（中期）等
131	東上野	水沢市東上野町	縄文	散布地	縄文土器（中期）等
132	駒形神社公園	水沢市東上野町	縄文	散布地	縄文土器（中期）等
133	馳上	水沢市東上野町	縄文	散布地	縄文土器（早期）
134	高屋敷	水沢市字高屋敷	平安	集落跡	土師器・須恵器
135	北田	水沢市佐倉河字北田	縄文・平安	集落跡	縄文土器・土師器
136	南矢中Ⅱ	水沢市字南矢中	平安	集落跡	土師器・須恵器
137	南矢中	水沢市字南矢中	平安	集落跡	土師器・須恵器
138	一本杉	水沢市字大明神	平安	散布地	土師器
139	後田	水沢市字後田	平安	集落跡	土師器・須恵器
140	水山	水沢市字水山	平安	散布地	土師器
141	足袋針Ⅱ	水沢市字足袋針	平安	集落跡	土師器・須恵器
142	石田	水沢市字光田	奈良・平安	散布地	土師器
143	足袋針Ⅰ	水沢市字足袋針	縄文・平安	集落跡	縄文土器・土師器等
144	大明神Ⅱ	水沢市字大明神	平安	集落跡	土師器・須恵器
145	西光田Ⅲ	水沢市字西光田	平安	散布地	土師器
146	西光田Ⅱ	水沢市字西光田	平安	集落跡	土師器・須恵器
147	西光田Ⅰ	水沢市字西光田	平安	散布地	土師器・須恵器
148	寺領	水沢市字寺領	奈良・平安	散布地	土師器・須恵器
149	石田Ⅰ・Ⅱ	胆沢町南都田字石田	平安	散布地	土師器・須恵器
150	机地	胆沢町南都田字机地	奈良・平安	散布地	土師器
151	堰田	胆沢町南都田字堰田	平安	散布地	土師器
152	沢田	胆沢町南都田字沢田	奈良・平安	散布地	土師器
153	宇南田	胆沢町南都田字宇南田	平安	集落跡	土師器
154	鶴田Ⅰ	胆沢町南都田字鶴田	平安	散布地	土師器
155	鶴田古窯群	胆沢町南都田字鶴田	奈良	古墳群	末期古墳
156	鶴田Ⅱ	胆沢町南都田字鶴田	縄文・平安	散布地	縄文土器・土師器等
157	浅野前	胆沢町南都田字浅野	縄文・古代	散布地	縄文土器・土師器等
158	浅野	胆沢町南都田字浅野	縄文・古代	散布地	縄文土器・土師器等
159	方子坂	胆沢町南都田字方子坂	縄文・古代	散布地	縄文土器・土師器等
160	濁川	胆沢町南都田字濁川	縄文・平安	集落跡	縄文土器・土師器等
161	西田Ⅰ	水沢市字西田	平安	集落跡	土師器・須恵器
162	西田Ⅱ	水沢市字西田	平安	集落跡	土師器・須恵器
163	前谷地	水沢市字前谷地	平安	集落跡	土師器・須恵器
164	福原	水沢市字福原	平安	集落跡	土師器・須恵器
165	袖谷地Ⅳ	水沢市字袖谷地	縄文・平安	集落跡	土師器・須恵器等
166	袖谷地Ⅰ	水沢市字袖谷地	平安	集落跡	土師器・須恵器
167	袖谷地Ⅲ	水沢市字袖谷地	平安	集落跡	土師器・須恵器
168	袖谷地Ⅱ	水沢市字袖谷地	平安	散布地	土師器・須恵器等
169	森下Ⅱ	水沢市字森下	縄文	散布地	縄文土器（前期）
170	合野	胆沢町南都田字合野	縄文	散布地	縄文土器・石鏃
171	見分森	水沢市字見分森	平安	生産跡	土師器・須恵器
172	中島	胆沢町小山字大深沢	縄文・古代	散布地	縄文土器（中期）
173	壇山	胆沢町小山字斉藤	縄文・古代	散布地	縄文土器・土師器
174	南笹森	胆沢町小山字南笹森	縄文	散布地	縄文土器・石鏃等
175	附野森	胆沢町小山字附野森	縄文・中世	散布地	縄文土器・陶磁器
176	龍ヶ馬場	水沢市字龍ヶ馬場	平安	集落跡	土師器・須恵器



1：50,000　北上・水沢

第6図　周辺の遺跡

〈平安時代〉

9世紀前半　水沢市胆沢城・林前遺跡・見分森窯、江刺市瀬谷子窯跡群、前沢町明後沢遺跡、金ヶ崎町妻根遺跡

9世紀中頃　江刺市宮地Ⅱ遺跡、水沢市中林遺跡

11世紀中頃　金ヶ崎町鳥海柵跡、衣川村長者廃寺跡、北上市国見山廃寺跡、江刺市豊田館跡・五位塚古墳群

〈鎌倉時代以降〉

13世紀後半　江刺市落合Ⅲ遺跡、水沢市跡呂井中陣場遺跡

15～16世紀　水沢市白井坂Ⅰ・Ⅱ遺跡、金ヶ崎町柏山館跡・松本館跡　他

(2) 水沢市の中世城館及び東館について

胆沢地方は早くから蝦夷と呼ばれた人々が住んだので平安朝によりしばしば討伐を受け、802（延喜21）年胆沢城が設置され、律令体制に組み込まれていった。次いで安倍氏、藤原氏統治の時代をへて奥州の開発拠点として重きをなし、中世には多くの城館が築かれた。

この時期は群雄割拠の戦国時代であり、城館の攻防や奪い合いに終始したので、城館はその局面の戦略上から要所に新設や改築されたり、あるいは取り壊されたりする等、その変動が複雑であったと思われる。中にはアイヌの人々のチャシや砦を受け継ぐものも見受けられる。近世になって一国一城の制となり城館が廃止されたため、中世城館に関する資料は乏しいと言わざるを得ず、さらに近年は道路や宅地の増設のため城館が壊滅していく状況にある。

中世の様相であるが、中世は文治5（1189）年に源頼朝が平泉の藤原氏を滅ぼした時を始まりとされる。源頼朝は平泉の戦いで最も功績のあった葛西清重を奥州総奉行、検非違使に任命し、胆沢郡を含む5郡を与えたと言われている。葛西氏は平泉の高館に入り以来17代晴信の天正18年（1590）までの400年治めた。この間、この地方では、葛内氏の麾下である柏山氏、江刺氏によって治められた。葛西七郡（約30万石）と称せられた領内には館持ち諸将の城館298城があって、胆沢15城、江刺24城（この中の田茂山山城は気仙の田茂山であるので23城）といわれた。

仙台藩の安永風土記によると水沢市内には北上川の河東に6城、北部に16城、南部に11城の計33城があったとされている。しかし、何故か洩れているものもあり、それらを含めると45城となる（胆沢城、北鵜木城、寿庵館等）。城館の調査は延宝5（1677）年の仙台古城書上と貞亨元（1684）年の古城書上があるが、書上の基準が異なるためか城館名及び城館数が一致しない。

『岩手県中世城館跡分布調査報告書』（1986）によると、水沢市において古代末～中世にかけての城館跡として報告されているのは38カ所ある。これらについては第7図及び第2表として示している。東舘Ⅱ遺跡のある佐倉河地区では11カ所あり、地域的に見て最も多く分布する。これは柏山氏の本城に近接し重要な役割を果たしていたことに関係するものと思われる。

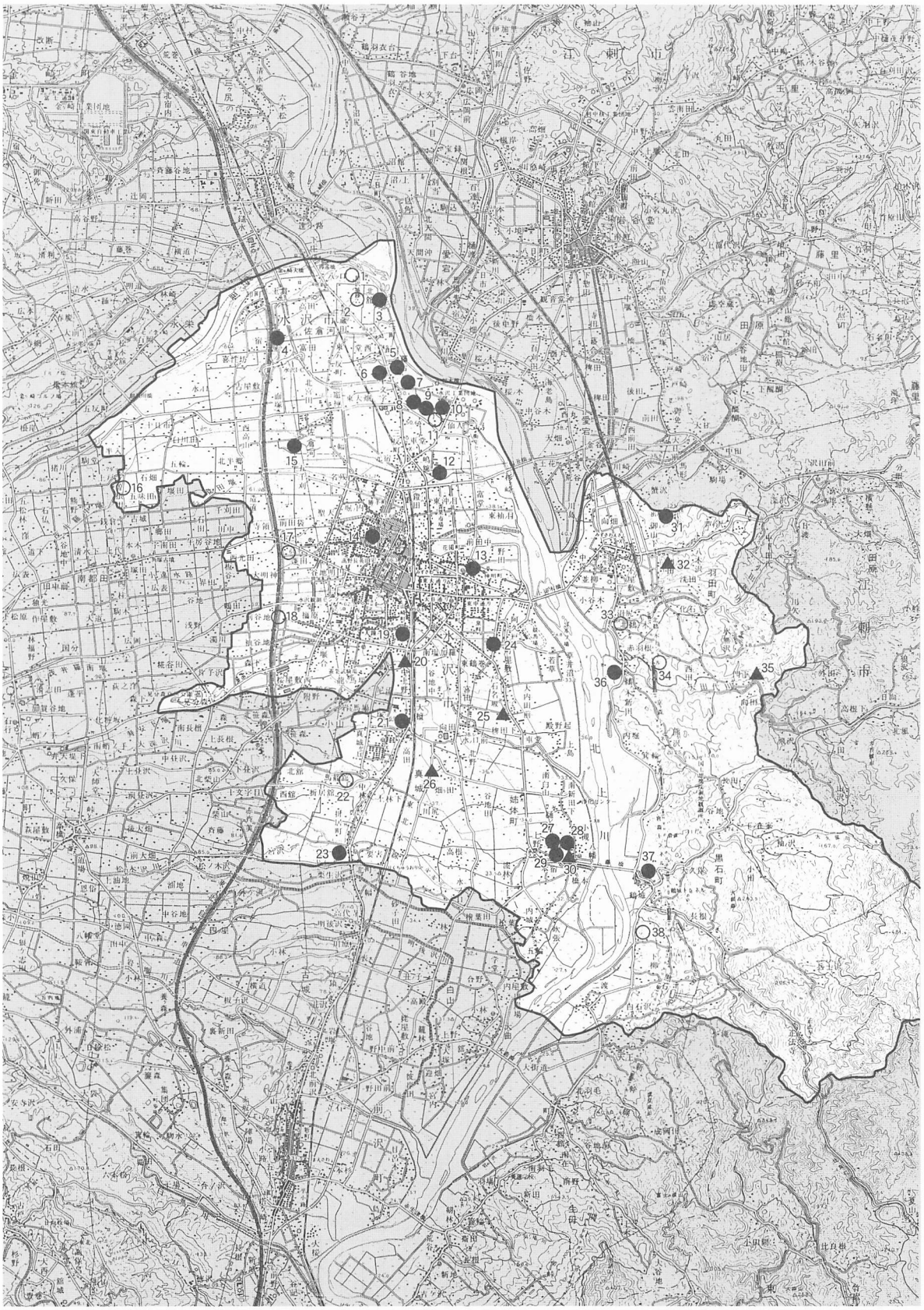
東舘は安永風土記に記述されている城館ではあるが、遺構については詳細不明とある。また、本文中に下河原内館（轟館）として記載されており、それを紹介する。

> 北上川右岸、水沢段丘の標高50m前後の段丘崖にある。一帯を東館という。いま公舎が建って付近の景観は破壊されている。一応全体の規模は東西200m、南北180m位と解されるが、遺構は西・東郭からなり、それを濠で画したものだが、いまは埋め立てられ、その痕跡を認め得ない。西郭が主郭で「内館」といい、東郭を「東館」という。内館は東西90～100m、南北140mの規模で、北崖部に土塁の一

第2表　水沢市の中世城館一覧表

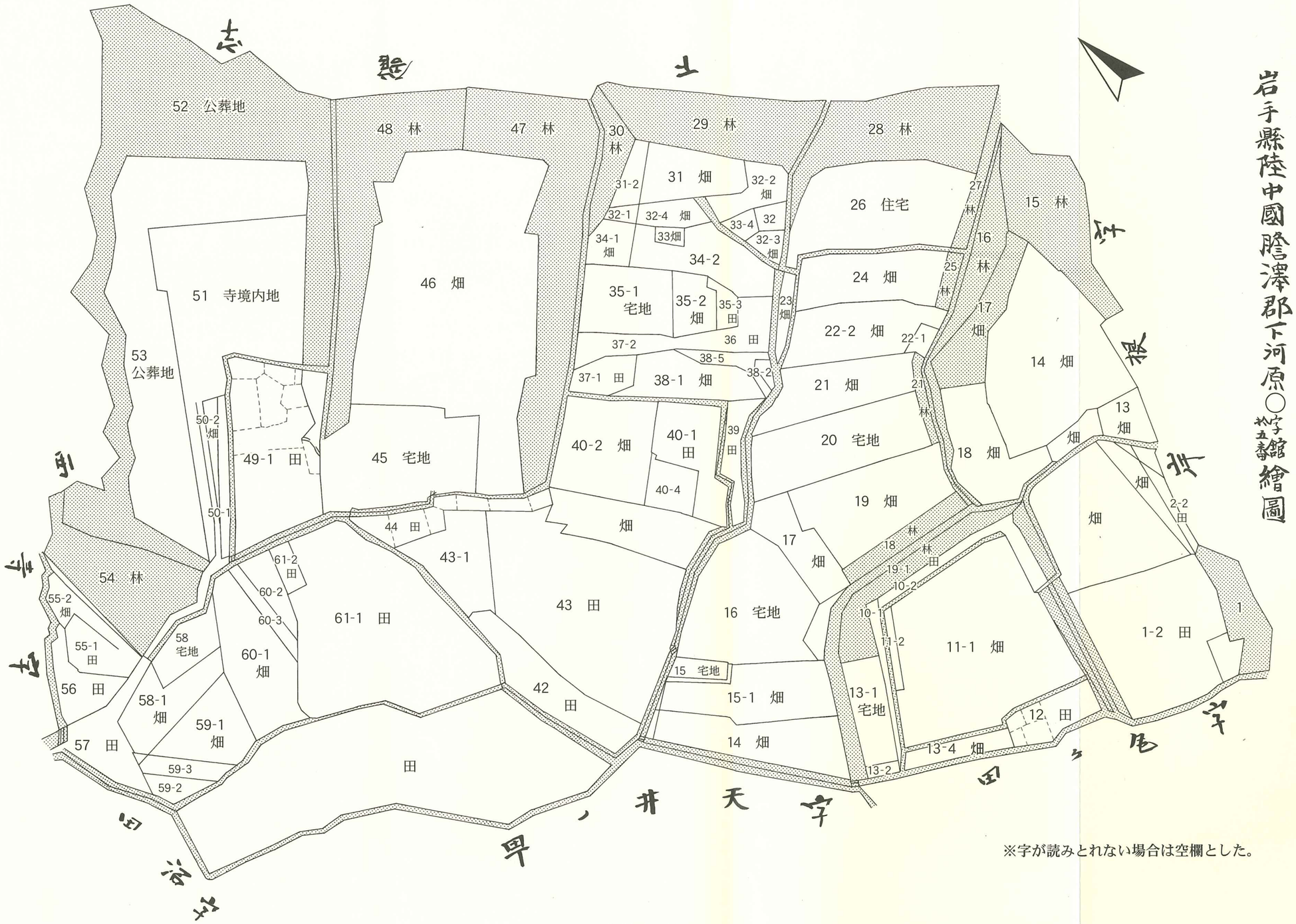
No.	城館名	別　称	所在地	形　式	分類1	分類2	分類3	城主	文献
1	上館	古館・速瀬館	佐倉河字八ツ口	平地連郭式			○		
2	胆沢城	方八丁	佐倉河字渋田他	平地単郭式			○	坂上田村麻呂	
3	館	長城館・川端館	佐倉河字北館	平地居宅		●			安永風土記
4	佐野館	タテバッタケ	佐倉河字宿	平地単郭式		●			安永風土記
5	御伊勢館		佐倉河字白井坂	平地連郭式		●			安永風土記
6	堀ノ内舘	上館	佐倉河字竈堂	平地居宅		●			安永風土記
7	毘沙門館	南館	佐倉河字天井町	平地居宅		●			安永風土記
8	下河原内館	轟館	佐倉河字東館	平地単郭式		●		下河原玄藩	安永風土記
9	東館		佐倉河字東館	平地単郭式		●			安永風土記
10	要害館	桐山屋敷	佐倉河字東館	平地単郭式		●			安永風土記
11	赤井館		佐倉河字東館	平地単郭式			○		
12	嶋館	那須川館・古館	佐倉河字嶋館	平地輪郭式		●		名須川玄藩	安永風土記
13	館	跡呂井館	神明町	平地輪郭式		●		岩渕氏	安永風土記
14	水沢城	要害	表小路	平地単郭式		●		蜂谷破鏡、留守宗利	安永風土記
15	築館	塩釜古館	築館	平地連郭式		●			安永風土記
16	常楽寺館		佐倉河字曽根田	平地連郭式			○		
17	要害館	要害館	佐倉河字後田	平地単郭式			○		
18	寿庵館	福原館	福原	平地単郭式			○	後藤寿庵	
19	片子沢館		真城字方子沢	平地単郭式		●			安永風土記
20	須江城	四郎館	真城字南塩加羅	平地単郭式	▲	●		須江四郎	安永風土記・古城書上
21	堤尻館	堤尻沢館	真城字大壇	段丘単郭式		●		堤尻殿	安永風土記
22	馬篭館		真城字馬篭館	段丘単郭式			○	馬籠長之助	
23	折居館		真城字要害他	段丘単郭式		●			安永風土記
24	瀬台野館	瀬台野古館・館	真城字寺後他	平地単郭式		●			安永風土記
25	上姉体城	館	姉体町字寺の西	平地単郭式	▲	●		千田豊後	安永風土記・古城書上
26	中野城	館	真城字館	平地単郭式	▲	●		千田与右衛門	安永風土記・古城書上
27	西館		姉体町字天神林	平地単郭式		●			安永風土記
28	道場館		姉体町字天神林	平地単郭式		●			安永風土記
29	松川館		姉体町字天神林	平地単郭式		●			安永風土記
30	内館	下姉体城本丸	姉体町字天神林	平地連郭式	▲	●			安永風土記・古城書上
31	羽黒堂館	蝦夷の砦	羽田町字御山下	平地単郭式		●			安永風土記
32	羽黒堂城	古館	羽田町字八木沢	山地連郭式	▲	●		羽黒堂対島守	安永風土記・古城書上
33	北鵜ノ木館	卯ノ木古館	羽田町字北鵜ノ木	山地連郭式			○		
34	鶯沢館		羽田町字篭	丘陵連郭式			○	鶯沢四郎兵衛	安永風土記
35	黒田助城	館	羽田町字門下	山地連郭式	▲	●		菊地内膳	安永風土記・古城書上
36	鵜ノ木館	館	黒石町字鵜ノ木	丘陵単郭式		●			安永風土記
37	鶴城館	黒石古館	黒石町字鶴城	山地輪郭式		●		黒石越後守正端	安永風土記
38	下柳館	下谷木	黒石町字下柳	丘陵居宅			○	千葉薩摩	

分類1　▲：延宝年中の古城書上にあるもの
分類2　●：安永風土記に載せられたもの
分類3　○：風土記に載らないが館跡が明らかで伝承あるもの



第7図　水沢市の中世城館跡

岩手縣陸中國膽澤郡下河原○字五軒館繪圖



※字が読みとれない場合は空欄とした。

第8図　絵図

※読み取れない字は空欄もしくは
○(空き)とした。

第9図　地籍図

部が確認できる。西に接して安養寺がある。中世に下河原氏が、後、羽黒堂氏居城。

上記中の公舎というのは、今回の発掘調査原因となった水沢家畜保険衛生所のことと思われる。現在、主郭にあたる内舘の現況は主に水田となっているが、付近の住民には言い伝えとして残っているようである。また、一部ではあるが堀が確認できる場所もあり、ここが中世城館であったことを偲ばせる。

なお、内舘の西側に曹洞宗の光明山安養寺があり、こちらは永禄元（1558）年に開創、金ヶ崎町永徳寺の末寺とされる。

(3) 水沢市の鋳物関連遺跡と関係地名

水沢市の地場産業の一つとして鋳物産業が挙げられる。本遺跡においても、確実な鋳物工房跡は検出されなかったが、鋳造炉と思われるよう窯体の炉壁、鋳型、坩堝（るつぼ）等が出土しており、鋳物関連遺跡及び関係地名について若干触れたい。

水沢市における鋳物の起源は、平安時代末期豊田館主藤原清衡が近江国から鋳物職人を呼び寄せて江刺市岩谷堂寺田松の木で鋳造させたのが始まりとされている。14世紀後半には京都聖護院の鋳物師が羽田町羽黒堂の千葉氏を継ぎ、葛西氏のお抱え鋳物師となった。その後1683年には及川喜右衛門が鋳物師となり、以降水沢市羽田町田茂山が鋳物生産地の中心として栄えた。江戸時代は伊達藩の統制を受け主に鍋や釜の日常品を製作していた。現在においても鋳物産業は水沢市の地場産業として今なお盛んである。平成10年現在で工場数56、従業員数753人、売上高88億円に達している。

水沢に鋳物が盛んとなった地理的背景には、第１に原材料、第２に燃料、第３に輸送のバランスがとれていたことがある。第１の原材料についてであるが、①鋳物に必要不可欠な砂鉄、岩鉄、銅が周辺の東山・気仙、江刺の３郡に豊富に産出されたこと。②良質の砂が北上川、胆沢川の合流地点より採取できたこと。③田茂山をとりまく丘陵地帯が良質の粘土を包蔵していたこと、等が挙げられる。第２の燃料については、銑鉄の溶解に必要な木炭が付近の北上山系各方面より安価に得ることができた。第３の輸送については、江刺・胆江地方が仙台領の文化・経済の中枢地域であり、舟運に恵まれた北上流路の要地であった。さらに、これら経済的要因に加え、中世から近世にかけて葛西氏や伊達氏の保護を受けていたという政治的要因も鋳物産業発達にとっては重要な役割を果たしたものと思われる。

遺跡としては、水沢市羽田町御山下の鹿野遺跡、江刺市岩谷堂寺田の寺田遺跡が発掘調査されている。鹿野遺跡は17世紀後半～18世紀にかけての鉄関連工房跡が発見され、ふいごの羽口や炉壁、炉体、鋳型等が出土している。寺田遺跡は16世紀末葉～17世紀初頭にかけての鋳物工房跡が発見され、コシキ片・鋳型片等が出土している。また、江刺市愛宕の二子町番匠・同金屋・同夕暮・田原土屋・同石山・水沢市羽田町の羽黒堂岩脇・同中山・同松原・田茂山麦屋・同宝生生等で鉄滓等が出土したり、金屋神を祀る家が、北上川の左岸沿い約５kmにわたって点在している。

〈引用・参考文献〉

水沢市（1982）：『水沢市史　2　中世』
水沢市（1982）：『水沢市史　3　近世〈下〉』
水沢市・水沢市観光協会（1981）：『観光水沢』
水沢市・㈳水沢観光協会（1999）：『－歴史と観光－　みずさわ浪漫』
水沢市（1998）：『水沢市統計要覧　平成９年版』

水沢市（1999）：『平成11年度　水沢市市勢要覧　資料編』
財団法人水沢市埋蔵文化財調査センター（1998）：『鹿野遺跡』水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書第11集
相原康二他（1998）：『大いなる夢の史跡』胆江日日新聞社
大上和良・吉田充（1984）：「北上川中流域、胆沢扇状地における火山灰層序」『岩手大学工学部研究報告 vol.37　1984』
中川久夫・岩井淳一・大池昭三・小野寺信吾・森由紀子・木下尚・竹内貞子・石田琢二（1963）：「北上川中流沿岸の第四系および地形」『地質雑誌　vol.69』p219～227
阿部惠彦（1983）：「水沢及びその周辺の地形・地質と土壌」『水沢の自然と文化Ⅱ』水沢市文化財調査研究年報1983
瀬川司男（1983）：「水沢市の原始と古代－遺跡を中心として－」『水沢の自然と文化Ⅱ』水沢市文化財調査研究年報1983
岩手県教育委員会（1986）：『岩手県中世城館跡分布報告書』岩手県文化財調査報告書第82集
高橋信雄・昆野靖（1996）：『日本の古代東北　51　岩手』保育社
㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1996）：『龍ヶ馬場遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第243集
㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1997）：『白井坂Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第248集

Ⅲ．野外調査と室内整理の方法

1．野外調査

(1) グリッドの設定

用地内に基準点２点を設定し、第Ｘ系公共座標軸を利用してグリッドを設定した。基準点１・２の成果値、及び杭高は以下の通りである。なお、基準点設置については、㈱アクト技術開発に業務委託をした。

基準点１　Ｘ＝-93,120.000ｍ　Ｙ＝27,550.000ｍ　Ｈ＝49.843ｍ

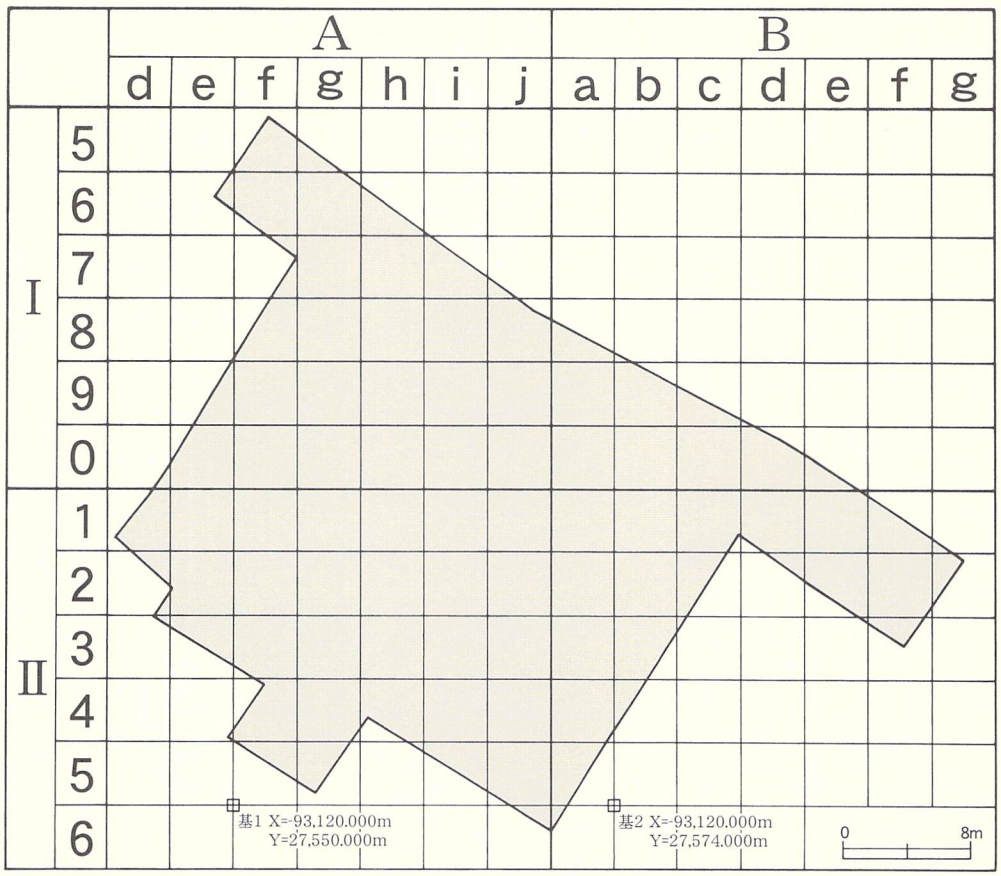
基準点２　Ｘ＝-93,120.000ｍ　Ｙ＝25,574.000ｍ　Ｈ＝49.735ｍ

また、上記基準点の他、補点として３カ所を調査区及び用地内に設置した。

グリッドは、起点を北東に置き一辺40×40ｍの大グリッドと、さらに大グリッドを４×４ｍ単位で10等分した小グリッドに細分した。大グリッドは起点から北から南へⅠ～Ⅱ、西から東へＡ～Ｂを、小グリッドは北から南へ１～０、西から東へａ～ｊを付した。調査区の名称は、大グリッドと小グリッドを組み合わせによって呼称した（例えばⅠＡ１ａ、ⅡＢ５ｇ等）。

(2) 粗掘・遺構検出

調査を開始するにあたり、ⅡＡ５ｈグリッド北東隅付近を起点に約Ｎ－32°－Ｅの方向を境界とし、東側調査区と西側調査区に分割した。これは、調査区に通じる道路の幅員が狭かったため排土置き場の確保が難しく、分割して調査を行う必要があったためである。



第10図　グリッド配置図

調査は最初に東側調査区について行うこととし、文化課が実施した試掘結果の確認のため２箇所のトレンチのクリーニングを行った。その後、遺構検出面までの深さや層序を確認し、重機及び人力によって徐々に表土除去を行った。遺構の検出が進むにつれ、遺構密度が文化課の試掘結果以上であったため、西側調査区についても早急に遺構検出を行い、遺跡全体の遺構数を確認する必要がでてきた。そのため、急遽用地外に排土置き場を設け、排土を行うこととし、西側調査区についても遺構検出を進めた。

遺構の検出は、Ⅲ層（主に黒褐色土）上面およびⅤ層（主に黄褐色土）上面で行った。Ⅲ層で検出されたものはわずかであり、ほとんどがⅤ層上面である。

(3) 遺構名の付け方

検出された遺構については、以下のように略号を付し、通し番号を付けた。

ＳＩ…竪穴住居跡、竪穴状遺構　　ＳＢ…掘立柱建物跡　　ＳＫ…土坑　　ＳＤ…溝跡・堀跡

ＳＡ…塀跡　　Ｐ…柱穴

なお本報告書では、第１号竪穴住居跡、第２号土坑等と遺構名を付け替えているが、本文中では旧遺構名も記している。

(4) 精査・実測

原則として竪穴住居跡、カマド燃焼部は４分法で、その他の遺構は２分法で精査を行った。実測は簡易遣り方測量で行い、遺構の平・断面図は縮尺20分の１を基本としたが、時間の都合上部分的に平板測量により小縮尺を用いた箇所もある。出土した遺物については、必要と思われるものについては写真撮影、平面実測後取り上げを行った。その他の遺物についても、適宜層位を確認しながら取り上げるよう努めた。竪穴住居跡・竪穴状遺構における遺物の取り上げ方については、埋土を4分割し時計回りにＱ１（カマドがある一辺を上に見て左上側の1/4ブロック）～Ｑ４（同左下側の1/4ブロック）と名付け、取り上げた。

(5) 写真撮影

写真撮影は、６×７㎝判1台（モノクローム）と35㎜判４台（モノクローム・カラーリバーサル各２台）を使用した。また、メモ的にポラロイドカメラを使用した。調査終了前には、セスナ機による空中写真撮影を行った。

２．室内整理

(1) 遺物の処理

遺物は、野外調査と並行して雨天時等を利用し水洗まで行い、その後室内整理期間に注記・接合・復原の順に進めた。遺物は土器類、陶磁器類、石器・石製品類、土製品類、金属製品類に大別し、それぞれ報告書掲載用のものを選別後、登録作業・実測・拓本・写真撮影・トレースを行い、遺物図版を作成した。石器類は器種毎に登録し、土器類と同様に進めた。

(2) 遺構図面

野外調査で得られた図面類は、標高等の確認・平断面図の点検をし、必要に応じて合成した。その後トレース・遺構図版作成の順に進めた。

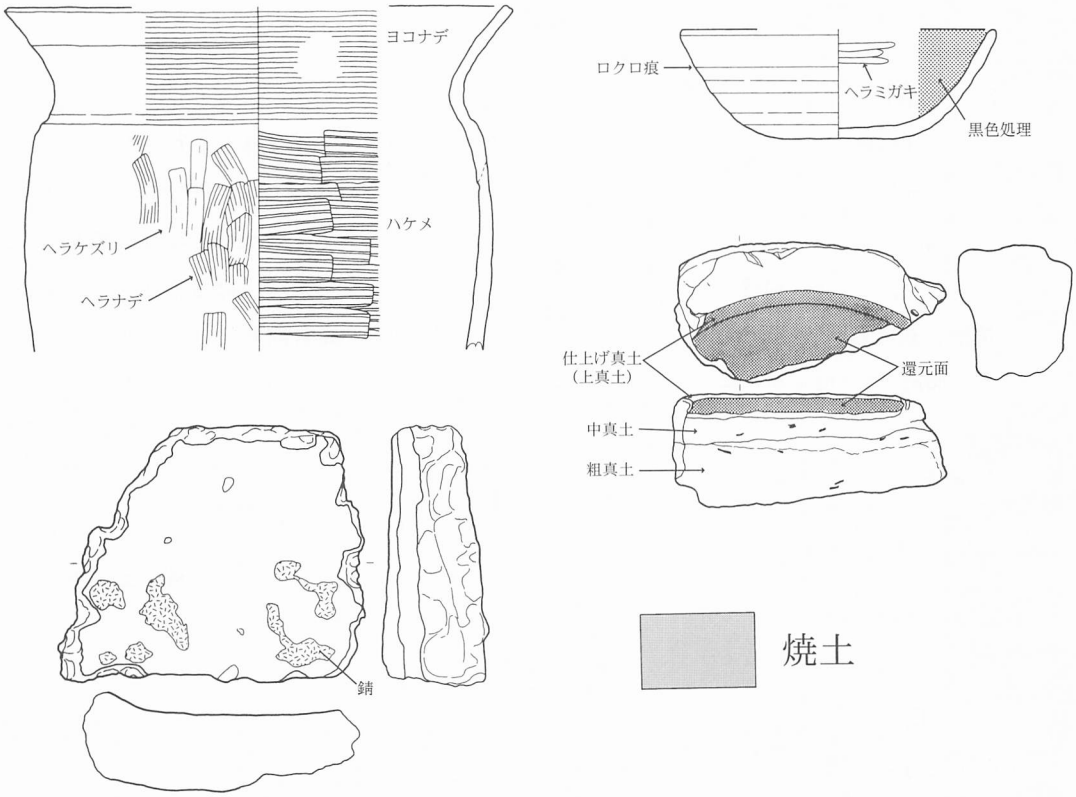
(3) 図版について

遺物図版は遺構種別毎にⅣ章に、遺構外出土のものはⅤ章にまとめて作成・掲載した。縮尺は土器実測図が原則1/3（土師器・須恵器・縄文土器・弥生土器・陶磁器）、拓影図は1/3、石器・石製品及び土製品・鉄製品は2/3～1/3である。なお、各図版内にはそれぞれスケールを付している。また、須恵器の断面は黒く塗りつぶし、土師器のそれとと区別した。須恵器の拓影図は、右側に表面、左側に裏面のものを貼付しているが、破片実測は左右がこの逆になっている。土師器の実測図の表現は、第11図に示したとおりである。

遺構図版は遺構の種類毎に掲載した。縮尺は各遺構とも1/50ないし1/60を基本としているが、掘立柱建物跡は1/100としている。また、竪穴住居跡のカマド付近については1/30である。遺構の図版に使用したスクリーントーンについては、第11図に凡例として示した。

(4) 遺物写真図版について

遺物写真図版の縮尺は、土器・陶磁器類が1/2～1/4、石器・石製品は1/1～1/3、土製品（鋳物関連遺物を含む）は1/2～1/3を原則とした。



第11図　凡例

Ⅳ．検出された遺構と遺構内出土遺物

本遺跡の調査の結果、検出された遺構は、竪穴住居跡10棟、竪穴状遺構１棟、土坑25基、溝跡４条、溝状遺構２条、堀跡２条、塀跡１条、掘立柱建物跡10棟、柱穴列６条、円形周溝１条、橋脚跡１棟、集石遺構２基、柱穴約800基である。出土遺物は、竪穴式住居内から土師器（酸火焔焼成されたもの。所謂赤焼き土器を含む）や須恵器（還元焔焼成されたもの）を中心に、中世～近世の陶磁器、炉壁や鋳型等の鋳物関連製品、石鏃や砥石等の石器・石製品、土錘等の土製品等が出土している。

１．竪穴住居跡

・第１号竪穴住居跡（ＳＩ１）

遺構　（第12～13図、写真図版３）

〈位置・検出状況〉　ＢⅡｂ１～ｂ３、ＢⅡｃ１～ｃ２区に位置する。Ｖ層（地山面）で検出した。

〈重複〉　第５号、６号掘立柱建物跡、第１号柱穴列と重複し、本遺構が旧い。

〈平面形〉　南東隅の一部が調査区外に延びているが、隅丸方形を呈すると考えられる。

〈規模〉　東西方向棟で5.60ｍ、南北方向棟で5.20ｍを測る。主軸方向はＮ－20°－Ｗである。検出分の床面積は29.08㎡である。

〈埋土〉　４層に区分された。黒褐色粘土質シルトが主体で、カマド付近の埋土には焼土が斑点状に混入する。

〈壁〉　地山の褐色粘土を掘り込んで構築されている。床面から緩く外傾して立ち上がる。壁高は2.5～11㎝である。

〈床面〉　中央部より東側が周溝に向かってわずかに傾斜している。締まっている。

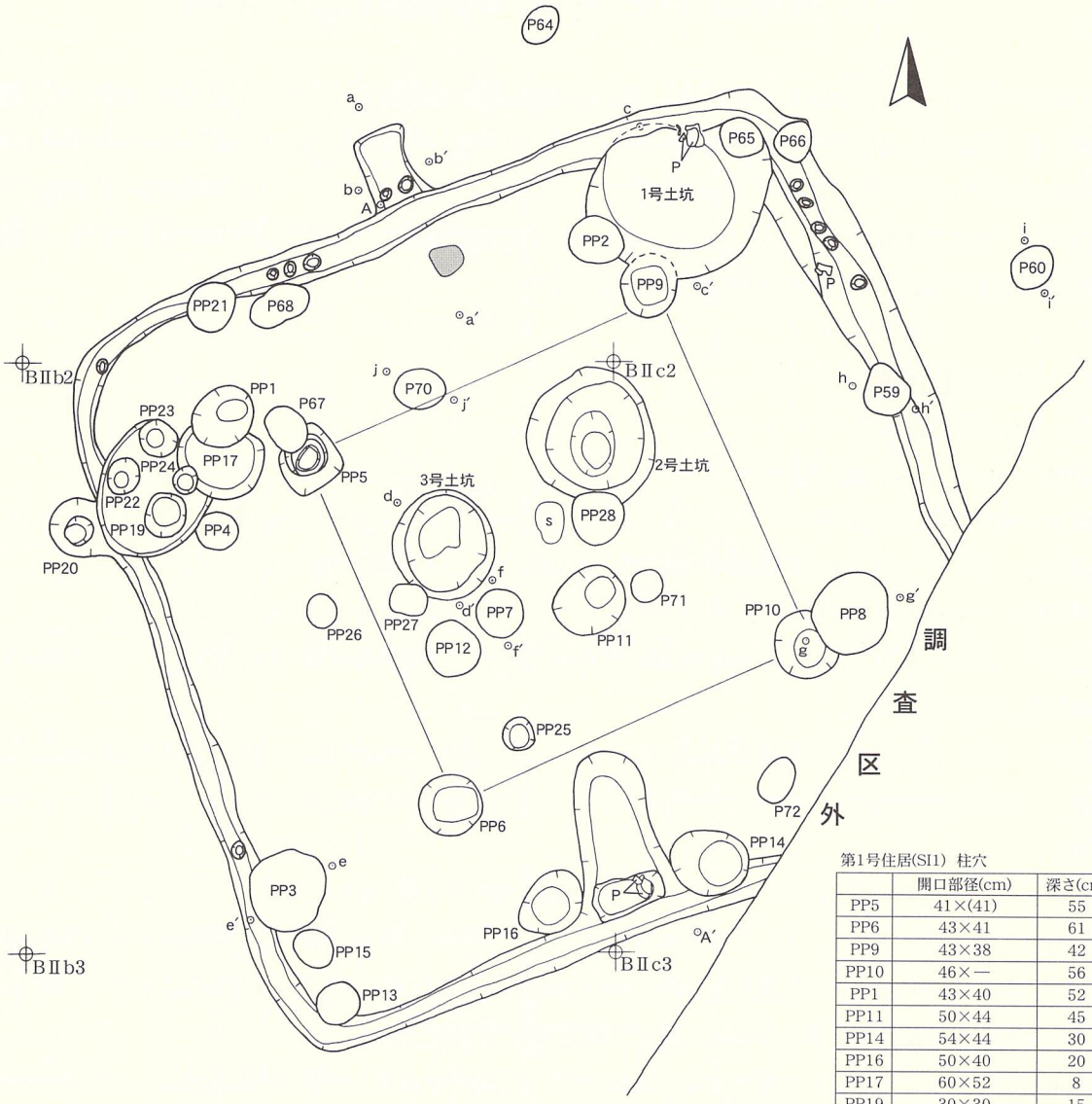
〈柱穴〉　35基検出された。このうち４基（PP５・PP６・PP９・PP10）は配置・規模等から主柱穴と考えられる。PP１、PP11は南西辺に傾斜し、特にPP11は主柱穴PP６を支えるような配置である。また、21基（白抜き）は検出面・配置・規模等からより新しい時代のものと思われる。

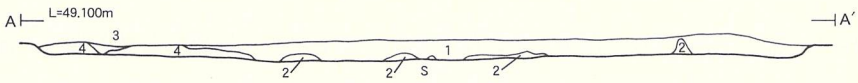
〈周溝〉　壁直下を全周する。幅は15㎝～45㎝、深さは２㎝～14㎝で、東壁の周溝が深い。一部で壁柱穴と思われる小柱穴を10基検出した。

〈カマド〉　住居北西辺中央部に設けられている。埋土上部が削平されているため、煙道部と燃焼部の一部しか残っていない。燃焼部は20㎝×20㎝の台形状の広がりを持ち、焼土の層厚は最大２㎝である。燃焼部から（土師器？）が出土している。

〈付属施設〉　北隅に１基、中央部に２基の土坑（１号土坑、２号土坑、３号土坑）を、南東辺中央部で入り口状遺構を検出した。１号土坑は周溝を避けて袋状に構築されていたが、調査時に幾分崩壊してしまった。主柱穴PP９、新しい時代に構築されたPP２、Ｐ65、Ｐ66に切られている。楕円形状を呈し、規模は120㎝×115㎝、深さは43㎝である。貯蔵穴とみられる。２号土坑は円形を呈し、90㎝×90㎝、深さは24㎝である。３号土坑は２号土坑の西側に位置している。円形を呈し、70㎝×70㎝、深さは19㎝である。入り口状遺構は長さ110㎝、最大幅50㎝、深さ４㎝で周囲より僅かに窪み、床は固く締まっている。周溝手前で方形状に一段窪んでいる。両脇に楕円形状の柱穴が１基ずつ検出された（PP14、PP16）。PP14は55㎝×45㎝、深さ30㎝で、PP16は50㎝×40㎝、深さ20㎝である。１号土坑、３号土坑、出入口状遺構から遺物が出土している。

〈その他〉　床面中央部で径30㎝の扁平な礫を検出した。表面が部分的に焼け焦げている。柱を据えたとき



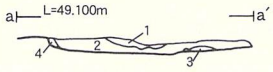


第1号竪穴住居跡(SI1) ベルト　A-A′

1. 7.5YR2/2黒褐　粘土質シルト　7.5YR4/4褐粘土20％斑点状に混入　炭化物含む　乾燥時締まる
2. 7.5YR3/4暗褐　粘土　炭化物含む　乾燥時締まる
3. 5YR3/2暗赤褐　粘土質シルト
4. 5YR3/2暗赤褐　粘土質シルト　5YR3/6暗赤褐粘土質シルトがパッチ状に混入　骨含む

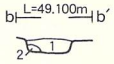
第1号住居(SI1) 土坑

	開口部径(cm)	深さ(cm)
1号土坑	120×115×70	43
2号土坑	90×90	24
3号土坑	70×70	19



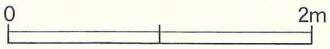
第1号竪穴住居跡(SI1) カマド　a-a′

1. 5YR3/2暗赤褐　粘土質シルト
2. 5YR3/3暗赤褐　粘土質シルト　5YR3/6暗赤褐粘土質シルト斑点状混入　粉末状の骨含む
3. 5YR2/4極暗赤褐　粘土質シルト(焼土)
4. 7.5YR3/4暗褐　粘土



第1号竪穴住居跡(SI1) 煙道　b-b′

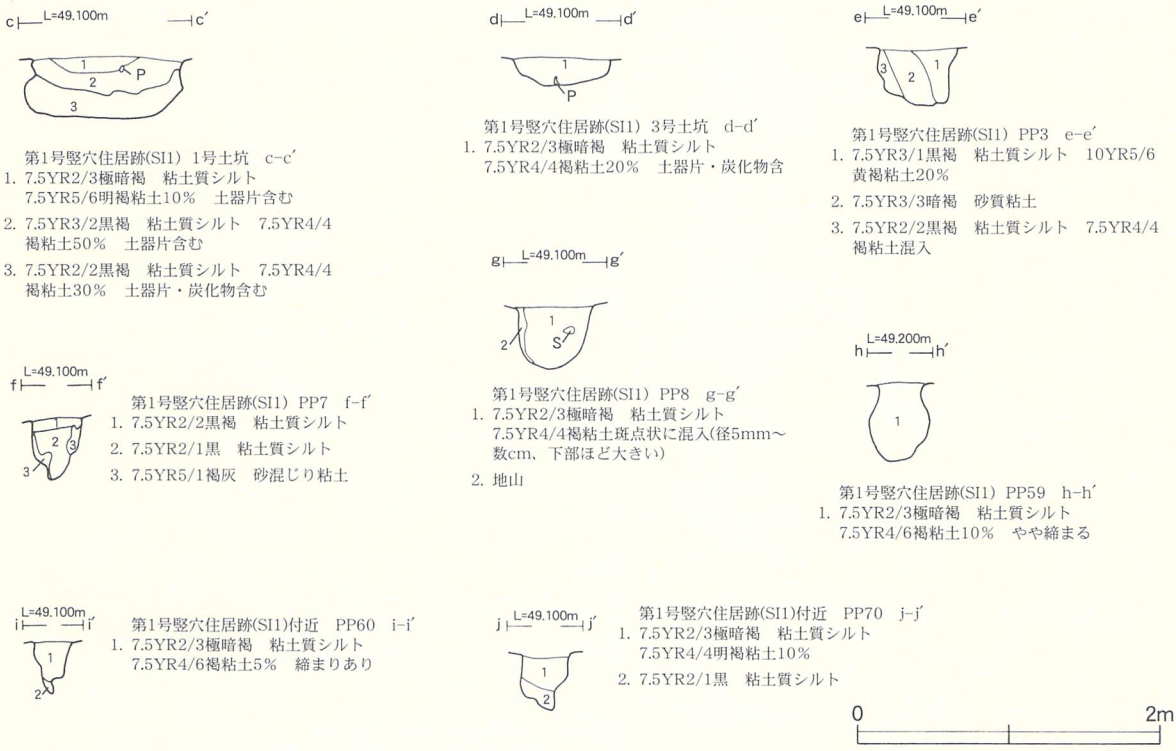
1. 5YR2/2黒褐　粘土質シルト
2. 7.5YR3/4暗褐　粘土



第1号住居(SI1) 柱穴

	開口部径(cm)	深さ(cm)
PP5	41×(41)	55
PP6	43×41	61
PP9	43×38	42
PP10	46×—	56
PP1	43×40	52
PP11	50×44	45
PP14	54×44	30
PP16	50×40	20
PP17	60×52	8
PP19	30×30	15
PP20	38×—	20
PP22	26×22	18
PP23	27×26	32
PP24	20×16	4
PP2	38×33	37
PP3	54×52	37
PP4	30×24	36
PP7	32×32	45
PP8	57×51	42
PP12	38×38	34
PP13	29×27	29
PP15	28×24	37
PP18	欠番	
PP21	33×21	28
PP25	22×22	18
PP26	24×20	12
PP27	26×22	21
PP28	36×36	25
P59	柱穴一覧表参照	
P65	柱穴一覧表参照	
P66	柱穴一覧表参照	
P67	柱穴一覧表参照	
P68	柱穴一覧表参照	
P70	柱穴一覧表参照	
P71	柱穴一覧表参照	
P72	柱穴一覧表参照	

第12図　第1号竪穴住居跡(1)



第13図 第1号竪穴住居跡(2)

の礎石的なものと考えることもできる。

遺物（第46～47図、写真図版27）

埋土及び床面、土坑、柱穴等から土師器、須恵器が大コンテナ１箱分出土し、土師器坏２点、甕13点、須恵器坏１点、甕１点を掲載した。

１～２は土師器の坏で、体部に段を持ち内面には黒色処理が施されている。１は丸底、２は平底である。３は須恵器の坏である。４～16は土師器の甕である。主に胴部外面はヘラナデ、胴部内面はヘラナデ及びハケメによる調整が施される。17は須恵器甕の胴部破片である。外面はタタキによる調整がなされている。

時期 第Ⅰ期

・第２号竪穴住居跡（ＳＩ２）

遺構（第14図、写真図版４）

〈位置・検出状況〉 ＢⅡｂ３～ｂ４グリッドに位置する。Ⅴ層（地山面）上面で検出した。

〈重複・新旧関係〉 P133と重複し、本遺構が旧い。

〈平面形〉 遺構が調査区外に延びるため全体形は不明であるが、隅丸方形状を呈するものと思われる。

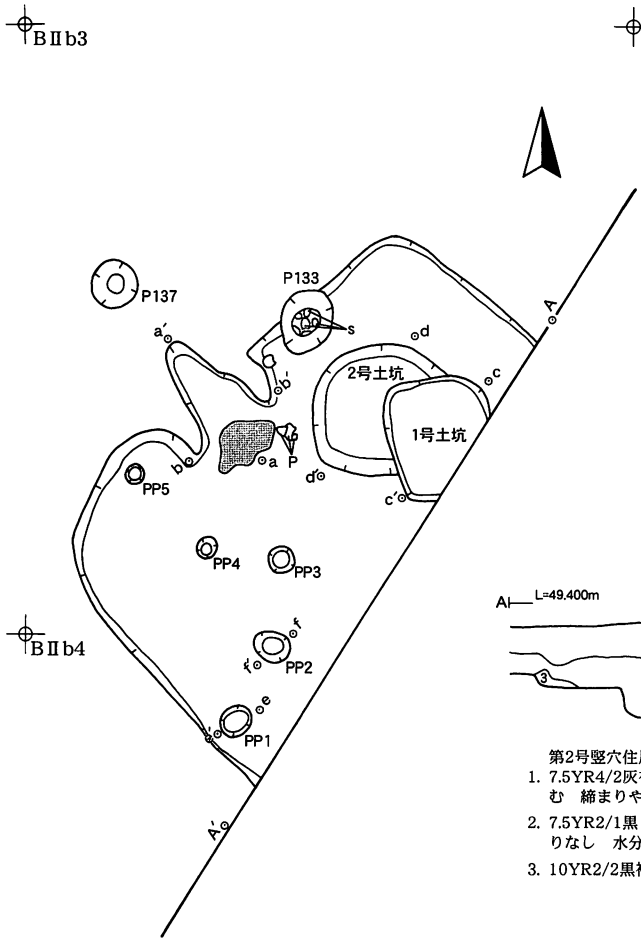
〈規模〉 北東壁方向棟で320㎝を測り、主軸方向Ｎ－46°－Ｗである。検出分の面積は約5.1㎡である。

〈埋土〉 黒～黒褐色粘土質シルトの２層に分かれる。黄～黄褐色土が２、３％～30％含まれる。

〈壁〉 地山を掘り込んで構築されていおり、床面から外傾して立ち上がる。壁高は２～７㎝程度である。

〈床面〉 平坦で、固く締まっている。

〈柱穴〉 本遺構に係わると思われる５基が検出された。開口部径12～25㎝、深さ６～13㎝である。主柱穴

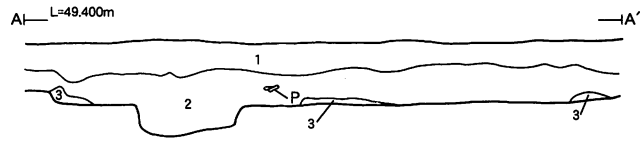


第2号住居(SI2) 柱穴

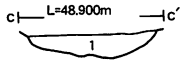
	開口部径(cm)	深さ(cm)
PP1	22×19	8
PP2	24×20	8
PP3	18×18	7
PP4	14×14	6
PP5	12×12	13

第2号住居(SI2) 土坑

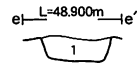
	開口部径(cm)	深さ(cm)
1号土坑	80×70	16
2号土坑	―×―	21



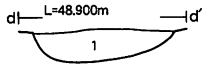
第2号竪穴住居跡(SI2) A-A′ 埋土断面
1. 7.5YR4/2灰褐 粘土質シルト 酸化鉄分の集積 小石・礫を若干含む 締まりやや軟・粘性あり 水田耕作土 Ⅲ層
2. 7.5YR2/1黒 粘土質シルト 10YR6/6明黄褐2.3% 粘性あり・締まりなし 水分に富む
3. 10YR2/2黒褐 粘土質シルト 10YR5/6明黄褐30%



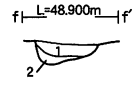
第2号竪穴住居跡(SI2) 1号土坑 c-c′
1. 7.5YR2/1黒 粘土質シルト 10YR6/6明黄褐2.3% 粘性あり・締まりなし 水分に富む



第2号竪穴住居跡(SI2) PP1 e-e′
1. 10YR2/1黒 粘土質シルト 粘性なし・締まりやや軟

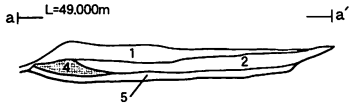


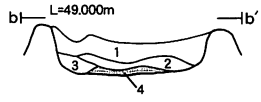
第2号竪穴住居跡(SI2) 2号土坑 d-d′
1. 5YR2/1黒褐 粘土質シルト 10YR6/6明黄褐30% 焼土粒微量



第2号竪穴住居跡(SI2) PP2 f-f′
1. 10YR5/6黄褐 粘土質シルト 粘性あり・締まりやや軟
2. 10YR2/1黒 粘土質シルト 粘性なし・締まりやや軟

0 2m





第2号竪穴住居跡(SI2) カマド a-a′・b-b′
1. 5YR2/1黒褐 粘土質シルト 10YR6/6明黄褐20% 炭化物・焼土粒少量 粘性なし・締まりあり
2. 10YR3/4暗赤褐 焼土 天井部の崩落土
3. 10YR3/3暗褐 粘土質シルト
4. 10YR4/6赤 焼土 粘性なし・締まりあり

0 1m

第14図 第2号竪穴住居跡

と思われる柱穴は検出されなかった。

〈土坑〉　重複関係にある２基（１号土坑、２号土坑）が検出され、１号土坑が新しい。１号土坑は方形状を呈し、開口部径80×70㎝、深さ16㎝を測る。２号土坑は円ないし楕円形状を呈すると思われ、深さは21㎝を測る。

〈カマド〉　北西壁に構築されている。燃焼部と煙道の一部が検出された。煙出部については、位置的にはP137が該当すると思われるが、煙道部の削平状況に対し相対的に深いことから煙出に該当しない可能性もある。P137は開口部径32×32㎝、深さ46㎝である。燃焼部の焼土は47×28㎝の不整形を呈し、層厚は最大５㎝である。袖部は裁ち断りから地山を利用し構築されたものと思われる。

遺物（第47～48図、写真図版５）

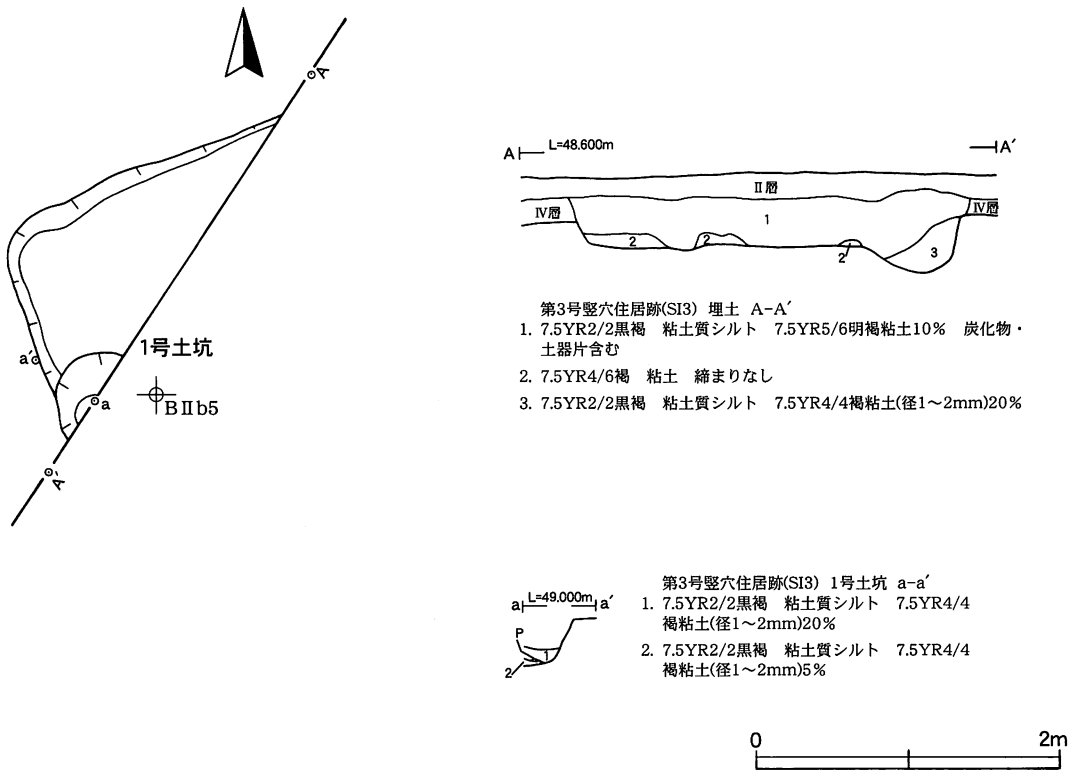
埋土及びカマド袖部周辺、土坑等から土師器、須恵器が小コンテナ１箱分出土し、土師器の坏３点、甕４点を掲載した。18～20は土師器の坏である。いずれも丸底を呈し、18、20は体部有段、19は無段である。また、20は内面黒色処理がされている。胴部外面調整はヨコナデやケズリ、胴部内面調整はヨコナデ、ミガキが施される。21～24は土師器の甕である。非ロクロ成形によるもので、胴部外面調整はヘラナデやケズリ、胴部内面調整はヘラナデ、ハケメである。

時期　第Ⅰ期

・第３号竪穴住居跡（ＳＩ３）

遺構（第15図、写真図版５）

〈位置・検出状況〉　ＢⅡａ４～ａ５、ＢⅡｂ４グリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。



第15図　第3号竪穴住居跡

〈重複・新旧関係〉　なし。

〈平面形〉　遺構が調査区外に延びるため全体形は不明であるが、隅丸方形が予想される。

〈規模〉　棟方向の長さは不明である。軸方向は、北西壁方向でN－20°－Wである。面積は検出分で約1.4㎡である。

〈埋土〉　褐色ないし黒褐色の粘土質シルト主体の３層からなる。１層には炭化物・土器片が含まれる。

〈壁〉　Ｖ層よりやや上面の層より掘り込まれており、外傾して立ち上がる。壁高は32㎝である。

〈床面〉　検出範囲内においては平坦で、締まっている。

〈柱穴〉　検出されていない。

〈土坑〉　南東壁隅で１基検出された。遺構外にかかるため、規模は不明である。

〈カマド〉　検出されていない。

遺物（第48図、写真図版28）

埋土中から須恵器が少量出土し、壺２点を掲載した。25～26は胴部破片で、ロクロ成形後のケズリ等の調整は見られない。

時期　共伴遺物が少なく、時期不明である。

・第４号竪穴住居跡（ＳＩ４）

遺構　（第16～17図、写真図版６）

〈位置・検出状況〉　AⅡｉ３～ｉ４、AⅡｊ３～ｊ４グリッドに位置する。Ｖ層（地山面）上面で検出した。

〈重複・新旧関係〉　円形周溝と重複し、本遺構が新しい。

〈平面形〉　隅丸方形状を呈する。西側に約260×200㎝範囲の重機による方形状の攪乱により一部壊されている。

〈規模〉　東壁486㎝、南壁456㎝、西壁510㎝、北壁515㎝を測る。主軸方向はN－77°－Eである。面積は23.5㎡である。

〈埋土〉　９層に細分される。主体は明黄褐粘土質シルト及び黒褐粘土質シルト主体の埋土である。

〈壁〉　地山面を掘り込んで構築されており、緩く外傾して立ち上がる。東壁の一部と南壁は、ある程度明瞭な立ち上がりを確認することが可能であったが、他は不明瞭であった。壁高は東壁～南壁で２～７㎝である。

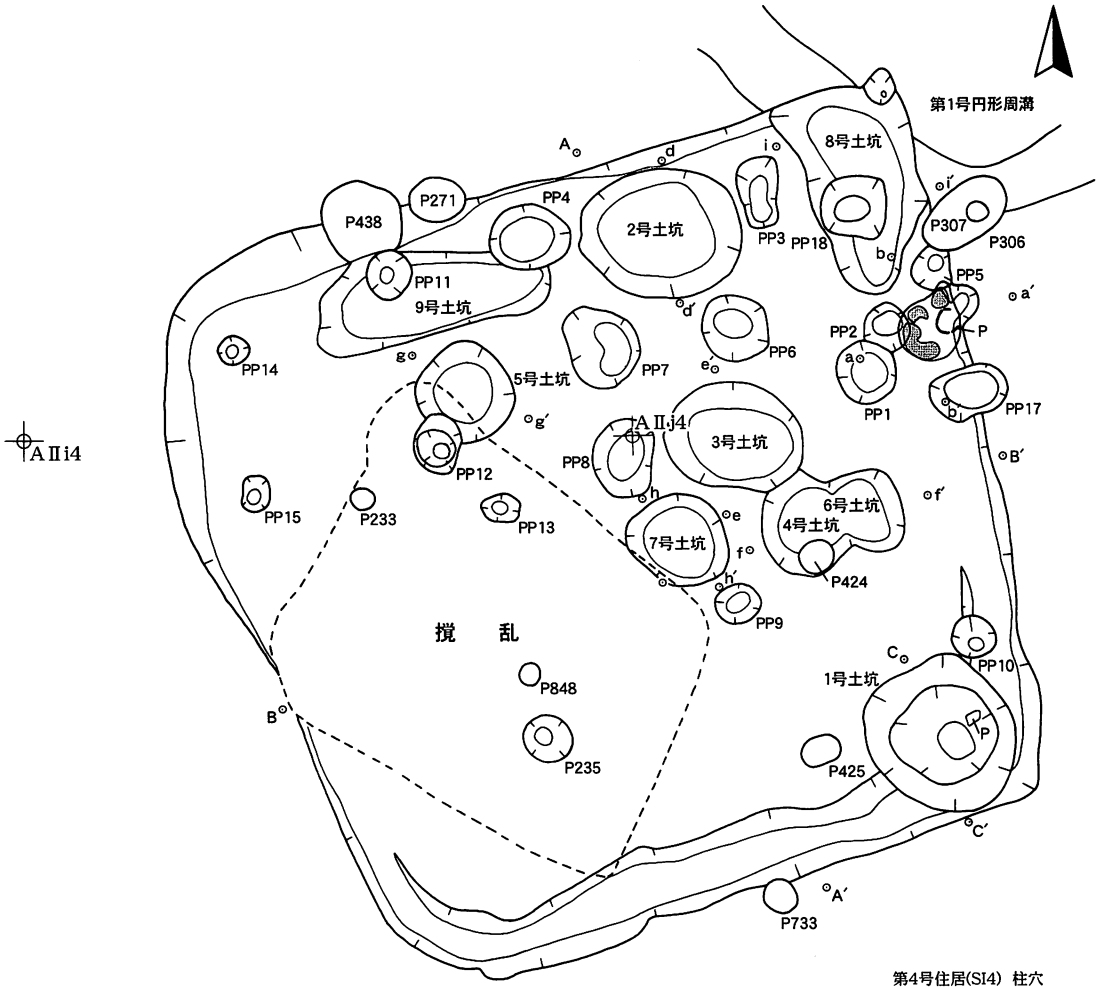
〈床面〉　概ね平坦であり、固く締まっている。

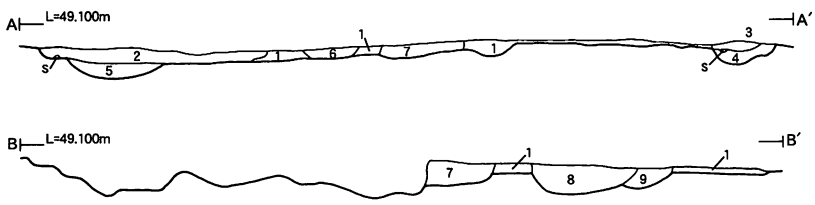
〈柱穴〉　検出段階で本遺構より新しいと確認された６基の他、全部で18基検出された。主柱穴については定かでないが、PP10、PP11、PP16（P235と同一柱穴）、PP18の4基がその可能性がある。その他14基中、攪乱部分から検出されたPP12、PP13については、本遺構に伴うものかは不明である。規模等の詳細は第16図に示した。

〈土坑〉　９基検出した。規模等の詳細は第16図に示した。

〈カマド〉　燃焼部と僅かに煙道部が検出された。煮炊きに使用されたと思われる甕が出土している

〈その他〉　周溝状の掘り込みが南壁際で検出された。上端幅42㎝、深さ14㎝を測る。本来の周溝としての役割を果たしていたものか、単に水はけを良くするために掘られたものなのか不明である。また、本遺構は柱穴及び土坑が数多く検出されており、建て替えの可能性も考えられる。削平により東壁付近でのみ明瞭な立ち上がりが見られず、重機による攪乱も受けており、ベルト断面からその痕跡を確認することは困難であった。





第4号竪穴住居跡(SI4) ベルト A-A′・B-B′

1. 10YR6/6明黄褐　粘土質シルト　粘性あり・締まりあり
2. 5Y2/1黒褐　粘土質シルト　焼土粒微量　粘性あり・締まりやや軟
3. 5YR2/1黒褐　粘土質シルト　10YR6/6明黄褐30%
4. 10YR6/6明黄褐　粘土質シルト　黒褐やや混じる
5. 10YR3/2黒褐　粘土質シルト　10YR6/6明黄褐7%斑状　炭化物5%・焼土5%　酸化鉄分微量　粘性あり・締まりあり
6. 10YR3/2黒褐　粘土質シルト　10YR6/6明黄褐10%　炭化物微量　酸化鉄分微量　土師器・須恵器片含む　粘性あり・締まりあり
7. 10YR2/2黒褐　粘土質シルト　10YR5/4にぶい黄褐15%　炭化物少量　酸化鉄分含む　粘性あり・締まりあり
8. 10YR3/2黒褐　粘土質シルト　10YR6/6明黄褐5%　炭化物1%　粘性あり・締まりあり
9. 10YR3/2黒褐　粘土質シルト　10YR4/4褐粒2～3%　粘性あり・締まりあり

第4号住居(SI4) 土坑

	開口部径(cm)	深さ(cm)
1号土坑	106×92	23
2号土坑	106×84	13
3号土坑	91×68	17
4号土坑	—×69	20
5号土坑	64×61	19
6号土坑	86×—	14
7号土坑	63×58	9
8号土坑	138×66	14
9号土坑	158×61	12

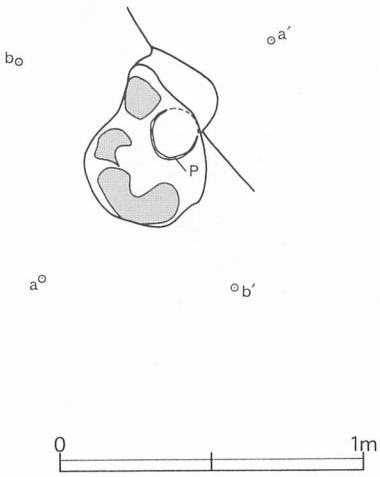
第4号住居(SI4) 柱穴

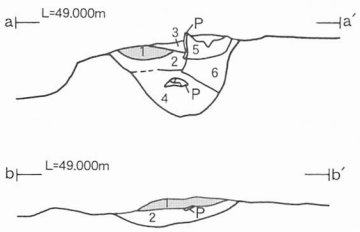
	開口部径(cm)	深さ(cm)
PP1	42×40	12
PP2	34×32	7
PP3	46×28	11
PP4	52×42	9
PP5	28×26	32
PP6	44×44	22
PP7	57×48	17
PP8	51×40	26
PP9	30×26	12
PP10	29×28	13
PP11	33×30	11
PP12	40×32	24
PP13	26×19	11
PP14	20×19	6
PP15	24×17	21
PP16	31×28	24
PP17	46×31	10
PP18	42×39	11

P233	柱穴一覧表参照	
P271	柱穴一覧表参照	
P306	柱穴一覧表参照	
P424	柱穴一覧表参照	
P425	柱穴一覧表参照	
P438	柱穴一覧表参照	
P848	柱穴一覧表参照	

0　2m

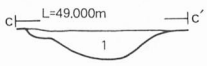
第16図　第4号竪穴住居跡(1)





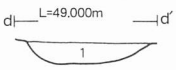
第4号竪穴住居跡(SI4) カマド a-a′・b-b′

1. 10YR4/6赤褐　粘性なし・締まりあり
2. 10YR2/3黒褐　粘土質シルト　10YR6/6明黄褐粘土質シルト10%　炭化物微量・焼土粒微量　粘性あり・締まりあり
3. 10YR2/3黒褐　粘土質シルト　明黄褐小粒、炭化物、焼土を2～3%含む　粘性あり・締まりあり
4. 10YR2/2黒褐　粘土質シルト　明黄褐小粒1～2%　炭化物1～2%　粘性あり・締まりあり
5. 2.5YR6/3にぶい黄　パミスのような細かなサラサラした土　締まりあり・粘性なし
6. 10YR3/3暗褐　粘土質シルト　明黄褐粒5%　粘性あり・締まりあり



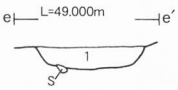
第4号竪穴住居跡(SI4) 1号土坑 c-c′

1. 5YR2/2黒褐　粘土質シルト　7.5YR7/8黄橙10%　炭化物少量　粘性なし・締まりあり



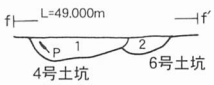
第4号竪穴住居跡(SI4) 2号土坑 d-d′

1. 10YR3/2黒褐　粘土質シルト　10YR6/6明黄褐7%斑状　炭化物5%・焼土5%　酸化鉄分微量　粘性あり・締まりあり



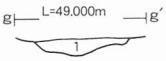
第4号竪穴住居跡(SI4) 3号土坑 e-e′

1. 10YR3/2黒褐　粘土質シルト　10YR6/6明黄褐10%　炭化物微量　酸化鉄分微量　土師器・須恵器片含む　粘性あり・締まりあり



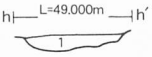
第4号竪穴住居跡(SI4) 4号土坑・6号土坑 f-f′

1. 10YR3/2黒褐　粘土質シルト　10YR4/4褐粒2～3%　炭化物1%・焼土10～15%　粘性あり・締まりあり
2. 10YR2/2黒褐　粘土質シルト　炭化物1%・焼土2%　粘性あり・締まりあり



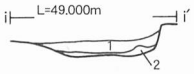
第4号竪穴住居跡(SI4) 5号土坑 g-g′

1. 10YR3/2黒褐　粘土質シルト　10YR6/6明黄褐5%　炭化物1%　粘性あり・締まりあり



第4号竪穴住居跡(SI4) 7号土坑 h-h′

1. 10YR2/2黒褐　粘土質シルト　10YR5/4にぶい黄褐15%　炭化物少量　酸化鉄分含む　粘性あり・締まりあり



第4号竪穴住居跡(SI4) 8号土坑 i-i′

1. 10YR2/2黒褐　粘土質シルト　10YR6/6明黄褐粒2～3%　炭化物1～2%・焼土微量　粘性あり・締まりあり
2. 10YR2/2黒褐　粘土質シルト　10YR6/6明黄褐粒10%　炭化物1～2%　粘性あり・締まりあり

0　2m

第17図　第4号竪穴住居跡(2)

遺物（第48～51図、写真図版28～30）

埋土及びカマド、土坑、柱穴等から土師器、須恵器、石器・石製品が大コンテナ1箱分出土し、土師器の坏10点、甕15点、須恵器の坏４点、甕５点、長頸壺１点、石製品１点を掲載した。

27～36はロクロ成形による土師器の坏である。27は回転糸切りによる底部切り離し後、底部及び胴部下半にヘラケズリによる再調整がされている。34は底部がヘラケズリによる再調整が施されており、底部の切り離し技法は不明である。28～29、33、35～36はヘラケズリあるいはヘラナデによる再調整が施されているものと思われるが、摩滅により不明瞭である。30は内面黒色処理されず、ロクロ成形以外の調整が見られないことから所謂赤焼き土器とされる土器である。37～40は須恵器の坏である。40は切り離し後、底部にヘラケズリ調整がされている。41～54は土師器の甕である。すべてロクロ成形によるものである。54はロクロ成形後、胴部外面にヘラケズリ、胴部内面にヘラナデ調整が施される。52～53は底部に回転糸切り痕が残る。55は須恵器の長頸壺の口縁～頸部である。口径は9.4cmである。56～60は須恵器の甕である。57～58は外面にタタキ、内面にアテグ痕が、59は外面のみタタキ、60はロクロ成形後、外面にヘラケズリが施される。61は石製紡錘車である。外径6.6×7.0cm、中央部孔径1.1cm、厚さ1.2cm、重さ66.02ｇである。

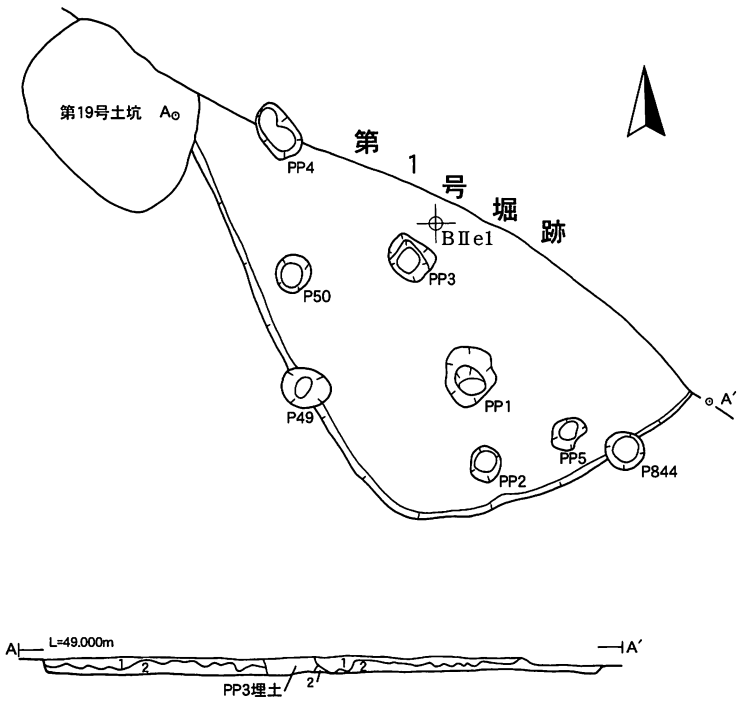
時期　第Ⅲ期

・第５号竪穴住居跡（ＳＩ６）

遺構（第18図、写真図版７）

〈位置・検出状況〉　ＢⅡｄ0～ｄ１、ＢⅡｅ１グリッドに位置する。Ｖ層（地山面）で検出した。

〈重複・新旧関係〉　第１号堀跡、第19号土坑と重複する。本遺構は第１号堀跡より新しく、第19号土坑よ



第5号竪穴住居跡(SI6) ベルト A-A′
1. 7.5YR2/2黒褐　炭化物・焼土・褐色土粒混在
2. 7.5YR3/3褐　炭化物・焼土・褐色土粒混在

第5号住居(SI6) 柱穴

	開口部径(cm)	深さ(cm)
PP1	42×34	59
PP2	24×20	23
PP3	30×25	40
PP4	38×24	25
PP5	24×20	26

P49	柱穴一覧表参照	
P50	柱穴一覧表参照	
P844	柱穴一覧表参照	

0　2m

第18図　第5号竪穴住居跡

り旧い。

〈平面形〉　遺構が第１号堀跡に切られているため全体形は不明であるが、隅丸方形を呈するものと予想される。

〈規模〉　棟方向の長さは不明である。主軸方向はＮ－24°－Ｗである。面積は検出分で約4.2㎡である。

〈埋土〉　黒褐～褐色土の２層からなる。ともに炭化物・焼土が混入する。

〈壁〉　地山を掘り込んで構築されており、外傾して立ち上がる。壁高は５～10㎝である。

〈床面〉　平坦であり、固く締まっている。

〈柱穴〉　本遺構より新しい柱穴３基を除き５基検出した。主柱穴は不明である。

〈土坑〉　検出されていない。

〈カマド〉　検出されていない。

遺物（第51図、写真図版30）

埋土及び柱穴から土師器が小コンテナ１箱弱出土し、坏、甕、鉢それぞれ１点ずつ計３点掲載した。

62は非ロクロ成形の坏である。体部有段であるが、破片のため丸底か平底か不明である。63は甕、64は鉢である。64は推定底径5.2㎝である。

時期　第Ⅰ期

・第６号住居跡（ＳＩ７）

遺構（第19図、写真図版８）

〈位置・検出状況〉　ＢⅡａ１～ｂ１、ＢＩａ０～ｂ０区に位置する。Ｖ層（地山面）で検出した。

〈重複〉　なし。

〈平面形・規模〉　かなり削平を受けており、北東角付近が残存するのみである。平面形は方形を基調とすると思われるものの、規模は不明であり、残存する部分で一辺２ｍ程である。

〈埋土〉　埋土上部が削平されているため検出できた埋土は薄く、４層に区分された。黒褐色粘土質シルトが主体である。

〈壁〉　地山の褐色粘土を掘り込んで構築されている。床面から緩く外傾して立ち上がる。壁高は残りの良いところで４㎝程である。

〈床面〉　概ね平坦で、締まっている。

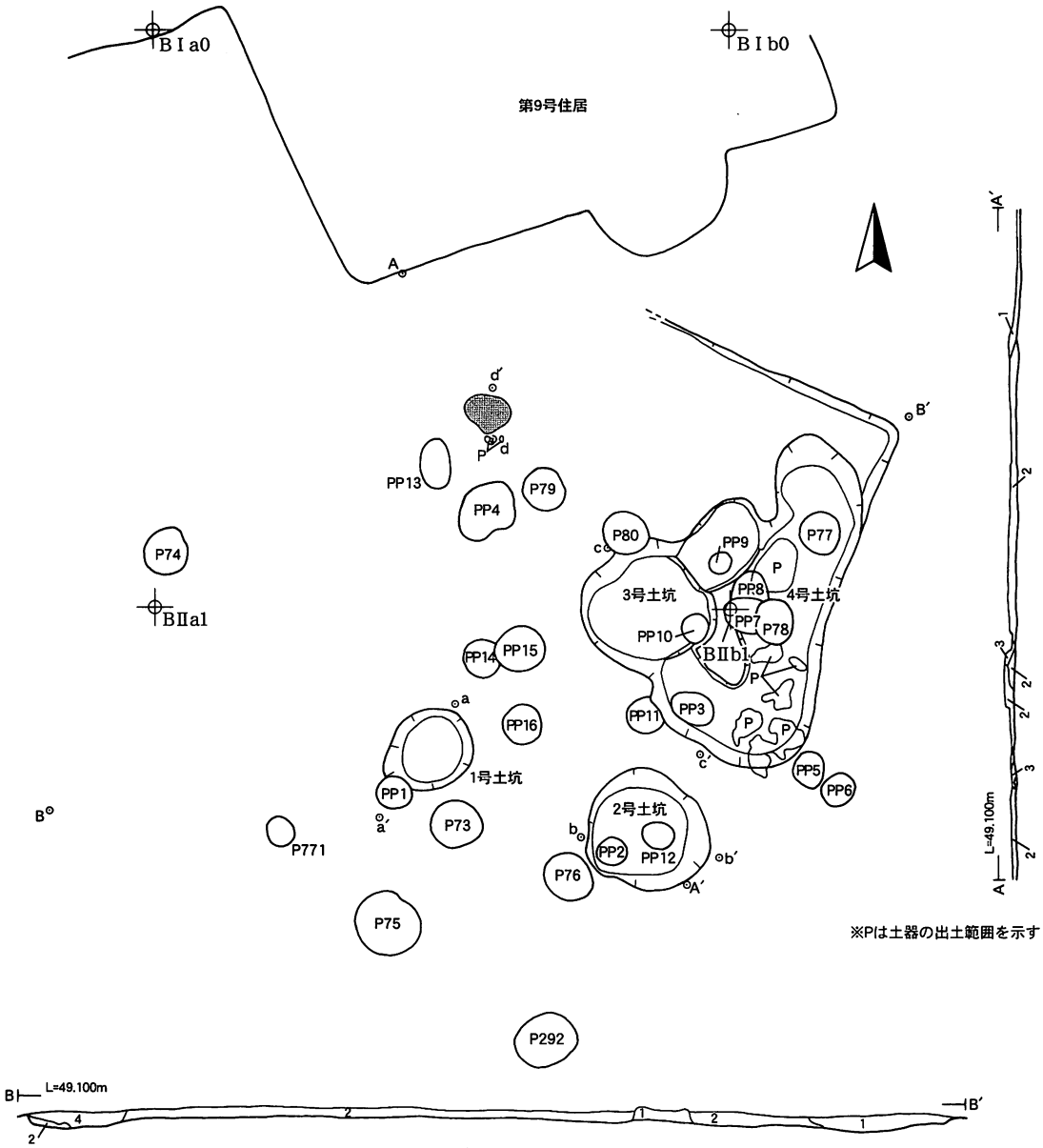
〈柱穴〉　本遺構より明らかに新しいものを除き16基検出されたが、住居跡より新しい時期の柱穴が多く検出されているので、埋土や配置等からは本住居に伴うものを断定できなかった。

〈炉〉　残存する床面南西端で焼け面が確認された。不整楕円形で32cm×26cmの範囲が焼けている。表面は橙色を呈し堅くしまり、厚さは最大3.5cmである。焼土内には粉末状の骨や土器片が含まれていた。

〈土坑〉　４基（１号～４号土坑）検出した。１号土坑は南端に位置し、楕円形状で規模は65cm×55cm、深さは約６㎝である。２号土坑は南東隅に位置し、円形状で規模は90㎝×80㎝、深さは約７㎝である。３号土坑は４号土坑を切って構築されている。円形状を呈し、規模は90㎝×90㎝、深さは23㎝である。４号土坑は不整な隅丸三角形を呈し、規模は190㎝×220㎝、深さは最大11㎝である。埋土上部から比較的多量の土器片が出土した。

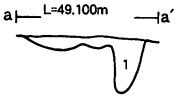
遺物（第51～52図、写真図版30）

埋土及び土坑等から、土師器、須恵器、石器が中コンテナ１箱分出土し、土師器の高坏１点、甕８点、須



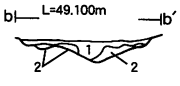
第6号竪穴住居跡(SI7) ベルト A-A′・B-B′

1. 7.5YR2/2黒褐　粘土質シルト　5YR3/6暗赤褐シルトが斑点状に混入　乾燥時締まる
2. 7.5YR2/2黒褐　粘土質シルト　7.5YR4/4褐シルト質粘土40%　乾燥時締まる　石英含む
3. 7.5YR3/1黒褐　粘土質シルト　乾燥時固い　石英含む
4. 7.5YR2/2黒褐　粘土質シルト　7.5YR4/6褐粘土斑点状に混入(径1mm大)　石英含む



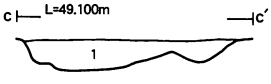
第6号竪穴住居跡(SI7) 1号土坑 a-a′

1. 7.5YR2/2黒褐　粘土質シルト　7.5YR4/4褐粘土10%　炭化物・土器片含む



第6号竪穴住居跡(SI7) 2号土坑 b-b′

1. 7.5YR2/2黒褐　粘土質シルト　7.5YR5/6褐粘土10%斑点状に混入(径5mm)　礫混入(径10mm)
2. 7.5YR4/4褐　粘土



第6号竪穴住居跡(SI7) 3号土坑 c-c′

1. 7.5YR2/2黒褐　粘土質シルト　7.5YR5/6明褐粘土斑点状に混入　土器片・炭化物

第6号竪穴住居跡(SI7) 焼土 d-d′

1. 10YR3/1黒褐　粘土質シルト　2.5YR6/8橙焼土40%　粉末状の骨・土器片含む

0　2m

第6号住居(SI7) 柱穴

	開口部径(cm)	深さ(cm)
PP1	24×22	39
PP2	21×19	10
PP3	30×22	9
PP4	46×36	40
PP5	25×22	17
PP6	24×21	不明
PP7	—×23	不明
PP8	—×—	不明
PP9	17×15	4
PP10	20×19	8
PP11	—×25	11
PP12	23×18	8
PP13	34×21	8
PP14	26×26	検出のみ
PP15	34×30	検出のみ
PP16	27×26	検出のみ

第19図　第6号竪穴住居跡

恵器の坏２点、石製品１点を掲載した。

65は土師器の高坏の底部と思われる。内外面にヘラナデ調整が施される。66～67は須恵器の坏である。67は焼成不良である。68～75は非ロクロ整形の甕である。胴部調整は外面がヘラナデ、ヘラケズリ、ハケメ、内面がヘラナデによるものである。76は石棒状の石製品である。欠損のため本来の器種は不明である。遺存長9.5cm、幅2.7cm、厚さ1.5cmを測る。重さは42.43ｇあり、石質は粘板岩である。

時期　第Ⅰ期

・第７号竪穴住居跡（ＳＩ８）

遺構（第20図）

〈位置・検出状況〉　ＢＩｂ９～ｂ０、ＢＩｃ９～ｃ０グリッドに位置する。Ｖ層（地山面）上面に位置する。

〈重複・新旧関係〉　第１号堀跡と重複し、本遺構が旧い。

〈平面形〉　隅丸方形を呈する。

〈規模〉　南棟方向で310cmを測るが、西壁の立ち上がりが不明瞭のため更に広がる可能性がある。

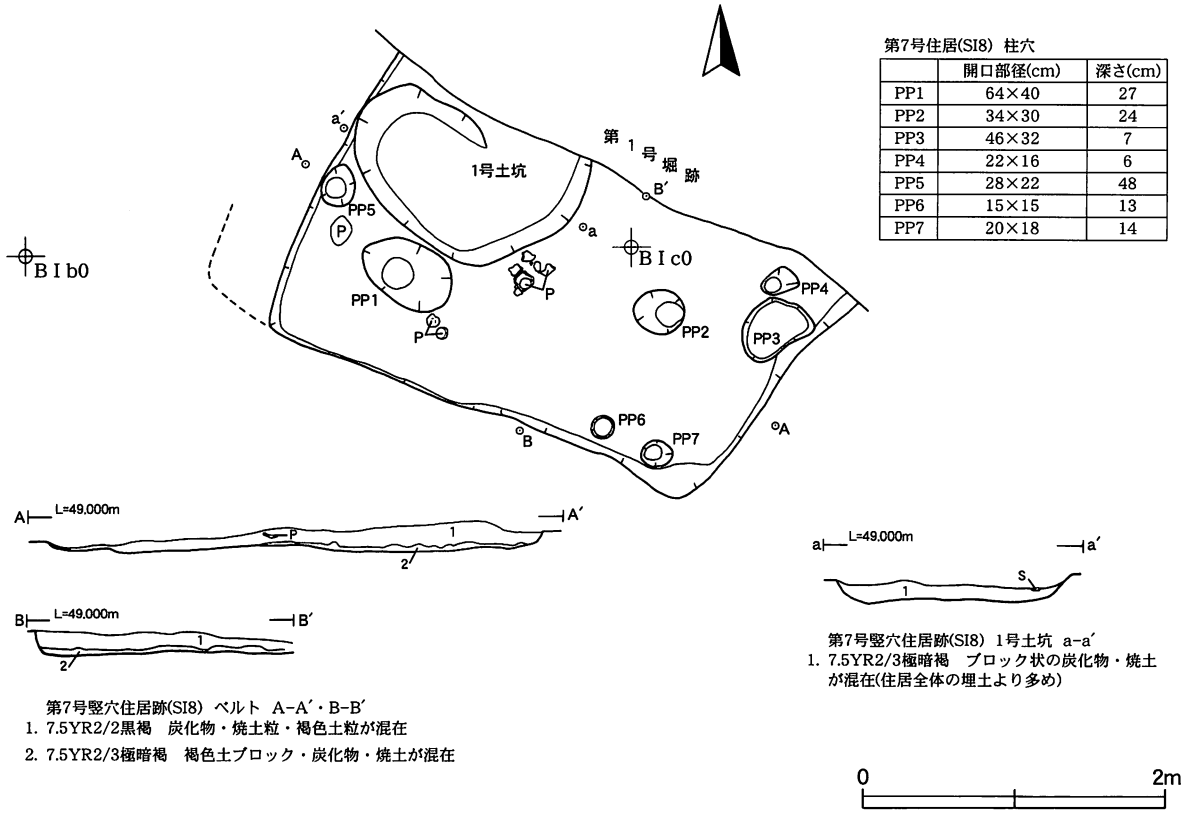
〈埋土〉　黒褐～極暗褐色土の２層に大別される。ともに炭化物・焼土が混在する。

〈壁〉　地山面を掘り込んで構築されており、床面から外傾して立ち上がる。壁高は東壁で12cm測るが、東に向かうにつれ浅くなる。

〈床面〉　ほぼ平坦であり、固く締まっている。

〈柱穴〉　７基検出されている。主柱穴は不明である。詳細は第20図に示した。

〈土坑〉　１基検出した。第１号堀跡に切られているため平面形は不明である。深さは12cmある。



第7号住居(SI8) 柱穴

	開口部径(cm)	深さ(cm)
PP1	64×40	27
PP2	34×30	24
PP3	46×32	7
PP4	22×16	6
PP5	28×22	48
PP6	15×15	13
PP7	20×18	14

第7号竪穴住居跡(SI8) ベルト A-A′・B-B′
1. 7.5YR2/2黒褐　炭化物・焼土粒・褐色土粒が混在
2. 7.5YR2/3極暗褐　褐色土ブロック・炭化物・焼土が混在

第7号竪穴住居跡(SI8) 1号土坑 a-a′
1. 7.5YR2/3極暗褐　ブロック状の炭化物・焼土が混在(住居全体の埋土より多め)

第20図　第7号竪穴住居跡

〈カマド〉　検出されていない。

遺物（第52図、写真図版30～31）

埋土及び床面から、土師器、縄文土器、石器が中コンテナ１箱分出土し、土師器の坏２点、甕６点、縄文土器の深鉢破片２点、石器２点掲載した。

77～85は土師器である。77～78はロクロ成形の坏で、78は回転糸切り後にヘラケズリによる再調整が施される。79は高坏の底部である。外面にヘラナデ調整が施される。80～85は非ロクロ整形の甕である。80、85は底部外面に木葉痕が残る。86～87は縄文土器の深鉢、胴部破片である。86はＬＲ縄文、87は撚糸文が施される。88～89は敲石である。ともに石質は安山岩で、88は長さ9.2㎝、幅6.8㎝、厚さ5.7㎝、重さ436.57ｇで、90は長さ8.3㎝、幅5.7㎝、厚さ5.1㎝、重さ425.44ｇである。

時期　第Ⅱ期

・第８号竪穴住居跡（ＳＩ９）

遺構（第21～23図、写真図版９）

〈位置・検出状況〉　ＡＩｊ０～ＢＩａ０区に位置する。Ｖ層（地山面）で検出した。

〈重複・新旧関係〉　第９号竪穴住居跡、第１号堀跡と重複しており、第９号竪穴住居跡よりも新しく、第１号堀跡よりも古い。

〈平面形〉　方形を呈すると思われる。

〈規模〉　遺構の重複等で明確ではない部分があるが、壁や床の残存部分から東西方向棟で4.30ｍ、南北方向棟で3.70ｍと推定される。主軸方向はＮ－10°－Ｗである。検出分の床面積は15.20㎡である。

〈埋土〉　２層に区分された。黒褐色粘土質シルトが主体で、暗赤褐色の焼土粒（径10～20㎜）が混入する。埋土中部で炭化物が集中する層がある。平面的には中央部東寄りに炭化物が広がる。

〈壁〉　地山の褐色粘土を掘り込んで構築されている。床面から緩く外傾して立ち上がる。壁高は6.0～9.5㎝である。

〈床面〉　概ね平坦で、締まっている。

〈柱穴〉　13基検出された。このうち４基（PP２、PP６、PP13、PP14）は配置・規模等から主柱穴と考えられる。また、PP８は第９号竪穴住居跡の主柱穴と思われる。その他８基（PP１、PP３、PP４、PP５、PP７、PP10、PP11、PP12）は配置・規模等からより新しい時代のものと思われる。

〈周溝〉　検出されていない。

〈カマド〉　住居北辺中央部より東寄りに設けられており、燃焼部と煙道、煙出しピットを確認した。燃焼部の天井部は潰れた状態で検出され、燃焼部内の規模は幅50㎝、奥行きは残存側壁から55㎝以上とみられる。側壁は黄褐色の地山を貼りつけて構築されている。奥壁は緩やかな角度で約12㎝立ち上がり、煙道に移行する。煙道底面は約36°の勾配で煙出しに向かって下がっている。煙道部の長さは約1.1ｍあり、一部はトンネル状になって残存している。底面幅は約20㎝ある。煙出しは円形で規模30㎝×25㎝で、煙道底面との比高は約９㎝である。

〈付属施設〉　土坑および土坑状の遺構７基と出入口状施設と思われる遺構を検出した。６号土坑は南壁付近に位置し、底面は礫層が露出する。楕円形状を呈し、規模は120㎝×95㎝、深さ約20㎝である。７号土坑は北東隅にあり貯蔵穴とみられる。楕円形状を呈し、規模は85㎝×80㎝、深さ22㎝である。出入口状遺構は東辺中央部付近に位置する。半楕円形状を呈し、長径は100㎝で、住居床面に向かって緩く傾斜している。

北寄りの部分に柱穴状の窪みがある。

遺物（第53～54図、写真図版31～32）

埋土・カマド・土坑・柱穴から土師器、須恵器、石製品、土製品が中コンテナ１箱分出土し、土師器の坏１点、甕９点、須恵器の坏３点、甕２点、長頸壺１点、石製品は砥石３点、土製品は鋳型１点掲載した。

90はロクロ成形の土師器の坏である。回転糸切り無調整で、内面に放射状のヘラミガキが施される。91～93は須恵器の坏である。94～102は土師器の甕である。ロクロ成形が主体となるが、98、100、101は非ロクロ成形である。いずれもカマド周辺から出土したものである。103～107は須恵器で103は長頸壺、104～107は甕である。103～105はロクロ成形、106～107は胴部外面にタタキ、内面にアテグによる調整が施される。108～110は石製品で器種はいずれも砥石である。どれも小型で、108は長さ5.1㎝、幅2.4㎝、厚さ1.1㎝、重さ21.46ｇで、109は長さ3.8㎝、幅3.5㎝、厚さ1.2㎝、重さ15.40ｇで、110は長さ5.1㎝、幅3.5㎝、厚さ2.1㎝、重さ34.33ｇである。111の土製品は鋳型である。本遺構に伴うものではなく、切り合う第１号堀跡からの流入と思われる。

なお、本遺構は第10号竪穴住居跡と重複していることから、Ｑ１及びＱ４埋土から出土した遺物については第10号竪穴住居跡との関わりを考慮する必要がある。

時期　第Ⅱ期

・第９号竪穴住居跡（ＳＩ10）

遺構（第21～23図、写真図版10）

〈位置・検出状況〉　ＡＩｊ０、ＡⅡｉ１～ｊ１グリッドに位置する。Ｖ層（地山面）で検出した。

〈重複・新旧関係〉　第８号竪穴住居跡、第１号堀跡と重複しており、そのいずれよりも古い。

〈平面形〉　隅丸方形を呈すると思われる。

〈規模〉　遺構の重複等で明確ではない部分があるが、壁や床の残存部分から東西方向棟で5.30ｍ、南北方向棟で5.0ｍ以上と推定される。主軸方向はＮ－10°－Ｗである。検出分の床面積は17.50㎡である。

〈埋土〉　埋土上部が削平されているため検出できた埋土は薄く、２層に区分された。黒褐色粘土質シルトが主体で、褐色粘土が斑点状に混入する。

〈壁〉　地山の褐色粘土を掘り込んで構築されている。床面から緩く外傾して立ち上がる。壁高は0.4㎝～2.7㎝である。

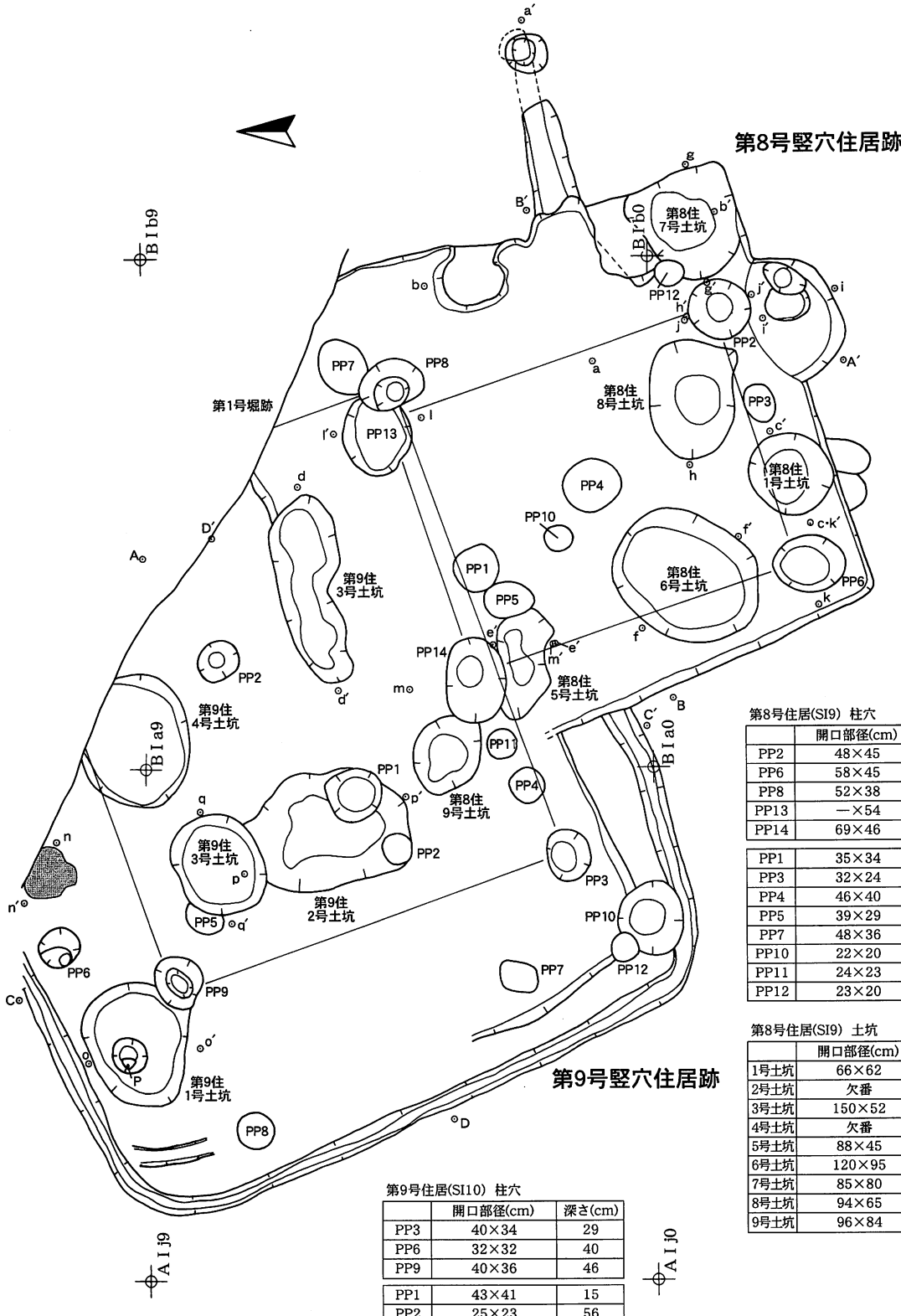
〈床面〉　概ね平坦で、締まっている。

〈柱穴〉　12基検出された。このうち３基（PP３、PP６、PP９）は配置・規模等から住居に伴うものと考えられ、PP３とPP９は主柱穴と考えられる。また、第８号竪穴住居跡のPP88は本遺構の主柱穴と思われる。その他は配置、規模等からより新しい時代のものと思われる。

〈周溝〉　壁直下を全周するとみられる。幅は11㎝～20㎝、深さは4㎝～5㎝である。

〈カマド〉　第１号堀跡に切られているため、検出できなかった。しかしながら、西壁中央付近床面で焼土を確認し、燃焼部の可能性もある。楕円形状を呈し、規模は40㎝以上×40㎝、厚さは６㎝である。

〈付属施設〉　土坑を５基（１～５号土坑）検出した。５号土坑は南西隅にあり、円形状で、規模は57㎝×55㎝、深さ約10㎝である。残り４基は中央部から西側に位置する。１号土坑は円形状を呈し、規模は100㎝×85㎝・深さ19㎝、２号土坑は楕円形状を呈し、規模は130㎝×100㎝・深さ14㎝、３号土坑は円形状を呈し、規模は80㎝×70㎝・深さ17㎝、４号土坑は一部第１号堀跡に切られているが、円形状を呈し、規模は100㎝×90㎝と推



第8号住居(SI9) 柱穴

	開口部径(cm)	深さ(cm)
PP2	48×45	14
PP6	58×45	17
PP8	52×38	70
PP13	—×54	22
PP14	69×46	11
PP1	35×34	6
PP3	32×24	13
PP4	46×40	12
PP5	39×29	19
PP7	48×36	13
PP10	22×20	5
PP11	24×23	5
PP12	23×20	8

第8号住居(SI9) 土坑

	開口部径(cm)	深さ(cm)
1号土坑	66×62	17
2号土坑	欠番	
3号土坑	150×52	15
4号土坑	欠番	
5号土坑	88×45	10
6号土坑	120×95	20
7号土坑	85×80	22
8号土坑	94×65	27
9号土坑	96×84	20

第9号住居(SI10) 柱穴

	開口部径(cm)	深さ(cm)
PP3	40×34	29
PP6	32×32	40
PP9	40×36	46
PP1	43×41	15
PP2	25×23	56
PP4	30×27	18
PP5	22×22	5
PP7	30×24	15
PP8	30×28	14
PP10	58×52	9
PP11	24×22	2
PP12	21×21	11

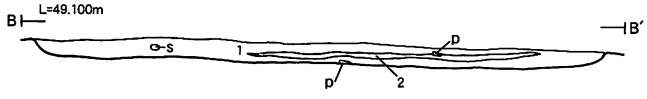
第9号住居(SI10) 土坑

	開口部径(cm)	深さ(cm)
1号土坑	100×85	19
2号土坑	130×100	14
3号土坑	80×70	17
4号土坑	100×(90)	14
5号土坑	57×55	10

第21図　第8号・9号竪穴住居跡(1)

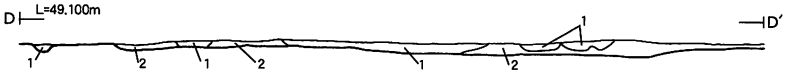
第8号竪穴住居跡(SI9) ベルト A-A′

1. 7.5YR2/3極暗褐粘土質シルトに7.5YR4/4褐粘土10%・5YR4/8赤褐粘土質シルトが斑点状に混入　炭化物・石英含む
2. 7.5YR2/3極暗褐　5YR4/8赤褐粘土質シルト(焼土)斑点状に混入
3. 7.5YR2/2黒褐　粘土質シルト　10YR5/6黄褐粘土50%
4. 10YR5/6黄褐粘土　締まりあり　地山
5. 5YR4/8赤褐　粘土質シルト(焼土投げ捨て)



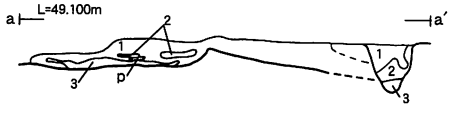
第8号竪穴住居跡(SI9) ベルト B-B′

1. 7.5YR2/2黒褐　粘土質シルト　5YR3/6暗赤褐焼土斑状に混入(径1～2mm) 多量の炭化物片(最大5～10cm大)混入　土器片・石英含む
2. 7.5YR2/2黒褐　粘土質シルト　7.5YR5/6明褐粘土50%　5YR5/8明赤褐焼土斑点状に混入(5～50mm大) 炭化物(最大2～5cm大)が上方に集中



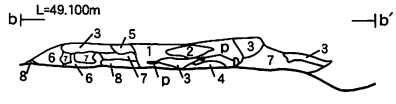
第9号竪穴住居跡(SI10) ベルト C-C′・D-D′

1. 7.5YR2/2黒褐　粘土質シルト　7.5YR4/4褐粘土斑点状に混入(径2～3mm) 石英含む　締まりややあり
2. 7.5YR4/6褐　粘土　締まりあり



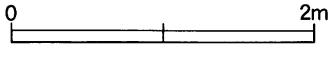
第8号竪穴住居跡(SI9) カマド a-a′

1. 7.5YR2/3極暗褐粘 5YR4/6赤褐焼土斑点状に混入20%　炭化物含む
2. 7.5YR2/3極暗褐　5YR4/6赤褐焼土・5YR5/6明褐粘土が斑点状に混入　炭化物20%含む
3. 10YR5/3にぶい黄褐　粘土質シルト

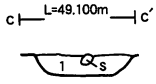


第8号竪穴住居跡(SI9) カマド b-b′

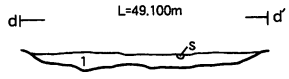
1. 7.5YR2/3極暗褐　粘土質シルト　5YR4/6赤褐焼土20%・7.5YR6/6橙シルト少量が斑点状に混入
2. 7.5YR3/2黒褐　粘土質シルト　5YR4/6赤褐焼土30%・7.5YR6/4にぶい橙シルト10%が斑点状に混入　土器片含む
3. 7.5YR6/4にぶい橙　粘土質シルト
4. 7.5YR3/2黒褐　粘土質シルト　5YR4/6赤褐焼土10%斑点状に混入　上方に7.5YR2/1黒炭化物の密集部分あり　土器片含む
5. 7.5YR2/2黒褐　粘土質シルト　7.5YR5/4にぶい褐粘土20%　土器片含む
6. 7.5YR3/2黒褐　粘土質シルト
7. 7.5YR2/2黒褐　粘土質シルト　7.5YR4/4褐粘土20%　炭化物・土器片含む
8. 7.5YR2/2黒褐　粘土質シルト　7.5YR5/6黄褐粘土50%



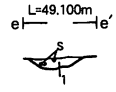
第22図　第8号・9号竪穴住居跡(2)



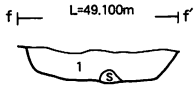
第8号竪穴住居跡(SI9) 1号土坑 c-c′
1. 7.5YR2/2黒褐 粘土質シルト 7.5YR4/4褐粘土10% 炭化物・土器片含む



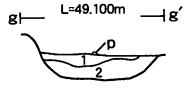
第8号竪穴住居跡(SI9) 3号土坑 d-d′
1. 7.5YR2/3極暗褐 粘土質シルト 7.5YR5/6明褐粘土20% 土器片含む



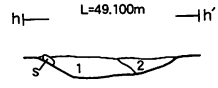
第8号竪穴住居跡(SI9) 5号土坑 e-e′
1. 7.5YR2/3極暗褐 粘土質シルト 10YR6/6明黄褐粘土10% 5YR4/6赤褐焼土10%が斑点状に混入 炭化物(最大1cm大)・土器片含む



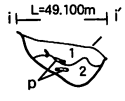
第8号竪穴住居跡(SI9) 6号土坑 f-f′
1. 7.5YR2/3極暗褐 粘土質シルト 7.5YR4/6褐粘土20% 5YR4/8赤褐焼土斑点状に混入 炭化物・土器片含む



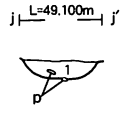
第8号竪穴住居跡(SI9) 7号土坑 g-g′
1. 7.5YR2/2黒褐 粘土質シルト 炭化物・土器片含む
2. 7.5YR2/3極暗褐 粘土質シルト 7.5YR5/6明褐粘土20% 5YR4/6赤褐焼土斑点状に混入(径10mm) 炭化物含む



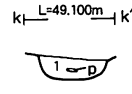
第8号竪穴住居跡(SI9) 8号土坑 h-h′
1. 7.5YR2/2黒褐 粘土質シルト 7.5YR4/4褐粘土斑点状に混入 炭化物・土器片含む
2. 7.5YR2/2黒褐 粘土質シルト 7.5YR5/6明褐粘土混入 炭化物・土器片含む



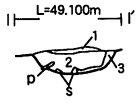
第8号竪穴住居跡(SI9) 入口状施設 i-i′
1. 7.5YR2/3極暗褐 粘土質シルト 7.5YR4/4褐粘土40% 5YR4/8赤褐焼土斑点状に混入 炭化物含む
2. 7.5YR2/3極暗褐 粘土質シルト 10YR6/6明黄褐粘土40% 5YR4/8赤褐焼土斑点状に混入 炭化物含む



第8号竪穴住居跡(SI9) PP2 j-j′
1. 7.5YR2/3極暗褐 粘土質シルト 7.5YR4/4褐粘土10% 5YR4/8赤褐焼土斑点状に混入 炭化物含む

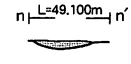


第8号竪穴住居跡(SI9) PP6 k-k′
1. 7.5YR3/2黒褐 粘土質シルト 5YR4/6赤褐焼土20% 炭化物・土器片含む

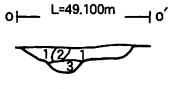


第8号竪穴住居跡(SI9) PP13 l-l′
1. 7.5YR2/3極暗褐 粘土質シルト 5YR4/8赤褐焼土斑点状に混入
2. 7.5YR3/2黒褐 粘土質シルト 5YR4/8赤褐焼土30%斑点状に混入 炭化物・土器片含む
3. 7.5YR2/3極暗褐 粘土質シルト 7.5YR5/6明褐粘土10% 炭化物含む

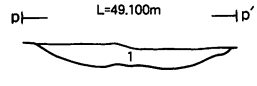
第8号竪穴住居跡(SI9) PP14 m-m′
1. 7.5YR2/3極暗褐 粘土質シルト 10YR6/6明黄褐粘土10% 5YR4/6赤褐焼土10%が斑点状に混入 炭化物(最大1cm大)・土器片含む



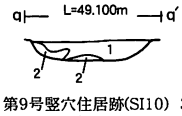
第9号竪穴住居跡(SI10) 焼土 n-n′
1. 5YR4/8赤褐 シルト質土 土器片含む



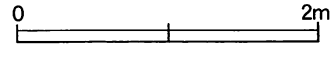
第9号竪穴住居跡(SI10) 1号土坑 o-o′
1. 7.5YR3/2黒褐 粘土質シルト 7.5YR5/6明褐粘土10% 5YR4/8赤褐焼土が斑点状に混入 炭化物・土器片含む
2. 7.5YR5/6明褐 粘土 7.5YR3/4暗褐シルト質粘土・5YR4/8赤褐焼土が斑点状に混入(30%)
3. 7.5YR2/3極暗褐 粘土質シルト 7.5YR5/6明褐含む 炭化物含む



第9号竪穴住居跡(SI10) 2号土坑 p-p′
1. 7.5YR3/2黒褐 粘土質シルト 7.5YR5/6明褐粘土10% 5YR4/8赤褐焼土が斑点状に混入 炭化物・土器片含む



第9号竪穴住居跡(SI10) 3号土坑 q-q′
1. 7.5YR2/3極暗褐 粘土質シルト
2. 7.5YR5/6明褐粘土10% 5YR4/8赤褐焼
3. 土が斑点状に少量混入 炭化物・土器片含む
4. 7.5YR5/4にぶい褐 粘土 土器片・炭化物含む



第23図 第8号・9号竪穴住居跡(3)

定され、深さは14㎝である。

〈その他〉　東辺～南辺にかけての床面で、壁に沿って最大７㎝の段差で掘りこみが見られたり、南西隅付近の床面に長さ50㎝、幅15㎝、深さ３㎝の溝状の遺構を検出した。全貌は確認できなかったか、立替前の住居の輪郭を示す可能性がある。

遺物（第54～55図、写真図版32）

埋土及び、土坑、柱穴等から、土師器、須恵器、土製品、石製品が小コンテナ１箱分出土し、土師器の坏１点、甕５点、土製品は土錘１点、石製品は硯１点掲載した。

112は非ロクロ成形の土師器の坏である。胴部内面にヘラミガキ調整が施される。内面底部からの立ち上がりが急である。113～116は非ロクロ成形の土師器甕である。胴部の調整は、外面・内面ともにヘラナデによる。117は硯である。PP５からの出土であり、本遺構より新しい柱穴と考えられることから本遺構に伴う遺物ではない。長さは8.7㎝、幅5.2㎝、厚さ1.7㎝、重さ63.78ｇである。118は土錘である。長さ4.8㎝、幅1.5㎝、孔径0.5㎝である。

時期　第Ⅰ期

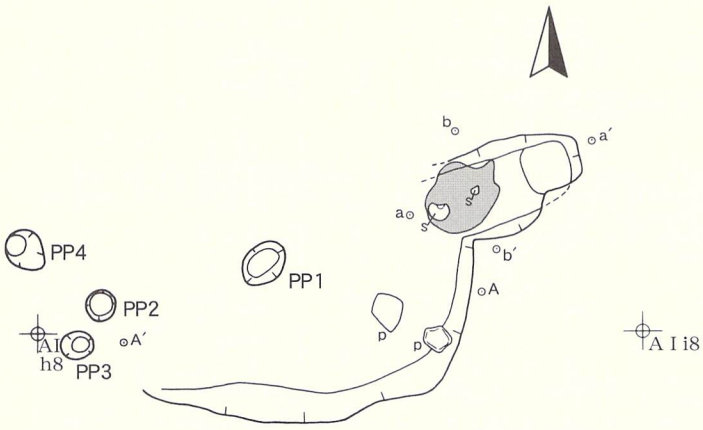
・第10号竪穴住居跡（ＳＩ11）

遺構（第24図）

〈位置・検出状況〉　ＡＩｈ７～ｈ８グリッドに位置する。Ⅴ層（地山面）で検出された。

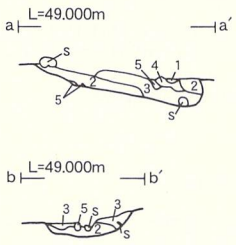
〈重複・新旧関係〉　第１号堀跡と重複し、本遺構が第１号堀跡より旧い。

〈平面形〉　大部分が削平されており全体形は不明であるが、隅丸方形状を呈するものと思われる。



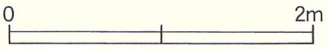
第10号住居(SI11) 柱穴

	開口部径(cm)	深さ(cm)
PP1	32×24	10
PP2	20×20	14
PP3	22×18	12
PP4	30×24	12



第10号竪穴住居跡(SI11) カマド a-a′・b-b′
1. 7.5YR3/3暗褐　褐色土・炭化物含む
2. 7.5YR2/2灰褐　褐色土・炭化物含む
3. 7.5YR3/2黒褐　焼土ブロック・褐色土・炭化物含む
4. 10YR5/3にぶい黄褐　煙道天井部の崩落土
5. 10YR4/4褐　黒褐色土粒を含む

第10号竪穴住居跡(SI11) ベルト　A-A′
1. 7.5YR2/2黒褐　炭化物・焼土混在　床面近くで褐色ブロック多い
2. 7.5YR3/3暗褐　褐色土ブロックが混じる　粘性あり



第24図　第10号竪穴住居跡

〈規模〉　棟方向の長さは不明である。軸線方向はN－69°－Eである。

〈埋土〉　黒褐～暗褐色土の２層からなる。床面近くで褐色土ブロックが多くなる。

〈壁〉　地山面を掘り込んで構築されており、外傾して立ち上がる。壁高は最も立ち上がりが明瞭な東壁で12㎝を測る。

〈床面〉　削平のため不明である。

〈柱穴〉　４基検出されているが、本遺構に確実に伴うかどうかは不明である。

〈土坑〉　検出されていない。

〈カマド〉　燃焼部と煙道が検出された。燃焼部焼土は58×42㎝の不整形な広がりを持ち、層厚は最大８㎝である。煙道の検出長は82㎝、煙出部に向かって緩やかに傾斜する。煙出部の深さは18㎝である。

遺物（第55図、写真図版32）

埋土床面及びカマドから土師器が小コンテナ１箱分出土し、甕２点（119、120）を掲載した。120は球胴甕である。120は胴部内面にヘラナデ及び横位のハケメ調整、外面にヘラナデ調整が施される。

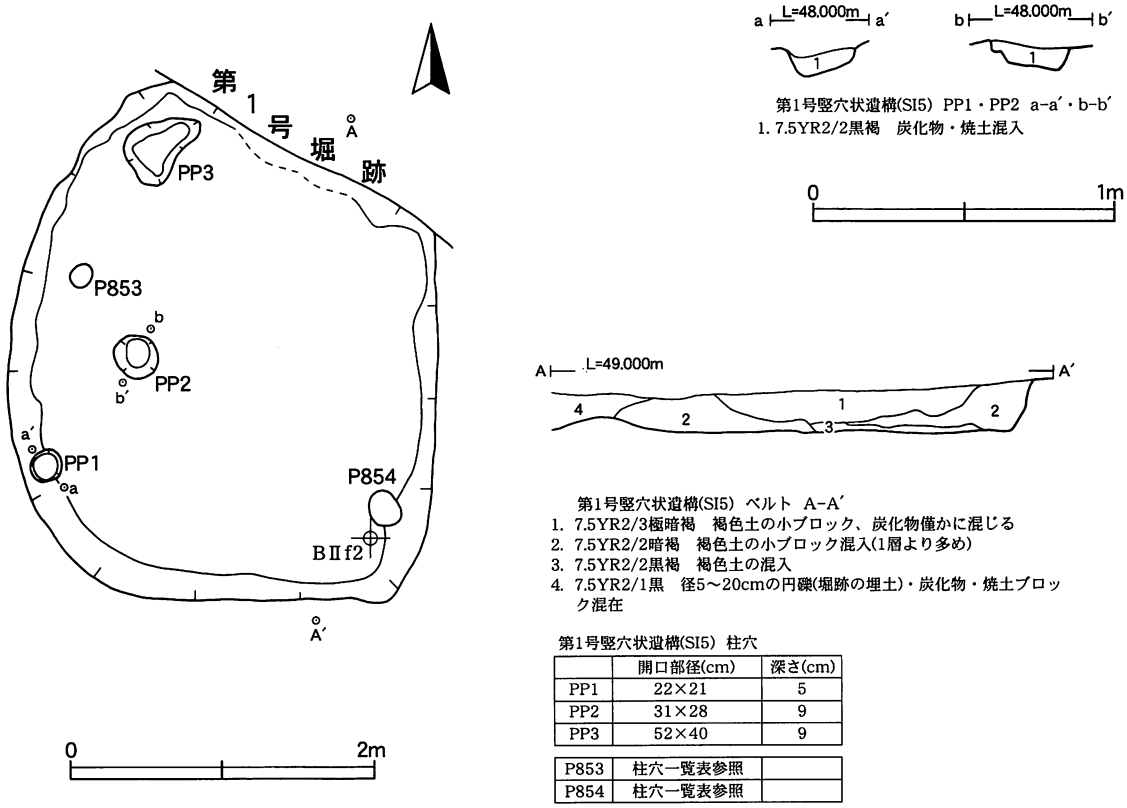
時期　第Ⅰ期

２．竪穴状遺構

・第１号竪穴状遺構（ＳＩ５）

遺構　（第25図、写真図版11）

〈位置・検出状況〉　BⅡe１～e２、BⅡf１～f２グリッドに位置する。Ⅴ層で検出した。



第1号竪穴状遺構(SI5) 柱穴

	開口部径(cm)	深さ(cm)
PP1	22×21	5
PP2	31×28	9
PP3	52×40	9

P853	柱穴一覧表参照	
P854	柱穴一覧表参照	

第25図　第1号竪穴状遺構

〈重複・新旧関係〉　第１号堀跡と重複し、本遺構が旧い。

〈平面形〉　第１号堀跡に切られているため全体形は不明であるが、不整楕円状を呈するものと思われる。

〈規模〉　全体規模は不明である。東西方向で幅292cmを測る。面積は検出分で約7.2㎡である。

〈埋土〉　暗褐～極暗褐、黒～黒褐色土の４層に区分される。部分的に褐色土ブロックが混入する。４層からは堀跡の埋土と思われる径５～20cmの円礫が混じる。

〈壁〉　地山面を掘り込んで構築されており、外傾して立ち上がる。壁高は南壁で34cmを測る。

〈床面〉　平坦で固く締まっている。

〈柱穴〉　本遺構より新しい２基を除き、３基検出された。主柱穴は不明である。

〈土坑〉　検出されていない。

遺物（第55図、写真図版32～33）

埋土中から土師器、須恵器、陶磁器が小コンテナ１箱分出土し、土師器の坏１点、甕１点、須恵器の坏１点、壺・甕４点、陶磁器は瀬戸・美濃産の磁器１点掲載した。

121はロクロ成形の土師器の坏である。回転糸切り後、ヘラナデによる再調整が施される。122は須恵器の坏である。123は非ロクロ成形の土師器の甕で胴部外面にヘラナデ、ケズリ調整、内面にヘラナデ調整が施される。124～127は須恵器の甕・壺類である。外面にタタキ、内面に当て具痕が見られる。128は瀬戸・美濃産の深皿である。時期は19世紀である。本遺構は第１号堀跡と切り合い部分があることから、本来堀跡埋土に含まれていたものと思われる。

時期　第Ⅱ期

３．掘立柱建物跡

・第１号掘立柱建物跡（ＳＢ１）

遺構　（第26～27図、写真図版12）

〈位置・検出状況〉　ＡＩｆ０、ＡＩｇ１～ｉ１、ＡⅡｇ２～ｉ２、ＡⅡｇ３～ｉ３に位置する。Ｖ層で検出した。

〈重複・新旧関係〉　第２号、８号掘立柱建物跡、第３号柱穴列と重複し、第２号掘立柱建物跡より本遺構が旧い。他については不明である。

〈規模〉　桁行３間（総長760cm）、梁行５間（総長866cm）の建物である。面積は建物全体で65.8㎡（19.9坪）である。

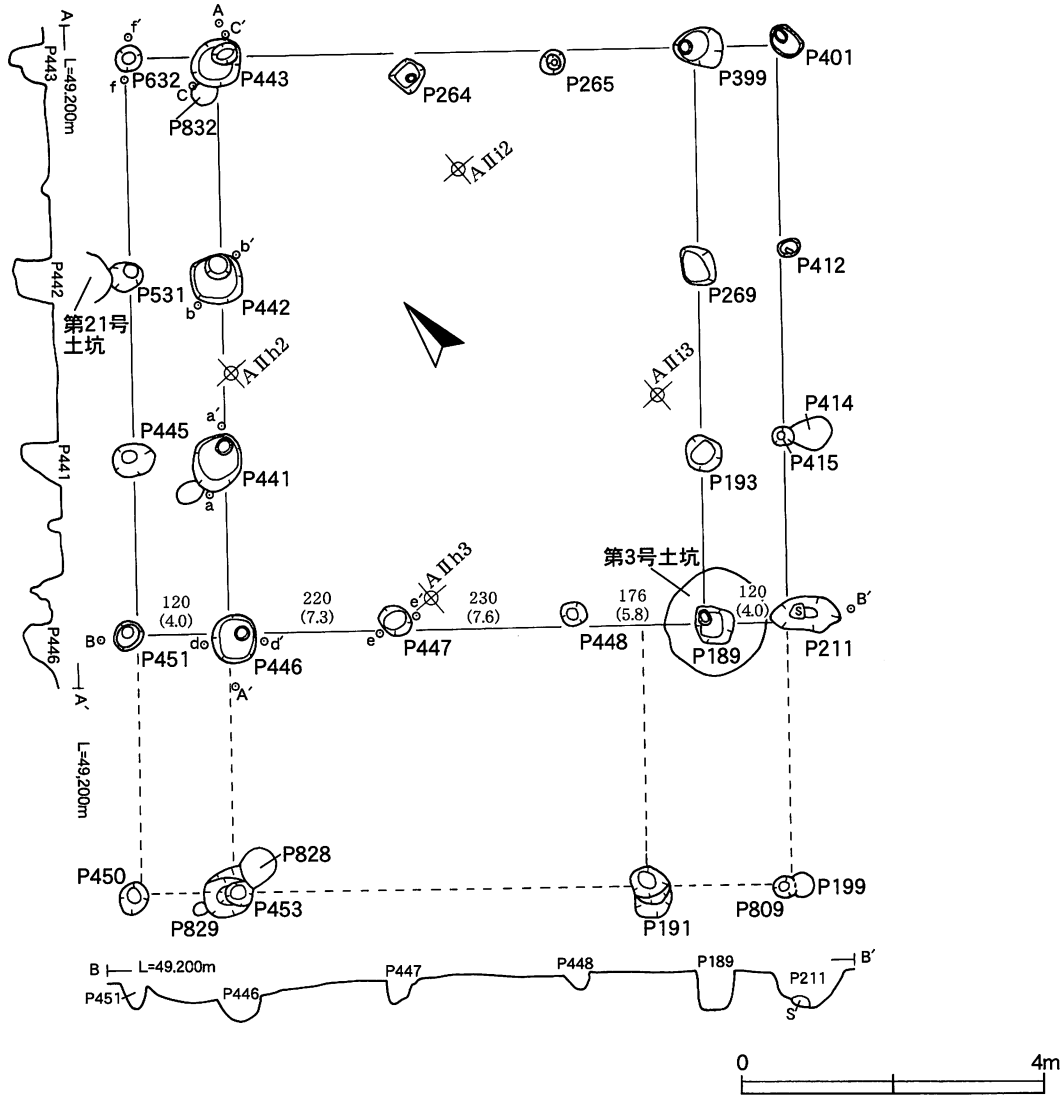
〈平面形式〉　桁行３間、梁行３間の身舎に、南北に廂がつく。

〈軸線方向〉　Ｎ－40°－Ｅである。

〈柱間寸法〉　桁行は北から270（8.9尺）、240cm（7.9尺）、250cm（8.3尺）、梁行は西から220（7.3尺）、230cm（7.6尺）、176cm（5.8尺）となる。廂の幅は120cm（4.0尺）である。

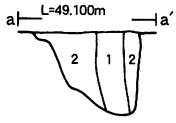
〈建物の性格〉　詳細は不明であるが、これを推定部分を含めず方三間の建物と仮定すると、建て替えの痕跡がなく、掘り方も大きいことから、御堂であった可能性もある（詳しくはまとめを参照）。

〈備考〉　建物の南に梁行南棟ラインと軸線を同じくする４基の柱穴が検出されている。P191がやや桁行東棟ラインからずれ、また桁行の柱間寸法が340cm（11.2尺）と大きくなるため同一の建物と断定することはできなかった。しかしながら、この４基の柱穴に対応する建物が調査区南側に検出されていないこと、埋土は良く似ていること等から建物を構成するとの見方も可能であろう。仮にこれを含めると建物面積は95.26㎡（28.9坪）となる。

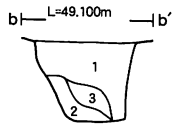


柱穴No.	グリッド	平面形	開口部径(cm) 長径	短径	深さ(cm)	出土遺物 土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	その他・備考	該当建物・柱穴列
189	AⅡh3	方形	52	46	67.4				○				中国産染付磁器端反皿	1号建物(SB1)
193	AⅡh3~AⅡi3	円	48	46	16.1	○							坏	1号建物(SB1)
211	AⅡh3	楕円	92	46	52.0									1号建物(SB1)
264	AⅡi1	方形	38	36	52.6	○	○						土師器坏、須恵器甕	1号建物・2号建物
265	AⅡi1	円	32	31	49.2	○							坏	1号建物(SB1)
269	AⅡi2	楕円状	64	50	72.1	○							種子、土師器は甕	1号建物(SB1)
399	AⅡi2	楕円	65	51	53.3									1号建物(SB1)
401	AⅡj2	楕円	48	35	37.0		○						甕	1号建物(SB1)
412	AⅡi2	楕円	30	22	32.2									1号建物(SB1)
415	AⅡi3	方形	29	22	23.3									1号建物(SB1)
441	AⅡg2	円	74	66	55.9		○						種子(モモ)	1号建物(SB1)
442	AⅡh1	方形	66	66	54.0	○						○	炉壁	1号建物(SB1)
443	AⅡh1	円	72	64	49.3	○							微量	1号建物(SB1)
445	AⅡg1~AⅡg2	楕円	52	44	40.2									1号建物(SB1)
446	AⅡg2	方形	62	58	56.4	○							坏、甕	1号建物(SB1)
447	AⅡg2~AⅡg3	円	44	38	31.9	○							微量	1号建物(SB1)
448	AⅡh3	円			0.0									1号建物(SB1)
451	AⅡg2	円	42	36	18.9									1号建物(SB1)
531	AⅡg1~AⅡh1	楕円	44	40	48.0							○	炉壁	1号建物(SB1)
632	AⅠh0~AⅡh1	円	35	34	79.6								掘りすぎ	1号建物(SB1)
191	AⅡg4	方形	70	50	54.0	○							微量	1号建物(SB1)?
450	AⅡf3	円	40	36	18.0									1号建物(SB1)?
453	AⅡf3	楕円		60	61.0	○			○			○	染付磁器皿、炉壁	1号建物(SB1)?
809	AⅡh4	楕円		27	33.8									1号建物(SB1)?

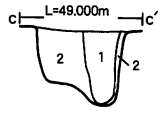
第26図　第1号掘立柱建物跡(1)



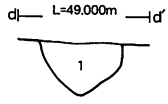
P441(SB1) a-a′
1. 10YR3/1黒褐　粘土質シルト　10YR6/6明黄褐10%　粘性あり・締まりやや軟
2. 10YR3/1黒褐　粘土質シルト　10YR6/6明黄褐40%　粘性あり・締まりやや軟



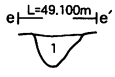
P442(SB1) b-b′
1. 10YR3/1黒褐　粘土質シルト　10YR6/6明黄褐ブロック状30%　粘性あり・締まりやや軟
2. 10YR3/1黒褐　粘土質シルト　10YR6/6明黄褐ブロック70%　粘性あり・締まりやや軟
3. 10YR3/1黒褐　粘土質シルト　10YR6/6明黄褐ブロック50%　粘性あり・締まりやや軟　2層に近似する



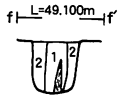
P443(SB1) c-c′
1. 10YR2/2黒褐　粘土質シルト　粘性中・締まり疎　柱痕跡
2. 10YR2/3黒褐　粘土質シルト　10YR4/4褐シルト混在(50%)　粘性中・締まり強



P446(SB1) d-d′
1. 7.5YR2/2黒褐　粘土質シルト　粘性中・締まり強　褐色土ブロック斑状に混入(30%～40%)



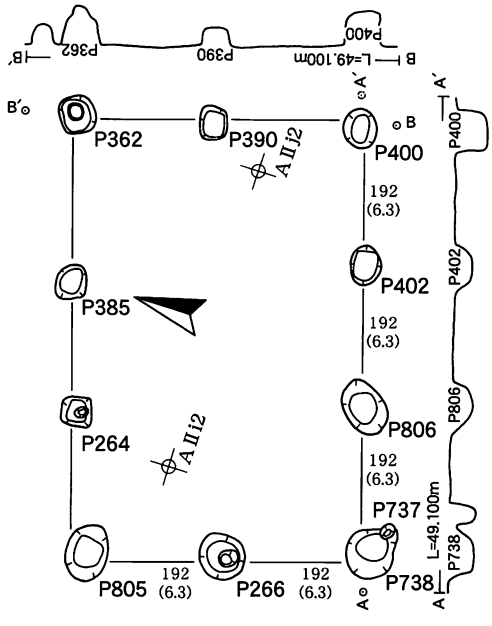
P447(SB1) e-e′
1. 7.5YR2/3極暗褐　粘土質シルト　粘性中・締まり強　褐色土ブロック斑状に混入(20%～30%)



P632(SB1) f-f′
1. 7.5YR3/1黒褐　粘土質シルト　粘性あり・締まりやや軟
2. 10YR3/1黒　粘土質シルト　10YR5/6黄褐40%　粘性あり・締まりやや軟

0　1m

第2号掘立柱建物跡



0　4m

柱穴No.	グリッド	平面形	開口部径(cm) 長径	開口部径(cm) 短径	深さ(cm)	出土遺物 土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	その他・備考	該当建物・柱穴列
264	AⅡj1	方形	38	36	52.6	○	○						土師器坏、須恵器甕	1号建物・2号建物
266	AⅡh4	円	64	62	55.7	○							微量	2号建物(SB2)
362	AⅡi1～AⅡj1	方形	52	46	49.6	○	○						坏	2号建物(SB2)
385	AⅡi1	方形	43	40	31.3	○		○					土師器は坏、縄文土器	2号建物(SB2)
390	AⅡj1	方形	40	36	25.7	○	○							2号建物(SB2)
400	AⅡj2	円	52	42	43.2	○			○				陶器は渥美産甕	2号建物(SB2)
402	AⅡi2	円	52	41	23.6	○								2号建物(SB2)
738	AⅡh2	円	66		33.8									2号建物(SB2)
805	AⅡh1	楕円	76	54	46.5									2号建物(SB2)
806	AⅡi2	楕円			28.0									2号建物(SB2)

第27図　第1号(2)・2号掘立柱建物跡

遺物（第60図、写真図版37）

柱穴34基中14基から土師器、須恵器、陶磁器、土製品等が出土し、陶磁器２点、炉壁１点の計３点掲載した。

203は中国産明代の磁器染付端反皿である。P189からの出土である。209は産地・時期不明の磁器皿である。P453から出土した。208は炉壁である。P442からの出土である。

時期　中世に属するものと思われる。

・第２号掘立柱建物跡（ＳＢ２）

遺構（第27図、写真図版13）

〈位置・検出状況〉　ＡⅡｈ１～ｊ１、ＡⅡｈ２～ｊ２に位置する。Ｖ層で検出した。

〈重複・新旧関係〉　第１号、第３号掘立柱建物跡と重複し、本遺構は第１号掘立柱建物跡より新しい。第３号掘立柱建物跡とは新旧不明である。

〈規模〉　桁行３間（総長576㎝）、梁行３間（総長384㎝）の建物である。面積は22.1㎡（6.7坪）である。

〈軸線方向〉　Ｎ－75°－Ｅである。

〈柱間寸法〉　桁行、梁行ともに192㎝（6.3尺）を使用している。

〈建物の性格〉　不明である。

遺物（第60図、写真図版38）

柱穴10基中７基から土師器、須恵器、縄文土器、陶磁器等が出土し、陶磁器１点掲載した。

204は12世紀後半の渥美産の大型壺の口縁部である。P400からの出土である。

時期　中世に属するものと思われる。

・第３号掘立柱建物跡（ＳＢ４）

遺構（第28図）

〈位置・検出状況〉　ＡＩｅ９～ｇ９、ＡＩｅ０～ｇ０、ＡⅡｅ１～ｆ１グリッドに位置する。Ｖ層で検出した。

〈重複・新旧関係〉　第４号掘立柱建物跡、第１号塀跡、第５・６号柱穴列と重複する。新旧関係は不明である。

〈規模〉　桁行４間（総長930㎝）、梁行２間（総長484㎝）である。面積は45.0㎡（13.6坪）である。

〈軸線方向〉　Ｎ－59°－Ｗである。

〈柱間寸法〉　桁行は220㎝（7.3尺）と270㎝（8.9尺）を、梁行は242㎝（8.0尺）を使用する。

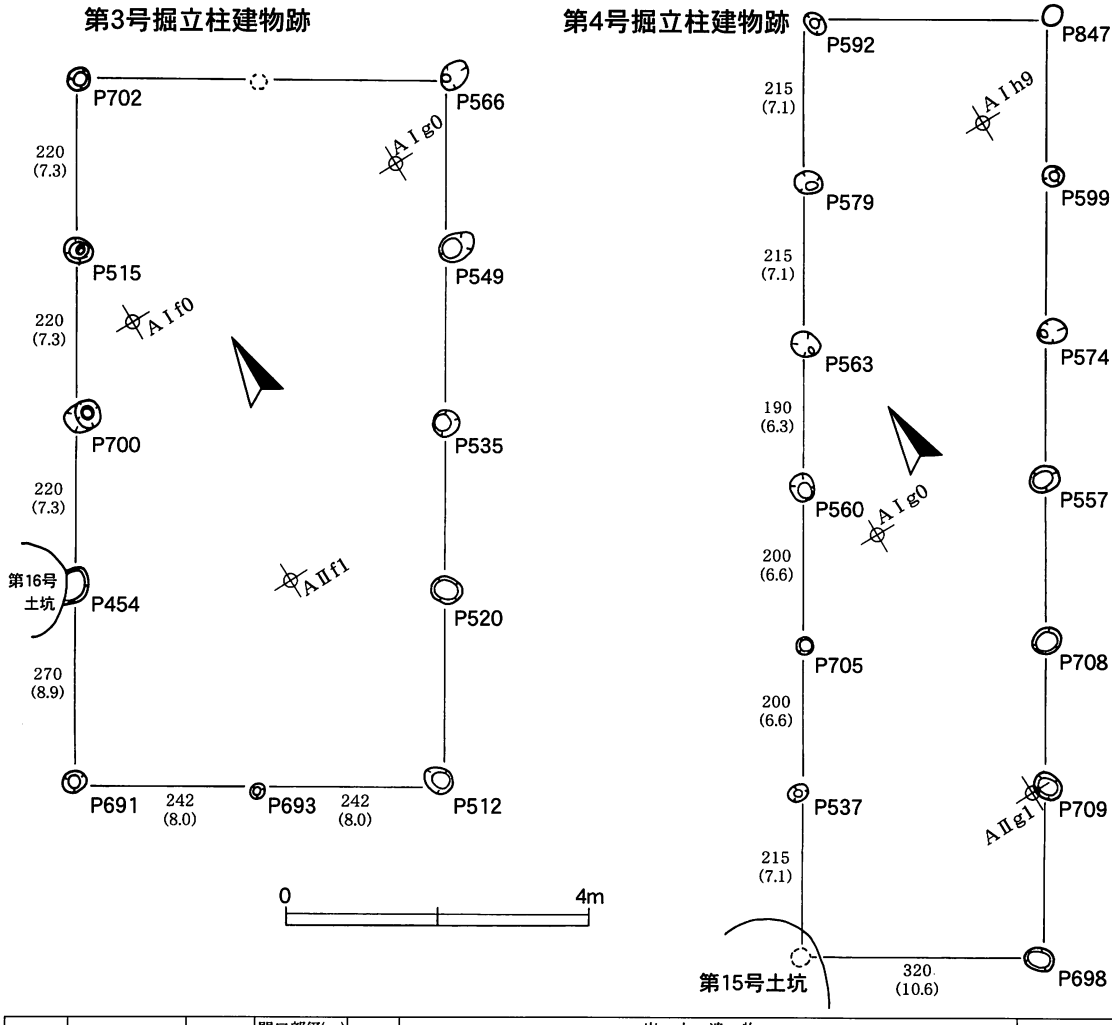
〈建物の性格〉　大きさから母屋的な性格が予想される。

遺物（第61図、写真図版37）

柱穴11基中４基から石製品、鉄製品、土製品等が出土し、各１点ずつの計３点掲載した。

210はP454からの出土で種類は鉄塊である。鋳造に使用される銑鉄の可能性がある。浅い碗状呈し、上部径9.8㎝、底部径8.1㎝、最大厚2.9㎝、重さは275.82ｇである。213～214はP515からの出土で213は坩堝、214は砥石である。坩堝は埋土中央付近、砥石はその直下から出土した。坩堝は長さ11.7㎝、幅6.4㎝、厚さ5.4㎝、重さ231.35ｇである。砥石は長さ13.4㎝、幅6.7㎝、厚さ4.5㎝、重さ605.42ｇである。坩堝と鉄塊の詳細については、付篇の分析・鑑定を参照していただきたい。

時期　中世に属するものと思われる。



柱穴No.	グリッド	平面形	開口部径(cm) 長径	短径	深さ(cm)	出土遺物 土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	その他・備考	該当建物・柱穴列
454	AIe0	方形	46		52.0						○		鉄塊	3号建物(SB4)
512	AIIf1	楕円	40	36	59.0									3号建物(SB4)
515	AIe9~AIf9	円	37	36	52.7					○		○	坩堝・砥石・炉内滓	3号建物(SB4)
520	AIIf1	楕円	42	32	54.8									3号建物(SB4)
535	AIf0	円	35	33	53.5									3号建物(SB4)
549	AIf0~AIg0	楕円	48	36	57.6						○		鉄滓？	3号建物(SB4)
566	AIg9	円	43	34	56.4									3号建物(SB4)
691	AIIe1	円	30	29	59.2									3号建物(SB4)
693	AIIe1	円	20	20	18.9									3号建物(SB4)
700	AIe0	円	46	40	44.9						○		鉄滓？	3号建物(SB4)
702	AIf9	円	30	28	47.4									3号建物(SB4)

柱穴No.	グリッド	平面形	開口部径(cm) 長径	短径	深さ(cm)	出土遺物 土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	その他・備考	該当建物・柱穴列
537	AIf0	楕円	27	20	29.8									4号建物(SB5)
557	AIg0	円	42	35	52.0	○	○						壺？微量	4号建物(SB5)
560	AIf9	円	37	30	44.1									4号建物(SB5)
563	AIg9	楕円	39	34	44.8	○							微量	4号建物(SB5)
574	AIg9	楕円	38	31	47.2									4号建物(SB5)
579	AIg8	円	36	30	28.2									4号建物(SB5)
591	AIg8	円	28	26	30.0	○						○	鋳型	4号建物(SB5)
599	AIh9	円	30	28	23.4	○							微量	4号建物(SB5)
698	AIIf1	楕円	38	26	21.3									4号建物(SB5)
705	AIf0	円	23	22	47.1									4号建物(SB5)
708	AIg0	円	38	36	50.7									4号建物(SB5)
709	AIg0~AIIg1	方形	36	32	32.9									4号建物(SB5)
847	AIh8	円	30	26	0.0									4号建物(SB5)

第28図　第3号・4号掘立柱建物跡

・第４号掘立柱建物跡（ＳＢ５）

遺構（第28図）

〈位置・検出状況〉　ＡＩｇ８～ｈ８、ｆ９～ｈ９、ｆ０～ｇ０、ＡⅡｆ１～ｇ１グリッドに位置する。Ｖ層で検出した。

〈重複・新旧関係〉　第３号、10号掘立柱建物跡、第１号塀跡、第５号・６号柱穴列、第15号土坑と重複し、本遺構は第15号土坑より旧い。

〈規模〉　桁行６間（総長1,235㎝）、梁行１間（総長320㎝）の建物である。面積は39.5㎡（12.0坪）である。

〈軸線方向〉　Ｎ－30°－Ｅである。

〈柱間寸法〉　桁行は190㎝（6.3尺）、200㎝（6.6尺）、215㎝（7.1尺）、梁行は320㎝（10.6尺）を使用する。

〈建物の性格〉　詳細は不明であるが、馬屋的な性格も推察される。

遺物（第61図、写真図版38）

柱穴13基中４基から土師器、須恵器、土製品が出土し、鋳型１点掲載した。

土製品　218は鋳型で、P591からの出土である。鋳造した製品は不明である。

時期　中世に属するものと思われる。

・第５号掘立柱建物跡（ＳＢ６）

遺構（第29図）

〈位置・検出状況〉　ＢＩｃ０～ｄ０、ＢⅡｂ１～ｄ１グリッドに位置する。Ｖ層で検出した。

〈重複・新旧関係〉　第１号、６号掘立柱建物跡、第２号柱穴列、第10号土坑と重複し、本遺構は第１号掘立柱建物跡、第10号土坑より新しい。

〈規模〉　桁行３間（総長580㎝）、梁行１間（総長384㎝）の建物と思われる。面積は推定部分も含め22.3㎡（6.7坪）である。

〈軸線方向〉　Ｎ－64°－Ｗである。

〈柱間寸法〉　桁行は190㎝（6.3尺）、梁行は（12.7尺）を使用する。

〈建物の性格〉　建物面積が狭いことから付属小屋的性格が推察される。

遺物　柱穴６基中１基から土師器坏・甕が出土したが、細片のため図面掲載していない。

時期　中世に属するものと思われる。

・第６号掘立柱建物跡（ＳＢ７）

遺構（第29図）

〈位置・検出状況〉　ＢＩｃ０、ＢⅡｃ１～ｄ１、ｄ２グリッドに位置する。Ｖ層で検出した。

〈重複・新旧関係〉　第１号、５号掘立柱建物跡、第２号柱穴列と重複し、本遺構は第１号掘立柱建物跡より新しい。

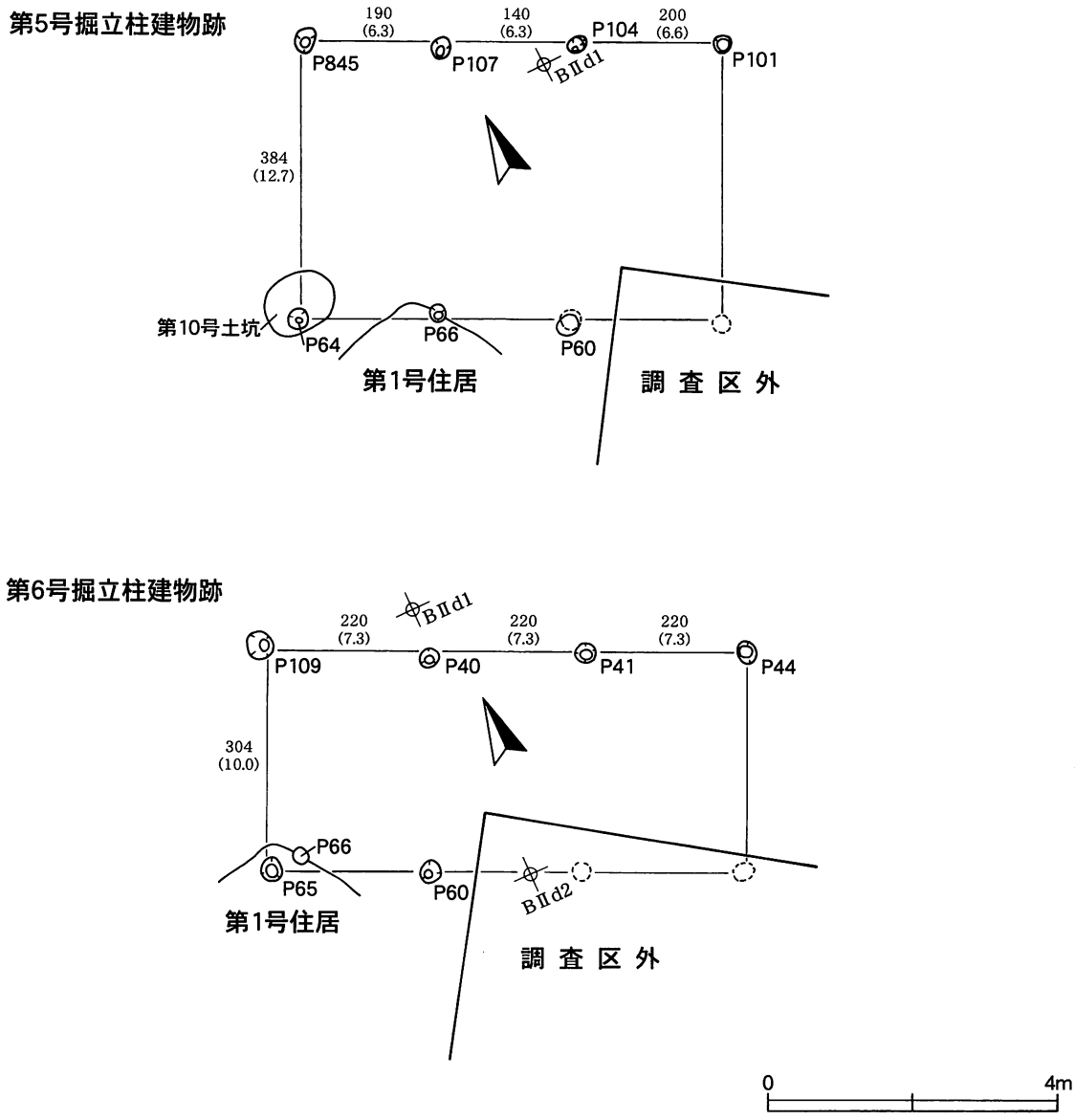
〈規模〉　桁行３間（総長660㎝）、梁行１間（総長304㎝）の建物と思われる。面積は推定部分も含め20.1㎡（6.１坪）である。

〈軸線方向〉　Ｎ－65°－Ｗである。

〈柱間寸法〉　桁行は220㎝（7.3尺）、梁行は304㎝（10.0尺）を使用している。

〈建物の性格〉　建物面積が狭いことから付属小屋的性格が推察される。

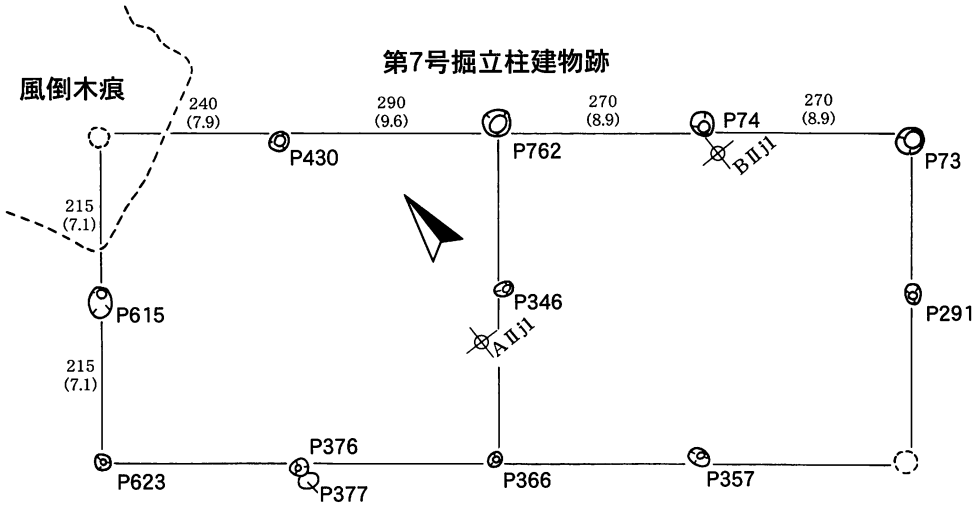
遺物　柱穴６基中１基から土師器が出土したが、細片のため図面掲載していない。器種も不明である。

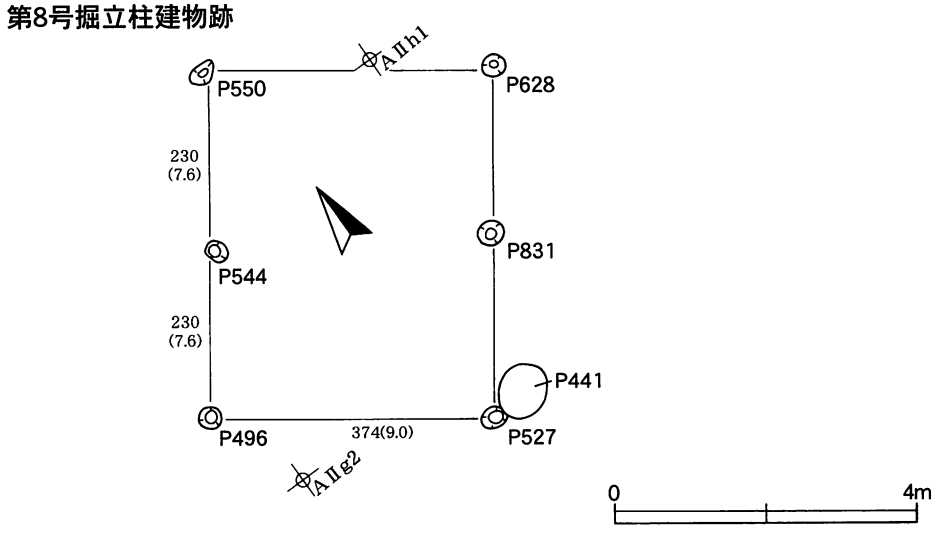


柱穴No.	グリッド	平面形	開口部径(cm)		深さ(cm)	出土遺物								該当建物・柱穴列
			長径	短径		土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	その他・備考	
64	BⅡb1	楕円	30	23	32.8	○							坏・甕	5号建物(SB6)
66	BⅡc1	円	28	24	33.9									5号建物(SB6)
101	BⅡd1	円	22	22	11.6									5号建物(SB6)
104	BⅠd0~BⅡd1	円	28	22	26.4									5号建物(SB6)
107	BⅠc0	楕円	34	26	27.3									5号建物(SB6)
845	BⅠc0	楕円	38	24	24.1									5号建物(SB6)

柱穴No.	グリッド	平面形	開口部径(cm)		深さ(cm)	出土遺物								該当建物・柱穴列
			長径	短径		土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	その他・備考	
40	BⅡc1~BⅡd1	円	28	26	47.6									6号建物(SB7)
41	BⅡd1	円	31	28	53.1									6号建物(SB7)
44	BⅡd1~BⅡe1	円	30	28	46.4									6号建物(SB7)
60	BⅡc1	円	32	26	35.7									6号建物(SB7)
65	BⅡc1	円	30	25	47.1									6号建物(SB7)
109	BⅠc0	円	36	34	40.6	○							微量	6号建物(SB7)

第29図　第5号・6号掘立柱建物跡





柱穴No.	グリッド	平面形	開口部径(cm) 長径	短径	深さ(cm)	出土遺物 土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	その他・備考	該当建物・柱穴列
73	BⅡa1	楕円	36	32	48.5									7号建物(SB8)
74	BⅠj0～BⅡa1	楕円	32	30	47.8									7号建物(SB8)
291	BⅡa1	円	28	20	11.1									7号建物(SB8)
346	AⅠj0	楕円	27	21	28.1	○	○	○					土師器は坏、縄文土器	7号建物(SB8)
357	AⅡj1	楕円	29	23	37.5									7号建物(SB8)
366	AⅡj1	円	21	16	42.8									7号建物(SB8)
376	AⅠi0	楕円？	24	23	47.8									7号建物(SB8)
430	AⅠi0	円	26	24	45.3			○					縄文土器	7号建物(SB8)
615	AⅠi0	楕円	30	22	34.8	○	○						坏　微量	7号建物(SB8)
423	AⅠh0	円	21	19	25.6									7号建物(SB8)
762	AⅠj0	円	38	36	56.5									7号建物(SB8)

柱穴No.	グリッド	平面形	開口部径(cm) 長径	短径	深さ(cm)	出土遺物 土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	その他・備考	該当建物・柱穴列
496	AⅡf1	円	30	30	40.4									8号建物(SB9)
527	AⅡg2	楕円		36	48.0									8号建物(SB9)
544	AⅡg1	楕円	33	26	41.5			○					縄文土器	8号建物(SB9)
550	AⅠg0	楕円	38	25	42.5	○								8号建物(SB9)
628	AⅡh1	円	32	30	47.7									8号建物(SB9)
831	AⅡg1~AⅡh1	円	34	32	39.4									8号建物(SB9)

第30図　第7号・8号掘立柱建物跡

時期　中世に属するものと思われる。

・**第７号掘立柱建物跡（ＳＢ８）**

遺構　（第30図）

〈位置・検出状況〉　ＡＩｈ０～ＢＩａ０、ＡⅡｉ１～ＢⅡａ１、ＡⅡｉ２～ｊ２グリッドに位置する。Ｖ層で検出した。

〈重複・新旧関係〉　第２号、10号掘立柱建物跡、第１号柱穴列と重複する。

〈規模〉　桁行４間（総長1,070㎝）、梁行２間（総長430㎝）の建物である。面積は46.0㎡（13.9坪）である。

〈軸線方向〉　Ｎ－53°－Ｗである。

〈柱間寸法〉　桁行は240㎝（7.9尺）、270㎝（8.9尺）、290㎝（9.6尺）を、梁行は215㎝（7.1尺）を使用する。

〈建物の性格〉　不明である。

遺物（第61図、写真図版37）

柱穴11基中３基から土師器、須恵器、縄文土器が出土し、縄文土器片１点掲載した。

206は縄文土器の深鉢胴部破片でP430からの出土である。地文はＲＬ縄文である。

時期　不明である。

・**第８号掘立柱建物跡（ＳＢ９）**

遺構　（第30図）

〈位置・検出状況〉　ＡＩｇ０、ＡⅡｆ１～ｈ１、ｇ２グリッドに位置する。Ｖ層で検出された。

〈重複・新旧関係〉　第１号掘立柱建物跡、第４号柱穴列と重複し、本遺構は第１掘立柱建物跡より旧い。

〈規模〉　桁行２間（総長460㎝）、梁行１間（総長374㎝）の建物である。面積は17.2㎡（5.2坪）である。

〈軸線方向〉　Ｎ－54°－Ｗである。

〈柱間寸法〉　桁行は230㎝（7.6尺）、梁行は374㎝（9.0尺）を使用する。

〈建物の性格〉　不明である。

遺物　柱穴６基中２基から土師器、縄文土器が出土した。細片のため図面掲載していない。

時期　不明である。

・**第９号掘立柱建物跡（ＳＢ10）**

遺構　（第31図）

〈位置・検出状況〉　ＡⅡｊ４～ｊ６、ＢⅡａ４～ａ６グリッドに位置する。Ｖ層で検出された。

〈重複・新旧関係〉　なし。

〈規模〉　遺構が調査区外に延びるため全体形は不明であるが、桁行２間以上、梁行２間（総長430㎝）の建物と思われる。面積は検出分で17.2㎡（5.2坪）である。

〈軸線方向〉　Ｎ－66°－Ｗである。

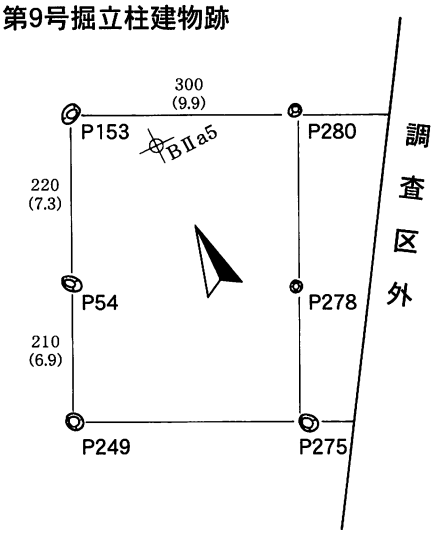
〈柱間寸法〉　桁行は300㎝（9.9尺）を、梁行は210㎝（6.9尺）、220㎝（7.3尺）を使用している。

〈建物の性格〉　不明である。

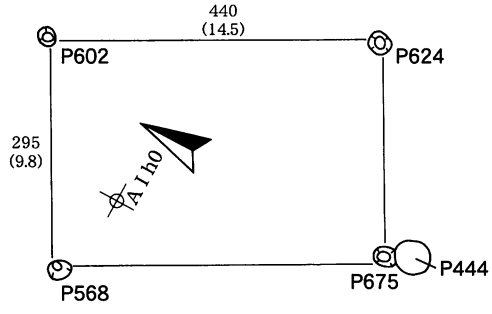
遺物　出土していない。

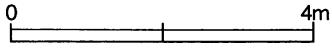
時期　不明である。

第9号掘立柱建物跡



第10号掘立柱建物跡





柱穴No.	グリッド	平面形	開口部径(cm)		深さ(cm)	出土遺物								該当建物・柱穴列
			長径	短径		土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	その他・備考	
54	AⅡj5	楕円	26	17	23.4									9号建物(SB10)
153	AⅡj4	円	28	28	16.9									9号建物(SB10)
249	AⅡj5	円	22	20	12.7									9号建物(SB10)
275	BⅡa5	楕円	26	22	12.4									9号建物(SB10)
278	BⅡa5	円	16	14	25.0									9号建物(SB10)
280	BⅡa5	円	15	15	15.7									9号建物(SB10)

柱穴No.	グリッド	平面形	開口部径(cm)		深さ(cm)	出土遺物								該当建物・柱穴列
			長径	短径		土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	その他・備考	
568	AⅠg9	円	30	28	45.4									10号建物(SB11)
602	AⅠh9	円	25	24	54.3	○							微量	10号建物(SB11)
624	AⅠh0	円	32	28	33.4									10号建物(SB11)
675	AⅠh0	円形		26	33.7									10号建物(SB11)

第31図　第9号・10号掘立柱建物跡

・第10号掘立柱建物跡（ＳＢ11）

遺構（第31図）

〈位置・検出状況〉　ＡＩｇ９～ｈ９、ｇ０～ｈ０に位置する。Ｖ層で検出した。

〈重複・新旧関係〉　第５号、７号掘立柱建物跡、第４号柱穴列と重複する。新旧関係は不明である。

〈規模〉　桁行１間ないし２間（総長440㎝）、梁行１間（総長295㎝）の建物と思われる。面積は13.0㎡（3.9坪）である。

〈軸線方向〉　Ｎ－62°－Ｅである。

〈柱間寸法〉　桁行１間とすると440㎝（14.5尺）、検出はされなかったが間に柱があったと仮定すると220㎝（7.3尺）となる。梁行は295㎝（9.8尺）である。

〈建物の性格〉　不明である。

遺物　柱穴４基中１基から土師器が出土したが、細片のため図面掲載していない。

時期　不明である。

４．柱穴列

・第１号柱穴列

遺構　（第32図）

〈位置・検出状況〉　ＡＩｊ１～ＡⅡａ１、ＢⅡａ２～ｂ２グリッドに位置する。Ｖ層で検出した。

〈重複・新旧関係〉　第１号竪穴住居跡、第７号掘立柱建物跡と重複し、本遺構が第１号掘立柱建物跡より新しい。

〈規模〉　柱穴５基、４間（総長1,040㎝）の検出である。

〈軸線方向〉　Ｎ－56°－Ｗである。

〈柱間寸法〉　260㎝（8.6尺）を使用する。

遺物　出土していない。

時期　第１号掘立柱建物跡より新しいが、詳細な時期は不明である。

・第２号柱穴列

遺構　（第32図）

〈位置・検出状況〉　ＢⅡｃ１、ｄ１～ｄ２グリッドに位置する。Ｖ層で検出した。

〈重複・新旧関係〉　第５号、６号掘立柱建物跡と重複する。新旧関係は不明である。

〈規模〉　柱穴５基、４間（総長960㎝）の検出である。

〈軸線方向〉　Ｎ－58°－Ｗである。

〈柱間寸法〉　西から順に260㎝（8.6尺）、240㎝（7.9尺）、220㎝（7.3尺）、240㎝（7.9尺）

遺物（第60図、写真図版37）

柱穴５基中２基から須恵器、石製品が出土し、砥石１点掲載した。201はP38から出土した。長さ19.5㎝、幅9.1㎝、厚さ5.5㎝、重さ1,501.10ｇである。石質は石英安山岩である。

時期　不明である。

・第３号柱穴列

遺構（第32図）

〈位置・検出状況〉　AⅡi2～j2、AⅡj3～BⅡa3グリッドに位置する。V層で検出した。

〈重複・新旧関係〉　第1号掘立柱建物跡、第1号円形周溝と重複し、本遺構が第1号円形周溝より新しい。

〈規模〉　柱穴4基、3間（総長850cm）の検出である。

〈軸線方向〉　N－57°－Wである。

〈柱間寸法〉　西から順に280cm（9.2尺）、280cm（9.2尺）、290cm（9.6尺）である。

遺物（第60図、写真図版37）

柱穴4基中2基から土師器、須恵器、土製品が出土し、須恵器1点掲載した。

205は須恵器の甕の胴部破片でP409から出土した。外面は平行のタタキ、内面はアテグによる調整が施される。

時期　第1号円形周溝より新しいが、詳細な時期は不明である。

・第4号柱穴列

遺構（第32図）

〈位置・検出状況〉　AⅡf1、g0～g1グリッドに位置する。V層で検出した。

〈重複・新旧関係〉　第1号、9号掘立柱建物跡と重複する。新旧関係は不明である。

〈規模〉　柱穴6基、5間（総長1,000cm）の検出である。

〈軸線方向〉　N－37°－Eである。

〈柱間寸法〉　200cm（6.6尺）を使用する。

遺物（第62図、写真図版38）

柱穴6基中1基から土師器が出土し、1点掲載した。

219は土師器の坏でP712から出土した。胴部に段を持つ。推定口径17.0cm、器高4.4cmである。

時期　柱穴の軸線方向が第1号掘立柱建物跡や第1号塀跡等とほぼ同じであることから、中世と思われる。

・第5号柱穴列

遺構（第33図）

〈位置・検出状況〉　AⅠf9～g9、f0、AⅡe1～f1に位置する。V層で検出された。

〈重複・新旧関係〉　第3号、4号掘立柱建物跡、第15号土坑と重複し、本遺構が第15号土坑より旧い。

〈規模〉　柱穴5基、4間（総長900cm）の検出である。

〈軸線方向〉　N－35°－Eである。

〈柱間寸法〉　北から順に210cm（6.9尺）、235cm（7.8尺）、245cm（8.1尺）、210cm（6.9尺）である。

遺物　出土していない。

時期　軸線方向から中世の可能性もある。

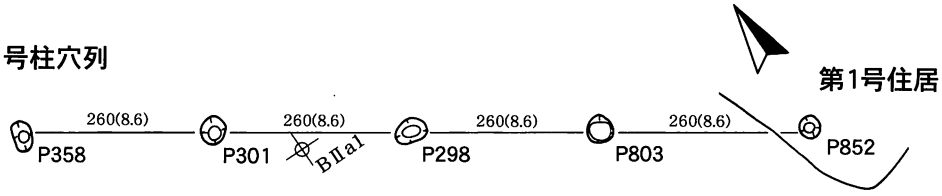
・第6号柱穴列

遺構（第33図）

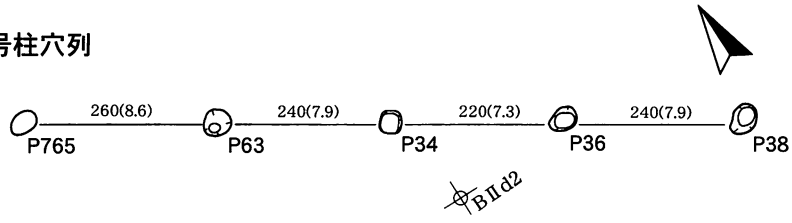
〈位置・検出状況〉　AⅠe0～f0、AⅡe1グリッドに位置する。V層で検出された。

〈重複・新旧関係〉　第3号掘立柱建物跡、第15号土坑と重複する。

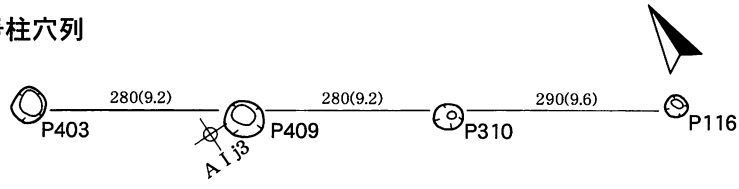
第1号柱穴列



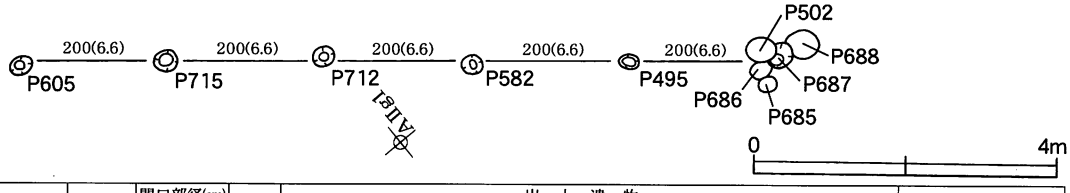
第2号柱穴列



第3号柱穴列



第4号柱穴列



柱穴No.	グリッド	平面形	開口部径(cm) 長径	短径	深さ(cm)	出土遺物 土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	その他・備考	該当建物・柱穴列
298	BⅡa2	円	44	32	47.8									柱穴列1号
301	AⅡj1	円	38	32	45.6									柱穴列1号
358	AⅡj1	楕円	41	26	62.5									柱穴列1号
803	BⅡa2	円	38	34	47.3									柱穴列1号
852	BⅡb2	円	54	52	37.0								第1号竪穴住居PP3	柱穴列1号

柱穴No.	グリッド	平面形	開口部径(cm) 長径	短径	深さ(cm)	出土遺物 土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	その他・備考	該当建物・柱穴列
34	BⅡc1	方形	30	26	42.2									柱穴列2号
36	BⅡd1~BⅡd2	不整方形	38	30	44.2		○						甕	柱穴列2号
38	BⅡd2	楕円	43	33	49.4					○			砥石	柱穴列2号
63	BⅡc1	円	38	37	69.9									柱穴列2号
765	BⅡb1	円	36	28	0.0									柱穴列2号

柱穴No.	グリッド	平面形	開口部径(cm) 長径	短径	深さ(cm)	出土遺物 土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	その他・備考	該当建物・柱穴列
116	BⅡa3	円	32	30	48.8									柱穴列3号
310	AⅡj3	円	38	34	46.2	○							微量	柱穴列3号
403	AⅡj2	円	48	44	65.2									柱穴列3号
409	AⅡj2~AⅡj3	円	52	49	48.1	○	○					○	炉壁　須恵器は甕	柱穴列3号

柱穴No.	グリッド	平面形	開口部径(cm) 長径	短径	深さ(cm)	出土遺物 土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	その他・備考	該当建物・柱穴列
495	AⅡf1	楕円	27	20	12.3									柱穴列4号
532	AⅡg1	円	28	26	39.9									柱穴列4号
605	AⅠg0	楕円	30	24	19.5									柱穴列4号
687	AⅡf2	円	38		21.8									柱穴列4号
712	AⅠg0~AⅡg1	円	30	27	16.9	○							坏	柱穴列4号
715	AⅠg0	円	30	28	14.5									柱穴列4号

第32図　柱穴列(1)

〈規模〉　柱穴４基、３間（総長580㎝）の検出である。

〈軸線方向〉　Ｎ－36°－Ｅである。

〈柱間寸法〉　北から順に190㎝（6.3尺）、200㎝（6.6尺）、190㎝（6.3尺）である。

遺物　出土していない。

時期　軸線方向から中世の可能性もあろう。

５．土坑

・第１号土坑（ＳＫ１）

遺構（第34図、写真図版14）

〈位置・検出状況〉　ＡⅡｆ５グリッドに位置する。Ⅲ層で検出された。

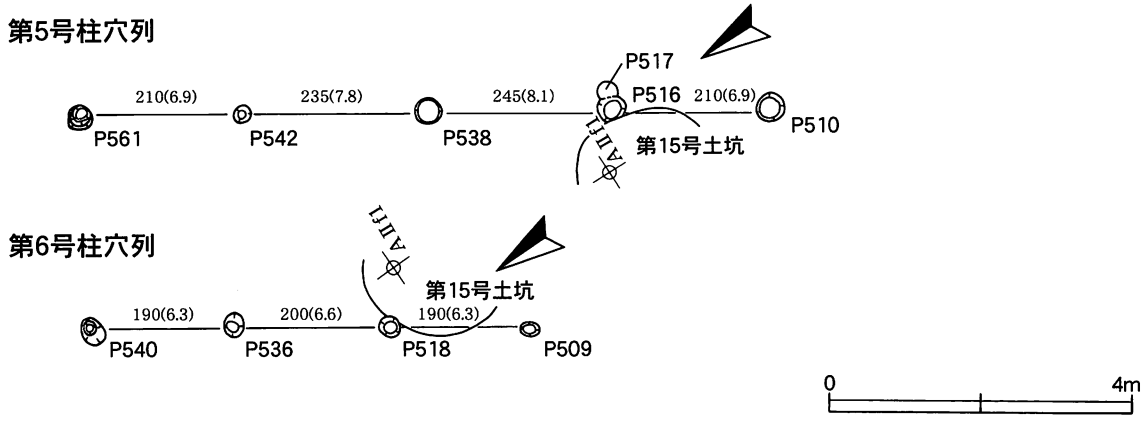
〈重複・新旧関係〉　第８号土坑、P155と重複し、ともに本遺構が新しい。

〈平面形・規模〉　遺構が遺構外にかかるため全体形は不明である。開口部径も不明であるが、断面Ａ－Ａ’で118㎝、それに直交するラインの最大幅は53㎝である。深さは最大25㎝である。

〈埋土〉　３層からなる。１～２層は黒褐色土ににぶい黄褐色土が混入する埋土で、２層により多くにぶい黄褐色土が入る。３層は黄褐色土にやや黒色土を含む。

〈壁・底面〉　北西壁はやや緩やかに、南東壁はやや急に底面から外傾して立ち上がる。底面は凹凸があり、平坦ではない。

遺物 出土していない。



柱穴No.	グリッド	平面形	開口部径(cm) 長径	開口部径(cm) 短径	深さ(cm)	出土遺物 土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	その他・備考	該当建物・柱穴列
510	AⅡe1	円	38	36	32.8									柱穴列5号
516	AⅡf1	円		36	23.1									柱穴列5号
538	AⅠf0	円	36	35	22.1									柱穴列5号
542	AⅠf0	円	24	22	23.5									柱穴列5号
561	AⅠg9	方形	32	29	45.4									柱穴列5号

柱穴No.	グリッド	平面形	開口部径(cm) 長径	開口部径(cm) 短径	深さ(cm)	出土遺物 土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	その他・備考	該当建物・柱穴列
509	AⅡe1	円	24	19	40.9									柱穴列6号
518	AⅠe0	円	30	28	26.4									柱穴列6号
536	AⅠf0	円	32	27	31.0									柱穴列6号
540	AⅠf0	楕円	38	30	24.8									柱穴列6号

第33図　柱穴列(2)

時期　これまでの土地利用から現代のリンゴ植栽坑の可能性がある。

・第２号土坑（ＳＫ２）

遺構（第34図、写真図版14）

〈位置・検出状況〉　ＡⅡｅ４～ｅ５、ＡⅡｆ４～ｆ５グリッドに位置する。Ⅲ層が検出面である。

〈重複・新旧関係〉　なし。

〈平面形・規模〉　全体形は遺構が調査区外にかかるため不明であるが、円形が予想される。規模は遺構全体が検出されていないため不明である。深さは検出できた中では最大27㎝を測る。

〈埋土〉　黒褐色粘土質シルトと褐色粘土が混合する単層からなる。

〈壁・底面〉　壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は起伏があり、平坦ではない。

〈その他〉　底面から径10～15㎝程の柱穴状小pitが数基検出された（木根か）。

遺物　出土していない。

時期　これまでの土地利用から近現代のリンゴ植栽坑の可能性がある。

・第３号土坑（ＳＫ３）

遺構（第34図、写真図版14）

〈位置・検出状況〉　ＡⅡｈ３グリッドに位置する。Ⅲ層が検出面である。

〈重複・新旧関係〉　P189と重複し、本遺構が新しい。

〈平面形・規模〉　ほぼ円形を呈する。開口部径は133×131㎝、深さは29㎝である。

〈埋土〉　４層に区分される。１～２層は黒褐色粘土質シルトに褐色粘土が混じる混合土、３～４層は暗褐～極暗褐粘土質シルトを主体とする。

〈壁・底面〉　壁は底面から直立気味に立ち上がる。底面は平坦である。

〈その他〉　底面から径10～30㎝台の柱穴状小pitが数基検出された（木根か）。

遺物（第56図、写真図版33）

埋土中から磁器が出土し、１点掲載した。129は中国産の磁器鉢である。時期は明末である。他に近現代の磁器が出土した。

時期　明代の磁器が出土しているが他に近現代の磁器も出土しており、埋め戻しの際の流れ込みの可能性が高い。また、これまでの土地利用から近現代のリンゴ植栽坑と思われる。

・第４号土坑（ＳＫ４）

遺構（第34図、写真図版14）

〈位置・検出状況〉　ＡⅡｇ３グリッドに位置する。Ⅲ層が検出面である。

〈重複・新旧関係〉　なし。

〈平面形・規模〉　ほぼ円形を呈する。開口部径は144×138㎝、深さは36㎝である。

〈埋土〉　褐色～黒褐色～極暗褐色が混合する粘土質シルト主体の２層からなる。

〈壁・底面〉　北西壁は緩やかに外傾して立ち上がり、南東壁は直立気味に立ち上がる。底面は平坦である。

〈その他〉　底面から径10～40㎝台の柱穴状小pitが数基検出された（木根か）。

遺物（第56図、写真図版33）

埋土中から縄文土器、土製品が微量出土し、各１点の計２点掲載した。

130は土製品である。器種は不明である。残存長2.9㎝、幅2.8㎝、厚さ1.6㎝である。中は中空となっており、孔の直径は0.8㎝である。131は縄文土器の深鉢の胴部破片である。ＲＬ縄文が施される。

時期　これまでの土地利用から近現代のリンゴ植栽坑の可能性がある。

・第５号土坑（ＳＫ５）

遺構（第34図、写真図版15）

〈位置・検出状況〉　ＡⅡｈ３～ｈ４グリッドに位置する。Ⅲ層が検出面である。

〈重複・新旧関係〉　なし。

〈平面形・規模〉　不整円形を呈する。開口部径は176×172㎝、深さは36㎝である。

〈埋土〉　黒褐色～暗褐色～極暗褐色主体の粘土質シルトの３層からなる。

〈壁・底面〉　壁は底面から外傾して立ち上がりる。底面は平坦である。

〈その他〉　底面から径10～30㎝台の柱穴状小pitが数基検出された（木根か）。

遺物　現行の10円玉が出土した。

時期　これまでの土地利用から近現代のリンゴ植栽坑の可能性がある。

・第６号土坑（ＳＫ６）

遺構（第35図、写真図版15）

〈位置・検出状況〉　ＡⅡｆ４グリッドに位置する。Ⅲ層が検出面である。

〈重複・新旧関係〉　P12が重複し、本遺構が新しい。

〈平面形・規模〉　隅丸長方形状を呈する。開口部径は120×59㎝、深さは20㎝である。

〈埋土〉　５層に区分される。黒色～黒褐色土に黄褐色土が混入する埋土である。下層ほど混入の割合が高い。

〈壁・底面〉　壁は底面からやや直立気味に立ち上がる。底面は平坦である。

遺物　出土していない。

時期　不明である。

・第７号土坑（ＳＫ７）

遺構（第35図、写真図版15）

〈位置・検出状況〉　ＡⅡｆ４～ｆ５、ＡⅡｇ４～ｇ５グリッドに位置する。Ⅲ層が検出面である。

〈重複・新旧関係〉　第８号土坑と重複し、本遺構が旧い。

〈平面形・規模〉　全体形は遺構が第８号土坑に切られるため不明であるが、検出分のプランから楕円形が予想される。規模は不明である。

〈埋土〉　黒褐色土に明黄褐色土が20％混入する単層からなる。人為堆積的様相を呈する。

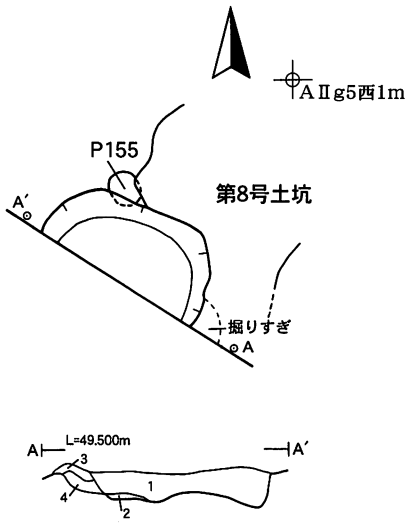
〈壁・底面〉　壁は概ね外傾して立ち上がっている。底面は第８号土坑に切られているため不明である。

〈その他〉　底面から径40㎝台の柱穴状小pitが検出された（木根か）。

遺物　出土していない。

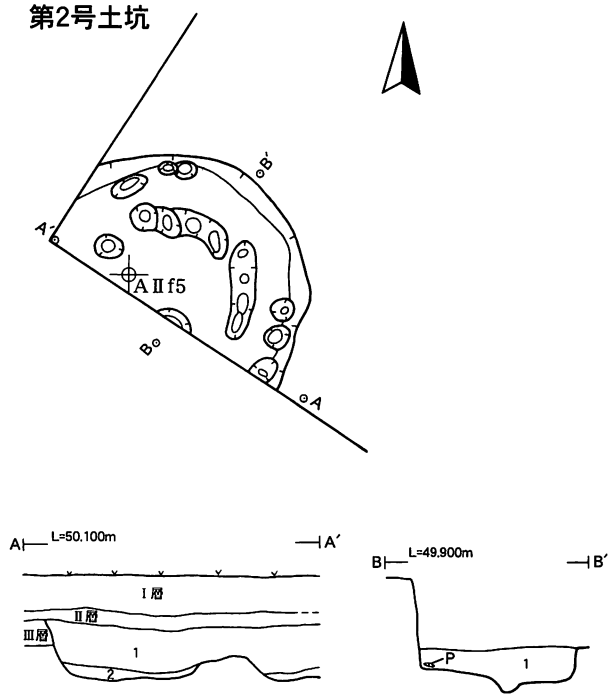
時期　これまでの土地利用から近現代のリンゴ植栽坑の可能性がある。

第1号土坑



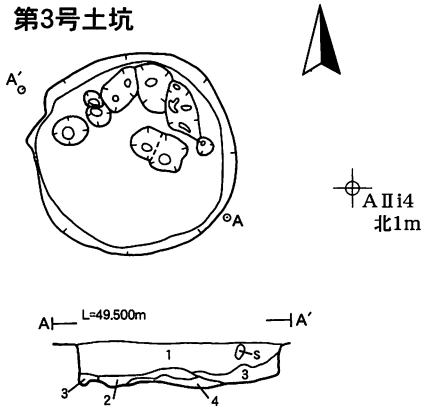
第1号土坑(SK1) A−A′
1. 10YR2/3黒褐　10YR5/4にぶい黄褐20%　締まりあり・粘性あり　SK1埋土
2. 10YR2/2黒褐　10YR5/4にぶい黄褐60%　締まりあり・粘性あり　SK1埋土
3. 10YR5/6黄褐　7.5YR2/1黒
4. 2.5YR2/1黒(掘りすぎ部分)

第2号土坑



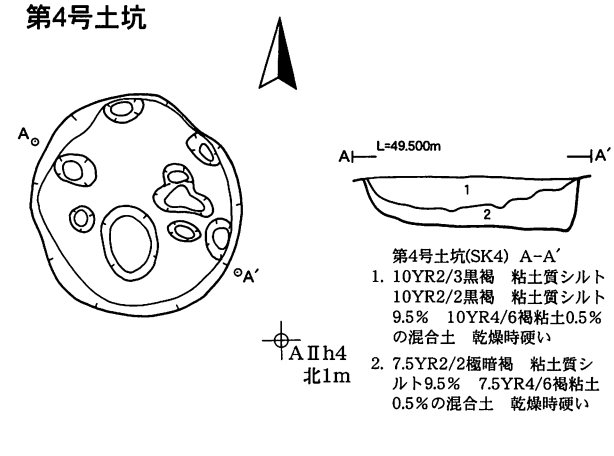
第2号土坑(SK2) A−A′
1. 10YR2/3黒褐　粘土質シルト40%と10YR4/6褐粘土60%の混合土　土器片含む　乾燥時硬い
2. 10YR5/6黄褐　粘土質シルト10YR2/3黒褐混入(掘りすぎ?)

第3号土坑



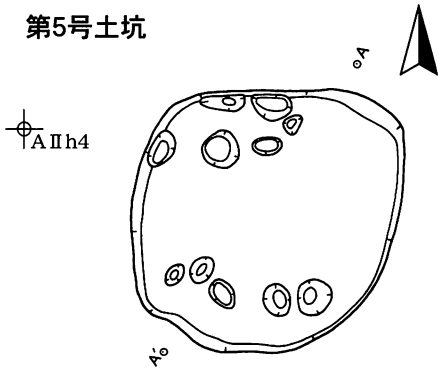
第3号土坑(SK3) A−A′
1. 10YR2/3黒褐　粘土質シルト　10YR2/2黒褐色粘土質シルト9.5%　10YR4/6褐色粘土0.5%との混合土　乾燥時硬い
2. 7.5YR2/2黒褐　粘土質シルト　7.5YR2/3極暗褐粘土質シルト・10YR4/6褐色粘土との混合土
3. 7.5YR2/3極暗褐　粘土質シルト　10YR4/4褐粘土との混合
4. 7.5YR3/4暗褐色粘土質シルト

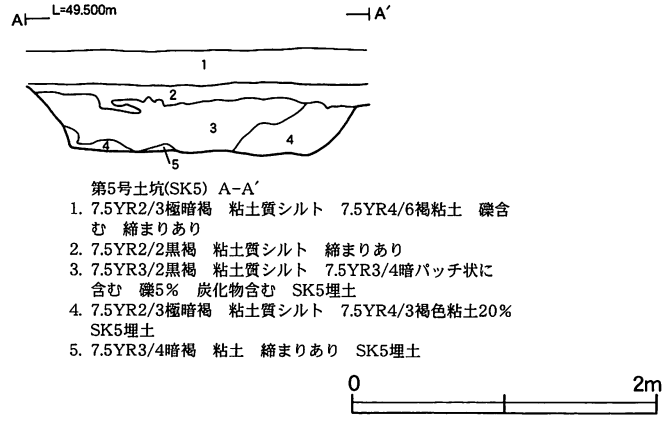
第4号土坑



第4号土坑(SK4) A−A′
1. 10YR2/3黒褐　粘土質シルト　10YR2/2黒褐　粘土質シルト9.5%　10YR4/6褐粘土0.5%の混合土　乾燥時硬い
2. 7.5YR2/2極暗褐　粘土質シルト9.5%　7.5YR4/6褐粘土0.5%の混合土　乾燥時硬い

第5号土坑





第5号土坑(SK5) A−A′
1. 7.5YR2/3極暗褐　粘土質シルト　7.5YR4/6褐粘土　礫含む　締まりあり
2. 7.5YR2/2黒褐　粘土質シルト　締まりあり
3. 7.5YR3/2黒褐　粘土質シルト　7.5YR3/4暗パッチ状に含む　礫5%　炭化物含む　SK5埋土
4. 7.5YR2/3極暗褐　粘土質シルト　7.5YR4/3褐色粘土20%　SK5埋土
5. 7.5YR3/4暗褐　粘土　締まりあり　SK5埋土

第34図　土坑(1)

・第８号土坑（ＳＫ８）

遺構（第35図、写真図版15）

〈位置・検出状況〉　ＡⅡｆ４～ｆ５グリッドに位置する。Ⅲ層が検出面である。

〈重複・新旧関係〉　第１号、７号土坑、P155と重複しており、本遺構は第１号土坑より旧く、第７号土坑及びP155より新しい。

〈平面形・規模〉　第１号土坑等に切られているため全体形は不明であるが、検出分のプランから不定形が予想される。規模は不明である。

〈埋土〉　黒褐色土に明黄褐色土が10％混入する単層からなる。自然堆積的様相を呈する。

〈壁・底面〉　壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は丸底状である。

〈その他〉　底面から径20～50㎝台の柱穴状小pitが数基検出された（木根か）。

遺物　出土していない。

時期　これまでの土地利用から近現代のリンゴ植栽坑の可能性がある。

・第９号土坑（ＳＫ９）

遺構（第35図、写真図版15）

〈位置・検出状況〉　ＡⅡｆ４グリッドに位置する。Ⅲ層が検出面である。

〈重複・新旧関係〉　第１号溝跡と重複し、本遺構が旧い。

〈平面形・規模〉　第１号溝跡に切られているため全体形は不明であるが、検出分のプランから円形が予想される。開口部径は断面Ａ－Ａ’で55㎝を測る。深さは６㎝である。

〈埋土〉　にぶい黄褐色土からなる単層である。粘性はなく、締まっている。

〈壁・底面〉　壁は概ね底面から外傾して立ち上がるが、南東壁では直立気味に立ち上がる箇所もある。底面は緩やかな起伏がやや見られる。

遺物　出土していない。

時期　検出面がⅢ層であることから近現代と思われる。

・第10号土坑（ＳＫ10）

遺構（第35図、写真図版16）

〈位置・検出状況〉　ＢⅡｂ１～ｃ１グリッドに位置する。Ⅴ層（地山面）が検出面である。

〈重複・新旧関係〉　P64と重複し、本遺構が旧い。

〈平面形・規模〉　楕円形を呈する。開口部径は101×60㎝、深さは最大19㎝である。

〈埋土〉　極暗褐色のシルト質粘土に赤褐色の焼土を15％含む単層からなる。

〈壁・底面〉　東壁は緩やかなスロープ状を呈しながら立ち上がり、西壁は直立気味に立ち上がる。底面は浅皿状を呈する。

〈その他〉　底面から柱穴状小pitが２基検出された。

遺物（第56図、写真図版33）

土師器、須恵器、炉壁が小コンテナ１箱分出土し、土師器の坏１点、甕５点、須恵器の坏２点、炉壁１点掲載した。

132はロクロ成形の土師器の坏である。133～134は須恵器の坏である。135～139はロクロ成形の土師器甕

である。140は炉壁である。本遺構より新しいP64と重複しており、取り上げの際に誤認識をした可能性もあるため本遺構に伴うか不明である。

時期　炉壁を除いた出土遺物は、第Ⅱ期に相当する。

・第11号土坑（ＳＫ11）

遺構（第35図、写真図版16）

〈位置・検出状況〉　ＢＩｃ０～ｄ１グリッドに位置する。Ｖ層（地山面）が検出面である。

〈重複・新旧関係〉　P61、P62が重複し、本遺構がともに旧い。

〈平面形・規模〉　円形を呈する。開口部径は133×127㎝、深さは34㎝である。

〈埋土〉　黒褐色の粘土質シルト主体の２層からなる。１層中に明褐色粘土30％の他、礫が混入する。

〈壁・底面〉　底面から外傾してに立ち上がる。底面は平坦である。

遺物（第57図、写真図版33）

埋土中から土師器、縄文土器が少量出土し、土師器３点、縄文土器１点の計４点掲載した。

141～143は土師器の甕である。143は底部外面に網代痕が残る。144は縄文土器の深鉢の胴部小破片である。地文はＬＲ縄文である。

時期　第Ⅰ期

・第12号土坑（ＳＫ12）

遺構（第36図、写真図版16）

〈位置・検出状況〉　ＡⅡｇ４グリッドに位置する。Ｖ層（地山面）が検出面である。

〈重複・新旧関係〉　Ｐ２と重複し、本遺構が旧い。

〈平面形・規模〉　長楕円形を呈する。開口部径は150×51㎝、深さは20㎝である。

〈埋土〉　黒～黒褐色の３層からなり、１、３層にはにぶい黄褐色土が50～60％含まれる。

〈壁・底面〉　壁は底面から直立気味立ち上がる。底面は平坦である。

遺物（第57図、写真図版34）

埋土中から土師器が少量出土し、甕３点掲載した。145～147は非ロクロ成形の甕である。口縁部内外面ともヨコナデ、胴部外面にヘラケズリ調整が施される。

時期　第Ⅰ期

・第13号土坑（ＳＫ13）

遺構（第36図、写真図版17）

〈位置・検出状況〉　ＡＩｊ２～ＢⅡａ２グリッドに位置する。Ｖ層（地山面）が検出面である。

〈重複・新旧関係〉　なし。

〈平面形・規模〉　不整円形を呈する。開口部径は90×80㎝、深さは21㎝である。

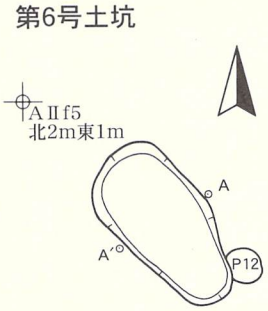
〈埋土〉　黒褐色土に僅かに明黄褐色土（５％）が含まれる単層からなる。

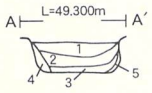
〈壁・底面〉　壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は平坦である。

遺物（第57図、写真図版34）

埋土中から須恵器が微量出土し、坏１点掲載した。148は坏の胴部破片である。口径、底径とも不明である。

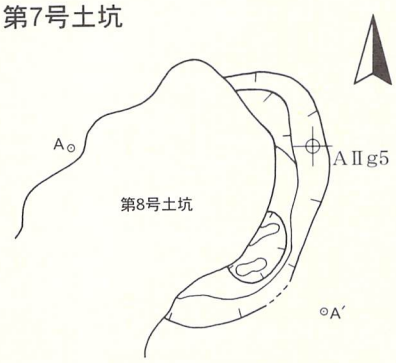
第6号土坑

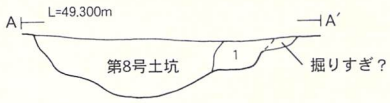




第6号土坑(SK6) A−A′
1. 10YR2/1黒　10YR5/6黄褐10%　炭化物粒微量　粘性あり・締まりやや軟
2. 10YR3/1黒褐　10YR5/6黄褐30%　粘性あり・締まりやや軟
3. 5YR2/1黒褐　10YR5/6黄褐10%　粘性あり・締まりやや軟
4. 10YR2/1黒　10YR5/6黄褐40%　粘性あり・締まりやや軟
5. 10YR2/1黒　10YR5/6黄褐

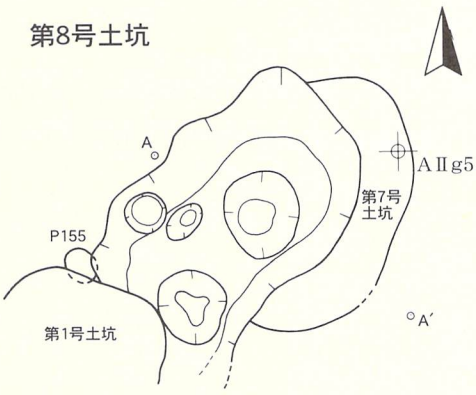
第7号土坑

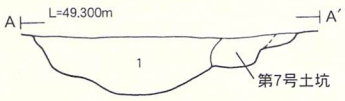




第7号土坑(SK7) A−A′
1. 2.5Y3/1黒褐　2.5Y6/6明黄褐20%　粘性あり・締まりやや軟　人為堆積的様相

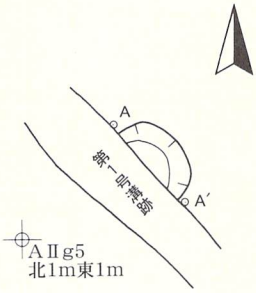
第8号土坑

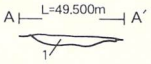




第8号土坑(SK8) A−A′
1. 10YR2/1黒　2.5Y6/6明黄褐10%　粘性なし・締まりやや軟　自然堆積的様相

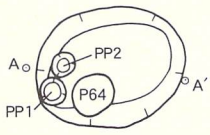
第9号土坑

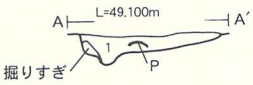




第9号土坑(SK9) A−A′
1. 2.5Y6/4にぶい黄　粘性なし・締まりあり

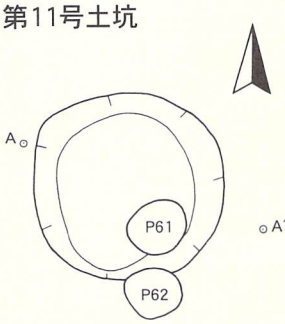
第10号土坑

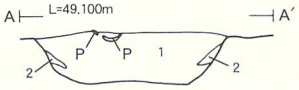




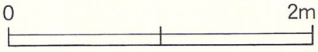
第10号土坑(SK10) A−A′
1. 7.5YR2/3極暗褐　シルト質粘土　2.5YR4/6赤褐焼土15%　斑点状に混入

第11号土坑





第11号土坑(SK11) A−A′
1. 7.5YR2/2黒褐　粘土質シルト　7.5YR5/6明褐粘土30%　礫混入
2. 7.5YR3/2黒褐　粘土質シルト



第35図　土坑(2)

時期　不明である。

・第14号土坑（ＳＫ14）

遺構（第36図、写真図版17）

〈位置・検出状況〉　ＢⅡａ３グリッドに位置する。Ｖ層（地山面）が検出面である。

〈重複・新旧関係〉　P417と重複し、本遺構が旧い。

〈平面形・規模〉　不整楕円形を呈する。開口部径は94×70㎝、深さは14㎝である。

〈埋土〉　黒褐色土と赤褐焼土の2層からなる。２層の焼土の層厚は最大４㎝を測る。

〈壁・底面〉　壁は外傾して立ち上がる。底面には数カ所の窪みが見受けられる。

遺物（第57図、写真図版34）

埋土中から土師器、須恵器が出土し、土師器１点、須恵器２点の計３点掲載した。

149は土師器の坏でロクロ成形によるものである。内面は黒色処理が、底部は再調整がされる。底部の切り離し技法は不明である。150～151は須恵器で、150は坏、151は甕である。151は胴部外面に平行のタタキ、内面に平行のアテグによる調整が施される。

時期　第Ⅱ期

・第15号土坑（ＳＫ15）

遺構（第36図）

〈位置・検出状況〉　ＡＩｅ９～ｅ０、ＡＩｆ９～ｆ０グリッドに位置する。Ｖ層（地山面）が検出面である。

〈重複・新旧関係〉　P516、P518と重複し、本遺構はP516より新しい。P518との新旧関係は不明である。

〈平面形・規模〉　円形を呈する。開口部径は190×188㎝、深さは10㎝である。

〈埋土〉　黒色土と明黄褐色土が混合する単層からなる。人為堆積的様相を呈する。

〈壁・底面〉　底面から緩やかに外傾して立ち上がる。底面は平坦である。

遺物　出土していない。

時期　不明である。

・第16号土坑（ＳＫ16）

遺構（第36図、写真図版17）

〈位置・検出状況〉　ＡＩｅ０グリッドに位置する。Ｖ層（地山面）が検出面である。

〈重複・新旧関係〉　P454と重複し、本遺構が旧い。

〈平面形・規模〉　不整円形を呈する。開口部径は121×118㎝、深さは33㎝である。

〈埋土〉　注記なし。

〈壁・底面〉　壁は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。

遺物（第57図、写真図版34）

埋土中から土師器、須恵器が少量出土し、土師器の甕２点、須恵器の甕１点掲載した。

152～153は非ロクロ成形の土師器甕である。152は胴部外面にヘラナデ、胴部内面にハケメ調整が施される。154はロクロ成形による須恵器甕である。還元焔焼成であることから須恵器として扱ったが、あかやき土器甕とも解される土器である。頸部にタタキが施された後、ロクロ成形されている。江刺市瀬谷子窯跡の流れ

を汲むものである。色調は白橙色を呈する。

時期　第Ⅱ期

・第17号土坑（ＳＫ17）

遺構（第36図）

〈位置・検出状況〉　ＢⅡｄ１～ｄ２、ＢⅡｅ１～ｅ２グリッドに位置する。Ｖ層（地山面）が検出面である。

〈重複・新旧関係〉　なし。

〈平面形・規模〉　不整楕円形を呈する。開口部径は88×64㎝、深さは12㎝である。

〈埋土〉　２層からなり、１層は黒褐色土に黄褐色土が30％含まれ、２層は黒色土主体の埋土である。２層には炭化物が多量に混入する。

〈壁・底面〉　底面は緩やかに外傾して立ち上がる。底面はやや丸底気味である。

遺物　出土していない。

時期　不明である。

・第18号土坑（ＳＫ18）

遺構（第36図）

〈位置・検出状況〉　ＢⅡｄ１グリッドに位置する。Ｖ層（地山面）が検出面である。

〈重複・新旧関係〉　P45と重複し、本遺構が新しい。

〈平面形・規模〉　不整形状を呈する。開口部径は140×61㎝、深さは38㎝である。

〈埋土〉　２層からなり、１層が黒色土主体、２層は明黄褐色土に黒色土が30％含まれる埋土である。

〈壁・底面〉　壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がる。底面は小pit状の窪みが見られ平坦ではない。

遺物　出土していない。

時期　不明である。

・第19号土坑（ＳＫ19）

遺構（第37図）

〈位置・検出状況〉　ＡⅡｄ０グリッドに位置する。Ｖ層（地山面）が検出面である。

〈重複・新旧関係〉　第６号竪穴住居跡、第２号溝跡と重複し、本遺構は第２号溝跡より旧く、第６号竪穴住居より新しい。

〈平面形・規模〉　第２号溝跡に切られるため全体形は不明であるが、検出分のプランから不整楕円形が予想される。開口部径は北西－南西軸で125㎝を測る。深さは22㎝である。

〈埋土〉　黒褐色土に明黄褐色土が20％混入する単層からなる。

〈壁・底面〉　壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は凹凸が見られ平坦ではない。

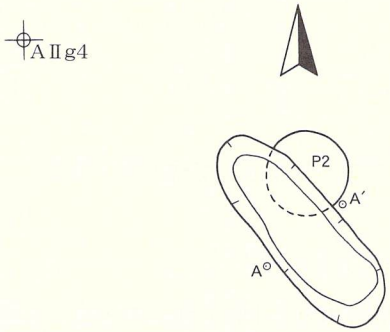
遺物　出土していない。

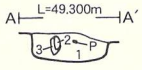
時期　切り合い関係から平安時代に属する可能性がある。

・第20号土坑（ＳＫ20）

遺構（第37図、写真図版17）

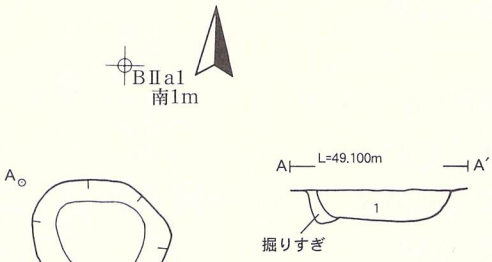
第12号土坑





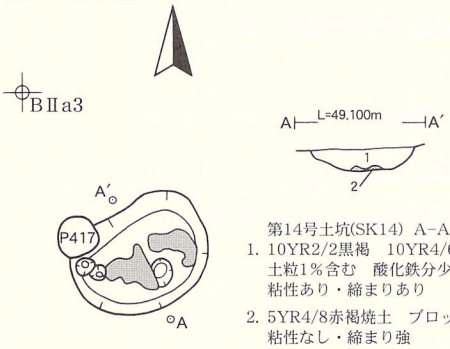
第12号土坑(SK12) A−A′
1. 10YR2/1黒　10YR5/4にぶい黄50%　炭化物粒微量　土師器片少量　粘性なし・締まりやや軟
2. 10YR2/2黒褐　粘性なし・締まりやや軟
3. 10YR2/1黒　10YR5/4にぶい黄60%　粘性なし・締まりやや軟

第13号土坑



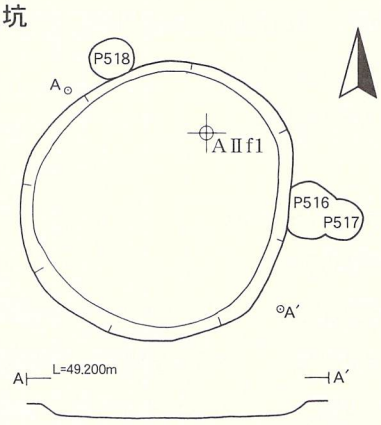
第13号土坑(SK13) A−A′
1. 7.5YR2/1黒　10YR7/6明黄褐5%　粘性なし・締まりやや軟

第14号土坑



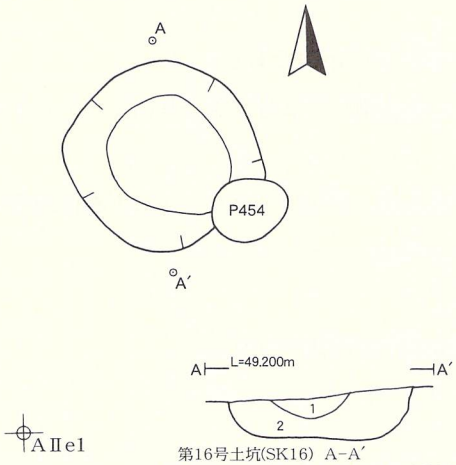
第14号土坑(SK14) A−A′
1. 10YR2/2黒褐　10YR4/6褐色土粒1%含む　酸化鉄分少量　粘性あり・締まりあり
2. 5YR4/8赤褐焼土　ブロック状　粘性なし・締まり強

第15号土坑



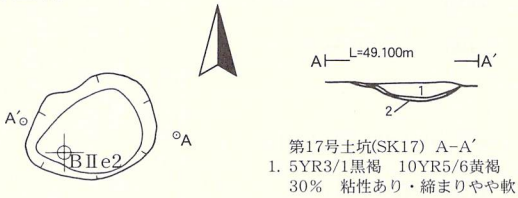
第15号土坑(SK15) A−A′
1. 7.5YR2/1黒と10YR6/6明黄褐の混合土　人為堆積的様相

第16号土坑



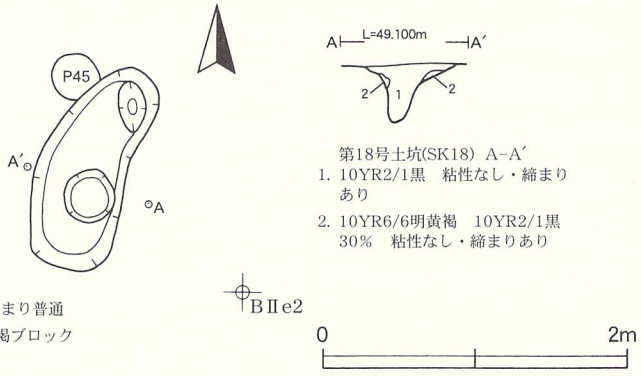
第16号土坑(SK16) A−A′
1. 7.5YR3/1黒褐　粘土質シルト　粘性あり・締まり普通
2. 7.5YR2/1黒　粘土質シルト　2.5YR7/6明黄褐ブロック5%　粘性あり・締まり普通

第17号土坑



第17号土坑(SK17) A−A′
1. 5YR3/1黒褐　10YR5/6黄褐30%　粘性あり・締まりやや軟
2. 2.5Y2/1黒　炭化物多量に含む

第18号土坑



第18号土坑(SK18) A−A′
1. 10YR2/1黒　粘性なし・締まりあり
2. 10YR6/6明黄褐　10YR2/1黒30%　粘性なし・締まりあり

第36図　土坑(3)

〈位置・検出状況〉　ＡＩｈ０～ｈ１グリッドに位置する。Ｖ層（地山面）が検出面である。
〈重複・新旧関係〉　P676と重複し、本遺構が旧い。
〈平面形・規模〉　円形を呈する。開口部径は88×82㎝、深さは23㎝である。
〈埋土〉　２層からなり、ともに黒～黒褐色土主体とする埋土に明黄褐色土が混入する。
〈壁・底面〉　壁は外傾して立ち上がる。底面はやや起伏が見られるが概ね平坦である。
遺物　出土していない。
時期　不明である。

・第21号土坑（ＳＫ21）
遺構（第37図、写真図版18）
〈位置・検出状況〉　ＡⅡｇ１グリッドに位置する。Ｖ層（地山面）が検出面である。
〈重複・新旧関係〉　P531と重複し、本遺構が新しい。
〈平面形・規模〉　円形状を呈する。開口部径は80×73㎝、深さは12㎝である。
〈埋土〉　２層に区分したが、２層は掘りすぎの可能性もある。１層は黒褐色土からなり、２層は黒褐色土に明黄褐色土が25％含まれる。
〈壁・底面〉　壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は凹凸が見られ平坦ではない。
遺物　出土していない。
時期　不明である。

・第22号土坑（ＳＫ22）
遺構（第37図、写真図版18）
〈位置・検出状況〉　ＡⅡｆ２グリッドに位置する。Ｖ層（地山面）が検出面である。
〈重複・新旧関係〉
〈平面形・規模〉　円形状を呈する。開口部径は94×79㎝、深さは８㎝である。
〈埋土〉　黒～黒褐色土主体の３層からなる。1、2層には焼土粒が微量ないし少量混入する。３層には明黄褐色土が多く含まれる。
〈壁・底面〉　壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は平坦であるが、南側に緩く傾斜する。
遺物　出土していない。
時期　不明である。

・第23号土坑（ＳＫ23）
遺構（第37図、写真図版18）
〈位置・検出状況〉　ＡⅡｇ３グリッドに位置する。Ｖ層（地山面）が検出面である。
〈重複・新旧関係〉　なし。
〈平面形・規模〉　楕円形を呈する。開口部径は90×76㎝、深さは27㎝である。
〈埋土〉　４層に区分される。１～３層は黒～黒褐色土主体の埋土である。４層は赤褐焼土からなる。
〈壁・底面〉　壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は中央部付近に窪みが見られ平坦ではない。
遺物（第57図、写真図版34）

埋土中から土師器が微量出土し、甕１点掲載した。155は胴部外面にケズリ、内面にヘラナデ調整が施される。

時期　不明である。

・第24号土坑（ＳＫ24）

遺構（第37図、写真図版18）

〈位置・検出状況〉　ＡⅡｆ１グリッドに位置する。Ｖ層（地山面）が検出面である。

〈重複・新旧関係〉　なし。

〈平面形・規模〉　楕円形を呈する。開口部径は102×80㎝、深さは18㎝である。

〈埋土〉　注記なし。

〈壁・底面〉　底面から外傾して立ち上がる。底面は平坦である。

遺物　出土していない。

時期　不明である。

・第25号土坑（ＴＰ１）

遺構（第37図、写真図版18）

〈位置・検出状況〉　ＡⅡｈ２～ｉ２グリッドに位置する。Ｖ層（地山面）が検出面である。

〈重複・新旧関係〉　なし。

〈平面形・規模〉　隅丸長方形を呈する。開口部径は212×67㎝、深さは17㎝である。

〈埋土〉　黒褐色土に黄橙色土が２～３％含まれる単層からなる。

〈壁・底面〉　底面から外傾して立ち上がる。特に北壁は急勾配となる。底面は平坦である。

遺物　出土していない。

時期　不明である。

６．溝跡

・第１号溝跡（ＳＤ１）

遺構（第38図、写真図版19）

〈位置・検出状況〉　ＡⅡｆ３～ｆ４、ＡⅡｇ４～ｇ５グリッドに位置する。Ⅲ層が検出面である。

〈重複・新旧関係〉　第９号土坑、P18、P163、P174と重複し、全て本遺構が新しい。

〈平面形〉　ほぼ真っ直ぐの線状を呈する。軸線方向はＮ－45°－Ｗである。

〈規模〉　検出長は約６ｍ20㎝、開口部幅は28～40㎝、深さは14㎝である。

〈埋土〉　黒～黒褐色粘土質シルト主体の２層からなる。２層は１層に比べ締まりが軟らかい。

〈断面形・底面〉　断面形は浅皿状を呈する。底面は概ね平坦である。

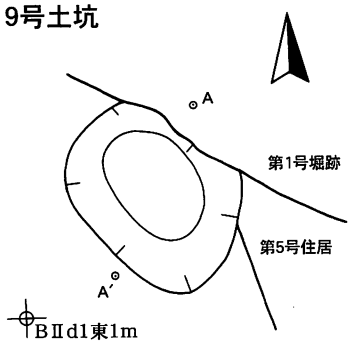
〈その他〉　水の流れる方向は不明である。

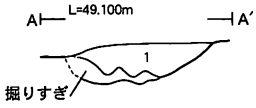
遺物　埋土中から土師器の甕底部が出土したが、細片のため掲載していない。

時期　遺構検出面から近現代に属すると思われる。

・第２号溝跡（ＳＤ３）

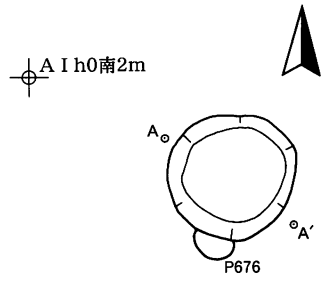
第19号土坑

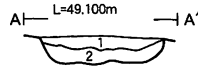




第19号土坑(SK19) A-A′
1. 10YR3/1黒褐　10YR6/6明黄褐20%

第20号土坑

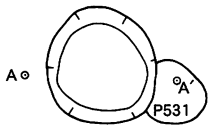


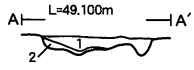


第20号土坑(SK20) A-A′
1. 10YR2/1黒　10YR6/6明黄褐5%　粘性なし・締まりあり
2. 10YR3/2黒褐　10YR6/6明黄褐25%　粘性なし・締まりあり

第21号土坑

AⅡh1南1m

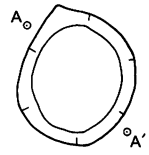


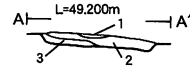


第21号土坑(SK21) A-A′
1. 10YR3/1黒褐　粘性なし・締まりあり
2. 10YR6/6明黄褐90%　10YR3/1黒褐10%(掘りすぎ？)

第22号土坑

AⅡg2

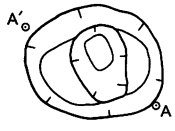


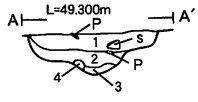


第22号土坑(SK22) A-A′
1. 7.5YR2/2黒褐　焼土粒少量混入　粘性なし・締まりあり
2. 7.5YR2/1黒　焼土粒微量混入　粘性なし・締まりあり
3. 7.5YR2/1黒　10YR6/6明黄褐60%　粘性なし・締まりあり

第23号土坑

AⅡf3南1m

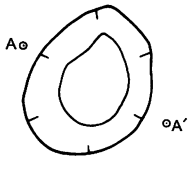


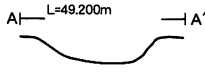


第23号土坑(SK23) A-A′
1. 7.5YR3/2黒褐　粘土質シルト　炭化物微量　粘土塊微量　土器片含む
2. 7.5YR2/1黒　粘土質シルト　焼土塊少量

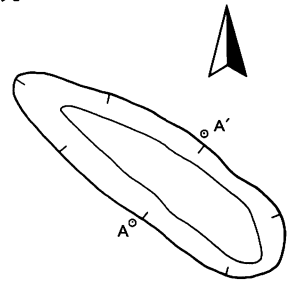
第24号土坑

AⅡg1
西1m南2m

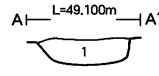




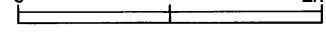
第25号土坑



AⅡi3北1m



第25号土坑(SK25) A-A′
1. 5YR2/1黒褐　10YR7/8黄橙2～3%　粘性なし・締まりあり



第37図　土坑(4)

遺構（第38図、写真図版19）

〈位置・検出状況〉　BⅡf１～f３グリッドに位置する。Ⅴ層（地山面）で検出された。

〈重複・新旧関係〉　第５号溝跡、P726と重複し、ともに本遺構が新しい。

〈平面形〉　概ね真っ直ぐな線状を呈する。軸線方向はN－１°－Eである。

〈規模〉　検出長は４ｍ76㎝、開口部幅は42～60㎝、深さ12㎝である。

〈埋土〉　黒褐色の粘土質シルトに褐色土粒が微量混入する単層からなる。

〈断面形・底面〉　断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦である。

遺物（第57図、写真図版34）

埋土中から土師器が微量出土し、坏１点掲載した。156はロクロ成形で、内面は内黒処理がされる。

時期　共伴遺物が１点のみと少なく、時期は不明である。

・第３号溝跡（ＳＤ７）

遺構（第38図、写真図版20）

〈位置・検出状況〉　調査区西側ＡⅠf８～f９、ＡⅠg９に位置する。Ⅴ層（地山面）で検出された。

〈重複・新旧関係〉　P573、P590、P719、P742、P743と重複し、全て本遺構が新しい。

〈平面形〉　ほぼ真っ直ぐの線状を呈する。軸線方向はN－68°－Wである。

〈規模〉　検出長は３ｍ82㎝、開口部幅は断面Ａ－Ａ’で54㎝、深さは断面Ａ－Ａ’で７㎝である。

〈埋土〉　黒褐色の粘土質シルトの単層からなる。

〈断面形・底面〉　断面形は浅皿状を呈する。底面はやや丸底気味である。

遺物　埋土中から土師器の甕底部が出土したが、細片のため掲載していない。

時期　不明である。

・第４号溝跡（ＳＤ９）

遺構（第38図、写真図版20）

〈位置・検出状況〉　調査区北西端部ＡⅠf５～f６に位置する。Ⅴ層（地山面）で検出された。

〈重複・新旧関係〉　第２号堀跡と重複し、本遺構が新しい。

〈平面形〉　ほぼ真っ直ぐの線状を呈する。軸線方向はN－40°－Wである。

〈規模〉　検出長は１ｍ80㎝、開口部径26～44㎝、深さは断面Ａ－Ａ’で19㎝である。

〈埋土〉　黒褐色の粘土質シルトの単層からなる。

〈断面形・底面〉　断面形は逆台形状を呈する。底面は平坦である。

遺物（第57図、写真図版34）

埋土中から須恵器が出土し、壺１点掲載した。157はロクロ成形によるもので、部位は肩部である。

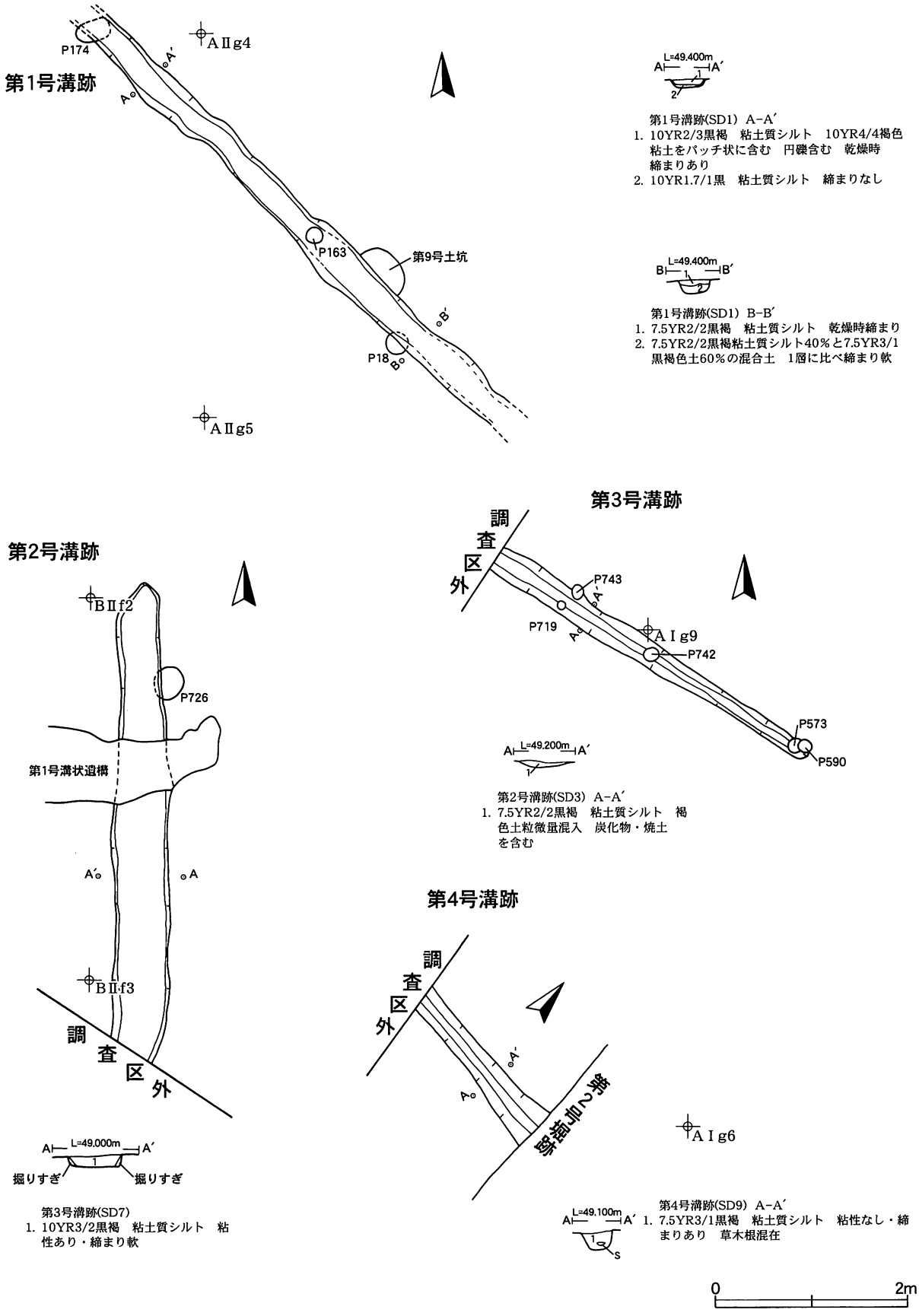
時期　共伴遺物が１点と少なく、時期は不明である。

７．堀跡

・第１号堀跡（ＳＤ２）

遺構（第39図、写真図版21）

〈位置・検出状況〉　調査区北端部に位置する。Ⅴ層（地山面）で検出された。


第1号溝跡
P174
AⅡg4
A
A′
P163
第9号土坑
B
B′
P18
AⅡg5
L=49.400m
A
A′
1
2
第1号溝跡(SD1) A−A′
1. 10YR2/3黒褐　粘土質シルト　10YR4/4褐色粘土をパッチ状に含む　円礫含む　乾燥時締まりあり
2. 10YR1.7/1黒　粘土質シルト　締まりなし
L=49.400m
B
B′
1
2
第1号溝跡(SD1) B−B′
1. 7.5YR2/2黒褐　粘土質シルト　乾燥時締まり
2. 7.5YR2/2黒褐粘土質シルト40%と7.5YR3/1黒褐色土60%の混合土　1層に比べ締まり軟
第2号溝跡
BⅡf2
P726
第1号溝状遺構
A′
A
BⅡf3
調査区外
L=49.000m
A
A′
1
掘りすぎ
掘りすぎ
第3号溝跡(SD7)
1. 10YR3/2黒褐　粘土質シルト　粘性あり・締まり軟
第3号溝跡
調査区外
P743
A′
P719
A
AⅠg9
P742
P573
P590
L=49.200m
A
A′
1
第2号溝跡(SD3) A−A′
1. 7.5YR2/2黒褐　粘土質シルト　褐色土粒微量混入　炭化物・焼土を含む
第4号溝跡
調査区外
A′
A
第4号溝跡へ繋
AⅠg6
L=49.100m
A
A′
1
S
第4号溝跡(SD9) A−A′
1. 7.5YR3/1黒褐　粘土質シルト　粘性なし・締まりあり　草木根混在
0
2m

第38図　溝　跡

〈重複・新旧関係〉　第５号、６号、７号、９号、10号、11号竪穴住居、第２号堀跡、第19号土坑、P645、P647、P672、P842と重複し、本遺構は竪穴住居よりは新しく、その他の遺構とは同時期に存在していた可能性もある。

〈平面形〉　遺構が調査区外に延びるため全体形は不明であるが、概ね線状を呈する。軸線方向はＮ－58°－Ｗである。また、北東部付近では池状の広がりを持つ。

〈規模〉　検出長は約47.2ｍである。開口部幅は遺構全体が検出されていないため不明である。深さは断面Ａ－Ａ’で46㎝、Ｂ－Ｂ’で80㎝、Ｃ－Ｃ’で67㎝である。

〈埋土〉　池状部分は５層からなり、黒褐色粘土質シルトを主体とする。池状部分以外は３層からなり、１～２層は黒～黒褐色粘土質シルト主体、３層は緑灰色の砂利層となる。

〈断面形・底面〉　全体形は不明であるが、池状部分を除きＶ字状が予想される。池状部分は底面から緩やかに外傾して立ち上がる。底面は平坦である。

〈その他〉　水堀であったと思われ、やや南東方向への傾斜する。

遺物（第57～59図、写真図版34～36）

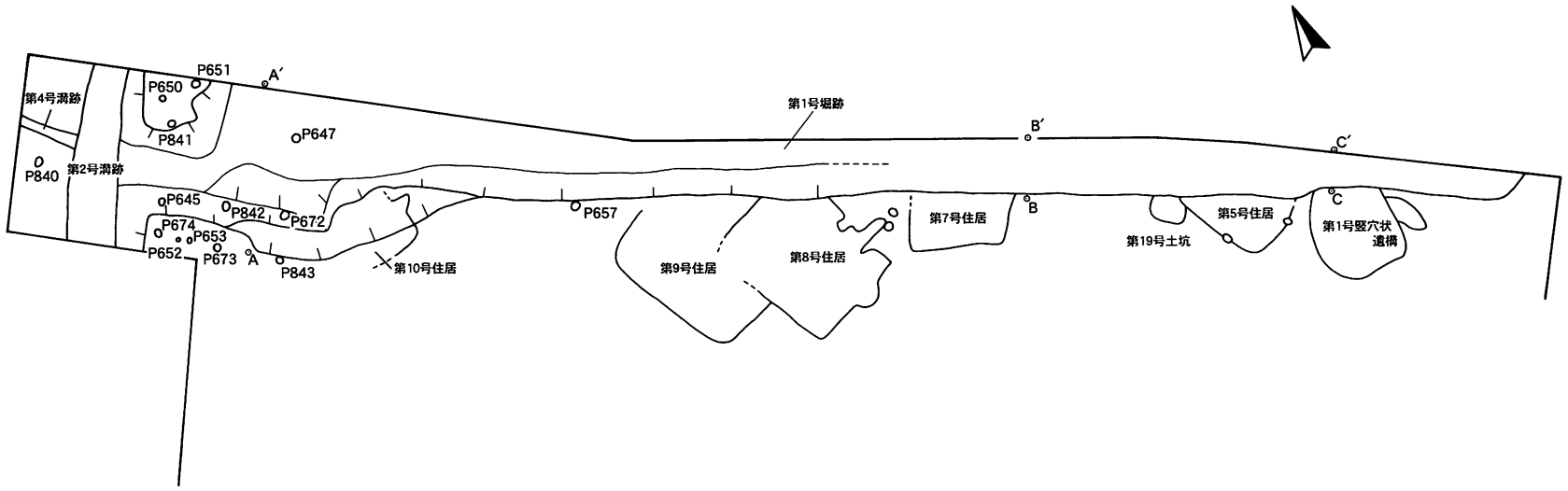
主に中央～東寄り付近での出土が多く、西側池状部分からの出土は見られなかった。また、埋土の中位～下位にかけての出土が多い。土師器、須恵器、弥生土器、陶磁器、鋳物関連遺物（炉壁、鋳型、坩堝、鉄塊）が出土し、土師器の高台付坏１点、甕３点、須恵器の甕の破片１点、弥生土器の鉢２点、陶器皿２点、磁器２点、鋳物関連遺物は鋳型５点、炉壁12点、坩堝１点掲載した。

158は土師器の高坏である。内面は内黒処理される。159～161は非ロクロ成形の土師器の甕、162は須恵器の甕である。163～164は弥生土器の鉢で、163は波状口縁に粘土溜が、164は変形工字文が見られる。ともに弥生時代前期に属する。165～169はともに瀬戸・美濃産の陶器で、165は丸皿、166は端反皿ないし丸皿である。時期はともに16世紀前半である。167～169は磁器で、167は18世紀の有田産の徳利胴部、168～169は中国産の皿で、時期は明末になる。170～184は溶解炉の炉壁である。溶解炉はコシキ炉とも呼ばれ、上コシキ・胴コシキ・炉鉢（ル）の３層構造が主に知られている。実際に使われた溶解炉が３層であったかどうかは不明である。炉体は円筒形で輪積み成形によるものと思われ、出土した資料も輪積みの段毎の破片である。170は最も大きい炉壁破片で推定外径41㎝、内径37㎝である。内面の状態はガラス化した鉄滓の塊の付着も見られず、錆がやや見られる程度であることから炉の上部であると思われる。178は炉体の口唇部の可能性もある。熱はあまり受けていない。182は羽口もしくは羽口装着孔である。推定直径は約８㎝である。183～184は同一個体で炉鉢部分と思われる。黒褐色のガラス化した鉄滓が付着し、木炭の噛み込みも見られる。185～188は鋳型である。細粒の川砂や山砂に粘土を２：１で混ぜ、水を加えてよく昆練し、これを赤橙色になるまで焼成してから粉砕したもので、粒径により粗真土・中真土・仕上げ真土（上真土）に分けられる。鋳造した製品名は不明である。185は粗真土、仕上げ真土が認められる。186は粗真土、中真土、仕上げ真土が認められる。187には鋳物の型離れや肌合いをよくするために、木炭粉や黒鉛を水や粘土汁（はじろ）で溶いた黒味が塗られている。188は粗真土の段階で製作を放棄したものであろうか。円形状を呈し、推定径は13.2㎝である。189は坩堝である。推定口径17.4㎝、厚さ2.1㎝である。鉄（湯）が入れられた痕跡はない。

時期　構築年代は出土遺物等から中世と思われる。廃絶は旧地権者の話から昭和30年代と思われる。

・第２号堀跡（ＳＤ４）

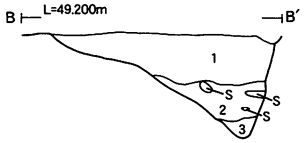
遺構（第40図、写真図版22）



第39図　第1号堀跡

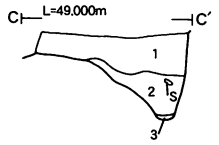
第1号堀跡(SD2) A-A′

1. 7.5YR3/1黒褐　粘土質シルト　10YR6/6明黄褐30%　粘性あり・締まりやや軟　人為堆積
2. 10YR3/2黒褐　粘土質シルト　粘性あり・締まりあり
3. 10YR2/2黒褐　粘土質シルト　粘性大・締まりやや軟
4. 10YR7/6明黄褐(地山土)　10YR2/2黒褐2～3%　酸化鉄分集積あり　粘性なし・締まりあり
5. 10YR2/2黒褐　粘土質シルト　酸化鉄分集積多量　水分に富む　粘性大・締まりやや軟



第1号堀跡(SD2) B-B′

1. 5YR3/1黒褐　粘土質シルト　10YR5/6黄褐5%　小石・礫混入　粘性なし・締まりあり
2. 5YR2/1黒　粘土質シルト　小石・礫混入　粘性大・締まりやや軟
3. 5G6/1緑灰砂利層　小石・礫多量に混入　粘性なし・締まりあり



第1号堀跡(SD2) C-C′

1. 5YR3/1黒褐　粘土質シルト　10YR5/6黄褐5%　小石・礫混入　粘性なし・締まりあり
2. 5YR2/1黒　粘土質シルト　10YR5/6黄褐ブロック少量混入　小石・礫混入　粘性大・締まりやや軟
3. 5G6/1緑灰砂利層　小石・礫多量に混入　粘性なし・締まりあり

0　2m

〈位置・検出状況〉　ＡＩｆ５～ｆ７、ＡＩｇ５～ｇ６に位置する。Ｖ層（地山面）で検出された。

〈重複・新旧関係〉　第１号堀跡、第４号溝跡と重複し、本遺構は第１号堀跡とほぼ同時期もしくは旧い可能性があり、第４号溝跡より旧い可能性がある。

〈平面形〉　ほぼ真っ直ぐの線状を呈する。軸線方向はＮ－33°－Ｅである。

〈規模〉　検出長は６ｍ28㎝、開口部幅は168㎝～280㎝、深さは断面Ａ－Ａ’で88㎝である。

〈埋土〉　３層からなる。１層は明黄褐色粘土質シルトに黒色土が混じり、人為堆積的様相を呈する。２層は黒色粘土質シルトを主体とし炭化物が微量含まれる。１、２層とも小石・礫が混入する。３層は水分に富む黒褐色粘土質シルトからなる。礫は含まれない。

〈断面形・底面〉　断面形はＶ字状を呈する。壁は底面から埋土中頃までやや急に外傾し立ち上がるが、検出面までは緩やかな立ち上がりとなる。

〈その他〉　水堀であったと思われ、周辺の地形的特徴から北流するものと思われる。

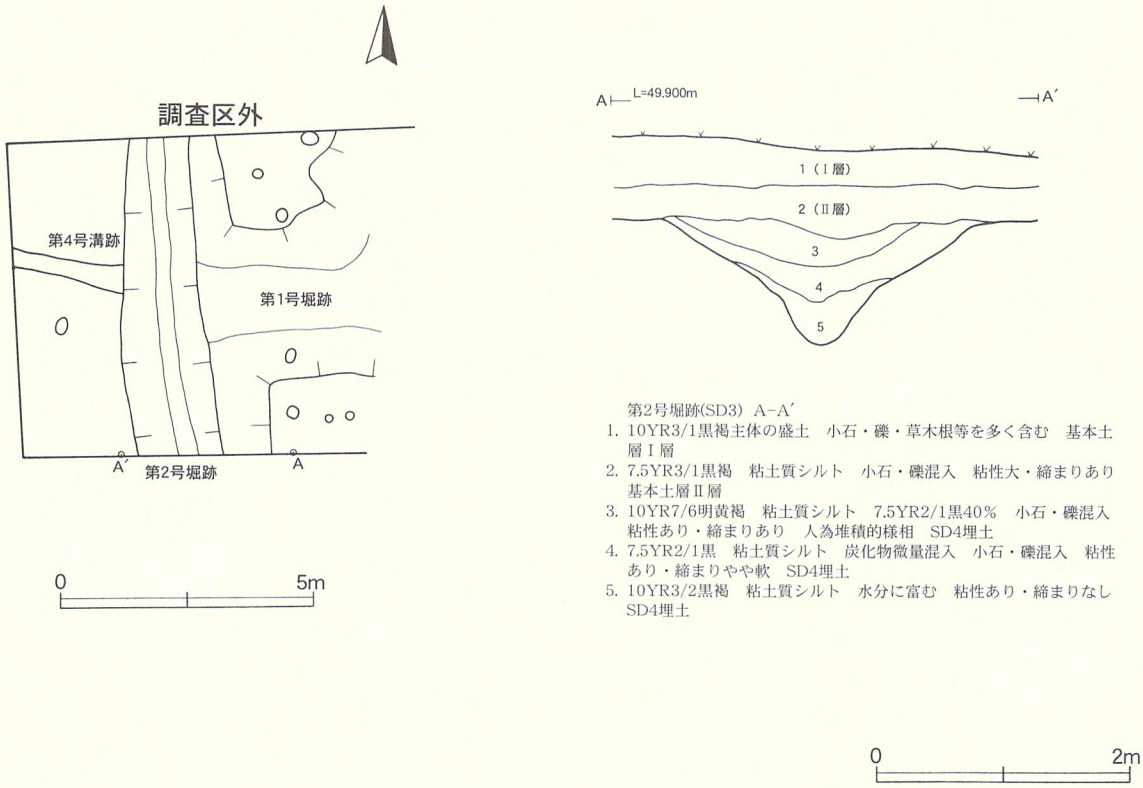
遺物　遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、第１号堀跡が本遺構にぶつかり終わっていることから、本遺構は第１号堀跡とほぼ同時期もしくは旧い可能性がある。したがって、遺構の時期は中世が考えられる。廃絶時期は不明である。

８．橋脚跡

・第１号橋脚跡（ＳＢ３）

遺構（第41図、写真図版23）



第40図　第2号堀跡

〈位置・検出状況〉　ＡＩｆ６～ｆ７、ＡＩｇ５～ｇ７、ｈ５～ｈ７に位置する。Ｖ層で検出した。

〈重複・新旧関係〉　第１号堀跡（SD２）と重複する。一定期間同時期に存在していた可能性がある。

〈規模〉　遺構が調査区外に延びるため全体形は不明である。検出分で桁行２間以上（総長380㎝以上）、梁行２間（総長416㎝）である。

〈軸線方向〉　Ｎ－38°－Ｅである。

〈柱間寸法〉　桁行は270㎝（8.9尺）、110㎝（3.6尺）、梁行は208㎝（6.9尺）を使用する。

遺物　出土していない。

時期　中世に属すると思われる。

9．塀跡

・第１号堀跡（ＳＤ８）

遺構（第42図、写真図版24）

〈位置・検出状況〉　調査区西側ＡＩｇ８、ＡＩｆ９～ｆ０、ＡＩｅ０～ｅ１に位置する。Ｖ層（地山面）で検出された。

〈重複・新旧関係〉　P540、P578、P704、P718、P741と重複する。新旧関係は不明である。

〈平面形〉　ほぼ真っ直ぐな線状である。軸線方向はＮ－35°－Ｅである。

〈規模〉　検出長は推定部分も含め約18ｍ50㎝、布掘りの開口部幅は24～44㎝、深さは２～７㎝である。柱痕跡は11基を数えたが、北側部分がP586・P587に続くのか、P717・P720に続くのか判断しかねた。柱穴の規模は開口部径20～44㎝、深さは10～53㎝である。柱間寸法は215㎝（7.1尺）～235㎝（7.4尺）が主となる。柱間の板材及び板痕跡は検出されておらず、詳細な構造は不明である。

〈埋土〉　掘り方は黒褐色粘土質シルトに明黄褐色土が３～５％程度含まれる単層からなる。柱穴は概ね黒色粘土質シルトに明黄褐色土が20～30％斑状に混入する埋土である。

〈壁・底面〉　布掘り部分の壁は、底面から外傾して立ち上がるが、削平により不明瞭な部分がある。底部は概ね平坦ないし丸底状を呈する。

遺物（第59図、写真図版36）

布掘り部分から須恵器が微量出土し、甕１点掲載した。190の部位は胴部である。

時期　中世に属するものと思われる。

10．円形周溝

・第１号円形周溝

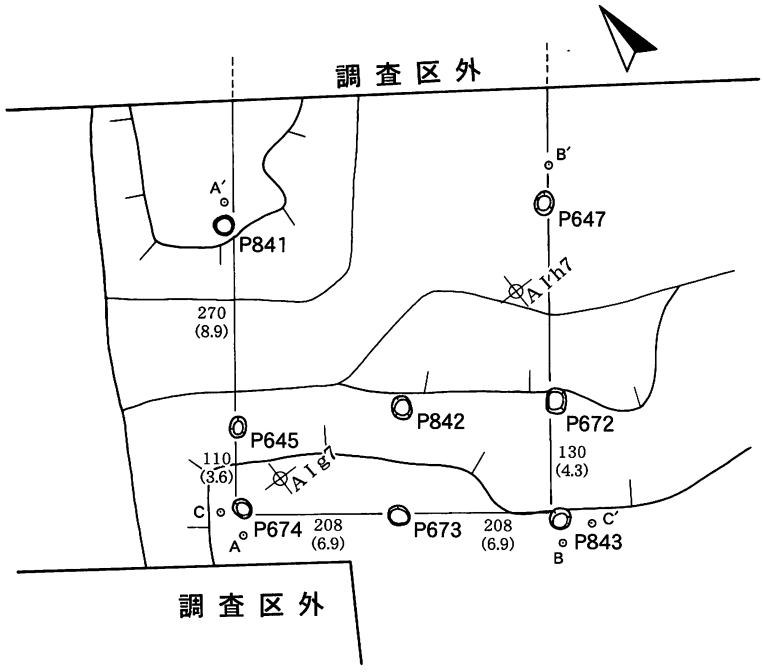
遺構（第43図、写真図版25）

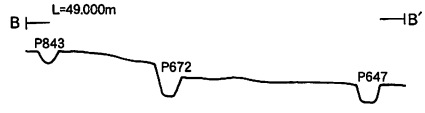
〈位置・検出状況〉　ＡⅡｊ２～ｊ３グリッドに位置する。Ｖ層（地山面）で検出された。

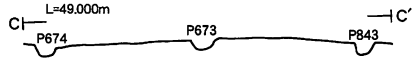
〈重複・新旧関係〉　第４号竪穴住居の他、柱穴17基（P306、P307、P308、P310、P311、P312、P313、P408、P409、P416、P428、P807、P823、P824、P825、P826、P839）と重複する。本遺構はP825より新しく、第４号竪穴住居及びその他の柱穴より旧い。

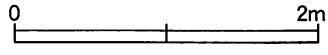
〈平面形〉　馬蹄形を呈する。

〈規模〉　北西－南東方向で外径３ｍ78㎝、内径２ｍ82㎝、北東－南西方向で外径３ｍ63㎝、内径で２ｍ63㎝を測る。開口部幅は36～54㎝、底部幅15～30㎝、深さは約20㎝である。



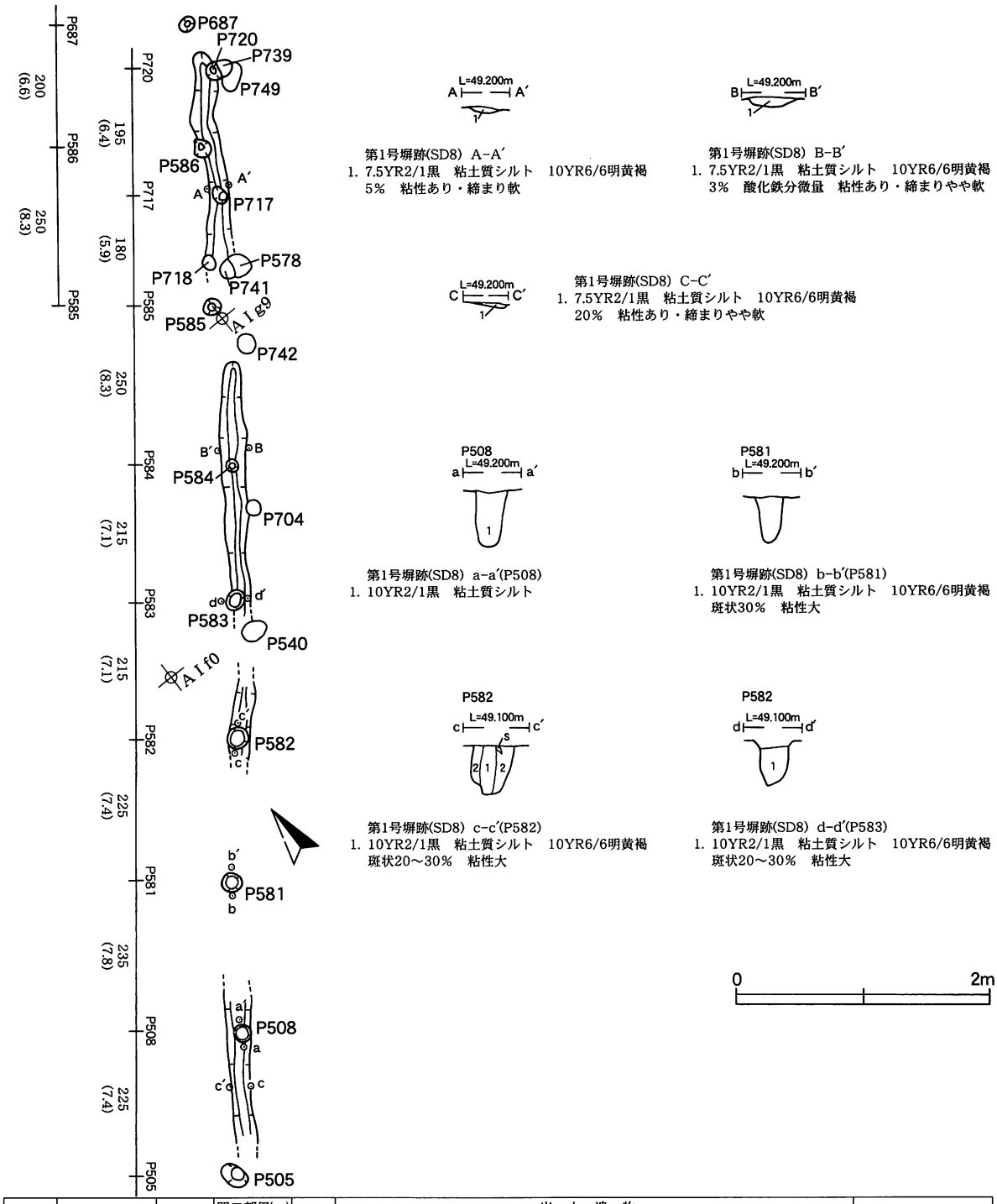






柱穴No.	グリッド	平面形	開口部径(cm)		深さ(cm)	出土遺物								該当建物・柱穴列
			長径	短径		土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	その他・備考	
645	AIf6～AIg6	方形	25	20	44.8									1号橋脚(SB3)
647	AIh6	円	30	30	26.2									1号橋脚(SB3)
672	AIg7	方形	35	30	47.3									1号橋脚(SB3)
673	AIg7	円	30	25	15.5									1号橋脚(SB3)
674	AIf6～AIf7	円	25	23	14.6									1号橋脚(SB3)
841	AIg6	円	26	26	7.9									1号橋脚(SB3)
842	AIg7	円	30	30	43.0									1号橋脚(SB3)
843	AIg7	円	26	26	7.9									1号橋脚(SB3)

第41図　第1号橋脚跡



柱穴No.	グリッド	平面形	開口部径(cm) 長径	短径	深さ(cm)	出土遺物 土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	その他・備考	該当建物・柱穴列
505	AⅡd1～AⅡe1	楕円	46	31	43.4									1号堀跡
508	AⅡe1	円	28	26	47.2									1号堀跡
581	AⅠe0	円	32	30	52.7	○							微量	1号堀跡
582	AⅠf0	円	34	33	37.8									1号堀跡
583	AⅠf9	円	32	28	39.3									1号堀跡
584	AⅠf9	円	20	20	10.4									1号堀跡
585	AⅠf8～AⅠg8	円	29	24	14.5									1号堀跡
586	AⅠg8	不整円形	30	30	20.7									1号堀跡
588	AⅠg8	円	22	22	7.3									1号堀跡
717	AⅠg8	楕円	30	24	13.9									1号堀跡
720	AⅠg8	円	28		50.0									1号堀跡

第42図　第1号堀跡

〈埋土〉　黒色粘土質シルトに褐色ないし明黄褐色土が数％含まれる埋土である。

〈断面形・底面〉　断面形は逆台形状を呈する。底面は平坦である。

遺物（第60図、写真図版36）

埋土及び直上層から、土師器、須恵器が少量出土し、土師器の坏１点、甕３点、須恵器の坏２点、甕３点掲載した。

191はロクロ成形の土師器の坏である。192～193は須恵器の坏である。194～196は土師器の甕である。195、196には煤が付着する。197～199は須恵器の甕でいずれも胴部外面に平行タタキ、外面に平行アテグによる調整が施される。なお、198、200～204の６点は埋土直上からの出土で第４号竪穴住居跡とも重複する地点から出土しているため、時期決定資料とはせず、参考資料として捉えている。

時期　出土遺物が少ないため特定は難しいが、切り合いから第4号竪穴住居跡より旧いことが調査の結果判明している。ロクロ成形の土師器坏が出土している点を重視すると９世紀前半の時期が与えられ、第Ⅱ期の可能性がある。

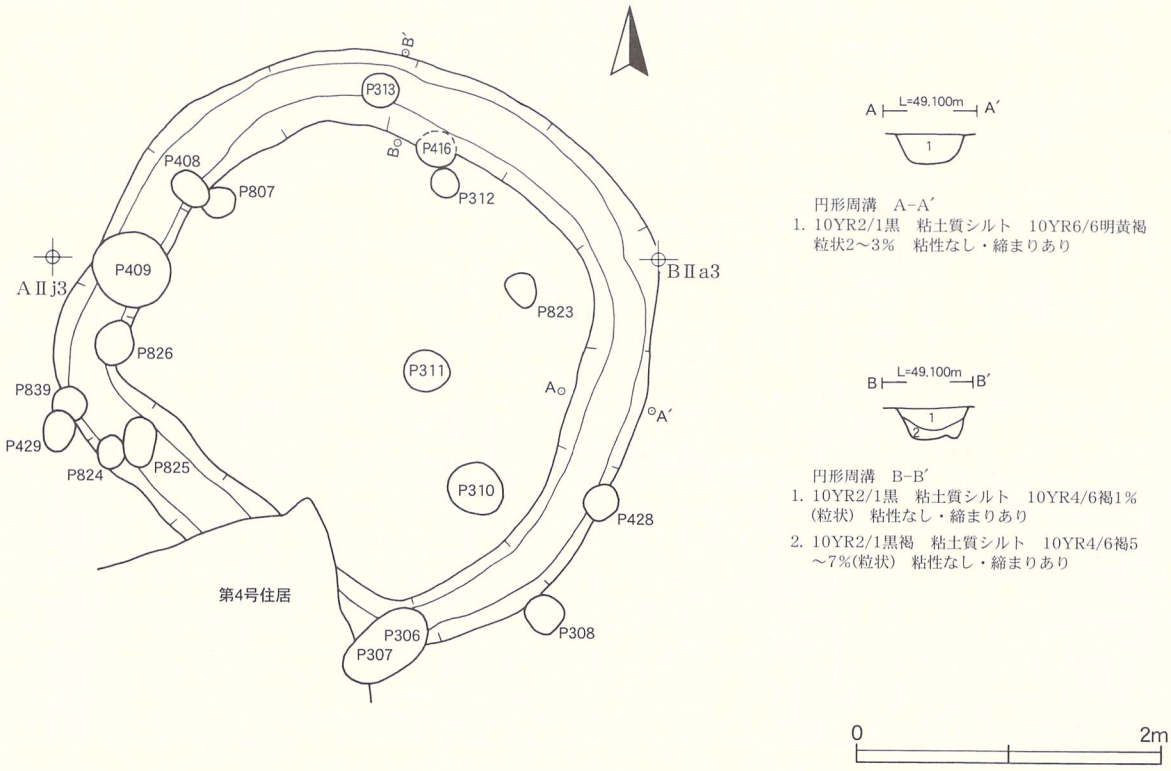
11. 溝状遺構

・第１号溝状遺構（ＳＤ５）

遺構（第44図、写真図版19）

〈位置・検出状況〉　調査区北側東寄りＢⅡｄ２～ｅ２、ＢⅡｆ１～ｆ２グリッドに位置する。Ⅴ層（地山面）で検出された。

〈重複・新旧関係〉　第２号溝跡、第２号溝状遺構と重複し、本遺構は第２号溝跡より旧く、第２号溝状遺構より新しい。



第43図　第1号円形周溝

〈平面形〉　平面形状は蛇行により一定していない。したがって、軸線方向は不明である。

〈規模〉　推定部分も含めた検出長は約８ｍ80㎝、開口部幅は断面Ａ－Ａ’が68㎝、Ｂ－Ｂ’が52㎝、Ｃ－Ｃ’が65㎝である。深さは14～35㎝である。

〈埋土〉　３層に区分される。黒褐～暗褐色土に褐色土粒・ブロックを混入する。１～２層では炭化物・焼土が含まれる。

〈壁・底面〉　底面から外傾して立ち上がるが、場所により一定ではない。底面も平坦であったり起伏があったりと一様ではない。

遺物　出土していない。

時期　不明である。

・第２号溝状遺構（ＳＤ６）

遺構（第44図、写真図版19）

〈位置・検出状況〉　調査区北側東寄りＢⅡｆ１～ｆ２グリッドに位置する。Ⅴ層（地山面）で検出された。

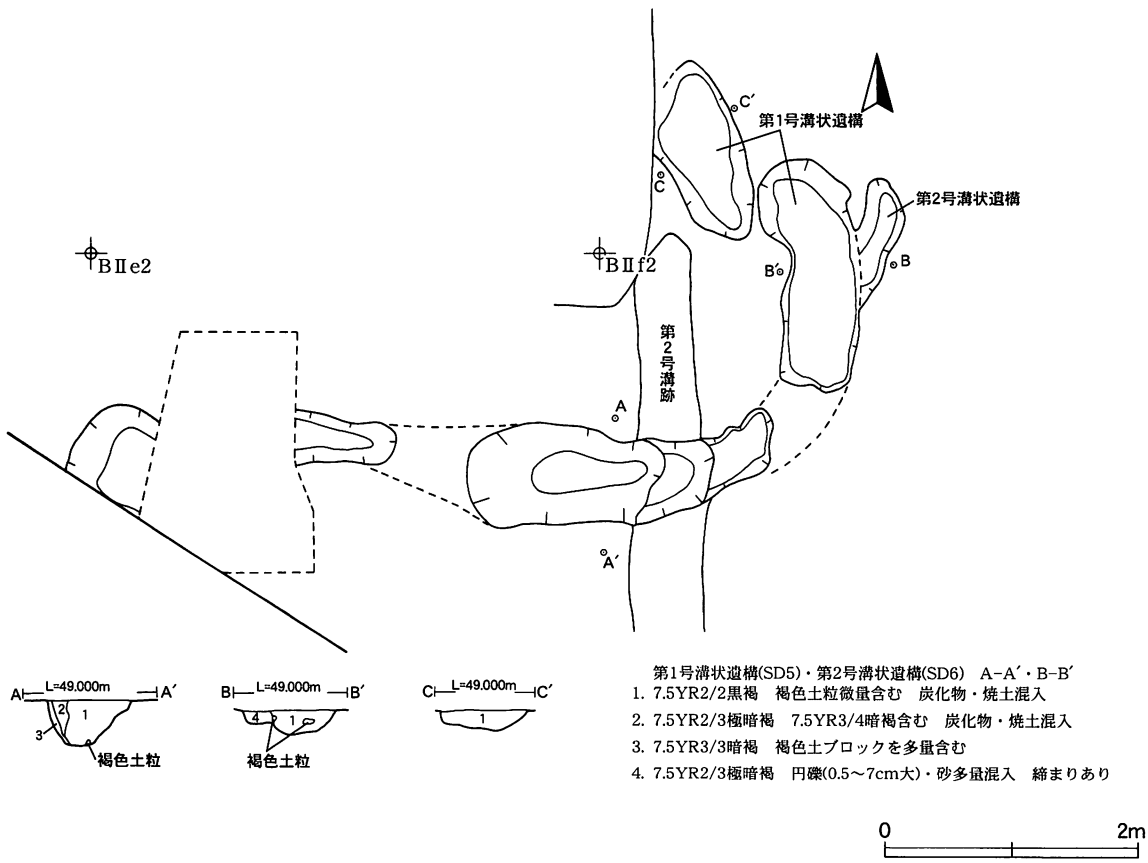
〈重複・新旧関係〉　第１号溝状遺構と重複し、本遺構が旧い。

〈平面形〉　全体形が把握できなかったため、不明である。軸線方向も不明である。

〈規模〉　検出長は約80㎝、開口部幅32㎝、深さは10㎝である。

〈埋土〉　単層である。極暗褐色土に円礫（0.5～７㎝大）及び砂が多量に混入する埋土である。

〈壁・底面〉　底面から外傾して立ち上がる。底面は概ね平坦である。



第44図　溝状遺構

遺物　出土していない。

時期　不明である。

12. その他の遺構

(1) 集石遺構

・第１号集石遺構（ＳＱ１）

遺構（第45図、写真図版26）

〈位置・検出状況〉　ＡⅡｈ３～ｈ４に位置する。Ⅲ層で検出された。

〈重複・新旧関係〉　なし。

〈平面形・規模〉　概ね東西105㎝、南北75㎝の範囲内に２、３～15㎝台の小石・礫が集積する。石の下には、60×39㎝の不整形の焼土が広がる。焼土の層厚は最大８㎝である。

〈焼土〉　焼土は４層に分けられる。１～３層は橙～赤褐色の焼土である。４層は暗褐粘土質シルトに僅かに焼けが及ぶ。

遺物　検出面において土師器が微量出土しているが、細片のため掲載していない。

時期　検出層から近現代と思われる。

・第２号集石遺構（ＳＱ２）

遺構（第45図、写真図版26）

〈位置・検出状況〉　ＡⅡｇ４～ｈ４グリッド、第１号集石遺構の南東約４ｍに位置する。Ⅲ層で検出された。

〈重複・新旧関係〉　なし。

〈平面形・規模〉　概ね東西90㎝、南北80㎝の範囲内に、２、３㎝～15㎝台の小石・礫が集積する。石の下には焼土や柱穴等は見られず、浅い掘り込み状のものが見受けられたが、壁の境界は極めて不明瞭であった。

〈埋土〉　浅い掘り込み状部分は黒褐色粘土質シルト主体の単層からなる。

遺物　検出面付近より非ロクロ成形の土師器甕の底部が出土したが、細片のため掲載していない。

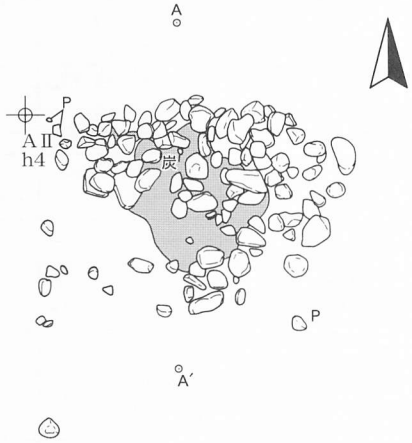
時期　検出層から近現代と思われる。

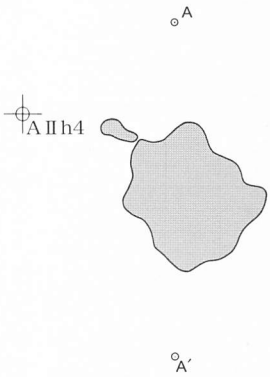
(2) 柱穴

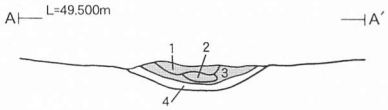
調査区全体で764基の柱穴を検出した。柱穴の位置、平面形、開口部径、深さ、出土遺物については第３表の柱穴一覧表に掲載した。

遺物については、119基から遺物が出土しており、その内18基から出土した24点を掲載している（第60～62図、写真図版37～38）。

第1号集石遺構

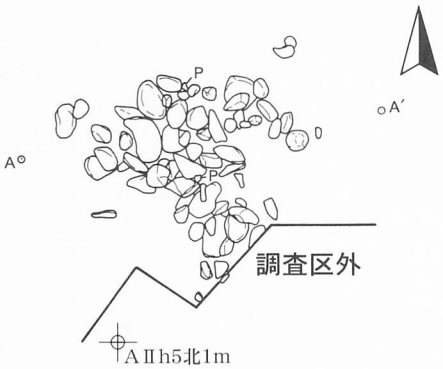


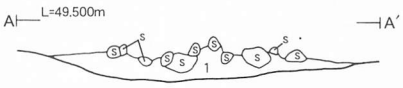




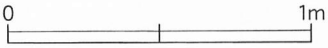
第1号集石遺構(SQ1)
1. 5YR7/8橙　焼土　締まりあり
2. 2.5YR4/8赤褐　焼土　締まりあり
3. 2.5YR5/8明赤褐　焼土　締まりややあり
4. 7.5YR7/8暗褐　粘土質シルト　焼土混入　締まりややあり

第2号集石遺構





第1号集石遺構(SQ1)
1. 7.5YR7/8黒褐　粘土質シルト　粘性あり・締まりやや軟



第45図　集石遺構

第3表　柱穴一覧表

柱穴No.	グリッド	平面形	開口部径(cm) 長径	開口部径(cm) 短径	深さ(cm)	出土遺物 土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	その他・備考	該当建物・柱穴列
1	AⅡf5	円	20	20	27.5									
2	AⅡg4	円	56	54	20.0	○			○				美濃産陶器筒型香炉	
3	AⅡg3~AⅡg4	円	46	43	7.5									
4	AⅡg5	円	22		23.8									
5	AⅡf5~AⅡg5	楕円	22	16	18.9	○							微量	
6	AⅡg5	円	20	20	25.4									
7	AⅡg5	円	12	12	16.4									
8	AⅡg5	円	20	18	7.5									
9	AⅡg5	円	18		7.5									
10	AⅡg5	円	28	26	20.2									
11	AⅡg5	円	24	22	21.9		○						坏微量	
12	AⅡf4	円	24		20.9		○						坏	
13	AⅡf4	円	17	17	29.0									
14	AⅡf5	円	28	28	14.1									
15	AⅡf5	楕円	32	14	11.5									
16	AⅡf5	円	24	21	22.5									
17	AⅡg4~AⅡg5	楕円	44	34	31.0									
18	AⅡg4	円	24	22	25.9									
19	AⅡg5	楕円状	22		14.6		○						坏微量	
20	欠番													
21	AⅡg4	円	33	31	26.1	○								
22	BⅡa2~BⅡa3	円	20	20	18.8	○							微量	
23	BⅡa3	楕円	22	18	13.6									
24	BⅡa2~BⅡa3	円	16	16	19.6									
25	BⅡa3	円	16	14	14.5									
26	BⅡa3	円	30	28	51.4									
27	BⅡa3	円	12	12	7.3									
28	BⅡa3	円	21	20	11.1									
29	BⅡa3	円	26	24	52.8									
30	BⅡa3	円	18	17	6.8									
31	BⅡa3	円	22	21	17.6									
32	BⅡa3	円	19	18	20.3									
33	BⅡa3	円	38	34	52.7									
34	BⅡc1	方形	30	26	42.2									柱穴列2号
35	BⅡd1	円	31	30	28.3									
36	BⅡd1~BⅡd2	不整方形	38	30	44.2		○						甕	柱穴列2号
37	BⅡd2	円	16	14	18.3									
38	BⅡd2	楕円	43	33	49.4					○			砥石	柱穴列2号
39	BⅡd1	楕円	45	38	65.5									
40	BⅡc1~BⅡd1	円	28	26	47.6									6号建物(SB7)
41	BⅡd1	円	31	28	53.1									6号建物(SB7)
42	BⅡd1	円	18	15	11.5									
43	BⅡd1	円	20	18	15.7									
44	BⅡd1~BⅡe1	円	30	28	46.4									6号建物(SB7)
45	BⅡd1	円	31	30	57.3									
46	BⅡd1	楕円状	30		25.5									
47	BⅡd1	楕円状	36		46.2									
48	BⅡe1	円	28	25	23.0									
49	BⅡd1	円	28	26	15.8									
50	BⅡd1	円	24	24	12.2									
51	BⅡa5	円	28	28	49.1									
52	BⅡa5	円	26	24	44.4	○	○						須恵器は甕・坏	
53	AⅡj5	円	22	22	23.4	○	○						微量	
54	AⅡj5	楕円	26	17	23.4									9号建物(SB10)
55	AⅡj5	円	22	22	17.3									
56	AⅡj5	円	18	15	13.0									
57	AⅡi5	楕円	26	18	9.7									
58	AⅡj5	楕円	28	22	25.3									
59	BⅡc2	円	38	32	47.6									
60	BⅡc1	円	32	26	35.7									6号建物(SB7)
61	BⅡc1	円	40	36	45.1									
62	BⅡc1	楕円	42	34	36.6									
63	BⅡc1	円	38	37	69.9									柱穴列2号
64	BⅡb1	楕円	30	23	32.8	○							坏・甕	5号建物(SB6)
65	BⅡc1	円	30	25	47.1									6号建物(SB7)
66	BⅡc1	円	28	24	33.9									5号建物(SB6)
67	BⅡb2	楕円	33	26	37.3									
68	BⅡb1	円		23	12.7									
69	欠番													
70	BⅡb2	円	35	27	45.0				○				中国産磁器端反皿	
71	BⅡc2	円	22	22	28.9									
72	BⅡc2	楕円	32	22	38.8	○	○						微量	
73	BⅡa1	楕円	36	32	48.5									7号建物(SB8)
74	BⅠj0~BⅡa1	楕円	32	30	47.8									7号建物(SB8)
75	BⅡa1	円	45	44	26.2									
76	BⅡa1	円	36	32	53.2									
77	BⅡb0	円	32	26	46.6									

柱穴No.	グリッド	平面形	開口部径(cm)		深さ(cm)	出土遺物								該当建物・柱穴列
			長径	短径		土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	その他・備考	
78	BⅡb0~BⅡb1	円	30	30	51.3									
79	BⅠa0	円												
80	BⅠa0	円	32	31	37.7									
81	欠番													
82	欠番													
83	欠番													
84	欠番													
85	欠番													
86	欠番													
87	欠番													
88	欠番													
89	欠番													
90	欠番													
91	欠番													
92	欠番													
93	欠番													
94	欠番													
95	欠番													
96	欠番													
97	欠番													
98	欠番													
99	欠番													
100	欠番													
101	BⅡd1	円	22	22	11.6									5号建物(SB6)
102	BⅡd1	方形	32	27	20.3									
103	BⅠd0	円	24	22	17.0									
104	BⅠd0~BⅡd1	円	28	22	26.4									5号建物(SB6)
105	欠番													
106	BⅡd1	円	19	18	13.1									
107	BⅠc0	楕円	34	26	27.3									5号建物(SB6)
108	BⅠc0	円	24	24	18.5									
109	BⅠc0	円	36	34	40.6	○							微量	6号建物(SB7)
109	BⅠc0	円	38	38	41.5									
110	BⅡd2	円	24	22	12.6									
111	BⅡd2	円	14	12	49.4									
112	BⅡd2	楕円	48	38	28.9									
113	BⅡd2	円	20	20	11.7									
114	BⅡd2	円	20	20	13.5									
115	欠番													
116	BⅡa3	円	32	30	48.8									柱穴列3号
117	BⅡa3	円	23	22	4.6									
118	BⅡa3	円	14	13	19.9									
119	BⅡa3	円	14	13	15.4									
120	BⅡa3	円	14	13	15.7									
121	欠番													
122	BⅡa3	楕円	20	18	10.5									
123	BⅡa3	円	19	18	21.4									
124	BⅡa3	円	19	16	19.2									
125	BⅡa3	円	19	17	14.4									
126	BⅡa3	円	18	16	19.5									
127	欠番													
128	BⅡa2	円	43	38	51.6									
129	BⅡb2	円	36	33	47.9									
130	BⅡb4	円	26	26	15.5									
131	BⅡb2	円	16	14	12.4									
132	BⅡb3	円	16	14	10.8									
133	BⅡb3	楕円	42	34	41.4									
134	BⅡb3	円	23	20	19.5									
135	BⅡb3	円	32	24	32.7									
136	BⅡb3	円	24	22	19.4									
137	BⅡb3	円	32	32	45.8									
138	BⅡb3	円	22	22	19.7									
139	BⅡb3	円	22	20	33.3									
140	BⅡa4	円	14	14	13.4									
141	BⅡb4	円	24	20	28.7									
142	BⅡa4	円	22	20	19.1									
143	BⅡa4	円	20	18	10.6									
144	BⅡa4	円	23	22	16.6									
145	BⅡa4	円	38	36	19.7									
146	BⅡa4	円	18	15	11.7									
147	BⅡa4	円	21	19	13.1									
148	AⅡj4	円	24	24	39.4									
149	AⅡj4	円	18	18	6.6									
150	AⅡj4~BⅡa4	円	22	21	8.4	○								
151	AⅡj4	円	12	9	7.5	○							甕	
152	AⅡj4	円	13	10	5.7									
153	AⅡj4	円	28	28	16.9									9号建物(SB10)
154	BⅡa4	楕円	44	28	22.1									
155	AⅡf5	円	24	20	18.3									

柱穴No.	グリッド	平面形	開口部径(cm)		深さ(cm)	出土遺物								該当建物・柱穴列
			長径	短径		土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	その他・備考	
156	AⅡf5	楕円	25	18	16.5									
157	AⅡg4	楕円	26	20	14.4									
158	欠番													
159	AⅡg4	円	20	19	17.4									
160	AⅡf4	円	16	16	12.9									
161	AⅡg4	円	27	26	16.8									
162	AⅡg4	円	20	19	26.9									
163	AⅡg4	円	18	17	7.5									
164	AⅡf4	楕円	30	21	10.2									
165	AⅡg4	円	18	16	18.3									
166	AⅡf4~AⅡg4	円	30	28	24.3									
167	欠番													
168	AⅡg4	円	22	22	9.5									
169	AⅡf4~AⅡg4	楕円	24	20	25.6									
170	AⅡg3	円	27	27	39.8									
171	AⅡf3	円	25	22	12.5									
172	AⅡf3	円	24	22	19.6									
173	AⅡf3	円	20	18	14.1									
174	AⅡf3~AⅡf4	楕円	36	21	14.6									
175	AⅡg4	楕円	32	20	29.5									
176	AⅡg4	円	14	14	31.9	○	○						微量	
177	AⅡg4	円	31	30	38.3	○							微量	
178	AⅡg4	楕円	27		28.7	○							微量	
179	AⅡg4	円	22	19	15.3									
180	AⅡf3~AⅡg3	円?	26		46.0									
181	AⅡh4	方形	20	17	22.8									
182	AⅡh4	円	27	27	15.3									
183	AⅡg3	方形	22	21	0.0									
184	欠番													
185	AⅡg3	円	20	18	17.0									
186	AⅡg3	楕円	24	18	0.0									
187	AⅡh3	円	30	26	17.0									
188	AⅡh3	円	26	26	19.1									
189	AⅡh3	方形	52	46	67.4				○				中国産染付磁器端反皿	1号建物(SB1)
190	AⅡh3	不整円	50	43	33.7									
191	AⅡg4	方形	70	50	54.0	○							微量	1号建物(SB1)?
192	AⅡg3	円	16	14	0.0									
193	AⅡh3~AⅡi3	円	48	46	16.1	○							坏	1号建物(SB1)
194	AⅡg3~AⅡh3	楕円	30	22	8.8									
195	AⅡh3	円	30	27	27.2									
196	AⅡh3	円	24	22	11.3									
197	AⅡh2	円	22	18	12.9									
198	AⅡh4	円	26	23	19.7									
199	AⅡh4	円?	32		42.9									
200	AⅡg2	円	20	18	10.8									
201	AⅡh3	円	30	26	20.1									
202	AⅡg3	楕円	26	20	11.1									
203	AⅡh3	円	20	20	9.3									
204	AⅡh2	円	52	46	-32.0	○							甕、炭	
205	AⅡh2	円	24	24	15.1									
206	AⅡh2~AⅡh3	楕円	32	28	13.0									
207	AⅡi5	円	30	24	11.6									
208	AⅡi5	円	21	18	7.4									
209	AⅡi5	円	21	18	8.3								微量	
210	AⅡh2	楕円	24	22	33.4									
211	AⅡh3	楕円	92	46	52.0									1号建物(SB1)
212	AⅡg3	円	19	17	20.1									
213	AⅡh3	円	24	18	14.0									
214	欠番													
215	AⅡh4	円	24	23	30.1									
216	AⅡi4	円	20		17.2									
217	AⅡi4~AⅡi5	円	19	18	19.0									
218	AⅡi5	円		32	53.2									
219	AⅡi5	円		21	15.8									
220	AⅡi5	円	30	26	32.9	○							微量	
221	AⅡi4	楕円	36	33	32.8									
222	AⅡh4	円	19	17	14.3									
223	AⅡi4	円	36	30	40.4									
224	AⅡi4	円	16	15	13.3									
225	AⅡi4	円	25	22	8.6									
226	AⅡh4	円	18	18	27.6									
227	AⅡh4	円	22	22	11.9									
228	AⅡh4~AⅡi4	楕円	32	26	39.7									
229	AⅡi5	円	16	15	17.1									
230	AⅡi5	円	20	18	42.8									
231	AⅡi4	円	15	12	21.5									
232	AⅡi3	方形	38	34	21.9	○							微量	
233	AⅡi4	円	14	13										
234	AⅡi4	円	37	36	22.9									

柱穴No.	グリッド	平面形	開口部径(cm)		深さ(cm)	出土遺物								該当建物・柱穴列
			長径	短径		土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	その他・備考	
235	AⅡi4	楕円	31	28	23.7									
236	AⅡh4~AⅡi4	方形		36	38.9									
237	AⅡh4	円		52										
238	AⅡi4	円	13	12	12.4									
239	AⅡi4	円	18	16	12.4									
240	AⅡi5	円	20	17	15.1									
241	AⅡi5	円	16	16	10.3									
242	AⅡj4	楕円	30	28	12.7									
243	AⅡi5~AⅡj5	円	38	36	38.8									
244	AⅡi5	円	16	14	12.5									
245	AⅡj5	楕円	18	14	21.2									
246	AⅡj5	円	26	24	31.8	○							微量	
247	AⅡi5	円	20	18	38.9									
248	AⅡj5	円	18	16	20.6									
249	AⅡj5	円	22	20	12.7									9号建物(SB10)
250	AⅡj5	楕円	18	14	10.6									
251	AⅡj5	円	12	12	37.8									
252	AⅡj5	円	25	22	11.6									
253	AⅡj4~AⅡj5	円	18	16	11.6									
254	AⅡj5	楕円	20	16	16.5									
255	AⅡj5	楕円	24	18	26.4									
256	AⅡh2	円	28	25	23.7									
257	AⅡh2	円	22	19	21.8									
258	AⅡh2	円	22	20	17.9									
259	AⅡh1	円	30	26	24.6									
260	AⅡh1	円	32	26	23.1									
261	AⅡh1	円	16	14	15.0									
262	AⅡi1	楕円	26	22	59.4								炭	
263	AⅡi1	楕円	26	20	29.1									
264	AⅡi1	方形	38	36	52.6	○	○						土師器坏、須恵器甕	1号建物・2号建物
265	AⅡi1	円	32	31	49.2	○							坏	1号建物(SB1)
266	AⅡh2	円	64	62	55.7	○							微量	2号建物(SB2)
267	AⅡh2	円	21	20	31.0									
268	AⅡh2	円	24	22	22.0									
269	AⅡi2	楕円状	64	50	72.1	○							種子、土師器は甕	1号建物(SB1)
270	AⅡh2	方形	30	28	24.3									
271	AⅡi3	円	38	30	29.3									
272	欠番													
273	AⅡi2	円	32		36.5									
274	BⅡa5	楕円	28	22	24.6									
275	BⅡa5	楕円	26	22	12.4									9号建物(SB10)
276	BⅡa5	楕円	26	22	25.8	○							微量	
277	BⅡa5	円	22	19	14.3									
278	BⅡa5	円	16	14	25.0									9号建物(SB10)
279	AⅡj5~BⅡa5	方形	17	14	28.1									
280	BⅡa5	円	15	15	15.7									9号建物(SB10)
281	BⅡa5	楕円	20	17	22.5									
282	BⅡa5	楕円	18	10	17.1									
283	AⅡj6	円	20	19	19.3									
284	BⅡa5	楕円	25	20	14.2									
285	BⅡa5	円状	28		13.7									
286	欠番													
287	欠番													
288	欠番													
289	AⅡj1	円	22	21	38.4	○							甕	
290	BⅡa1	円	28	28	38.7									
291	BⅡa1	円	28	20	11.1									7号建物(SB8)
292	BⅡa1	円	34	30	26.8									
293	BⅡa1	楕円	28	21	36.8									
294	BⅡa1~BⅡa2	円	28	25	19.0									
295	BⅡa1~BⅡa2	円	19	17	19.8									
296	BⅡa2	方形	22	18	17.6									
297	BⅡa2	楕円	22	16	26.3									
298	BⅡa2	円	44	32	47.8									柱穴列1号
299	BⅡa2	円	28	25	11.9									
300	BⅡa2	円	30	19	17.4									
301	AⅡj1	円	38	32	45.6									柱穴列1号
302	AⅡj1	円	28	22	21.9									
303	AⅡj2~BⅡa2	円	20	20	16.6									
304	AⅡj2	円	28	24	21.1									
305	AⅡj2	円	22	20	22.0									
306	AⅡj3	楕円		25	32.1									
307	AⅡj3	楕円	64	35	37.3	○							微量	
308	AⅡj3	円	26	26	12.0									
309	AⅡj3	円	20	20	15.8									
310	AⅡj3	円	38	34	46.2	○							微量	柱穴列3号
311	AⅡj3	円	31	28	19.6									
312	AⅡj2	円	20	19	22.5	○								
313	AⅡj2	円	25	22	20.4	○							微量	

柱穴No.	グリッド	平面形	開口部径(cm)		深さ(cm)	出土遺物								該当建物・柱穴列
			長径	短径		土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	その他・備考	
314	AⅡj2	円	29	26	23.8									
315	AⅡj2	円	24	22	23.5									
316	AⅡj2	円	34	30	36.4									
317	AⅡj2	円	20	15	17.2									
318	AⅡj2	円	19	18	24.1									
319	AⅡj2~BⅡa2	楕円	32	23	15.8									
320	BⅡa2	円	32	20	18.9									
321	BⅡa2	楕円	29	22	12.0									
322	BⅡa2	円	19	18	10.2									
323	AⅡj2	円	18	17	20.6									
324	BⅡa2	円	14	13	9.8									
325	AⅡj2~BⅡa2	楕円	27	24	10.1									
326	BⅡa2	円	27	25	39.4									
327	欠番													
328	欠番													
329	欠番													
330	欠番													
331	BⅡa2	円	24	24	26.2	○							坏、微量	
332	BⅡa2	楕円	28	21	18.0									
333	BⅡa2	円	22	18	10.6									
334	BⅡa2	円	36	31	22.4	○							微量	
335	BⅡa2	円	21	19	14.2									
336	BⅡa2	円	17	14	9.3									
337	BⅡa2	円	21	16	23.7									
338	BⅡa2	方形	19	15	36.0									
339	BⅡa2	円	23	22	34.2									
340	BⅡa2	円	19	18	18.5									
341	BⅡa2	円	20	18	12.1									
342	AⅠi0	円	24	24	34.3									
343	AⅠi0	円	19	16	43.0									
344	AⅠi0	楕円	32	22	14.8									
345	AⅠi0~AⅠj0	円	32	28	44.1									
346	AⅠj0	楕円	27	21	28.1	○	○	○					土師器は坏、縄文土器	7号建物(SB8)
347	AⅡj1	円	18	17	10.2									
348	AⅡj1	円	22	19	13.4									
349	AⅡj1	楕円	28	20	17.3									
350	AⅡj1	楕円	23	19	28.7									
351	AⅡj1	円	20	18	16.9									
352	AⅡj1	円	24	22	15.5	○							坏	
353	AⅡj1	円	19	18	11.6									
354	AⅡj1	円	17	16	11.6									
355	AⅡj1	円	22		13.6									
356	AⅡj1	円	22	21	13.8									
357	AⅡj1	楕円	29	23	37.5									7号建物(SB8)
358	AⅡj1	楕円	41	26	62.5									柱穴列1号
359	欠番													
360	AⅡj1	楕円	30	25	13.6									
361	AⅡj1	円	27	26	26.5									
362	AⅡi1~AⅡj1	方形	52	46	49.6	○	○						坏	2号建物(SB2)
363	AⅡi1	円	36	28	48.2									
364	AⅡi1	円	21	17	13.8									
365	AⅡi1	楕円	20	14	19.3									
366	AⅡi1	円	21	16	42.8									7号建物(SB8)
367	AⅡi1	円	18	14	9.0									
368	AⅠi0	方形	30	22	34.6									
369	AⅠi0	円	19	18	38.5	○							微量	
370	AⅠi0	円状	19		0.0									
371	AⅠi0	円	20	14	27.3									
372	AⅠi0	円	22	20	20.5									
373	AⅠi0~AⅡi1	楕円	36	28	38.7	○							微量	
374	AⅡi1	楕円	35	28	42.1	○							微量	
375	AⅡi1	円?	24		14.3									
376	AⅠi0	楕円?	24	23	47.8									7号建物(SB8)
377	AⅠi0~AⅡi1	楕円	28	22	20.5									
378	AⅡi1	円	19	16	13.2									
379	AⅡi1	方形	17	16	24.5									
380	AⅡi1	円	26	24	30.4									
381	AⅡi1	円	19	16	8.5									
382	AⅡi1	楕円	30		55.9									
383	AⅡi1	円	15	15	13.3									
384	AⅡi1	円	12		13.5									
385	AⅡi1	方形	43	40	31.3	○		○					土師器は坏、縄文土器	2号建物(SB2)
386	AⅡi1	円	18	17	17.7									
387	AⅡi1	方形	20	18	16.4	○							微量	
388	AⅡi1	円	16	15	16.1									
389	AⅡi1~AⅡj1	円	44	34	22.5	○	○						土師・須恵器とも甕	
390	AⅡj1	方形	40	36	25.7	○	○							2号建物(SB2)
391	AⅡj1	楕円	36	30	48.4							○	鋳型	
392	AⅡi1	円	17	16	7.6									

柱穴No.	グリッド	平面形	開口部径(cm)		深さ(cm)	出土遺物								該当建物・柱穴列
			長径	短径		土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	その他・備考	
393	AⅡi1	円	14	12	9.5									
394	AⅡi1	円	15	14	9.9									
395	AⅡi1	円	28	24	49.2									
396	AⅡi1	円	18	15	8.5									
397	AⅡi1	楕円	20	16	14.0									
398	AⅡi1	円	21	20	44.2									
399	AⅡi2	楕円	65	51	53.3									1号建物(SB1)
400	AⅡj2	円	52	42	43.2	○			○				陶器は渥美産甕	2号建物(SB2)
401	AⅡj2	楕円	48	35	37.0		○						甕	1号建物(SB1)
402	AⅡi2	円	52	41	23.6	○								2号建物(SB2)
403	AⅡi2	円	48	44	65.2									柱穴列3号
404	AⅡi2	円	30	24	30.9									
405	AⅡi2	円	21	18	32.5									
406	AⅡi2	楕円	23	19	5.2									1号建物(SB1)
407	AⅡj2	円	30	28	25.3							○	炉壁	
408	AⅡj2	楕円	26	18	44.4									
409	AⅡj2~AⅡj3	円	52	49	48.1	○	○					○	炉壁　須恵器は甕	1号建物(SB1)
410	AⅡi3	円	36	36	25.6									
411	AⅡi3	円	24	22	40.4									
412	AⅡi2	楕円	30	22	32.2									
413	AⅡi2~AⅡi3	方形	18	18	0.0									
414	AⅡi3	不整楕円		42	27.1									
415	AⅡi3	方形	29	22	23.3									
416	AⅡj2	円状	26		8.7									
417	BⅡa3	円状	26	26	-156.1									
418	BⅡa3~BⅡa4	円	26	22	22.8									
419	AⅡj3	円	14	12	20.5									
420	AⅡj3	円	16	14	13.9									
421	AⅡj4	方形	34	28	43.7	○							微量	
422	AⅡj4	円	12	12	11.3									
423	AⅡj4	楕円	34	28	36.5	○							微量	
424	AⅡj4	円	22	22	19.5	○							甕の口縁部・底部	7号建物(SB8)
425	AⅡj4	円	26	20	24.5		○							
426	AⅡi4	楕円	30	19	21.7									
427	欠番													
428	AⅡj3	円	25	22	16.8	○							微量	
429	AⅡi3~AⅡj3	楕円	26	20	33.6									
430	AⅠi0	円	26	24	45.3			○					縄文土器	
431	欠番													
432	欠番													
433	AⅠj0	円	24	23	22.1									
434	AⅠj0	円	35	34	34.3									
435	AⅡj5	円	21		11.5									1号建物(SB1)
436	欠番													1号建物(SB1)
437	欠番													1号建物(SB1)
438	AⅡi3	円	54	54	18.3	○						○	土錘	
439	欠番													1号建物(SB1)
440	欠番													1号建物(SB1)
441	AⅡg2	円	74	66	55.9		○						種子（モモ）	1号建物(SB1)
442	AⅡh1	方形	66	66	54.0	○						○	炉壁	1号建物(SB1)
443	AⅡh1	円	72	64	49.3	○							微量	
444	AⅠh0~AⅡh1	楕円	50	43	10.8									1号建物(SB1)?
445	AⅡg1~AⅡg2	楕円	52	44	40.2									1号建物(SB1)
446	AⅡg2	方形	62	58	56.4	○							坏、甕	
447	AⅡg2~AⅡg3	円	44	38	31.9	○							微量	1号建物(SB1)?
448	AⅡh3	円			0.0									3号建物(SB4)
449	AⅠh0	円	24	23	21.1	○	○						土師・須恵器とも甕	
450	AⅡf3	円	40	36	18.0									
451	AⅡg2	円	42	36	18.9									
452	AⅡg2	楕円	25	20	7.2									
453	AⅡf3	楕円		60	61.0	○			○			○	染付磁器皿、炉壁	
454	AⅠe0	方形	46		52.0						○		鉄塊	
455	AⅡf3	楕円	32	24	7.3									
456	AⅡf3	楕円	38	24	24.5									
457	AⅡf3	円	24	22	22.7									
458	AⅡf3	楕円	38	26	26.7	○								
459	AⅡf3	円		24	43.2	○								
460	AⅡf3	円	32		22.3									
461	AⅡf3	円	29		43.2									
462	AⅡf3	円	23	22	20.2	○							微量	
463	AⅡf3	円	32		23.3									
464	AⅡf3	円	20		29.3									
465	AⅡf3	円	30	28	24.9									
465b		円	22		12.2									
466	AⅡf3	円	28	22	16.0									
467	AⅡf3	円	28	24	26.1	○							甕	
468	AⅡf3	円	20	18	14.9									
469	AⅡf3	円	14	14	14.0									
470	AⅡf3	円	16	15	20.0									

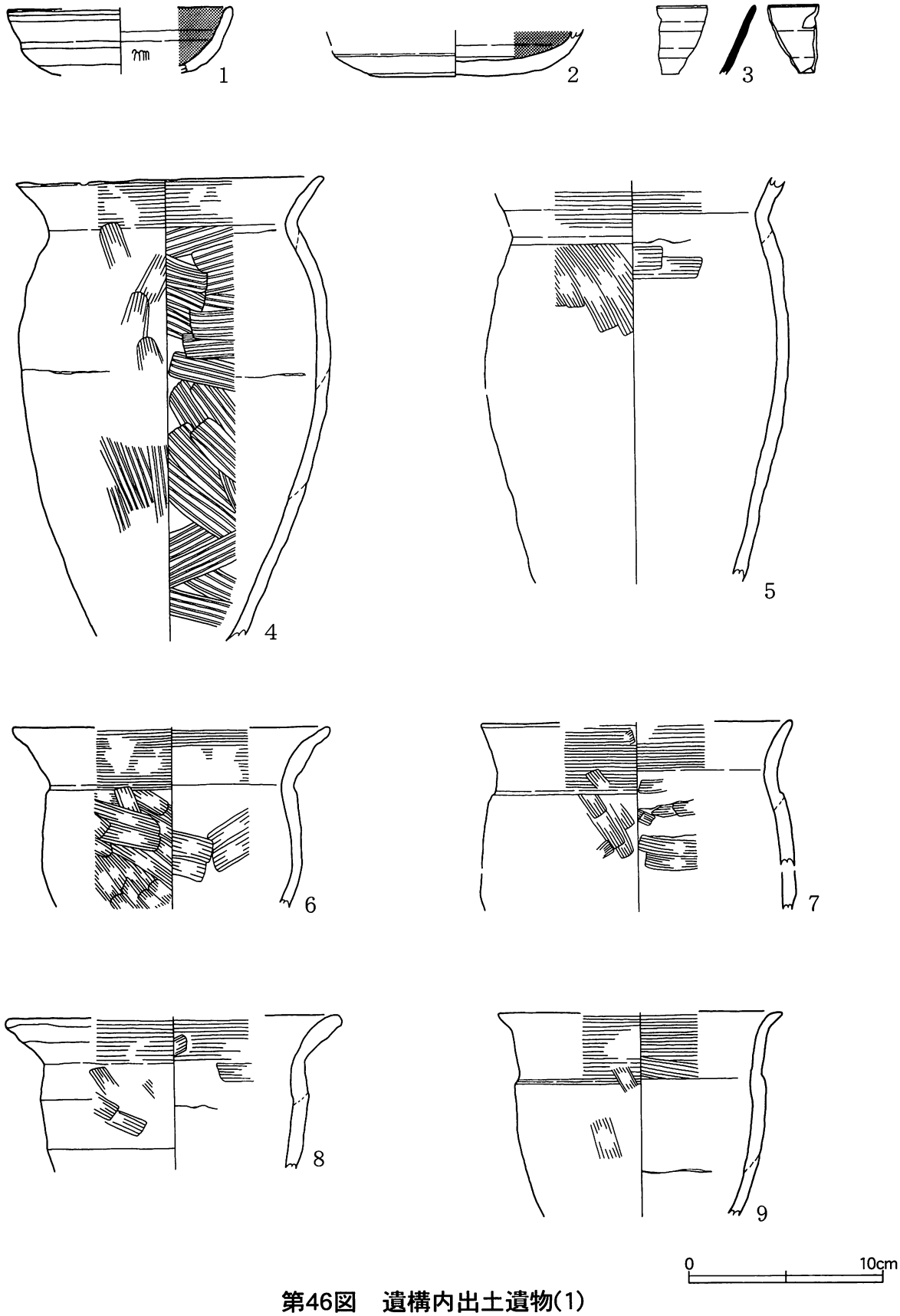
柱穴No.	グリッド	平面形	開口部径(cm)		深さ(cm)	出土遺物								該当建物・柱穴列
			長径	短径		土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	その他・備考	
471	AⅡf3	円	32	26	20.9									
472	AⅡe3	円	44	38	62.3									
473	AⅡe3	楕円	50	38	22.3									
474	AⅡe2~AⅡe3	円	50	42	40.9	○		○					土師器微量、縄文土器	
475	AⅡe2~AⅡe3	楕円	52	44	25.5	○			○				微量　白磁碗	
476	AⅡf2~AⅡf3	円	32	30	21.2									
477	AⅡf3	楕円	40	29	22.6									
478	AⅡf2~AⅡf3	楕円	50	37	28.9									
479	AⅡf3	円	52	44	52.7									
480	AⅡf3	円	17	15	12.8									
481	AⅡf3	円	18	18	16.4									
482	AⅡf3	楕円状	23		18.2									
483	AⅡf3	円	32	30	40.3									
484	AⅡf3	円	30	28	25.6									
485	AⅡf2	円	30	24	17.2									
486	AⅡf2	円	27	21	16.4									
487	AⅡe2~AⅡf2	楕円	32	22	18.5									
488	AⅡf2	方形	39	30	44.9									
489	AⅡf2	楕円	30	20	12.6									
490	AⅡf2	円	32	29	41.1	○							坏	
491	AⅡe2	円	22	20	24.9									
492	AⅡe2~AⅡf2	方形	34	34	18.4									
493	AⅡe2	円	26	24	45.7									
494	AⅡf1	円	24	23	10.2									
495	AⅡf1	楕円	27	20	12.3									柱穴列4号
496	AⅡf1	円	30	30	40.4									8号建物(SB9)
497	AⅡg1	円	28	22	43.0									
498	AⅡg2~AⅡg3	円	20	20	15.7									
499	AⅡg1	円	34	34	42.0									
500	AⅡg2	円	26	22	33.5									
501	AⅡg2	円	34	32	27.2									
502	AⅡf2	楕円	42	32	36.7									
503	AⅡf2	方形	30	30	51.9									
504	AⅡf1~AⅡf2	円	32	28	23.0									
505	AⅡd1~AⅡe1	楕円	46	31	43.4									1号塀跡
506	AⅡd1	円	28	26	15.5									
507	AⅠe0	円	20	20	9.5									
508	AⅡe1	円	28	26	47.2									1号塀跡
509	AⅡe1	円	24	19	40.9									柱穴列6号
510	AⅡe1	円	38	36	32.8									柱穴列5号
511	AⅡe1	円	36	35	66.8	○								
512	AⅡf1	楕円	40	36	59.0									3号建物(SB4)
513	欠番													
514	AⅡf1	円	30	28	16.5					○			器種不明	
515	AⅠe9~AⅠf9	円	37	36	52.7					○		○	坩堝・砥石・炉内滓	3号建物(SB4)
516	AⅡf1	円		36	23.1									柱穴列5号
517	AⅡf1	円	26		46.2									
518	AⅠe0	円	30	28	26.4									柱穴列6号
519	AⅡf1	円	24	22	17.5									
520	AⅡf1	楕円	42	32	54.8									3号建物(SB4)
521	AⅡf2~AⅡg2	楕円	30	24	8.2								甕	
522	AⅡf2	円		26	5.2									
523	AⅡf2~AⅡg2	円	31		6.6									
524	AⅡf2~AⅡg2	円	26		23.5									
525	AⅡg2	円	18	18	20.0									
526	AⅡg2	円	20	18	24.2									
527	AⅡg2	楕円		36	48.0									8号建物(SB9)
528	欠番													
529	AⅡg1~AⅡh1	円	20	20	23.8									
530	AⅡg1	円	19	17	35.0									
531	AⅡg1~AⅡh1	楕円	44	40	48.0							○	炉壁	1号建物(SB1)
532	AⅡg1	円	28	26	39.9									柱穴列4号
533	AⅡf1	円	26	22	16.6									
534	AⅠf0~AⅡf1	円	26	22	34.6	○							微量	
535	AⅠf0	円	35	33	53.5									3号建物(SB4)
536	AⅠf0	楕円	32	27	31.0									柱穴列6号
537	AⅠf0	楕円	27	20	29.8									4号建物(SB5)
538	AⅠf0	円	36	35	22.1									柱穴列5号
539	AⅠf0	円	19	18	18.4									
540	AⅠf0	円	38	30	24.8									柱穴列6号
541	AⅠf9	円	16	14	16.0									
542	AⅠf0	円	24	22	23.5									柱穴列5号
543	AⅠf0	円	32	28	30.9									
544	AⅡg1	楕円	33	26	41.5			○					縄文土器	8号建物(SB9)
545	AⅡg1	円	52	46	42.0	○							微量	
546	AⅡg1	円	22	22	39.8									
547	AⅡg1	円	19	18	15.8									
548	AⅡg1	円	22	19	34.3									
549	AⅠf0~AⅠg0	楕円	48	36	57.6						○		鉄滓？	3号建物(SB4)

柱穴No.	グリッド	平面形	開口部径(cm)		深さ(cm)	出土遺物								該当建物・柱穴列
			長径	短径		土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	その他・備考	
550	AIg0	楕円	38	25	42.5	○								8号建物(SB9)
551	AIg0	円	19	18	22.0									
552	AIg0	円	28	27	14.0									
553	AIg0	円	32	31	32.5	○							微量	
554	AIg0	円	24	23	23.2									
555	AIg0	楕円	40	28	36.0									
556	AIg0~AIg9	円	38	35	21.6									
557	AIg0	円	42	35	52.0	○	○						壺？ 微量	4号建物(SB5)
558	AIg9	円	23	21	24.0	○							微量	
559	AIf9	円	42	38	20.8									
560	AIf9	円	37	30	44.1									4号建物(SB5)
561	AIg9	方形	32	29	45.4									柱穴列5号
562	AIf9~AIg9	楕円	26		11.8									
563	AIg9	楕円	39	34	44.8	○							微量	4号建物(SB5)
564	AIg9	方形	28	26	12.5									
565	AIg0~AIg9	不整円形	38	35	23.5	○							微量	
566	AIg9	円	43	34	56.4									3号建物(SB4)
567	AIg9	楕円	28	22	14.3	○							微量	
568	AIg9	円	30	28	45.4									10号建物(SB11)
569	AIg9	円	22	22	14.5									
570	AIg9	円	30	28	12.5									
571	AIg9	円	32	31	41.6									
572	AIg9	円	24	23	13.8	○							微量	
573	AIg9	円	32		35.5									
574	AIg9	楕円	38	31	47.2									4号建物(SB5)
575	AIf8~AIf9	円	28	28	13.7									
576	AIf8~AIg8	円	16	12	8.8									
577	AIf8~AIg8	楕円	28	22	12.0									
578	AIg8	円	37		27.2							○	炉壁	
579	AIg8	円	36	30	28.2									4号建物(SB5)
580	AIg8	円	24	23	19.8									
581	AIe0	円	32	30	52.7	○							微量	1号塀跡
582	AIf0	円	34	33	37.8									1号塀跡
583	AIf9	円	32	28	39.3									1号塀跡
584	AIf9	円	20	20	10.4									1号塀跡
585	AIf8~AIg8	円	29	24	14.5									1号塀跡
586	AIg8	不整円形	30	30	20.7									1号塀跡
587	AIg7~AIg8	円	26	22	12.3									
588	AIg8	円	22	22	7.3									1号塀跡
589	AIg9	円	26	24	35.1									
590	AIg9	円	28	28	14.5									
591	AIg8	円	28	26	30.0	○						○	鋳型	4号建物(SB5)
592	AIg8	楕円	28	24	31.0									
593	AIg8	方形	26	22	9.9									
594	AIg8~AIh8	楕円	38	27	20.5									
595	AIh8	円	26	24	32.0		○							
596	AIh8	楕円	26	22	25.7	○							坏	
597	AIg8~AIh8	円	22	20	27.0									
598	AIg9	楕円	29	25	18.5									
599	AIh9	円	30	28	23.4	○							微量	4号建物(SB5)
600	AIh9	円	28	28	31.1	○								
601	AIh9	円	34	30	50.4									
602	AIh9	円	25	24	54.3	○							微量	10号建物(SB11)
603	AIh9	円	38	34	43.2									
604	AIh0	円	32	28	33.0	○								
605	AIg0	楕円	30	24	19.5									柱穴列4号
606	AIh9	円	18	18	8.1									
607	AIh9	円	20	18	20.0									
608	AIh9	円	26	24	13.1									
609	AIh9	円	17	15	8.3									
610	AIh9	楕円	29	22	11.5									
611	AIh0	円	18	16	8.7									
612	AIh0	楕円	31	26	34.3									
613	AIh0~AIi0	円	28		32.7	○	○						坏	
614	AIh0~AIi0	円	27		51.5	○							微量	
615	AIi0	楕円	30	22	34.8	○	○						坏 微量	7号建物(SB8)
616	AIi0	円	28	26	17.7									
617	AIi0	円	24	22	47.4									
618	AIh0	楕円	22	17	16.4									
619	AIh0	円	30	30	40.2	○							甕？	
620	AIh0	楕円	14	11	10.1									
621	AIh0	楕円	24	18	12.9									
622	AIh0	円	34	34	37.8									
623	AIh0	円	21	19	25.6									7号建物(SB8)
624	AIh0	円	32	28	33.4									10号建物(SB11)
625	AIh0	楕円状		20	24.0									
626	AIh0	円状	35		28.2									
627	AIh0	円状	36		25.0									
628	AIIh1	円	32	30	47.7									8号建物(SB9)

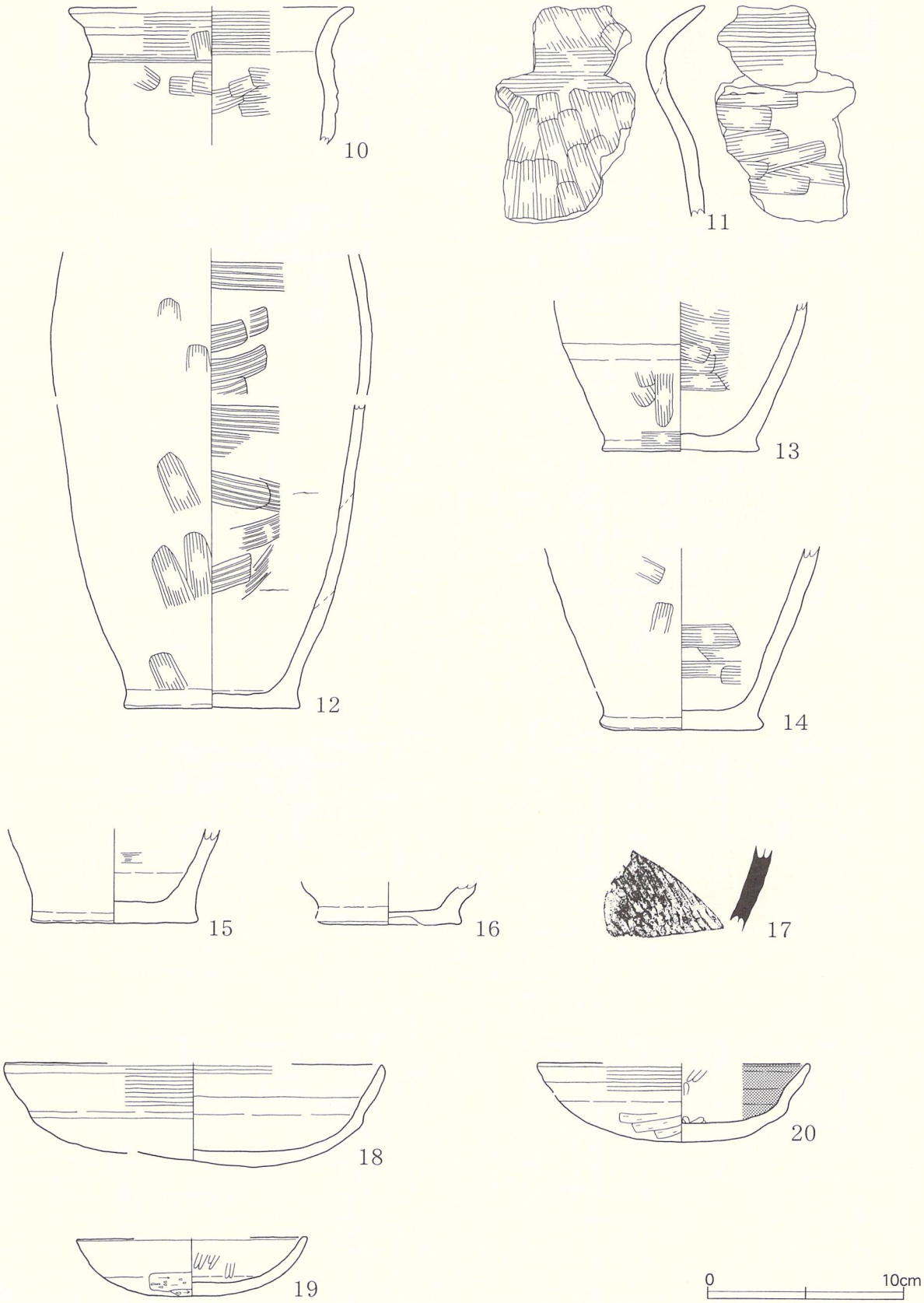
柱穴No.	グリッド	平面形	開口部径(cm)		深さ(cm)	出土遺物								該当建物・柱穴列
			長径	短径		土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	その他・備考	
629	AⅡh1	円状	36		42.2									
630	AⅡh1	円状	42		29.1									
631	欠番													
632	AⅠh0~AⅡh1	円	35	34	79.6								掘りすぎ	1号建物(SB1)
633	AⅡh1	円	22		11.8									
634	AⅡh1	円	26		29.6									
635	AⅡh1	円	22		27.3									
636	AⅡh1	円	46	43	39.3									
637	AⅠh0	円	25	24	102.3						○	○	鉄滓?、炉壁	
638	AⅠh0	円	26	22	33.7	○							鉄滓?、炉壁	
639	AⅠh0	円	29	29	27.4								微量	
640	AⅠh0	円	26	24	45.7									
641	AⅠi0	円	24	23	40.9									
642	AⅡe1	円状	34		25.0									
643	AⅡe1	円状	30		26.1									
644	AⅠe9	円	27	26	28.5									
645	AⅠf6~AⅠg6	方形	25	20	44.8									1号橋脚(SB3)
646	欠番													
647	AⅠh6	円	30	30	26.2									1号橋脚(SB3)
648	欠番													
649	欠番													
650	AⅠg6	円	20	20	11.0									
651	AⅠg6	円	30	30	18.6	○							微量	
652	AⅠf7	円	15	15	17.6									
653	AⅠg7	円	18	15	13.9								微量	
654	AⅠi8	楕円	28	22	21.3									
655	AⅠi8	楕円	40	26	35.7									
656	AⅠi8	楕円	16	14	15.1									
657	AⅠi8	楕円	34	28	59.4									
658	AⅠj8	楕円	22	12	8.5									
659	AⅠi8	楕円	22	16	12.0									
660	AⅠi8	円	12	12	8.1									
661	AⅠi8~AⅠi9	円	32	32	18.0									
662	AⅠi8	楕円	32	20	19.8									
663	AⅠi9	楕円	36	22	49.0	○							微量	
664	欠番													
665	AⅠj9	楕円	32	24	35.6									
666	AⅠj9	円	28	24	42.1									
667	AⅠi9	円	36	34	54.3	○							微量	
668	AⅠi9	円	20	17	16.0									
669	AⅠi0~AⅠi9	円	22	22	20.6									
670	AⅠi0~AⅠi9	楕円	38	30	29.0									
671	AⅠi0~AⅠi9	円	22	22	42.1	○							微量	
672	AⅠg7	方形	35	30	47.3									1号橋脚(SB3)
673	AⅠg7	円	30	25	15.5									1号橋脚(SB3)
674	AⅠf6~AⅠf7	円	25	23	14.6									1号橋脚(SB3)
675	AⅠh0	円形		26	33.7									10号建物(SB11)
676	AⅠh0	楕円	26		13.9									
677	AⅡh1	楕円	25	20	7.4									
678	AⅡh1	円	16	16	10.6									
679	AⅡg1	円	34	30	36.5									
680	AⅡg2	楕円	39	34	25.6									
681	AⅡg2	円	20	20	19.4									
682	AⅡf2	円	22	22	16.0									
683	AⅡe2	円	22	22	12.3									
684	AⅡe2	円	22	21	12.4									
685	AⅡf2	円	24	22	46.0									
686	AⅡf2	楕円	38		16.3									
687	AⅡf2	円	38		21.8									柱穴列4号
688	AⅡf2	円		38	18.2									
689	AⅡf2	円	26	24	13.7									
690	AⅡf2	楕円	38	30	18.8									
691	AⅡe1	円	30	29	59.2									3号建物(SB4)
692	AⅡe1	円	16	16	18.4									
693	AⅡe1	円	20	20	18.9									3号建物(SB4)
694	AⅡf1	円	21	19	47.3									
695	AⅡg1	円状	22		12.5									
696	AⅡg1	円状	20		11.3									
697	AⅡg1	楕円	37	27	22.2									
698	AⅡf1	楕円	38	26	21.3									4号建物(SB5)
699	AⅠf0	円	24	23	11.3									
700	AⅠe0	円	46	40	44.9						○		鉄滓?	3号建物(SB4)
701	AⅠf9	円	34	34	23.5									
702	AⅠf9	円	30	28	47.4									3号建物(SB4)
703	AⅠf9	円	38	34	19.4									
704	AⅠf9	円	22	22	16.3									
705	AⅠf0	円	23	22	47.1									4号建物(SB5)
706	AⅠf0~AⅠg0	円	29	28	22.2									
707	AⅠg0	円	30	28	16.7									

柱穴No.	グリッド	平面形	開口部径(cm)		深さ(cm)	出土遺物								該当建物・柱穴列
			長径	短径		土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	その他・備考	
708	AIg0	円	38	36	50.7									4号建物(SB5)
709	AIg0~AIIg1	方形	36	32	32.9									4号建物(SB5)
710	AIIg1	円	24	23	15.7									
711	AIIg1	円	20	19	21.0									
712	AIg0~AIIg1	円	30	27	16.9	○							坏	柱穴列4号
713	AIIg1	円	29	24	11.4									
714	AIIg1	円	30	28	10.2									
715	AIg0	円	30	28	14.5									柱穴列4号
716	AIg0	円	22	20	11.6									
717	AIg8	楕円	30	24	13.9									1号塀跡
718	AIg8	楕円	26	22	12.3									
719	AIf8	円	16	16	17.6									
720	AIg8	円	28		50.0									1号塀跡
721	BIIe2	円	28	26	17.0									
722	BIIe2	円	26	26	15.1									
723	BIIe2	円	34	34	20.0									
724	BIIe2	円	31	28	32.2									
725	BIIe2	円	34	30	24.8									
726	BIIf2	円	36	32	17.7									
727	BIIe2~BIIf2	楕円	36	28	19.0									
728	BIIe2	円	20	20	8.1									
729	BIIb1	方形	30	30	55.5									
730	BIIa3~BIIb3	円	38	34	22.0									
731	欠番													
732	BIIa4	楕円	44	30	19.2									
733	AIIj4	円	24	20	18.5									
734	AIIi4	円	23	23	27.4									
735	AIIh3	方形	24	24	24.7									
736	AIIh2	円	54	52	41.5	○	○						恵器は坏	
737	AIIh2~AIIi2	楕円状	36		45.2									
738	AIIh2	円	66		33.8									2号建物(SB2)
739	AIg8	円	28		189.5									
740	欠番													
741	AIg8	円	32		16.5									
742	AIf9~AIg9	円	31	30	41.5									
743	AIf8	楕円	32	26	34.8									
744	AIg0	円	25	25	14.0									
745	AIg7~AIg8	円	24	22	0.0									
746	AIg8	円	18	18	0.0									
747	AIh7	円	16	15	0.0									
748	AIh8	円	20	18	0.0									
749	AIg8~AIh8	楕円	46		24.2									
750	AIh9	楕円	30	25	27.8							○	鋳型、炉壁	
751	AIh9	楕円	27	22	0.0									
752	AIh8	円	20	18	0.0									
753	AIh8	楕円	26	22	0.0									
754	AIi8	円	24	22	0.0									
755	AIh8	円	59	56	0.0									
756	AIi8	円	16	14	0.0									
757	AIh8	円	28	26	0.0									
758	AIh8	円	18	18	0.0									
759	AIj9	円	28	24	20.2									
760	AIj0	円	40	38	57.7									
761	AIj0	円	35	33	31.3									
762	AIj0	円	38	36	56.5									7号建物(SB8)
763	AIj0	円	29	28	27.0									
764	BIIb1	円	32	30	0.0		○						甕	
765	BIIb1	円	36	28	0.0									柱穴列2号
766	欠番													
767	欠番													
768	欠番													
769	欠番													
770	欠番													
771	欠番													
772	欠番													
773	BIId1	円	32	28	76.5						○		炉壁	
774	BIId1	円	20	19	11.6	○							微量	
775	BIId1	円	32	31	32.9									
776	欠番													
777	欠番													
778	欠番													
779	欠番													
780	欠番													
781	欠番													
782	欠番													
783	欠番													
784	欠番													
785	欠番													
786	欠番													

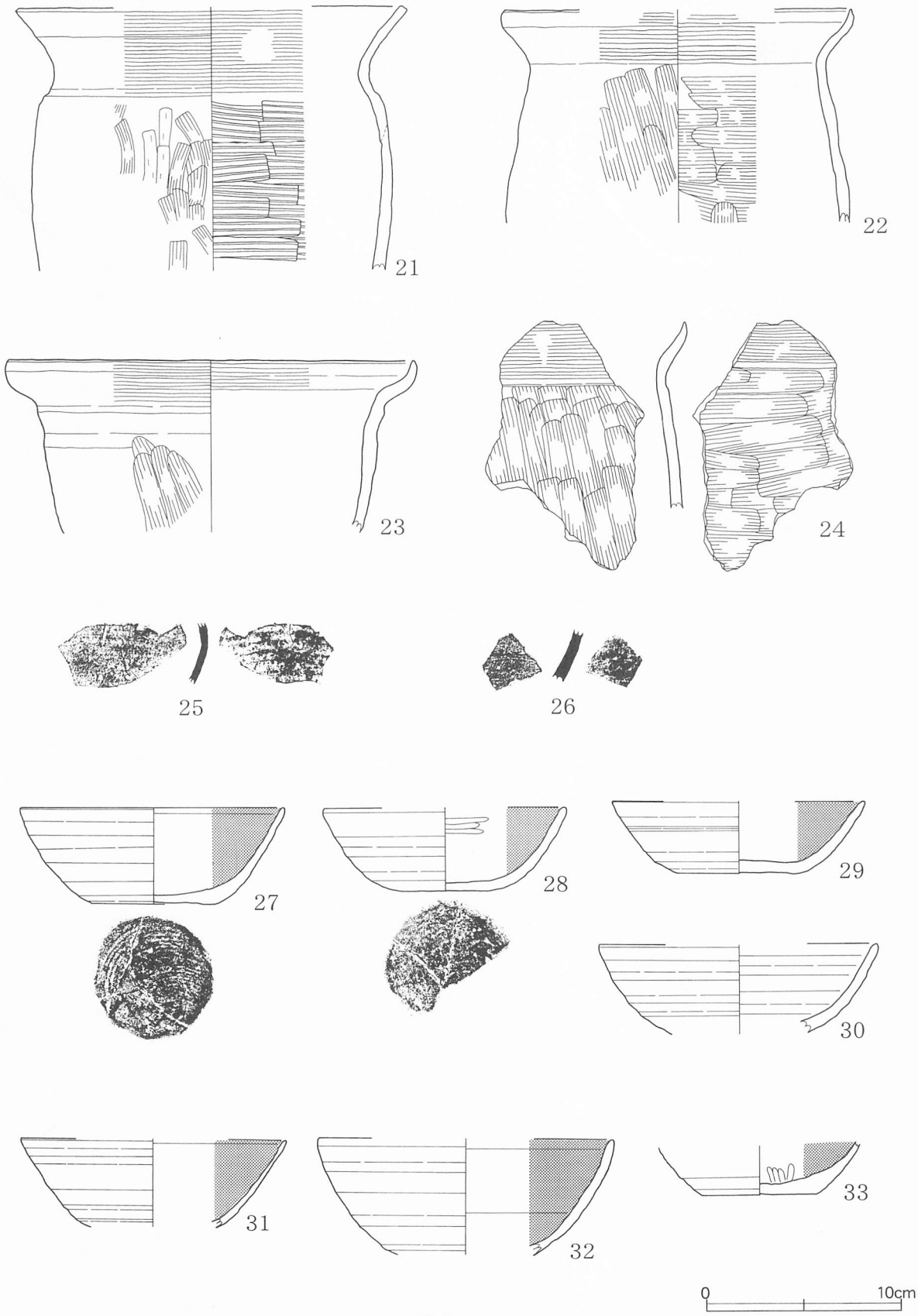
柱穴No.	グリッド	平面形	開口部径(cm)		深さ(cm)	出土遺物								該当建物・柱穴列
			長径	短径		土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	その他・備考	
787	欠番													
788	欠番													
789	欠番													
790	欠番													
791	欠番													
792	欠番													
793	欠番													
794	欠番													
795	欠番													
796	欠番													
797	欠番													
798	欠番													
799	欠番													
800	欠番													
801	AⅡh4	楕円	18	14	0.0									
802	AⅡi4	楕円	18	15	10.8									
803	BⅡa2	円	38	34	47.3									柱穴列1号
804	BⅡa2	円	18	18	8.9									
805	AⅡh1	楕円	76	54	46.5									2号建物(SB2)
806	AⅡi2				0.0									2号建物(SB2)
807	AⅡj2	円	22		41.6									
808	BⅡa3~BⅡa4	円	17	17	15.3									
809	AⅡh4	楕円		27	33.8									1号建物(SB1)?
810	AⅡi4	円	16	16	9.4									
811	欠番													
812	欠番													
813	欠番													
814	BⅡa4	円	26	24	11.9									
815	BⅡa4	円	22	22	16.4									
816	BⅡa3	円	26	26	15.4									
817	BⅡa3	円	64	64	62.2									
818	BⅡa3	円	34	32	44.8									
819	BⅡa3	円	16	16	10.0									
820	BⅡb3	円	14	14	14.1									
821	BⅡa3	円	14	14	10.9									
822	BⅡa3	楕円	17	14	13.1									
823	AⅡj3	不整円	24	20	7.2									
824	AⅡj3	楕円	32	20	10.8									
825	AⅡj3	円	22	20	18.9									
826	AⅡj3	楕円	32	24	23.3									
827	欠番													
828	AⅡf3~AⅡg3	楕円	50	44	32.5									
829	AⅡf3	円	15	15	5.5									
830	AⅡg2	円	28	26	43.7									
831	AⅡg1~AⅡh1	円	34	32	39.4									8号建物(SB9)
832	AⅡh1	楕円		28	22.7									
833	AⅡh1	円	32	32	16.9									
834	AⅠi0	円	28	28	22.1									
835	BⅠb0	楕円	30	24	0.0									
836	BⅠb0	楕円	38	28	0.0									
837	BⅠb0	楕円	43	32	0.0									
838	BⅠb9	円		30	0.0									
839	AⅡj3	円状	22		32.2									
840	AⅠf5~AⅠf6	楕円	22		32.2									
841	AⅠg6	円	26	26	7.9									1号橋脚(SB3)
842	AⅠg7	円	30	30	43.0									1号橋脚(SB3)
843	AⅠg7	円	26	26	7.9									1号橋脚(SB3)
844	BⅡe1	円	24	24	13.5									
845	BⅠc0	楕円	38	24	24.1									5号建物(SB6)
846	BⅠc0	円	26	21	16.9									
847	AⅠh8	円	30	26	0.0									4号建物(SB5)
848	AⅡi4	円	32	30	23.7									
849	AⅠf9~AⅠg9	楕円	37		19.4									
850	AⅠh8	楕円	18	15	14.0									
851	AⅠh7	楕円	18	15	10.8									
852	BⅡb2	円	54	52	37.0								第1号竪穴住居PP3	柱穴列1号
853	BⅡe1	楕円	16	14	0.0									
854	BⅡf1	楕円	24	20	0.0									



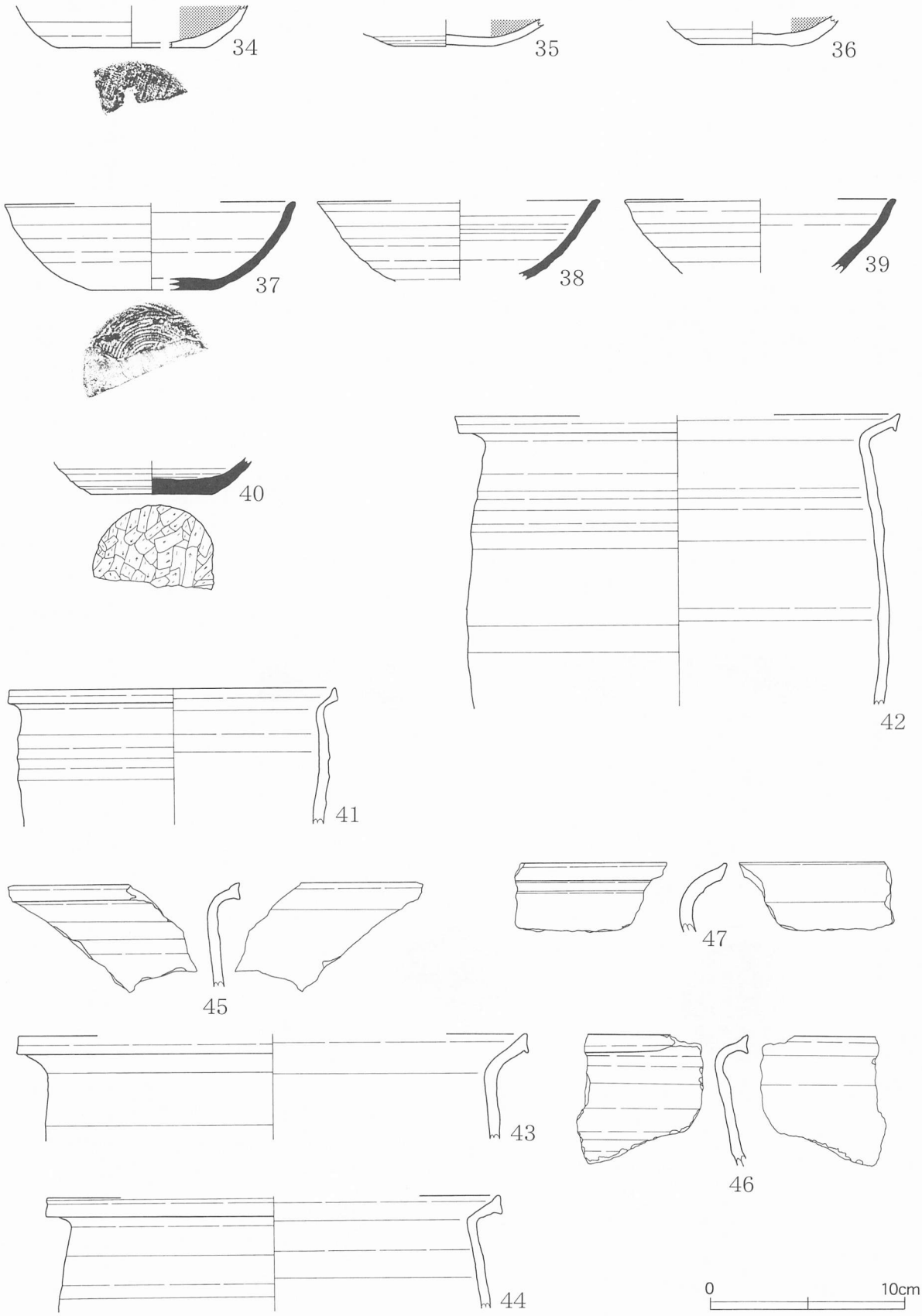
第46図　遺構内出土遺物(1)



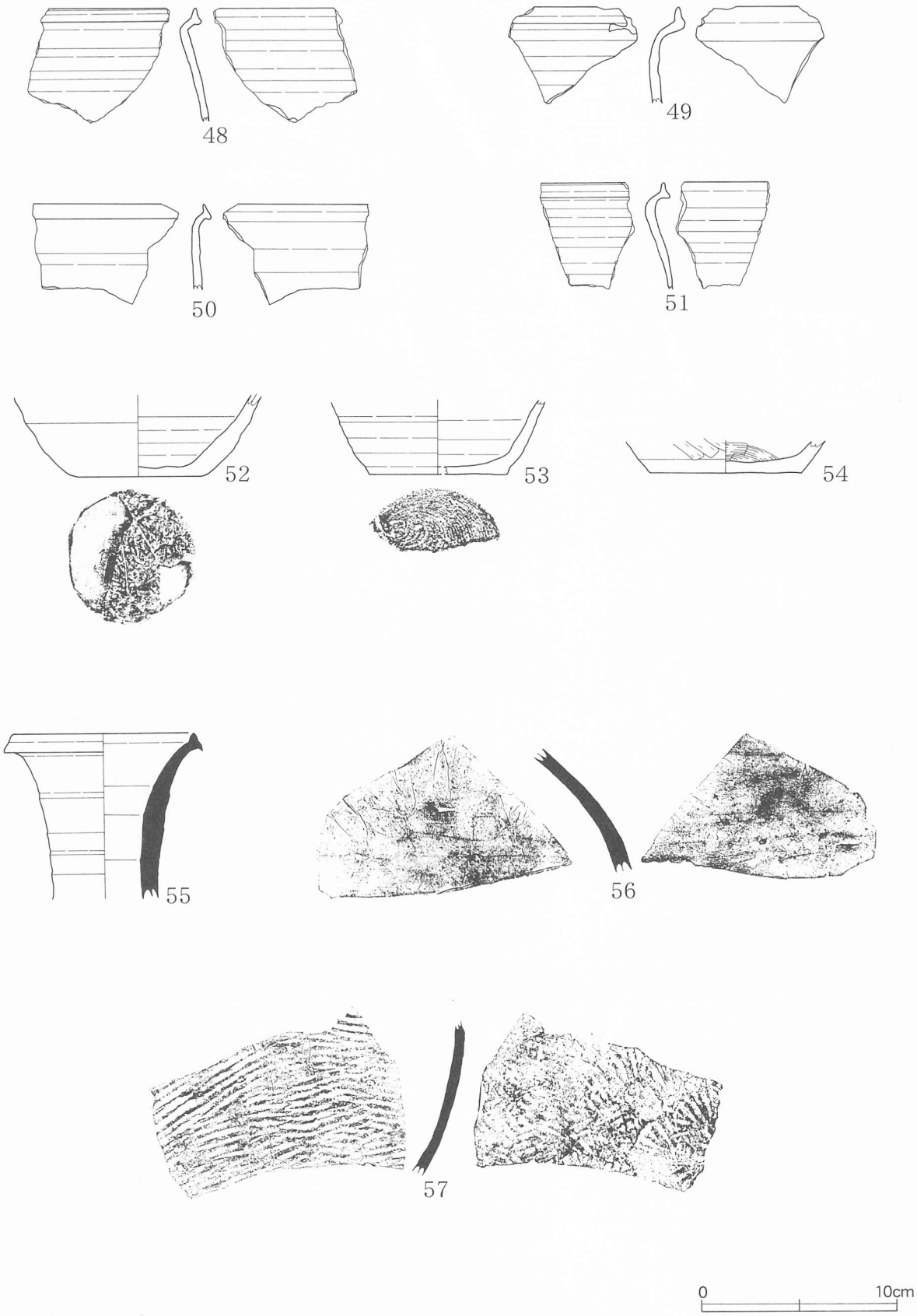
第47図　遺構内出土遺物(2)



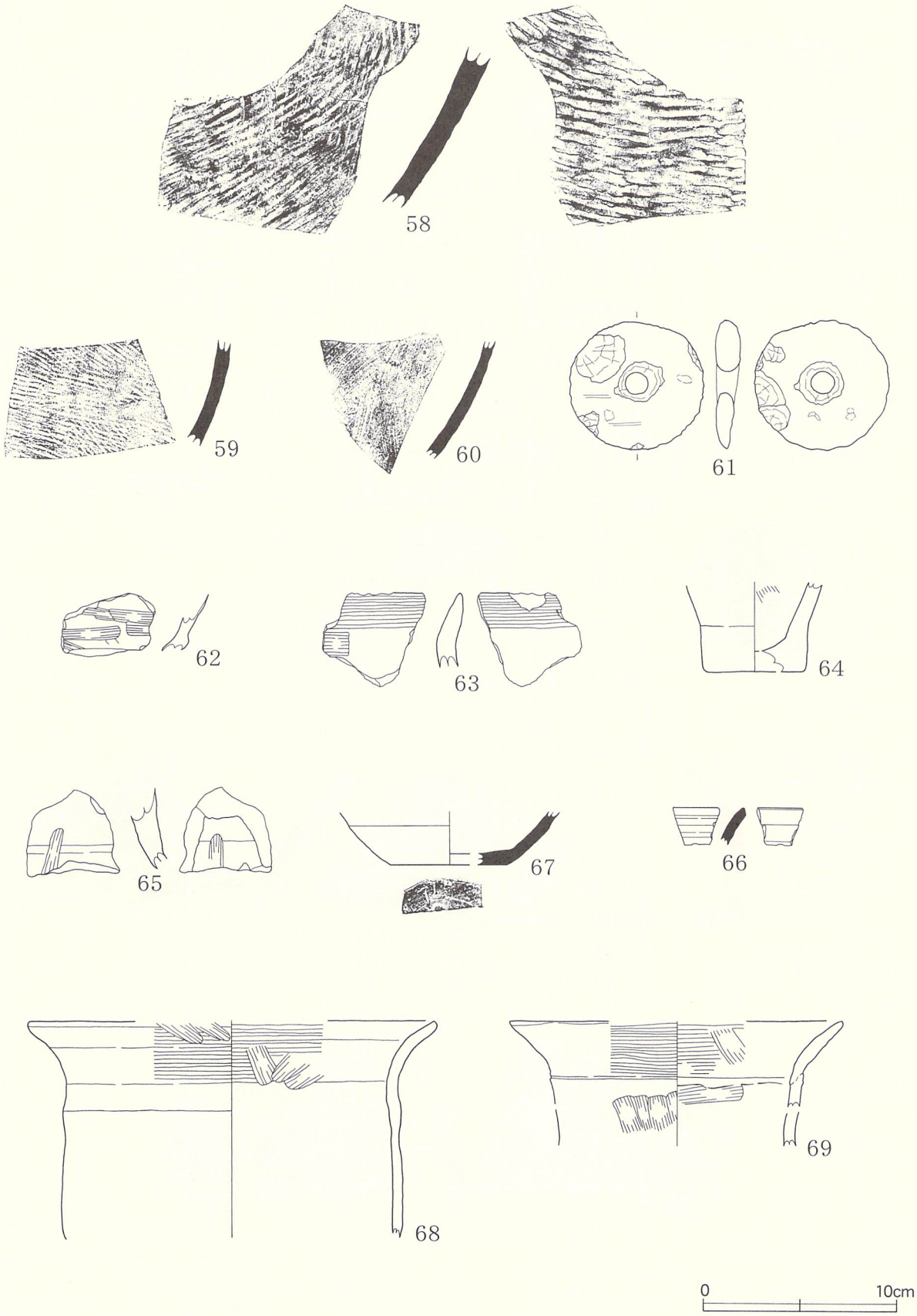
第48図　遺構内出土遺物(3)



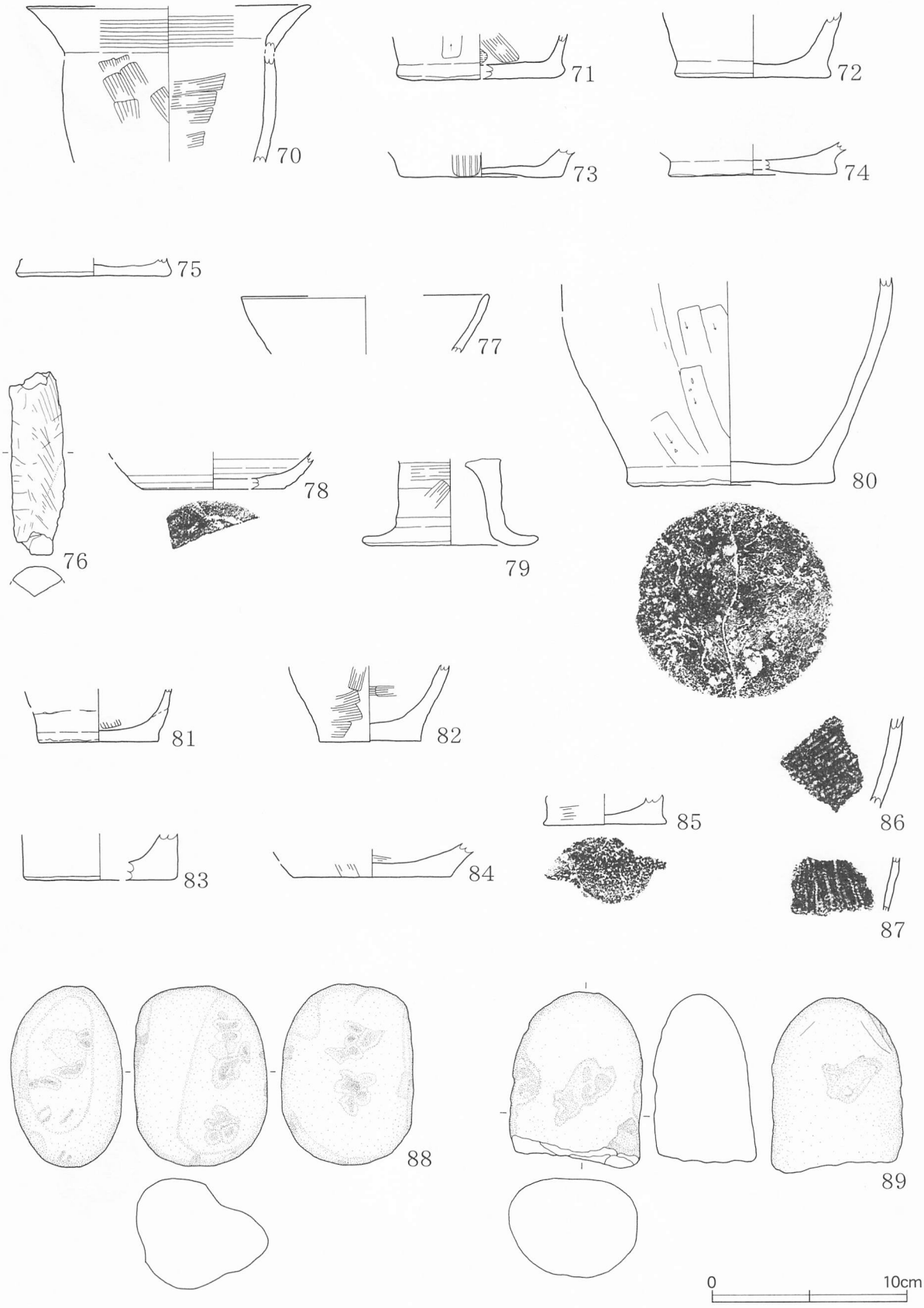
第49図　遺構内出土遺物(4)



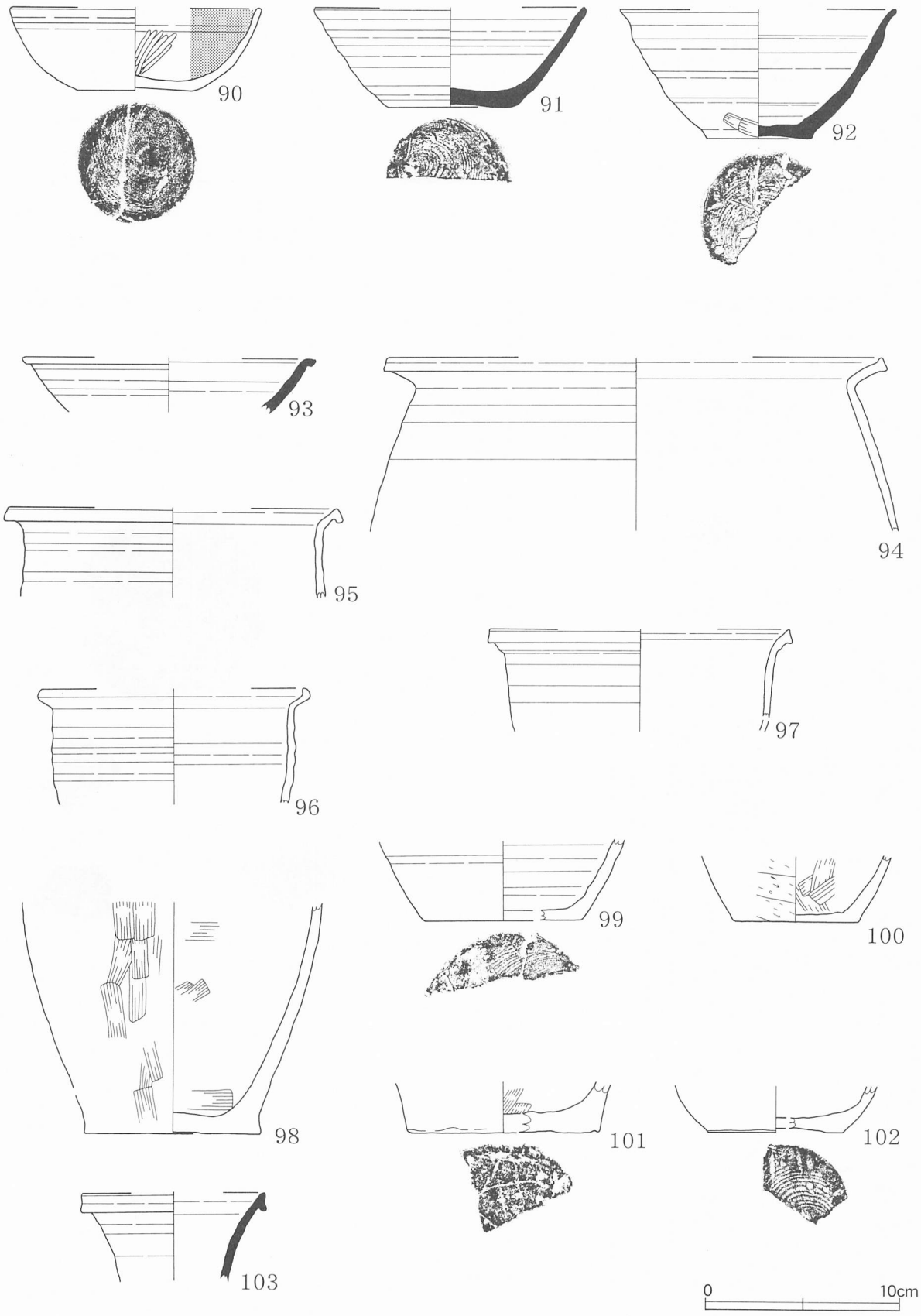
第50図　遺構内出土遺物(5)



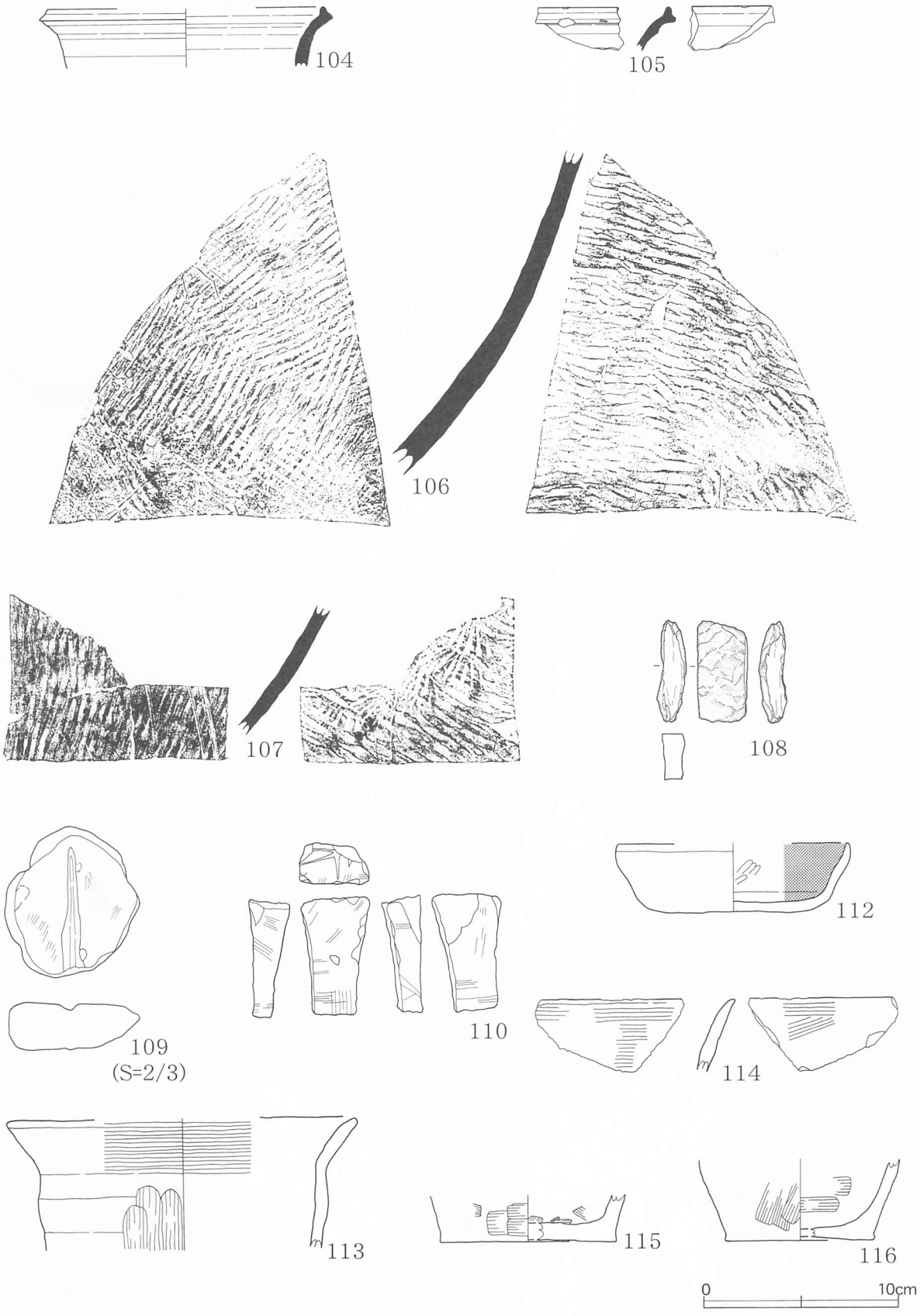
第51図　遺構内出土遺物(6)



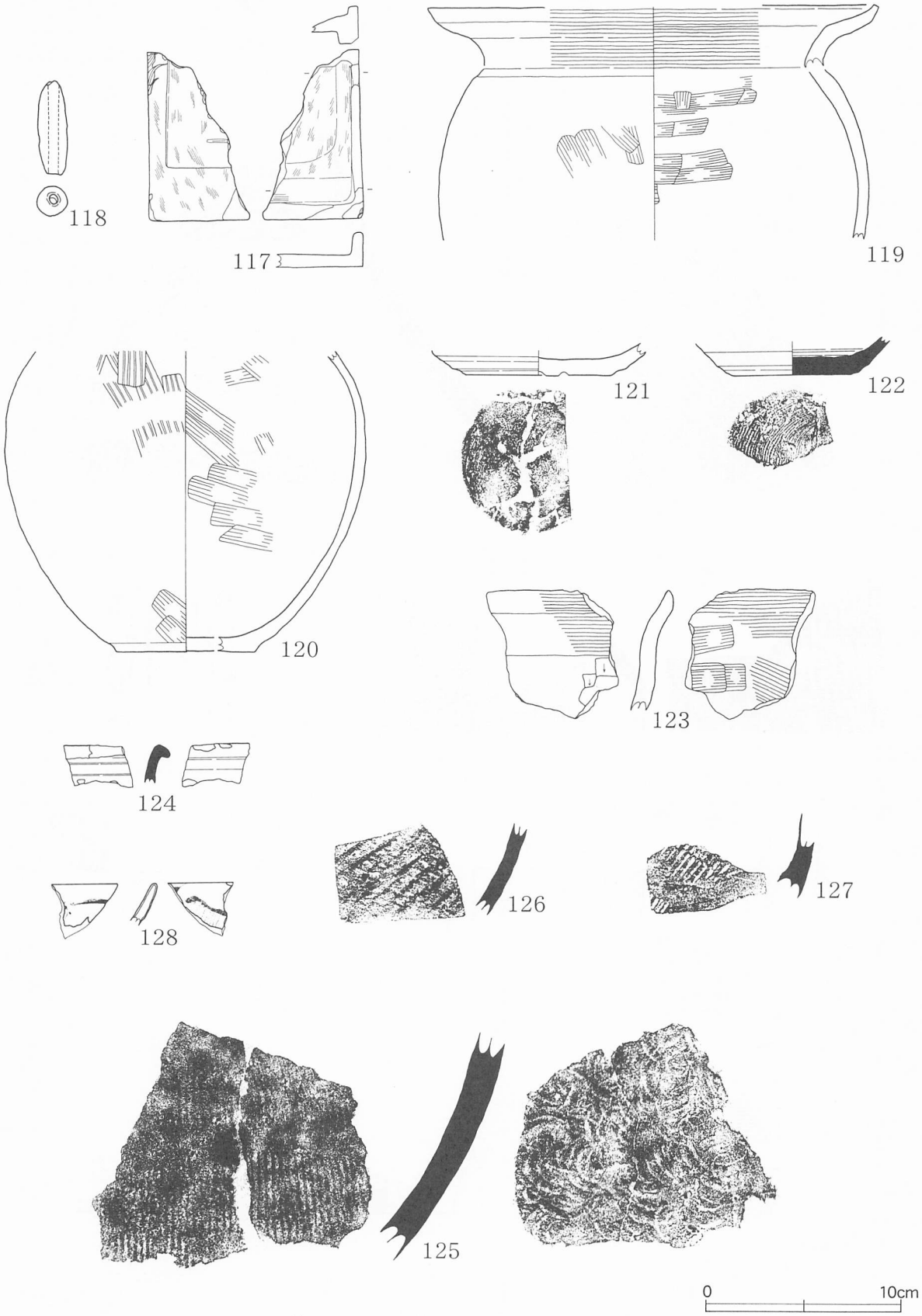
第52図　遺構内出土遺物(7)



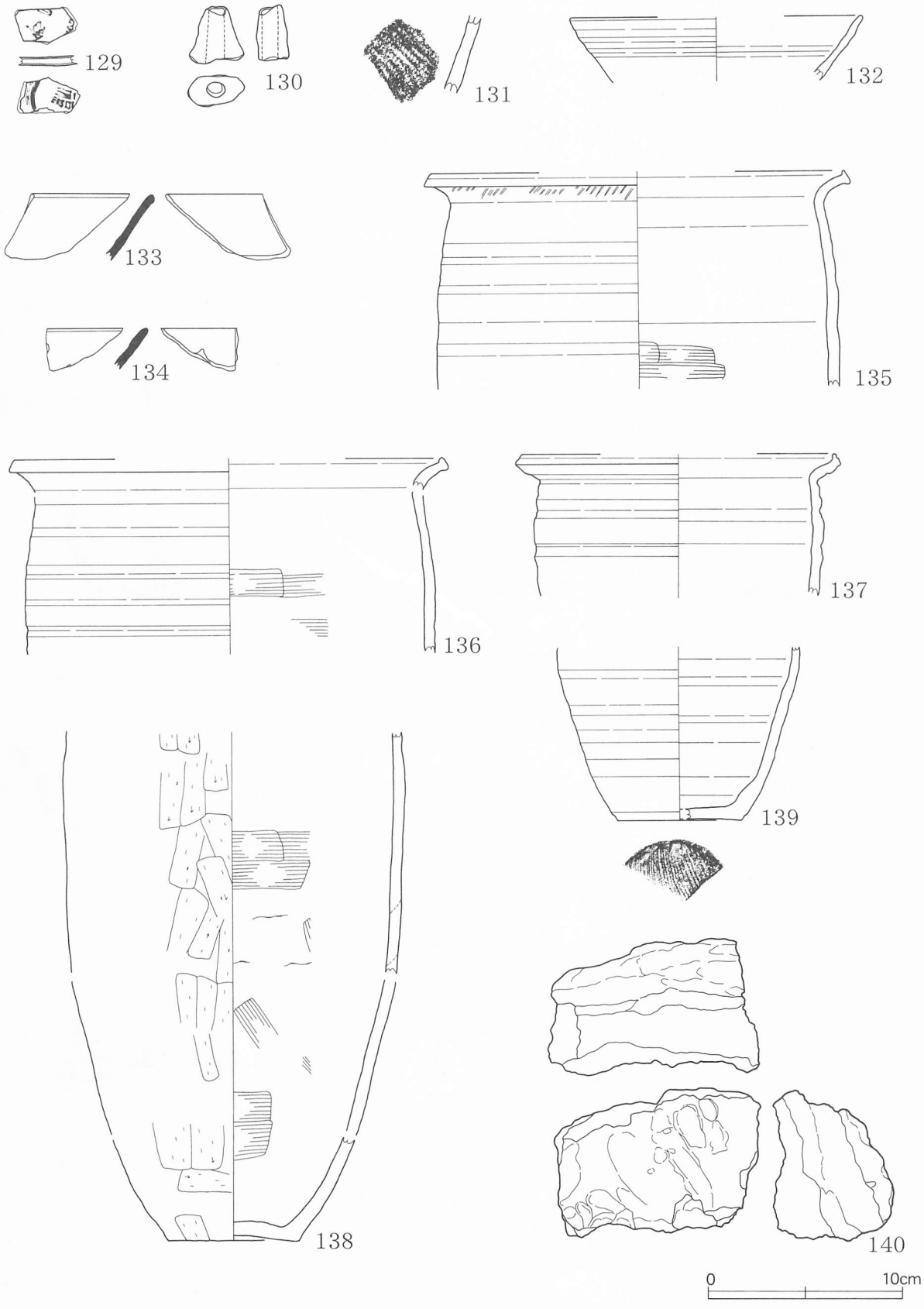
第53図　遺構内出土遺物(8)



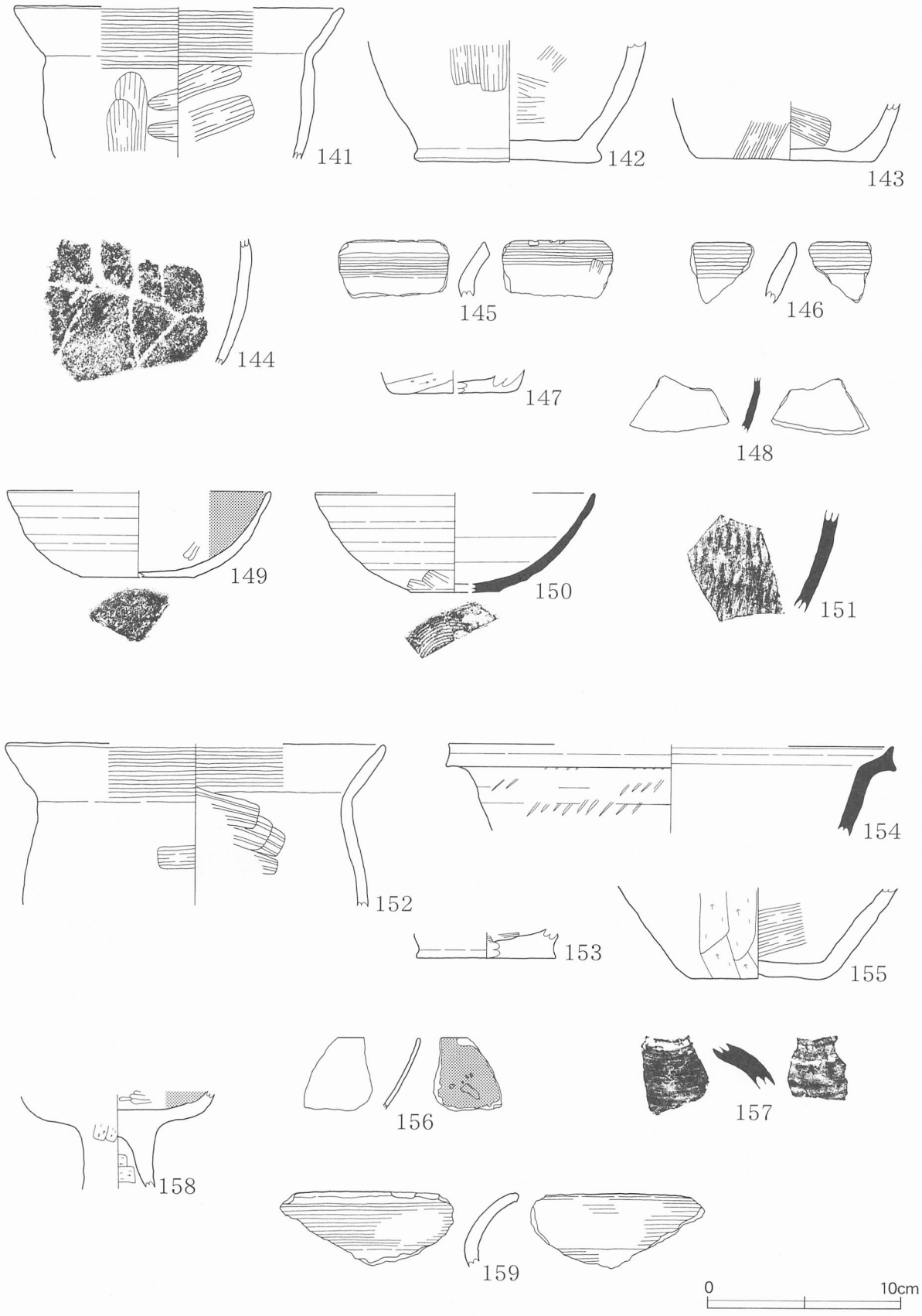
第54図　遺構内出土遺物(9)



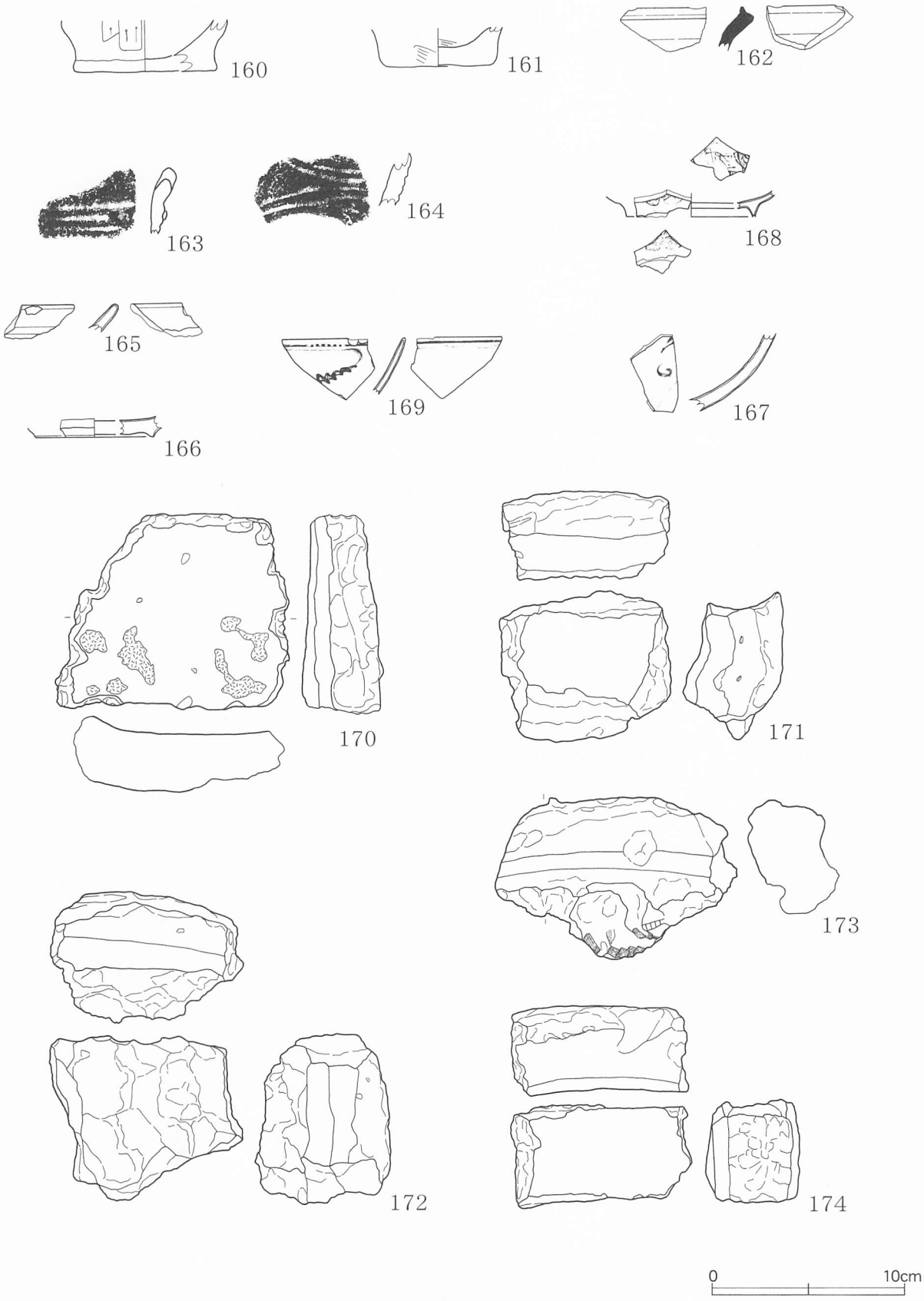
第55図　遺構内出土遺物(10)



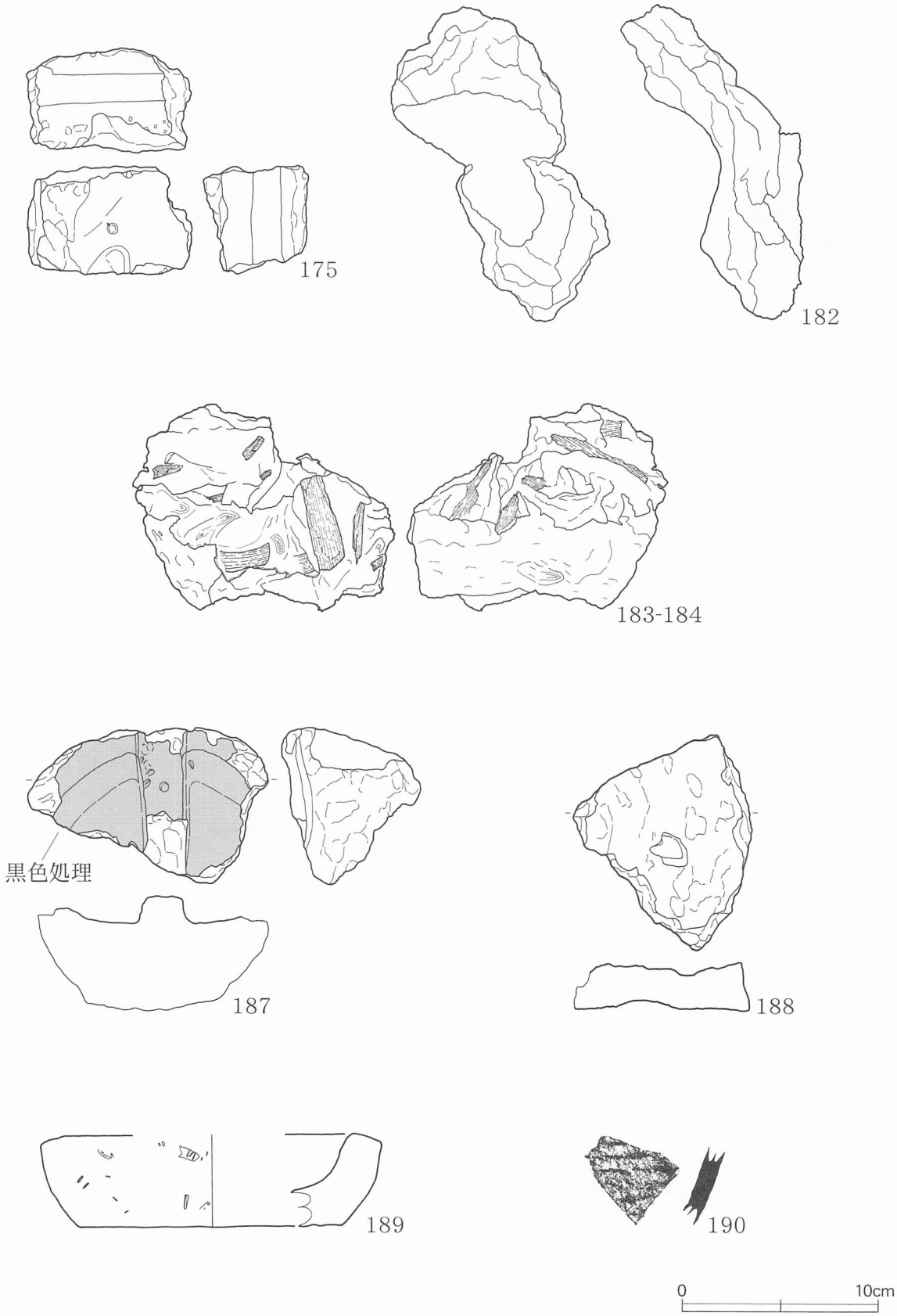
第56図　遺構内出土遺物(11)



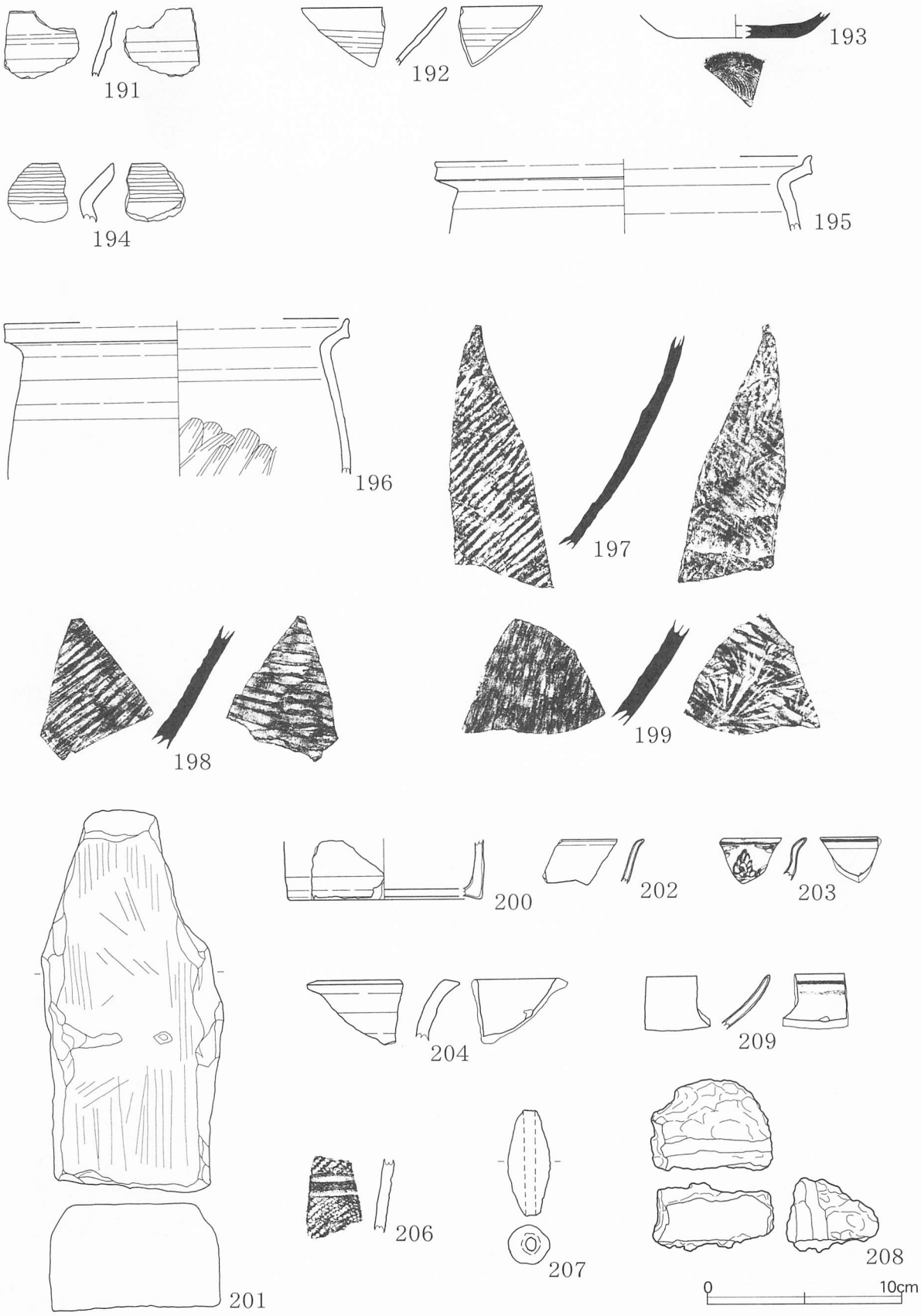
第57図　遺構内出土遺物(12)



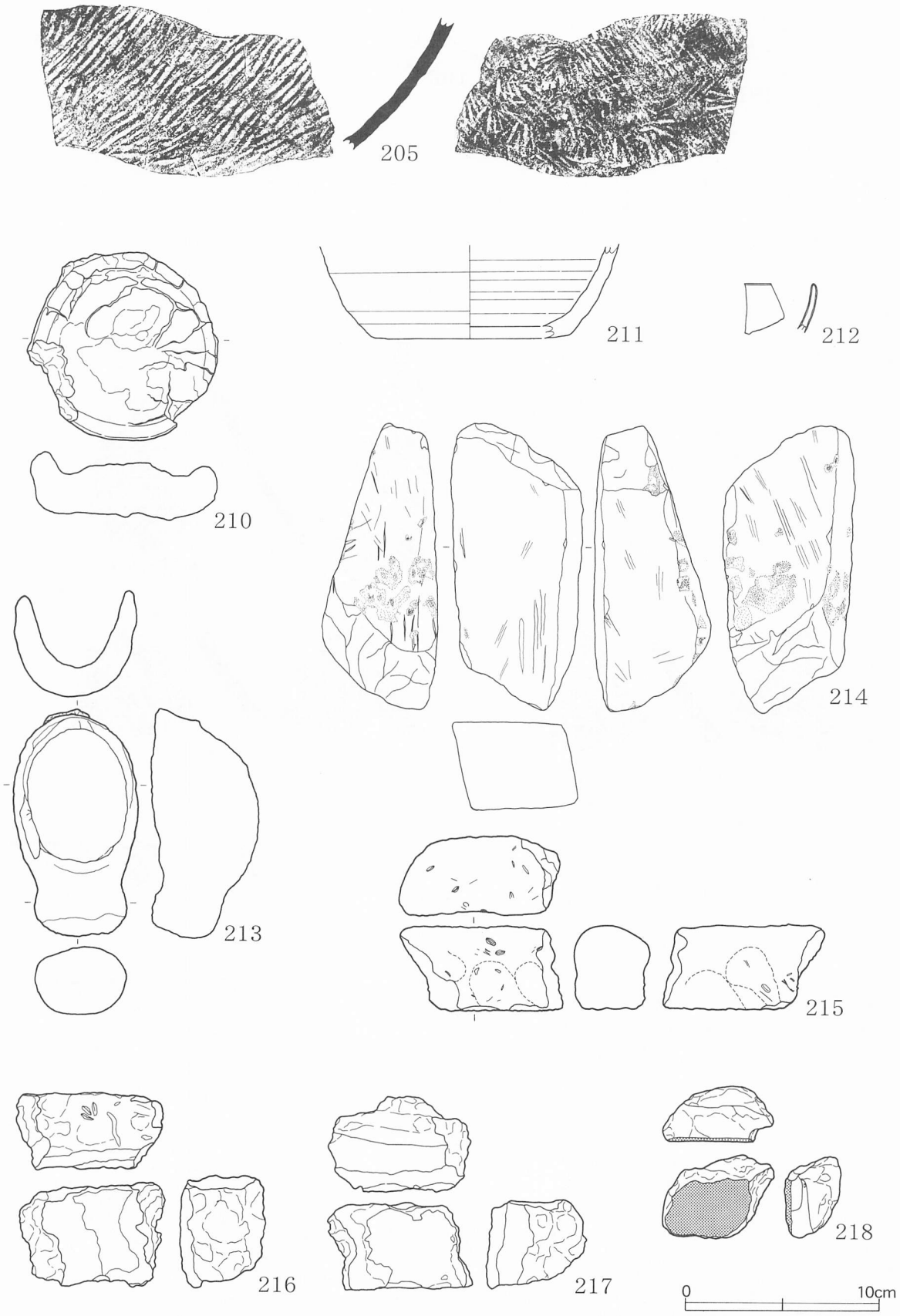
第58図　遺構内出土遺物(13)



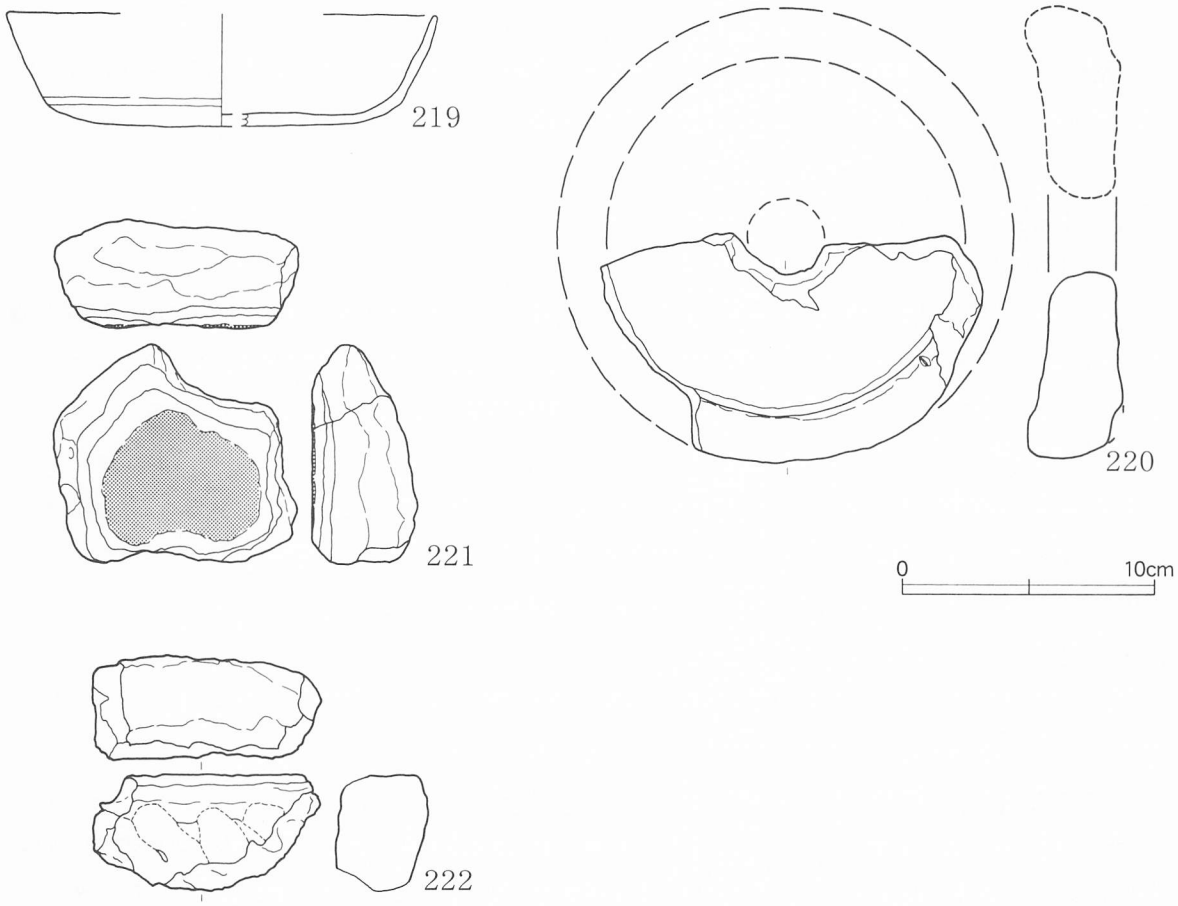
第59図　遺構内出土遺物(14)



第60図　遺構内出土遺物(15)



第61図　遺構内出土遺物(16)



第62図　遺構内出土遺物(17)

V．遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物の内、土器30点（土師器８・須恵器10・縄文土器８・弥生土器８・かわらけ２）、陶磁器18点、石器・石製品５点、鋳物関連遺物２点を掲載した。

１．土器

(1)　土師器（第63図、写真図版39）

土師器は８点掲載した。甕が７点、坏が１点である。224～225はロクロ成形の坏で、224は内面黒色処理、底部回転糸切り後ヘラケズリによる再調整が施される。225は回転糸切り無調整である。230～235は甕である。231のみロクロ成形で、その他は非ロクロ成形である。胴部調整は内外面ともヘラナデによる。

(2)　須恵器（第63～64図、写真図版39）

須恵器は10点掲載した。坏が４点、甕が６点である。226～228は坏、229は高台付坏である。高台の高さは0.7㎝である。236～241は甕である。236は胴部外面調整がヘラケズリ、内面調整がヘラナデである。237～241は外面調整が平行タタキ、内面調整が平行または放射状のアテグ、ヘラナデによる。

(3)　縄文土器（第64図、写真図版39）

縄文土器は242～249の８点掲載した。晩期の粗製土器が主体となる。口縁部が波状あるいは山形を呈し、頸部に数条の沈線を巡らしており、大洞Ｃ２式に比定される。

(4)　弥生土器（第64図、写真図版39）

弥生土器は２点出土しており、250は弥生時代前期、251は後期と見られる。250は鉢で変形工字文が施されており、谷起島式に比定される。土仮251は交互刺突文が施されているものと思われる。器種は甕か。

(5)　かわらけ（第64図、写真図版39）

かわらけは2点出土した。252はロクロ成形によるもので、推定口径8.4㎝、推定底径6.8㎝、器高1.5㎝である。胎土は緻密で、時期は12世紀以降のものと思われる。245は手づくね成形によるもので推定口径13.0㎝、器高2.0㎝である。12世紀後半代と思われる。

２．陶磁器

18点出土し、すべて掲載している。陶器が12点、磁器が６点である。

(1)　陶器（第65図、写真図版40）

259～263は12世紀後半の常滑産の甕である。259～262の4点は同一個体と思われる。264は美濃産の折縁皿で大窯編年第3段階後半（16世紀末）に該当する。265は瀬戸・美濃産の端反碗ないし丸皿で大窯編年第1段階期もしくは第２段階（ともに16世紀前半）に該当する。266は肥前産の碗で17世紀末～18世紀代、267は波佐見産の碗で18世紀代の製品である。268は産地・時期ともに不明である。器種は碗か。269は在地産の鉢であろうか。外面底部には回転糸切り痕が残る。詳細な時期は不明であるが、12世紀後半代の常滑産甕と近い時期のものではないかと思われる。270は産地不明の瓶？である。時期は細かく丁寧な作りをしていることから古代の可能性がある。

(2)　磁器（第65図、写真図版40）

271は中国産明代の端反碗である。272は18世紀代の有田産の碗である。大橋編年Ⅳ期ないしⅤ期に該当す

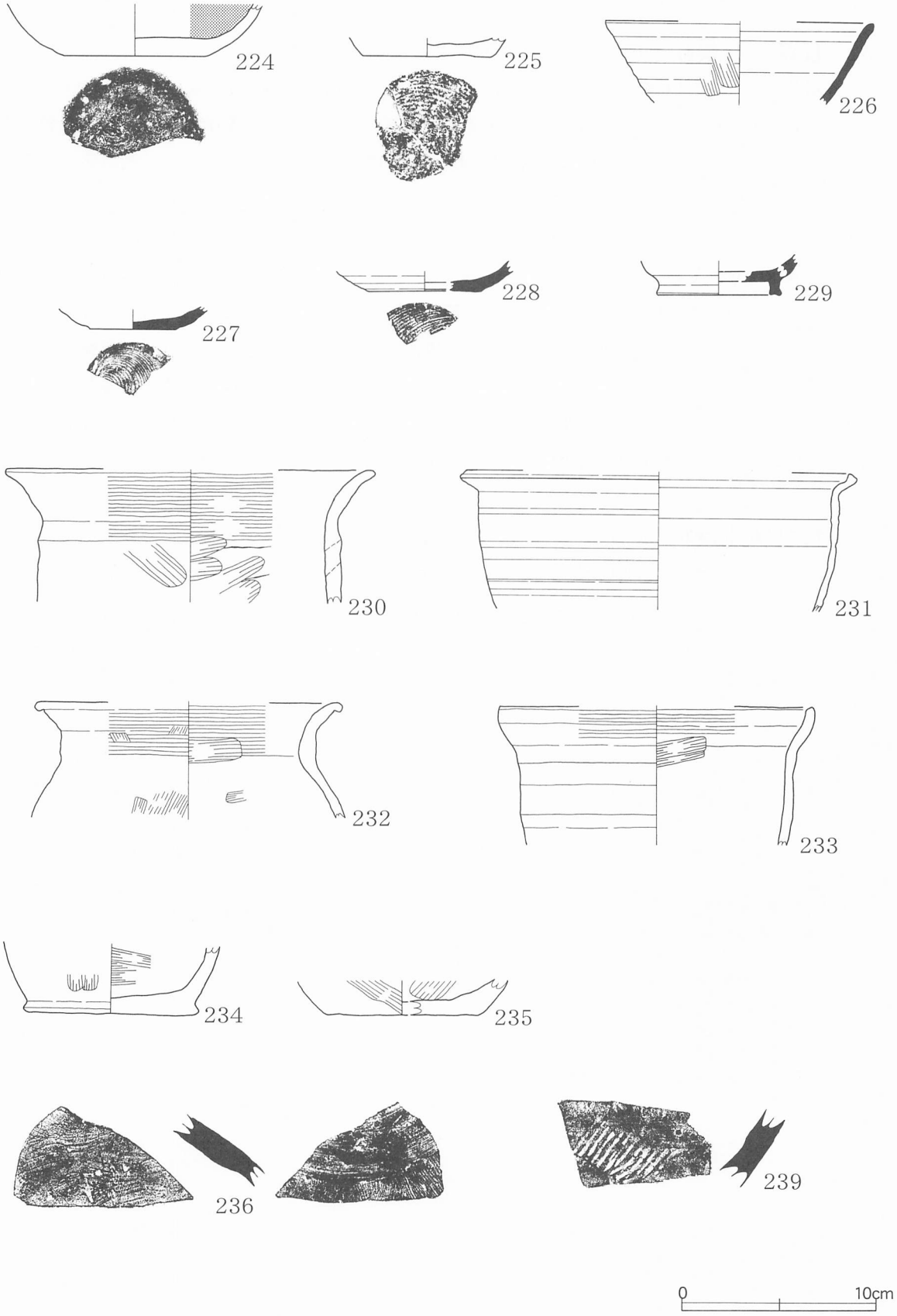
る。273～276は産地・時期ともに不明である。器種は273～275が碗で、274は蕎麦猪口であろうか。

3．石器・石製品（第64～65図、写真図版40）

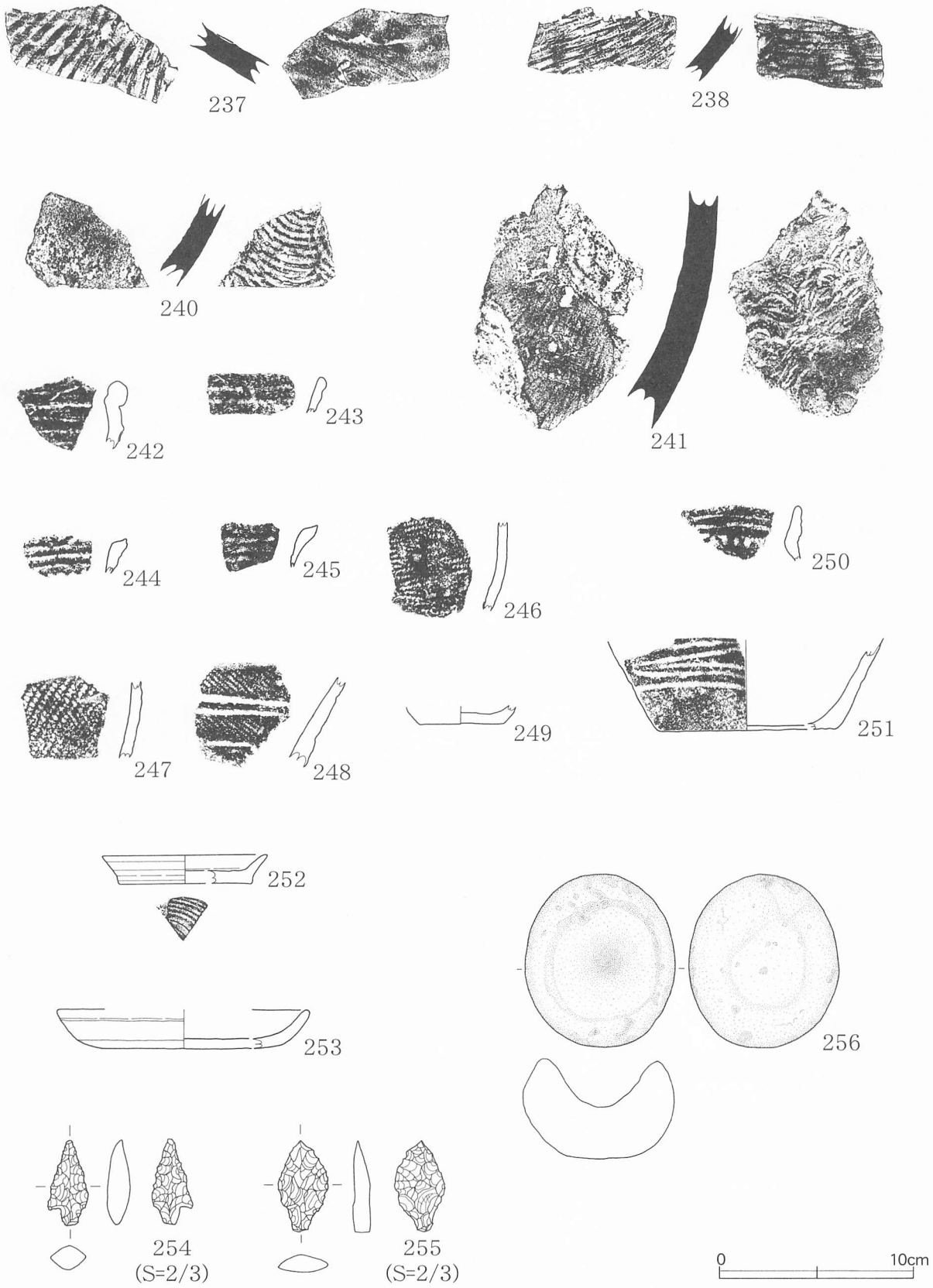
5点掲載した。内訳は石鏃が2点、凹み石が1点、石包丁の未製品状のものが1点、フレイクが1点である。254～255は石鏃である。254は平基有茎鏃で、石質は黒曜石である。255は凸基有茎鏃で、石質は頁岩である。256は凹石で長さ8.9、幅7.8㎝、重さ425.84ｇである。257は石包丁の未製品？である。内湾部を刃部としている。紐部となる穿孔もしくは穿孔前段階の窪みの痕跡は見られない。残存長19.7㎝、幅5.2㎝、厚さ1.2㎝、重さ194.73ｇである。石質は粘板岩である。しかしながら、これを石包丁の未製品とするには問題点が残る。第1に大きさがやや大ぶりであることが挙げられる。石包丁には特に大ぶりなものを大型石包丁と呼ぶものもあるが、これが該当するかどうか不明である。第2に製作工程の問題点である。一般的には穿孔後に、研磨し刃づけという工程が行われる。この14はまだ完成とは言えない状態であるが、すでに研磨と刃づけが行われている。第3に刃部とした内湾部の欠損箇所の問題である。人工的な敲打をしたとみると、その大ぶりな残存長を考え併せていくと石刀の形状ととることも可能であろう。以上から、取り敢えずは石包丁の未製品として掲載したが、問題点を持つ遺物であることを付記しておく。

4．鋳物関連遺物（第65図、写真図版40）

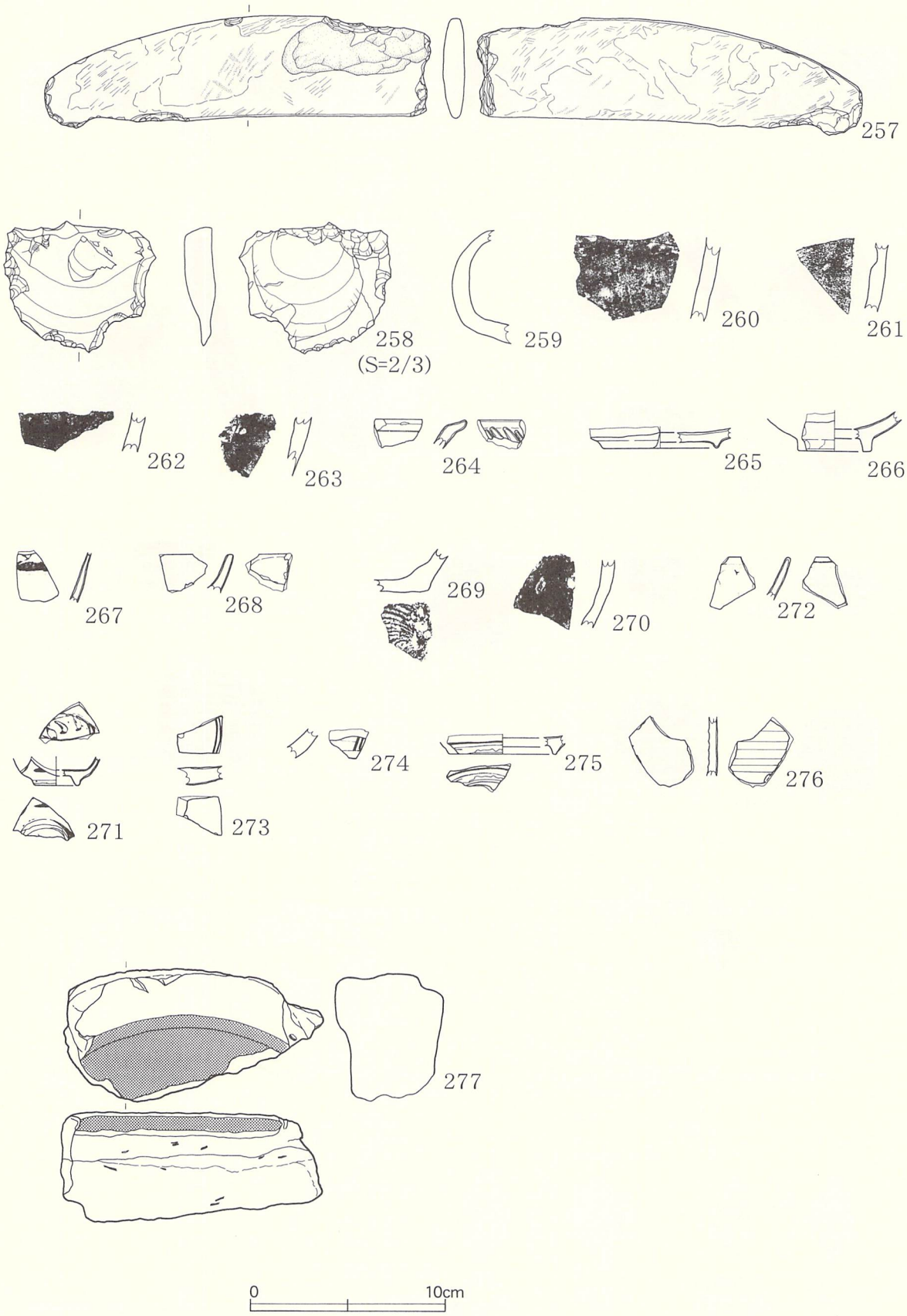
鋳型が2点出土した。277は円形状を呈し、推定外径24.5㎝ある。粗真土、中真土、仕上げ真土（上真土）の鋳物土が明瞭に確認できる。また、湯を流した還元面があり、実際に使用されたものであることが分かる。278も一部還元面が残る。277は平釜のつばの可能性もあるが、不明である。278は小破片であるため掲載していない。



第63図　遺構外出土遺物(1)



第64図　遺構外出土遺物(2)



第65図　遺構外出土遺物(3)

第４表　出土遺物観察表

No.	図番	写番	遺構名	出土地点・層位	種類	器種	部位	内面調整（口縁部）	内面調整（胴部）	外面調整（口縁部）	外面調整（胴部）	外面調整（底部）	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	土器分類	備考
1	46	27	第１号竪穴住居（ＳＩ１）	１号土坑埋土１層	土師器	坏	口～胴部	－	Ｍ	－	－	－	(11.6)	－	(3.4)	ＡＩａ１	内黒
2	46	27	第１号竪穴住居（ＳＩ１）	Ｑ４（出入口状施設）	土師器	坏	胴～底部	－	－	－	－	－	－	－	(2.4)	ＡＩｂ１	内黒
3	46	27	第１号竪穴住居（ＳＩ１）	PP19	須恵器	坏	口～胴部	Ｒ	Ｒ	Ｒ	Ｒ	－	－	－	(3.5)	Ｂ	住居に伴う柱穴
4	46	27	第１号竪穴住居（ＳＩ１）	１号土坑埋土１層	土師器	甕	口～胴部	Ｙ	Ｈ	Ｙ	Ｈ	－	(15.9)	－	(23.8)	ＡＩ	
5	46	27	第１号竪穴住居（ＳＩ１）	Ｑ３　３層	土師器	甕	口～胴部	Ｙ	Ｎ	Ｙ	Ｎ	－	－	－	(20.8)	ＡＩ	
6	46	27	第１号竪穴住居（ＳＩ１）	PP16	土師器	甕	口～胴部	Ｙ	Ｎ	Ｙ	Ｎ	－	(16.4)	－	(9.4)	ＡＩ	住居に伴う柱穴
7	46	27	第１号竪穴住居（ＳＩ１）	１号土坑	土師器	甕	口～胴部	Ｙ	Ｎ	Ｙ→Ｎ	Ｎ	－	(16.0)	－	(9.8)	ＡＩ	
8	46	27	第１号竪穴住居（ＳＩ１）	１号土坑	土師器	甕	口～胴部	Ｙ	Ｎ	Ｙ→Ｎ	Ｎ	－	(17.3)	－	(8.0)	ＡＩ	
9	46	27	第１号竪穴住居（ＳＩ１）	Ｑ４　４層	土師器	甕	口～胴部	Ｙ	－	Ｙ	Ｎ	－	(14.6)	－	(10.6)	ＡＩ	
10	47	27	第１号竪穴住居（ＳＩ１）	１号土坑	土師器	甕	口～胴部	Ｙ	Ｎ	Ｙ→Ｎ	Ｎ	－	(14.6)	－	(7.0)	ＡＩ	
11	47	27	第１号竪穴住居（ＳＩ１）	１号土坑	土師器	甕	口～胴部	Ｙ	Ｎ	Ｙ→Ｎ	Ｎ	－	－	－	(11.0)	ＡＩ	
12	47	27	第１号竪穴住居（ＳＩ１）	Ｑ３　３層他	土師器	甕	胴～底部	－	Ｈ	－	Ｎ	－	－	(8.8)	(23.3)	ＡＩ	
13	47	27	第１号竪穴住居（ＳＩ１）	１号土坑他	土師器	甕	胴～底部	－	Ｎ	－	Ｎ	－	－	8.0	(7.8)	ＡＩ	
14	47	27	第１号竪穴住居（ＳＩ１）	床面・PP17	土師器	甕	胴～底部	－	Ｎ	－	Ｎ	－	－	8.4	(9.3)	ＡＩ	住居に伴う柱穴
15	47	27	第１号竪穴住居（ＳＩ１）	Ｑ３　３層	土師器	甕	胴～底部	－	Ｎ	－	－	－	－	(8.6)	(4.8)	ＡＩ	
16	47	27	第１号竪穴住居（ＳＩ１）	Ｑ４（出入口状施設）	土師器	甕	胴～底部	－	－	－	－	－	－	7.4	(2.2)	ＡＩ	
17	47	27	第１号竪穴住居（ＳＩ１）	Ｑ２　４層	須恵器	甕	胴部	－	－	－	Ｔ	－	－	－	－	Ｂ	
18	47	28	第２号竪穴住居（ＳＩ２）	埋土（１号土坑等）	土師器	坏	口～底部	Ｙ	－	Ｙ	－	－	(19.6)	－	(5.3)	ＡＩａ１	
19	47	28	第２号竪穴住居（ＳＩ２）	埋土（１号土坑直上等）	土師器	坏	口～底部	－	Ｍ	－	Ｋ	－	11.8	－	3.0	ＡＩａ２	
20	47	28	第２号竪穴住居（ＳＩ２）	埋土	土師器	坏	口～底部	Ｍ	Ｍ	Ｙ	Ｋ	Ｋ	(13.9)	－	4.0	ＡＩａ１	内黒
21	48	28	第２号竪穴住居（ＳＩ２）	埋土	土師器	甕	口～胴部	Ｙ	Ｈ	Ｙ	Ｋ・Ｎ	－	(20.0)	－	(13.5)	ＡＩ	
22	48	28	第２号竪穴住居（ＳＩ２）	埋土	土師器	甕	口～胴部	Ｙ	Ｎ	Ｙ	Ｎ	－	(17.8)	－	(11.0)	ＡＩ	
23	48	28	第２号竪穴住居（ＳＩ２）	埋土	土師器	甕	口～胴部	Ｙ	－	Ｙ	Ｎ	－	(21.0)	－	(8.9)	ＡＩ	
24	48	28	第２号竪穴住居（ＳＩ２）	カマド袖部	土師器	甕	口～胴部	Ｙ	Ｎ	Ｙ	Ｎ	－	－	－	(12.9)	ＡＩ	
25	48	28	第３号竪穴住居（ＳＩ３）	埋土	須恵器	壺	胴部	－	Ｒ	－	Ｒ	－	－	－	－	Ｂ	
26	48	28	第３号竪穴住居（ＳＩ３）	埋土	須恵器	壺	胴部	－	Ｒ	－	Ｒ	－	－	－	－	Ｂ	
27	48	28	第４号竪穴住居（ＳＩ４）	埋土	土師器	坏	口～底部	Ｒ	Ｒ	Ｒ	Ｒ	回転糸切→Ｋ	13.6	6.2	5.0	ＡⅡａ２	内黒　体部下半にＫ
28	48	28	第４号竪穴住居（ＳＩ４）	８号土坑	土師器	坏	口～底部	Ｒ	Ｒ→Ｍ	Ｒ	Ｒ	－	(12.5)	(5.6)	4.3	ＡⅡａ３	内黒　切り離し不明　底部・胴部下半再調整（NoK）　摩滅
29	48	28	第４号竪穴住居（ＳＩ４）	４号土坑	土師器	坏	口～底部	Ｒ	Ｒ	Ｒ	Ｒ	－	(13.0)	(6.2)	3.7	ＡⅡａ３	内黒　切り離し不明　底部・胴部下半再調整（NoK）　摩滅
30	48	28	第４号竪穴住居（ＳＩ４）	埋土	土師器	坏	口～胴部	Ｒ	Ｒ	Ｒ	Ｒ	－	14.4	－	(4.5)	ＡⅡｂ	
31	48	28	第４号竪穴住居（ＳＩ４）	Ｑ１	土師器	坏	口～胴部	Ｒ	Ｒ	Ｒ	Ｒ	－	(13.6)	－	(4.5)	ＡⅡａ	内黒
32	48	28	第４号竪穴住居（ＳＩ４）	１号土坑	土師器	坏	口～胴部	Ｒ	Ｒ	Ｒ	Ｒ	－	(15.2)	－	(6.0)	ＡⅡａ	内黒
33	48	28	第４号竪穴住居（ＳＩ４）	Ｑ４	土師器	坏	胴～底部	－	Ｒ→Ｍ	－	Ｒ	－	－	5.8	(2.5)	ＡⅡａ３	内黒　切り離し不明　底部・胴部下半再調整（NoK）　摩滅
34	49	28	第４号竪穴住居（ＳＩ４）	Ｑ２　１層	土師器	坏	胴～底部	－	Ｒ	－	Ｒ	Ｋ	－	(8.0)	(2.1)	ＡⅡａ３	内黒　底部切り離し不明
35	49	28	第４号竪穴住居（ＳＩ４）	４号土坑	土師器	坏	胴～底部	－	Ｒ	－	Ｒ	－	－	5.2	(1.4)	ＡⅡａ３	内黒　切り離し不明　底部・胴部下半再調整（Ｋ？）　摩滅
36	49	28	第４号竪穴住居（ＳＩ４）	８号土坑	土師器	坏	胴～底部	－	Ｒ	－	Ｒ	－	－	5.6	(1.2)	ＡⅡａ３	内黒　切り離し不明　胴部下半にＫ　摩滅
37	49	28	第４号竪穴住居（ＳＩ４）	カマド下	須恵器	坏	口～底部	Ｒ	Ｒ	Ｒ	Ｒ	回転糸切	(15.0)	(6.4)	4.4	ＢⅡａ	
38	49	28	第４号竪穴住居（ＳＩ４）	カマド下・８号土坑等	須恵器	坏	口～胴部	Ｒ	Ｒ	Ｒ	Ｒ	－	(14.6)	－	(4.1)	Ｂ	
39	49	28	第４号竪穴住居（ＳＩ４）	８号土坑等	須恵器	坏	口～胴部	Ｒ	Ｒ	Ｒ	Ｒ	－	(14.0)	－	(4.8)	Ｂ	
40	49	28	第４号竪穴住居（ＳＩ４）	カマド上部焼土付近	須恵器	坏	胴～底部	－	Ｒ	－	Ｒ	回転糸切→Ｋ	－	(6.2)	(1.7)	ＢⅡｂ	
41	49	28	第４号竪穴住居（ＳＩ４）	カマド埋設	土師器	甕	口～胴部	Ｒ	Ｒ	Ｒ	Ｒ	－	(16.8)	－	(7.0)	ＡⅡ	
42	49	29	第４号竪穴住居（ＳＩ４）	８号土坑等	土師器	甕	口～胴部	Ｒ	Ｒ	Ｒ	Ｒ	－	(22.8)	－	(15.0)	ＡⅡ	
43	49	29	第４号竪穴住居（ＳＩ４）	Ｑ１	土師器	甕	口～胴部	Ｒ	Ｒ	Ｒ	Ｒ	－	(26.2)	－	(5.4)	ＡⅡ	
44	49	29	第４号竪穴住居（ＳＩ４）	Ｑ１　１層他	土師器	甕	口～胴部	Ｒ	Ｒ	Ｒ	Ｒ	－	(23.3)	－	(5.9)	ＡⅡ	
45	49	29	第４号竪穴住居（ＳＩ４）	２号土坑	土師器	甕	口～胴部	Ｒ	Ｒ	Ｒ	Ｒ	－	－	－	(5.5)	ＡⅡ	

No.	図番	写番	遺構名	出土地点・層位	種類	器種	部位	内面調整(口縁部)	内面調整(胴部)	外面調整(口縁部)	外面調整(胴部)	外面調整(底部)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	土器分類	備考
46	49	29	第4号竪穴住居(SI4)	Q1　1層	土師器	甕	口～胴部	R	R	R	R	－	－	－	(6.7)	AⅡ	
47	49	29	第4号竪穴住居(SI4)	2号土坑	土師器	甕	口～胴部	R	R	R	R	－	－	－	(3.5)	AⅡ	
48	50	29	第4号竪穴住居(SI4)	2号土坑	土師器	甕	口～胴部	R	R	R	R	－	－	－	(5.9)	AⅡ	
49	50	29	第4号竪穴住居(SI4)	8号土坑	土師器	甕	口～胴部	R	R	R	R	－	－	－	(5.0)	AⅡ	
50	50	29	第4号竪穴住居(SI4)	8号土坑	土師器	甕	口～胴部	R	R	R	R	－	－	－	(5.1)	AⅡ	
51	50	29	第4号竪穴住居(SI4)	Q2　1層	土師器	甕	口～胴部	R	R	R	R	－	－	－	(5.4)	AⅡ	
52	50	29	第4号竪穴住居(SI4)	1号土坑	土師器	甕	胴～底部	－	R	－	R	回転糸切	－	6.6	(4.1)	AⅡ	
53	50	29	第4号竪穴住居(SI4)	4号土坑	土師器	甕	胴～底部	－	R	－	R	回転糸切	－	(7.0)	(3.7)	AⅡ	
54	50	29	第4号竪穴住居(SI4)	Q4	土師器	甕	胴～底部	－	R→N	－	R→K	－	－	(7.7)	(1.7)	AⅡ	
55	50	29	第4号竪穴住居(SI4)	8号土坑埋土下部	須恵器	長頸壺	口～頸部	R	－	R	－	－	(9.4)	－	(8.4)	B	
56	50	29	第4号竪穴住居(SI4)	1号土坑埋土1層	須恵器	甕	胴部	－	R	－	R	－	－	－	－	B	
57	50	29	第4号竪穴住居(SI4)	Q1	須恵器	甕	胴部	－	A(放射状)	－	T(平行)	－	－	－	－	B	
58	50	29	第4号竪穴住居(SI4)	2号土坑	須恵器	甕	胴部	－	A(平行)	－	T(平行)	－	－	－	－	B	
59	51	30	第4号竪穴住居(SI4)	埋土	須恵器	甕	胴部	－	－	－	T(平行)	－	－	－	－	B	
60	51	30	第4号竪穴住居(SI4)	カマド付近PP5	須恵器	甕	胴部	－	R	－	R→K	－	－	－	－	B	住居に伴う柱穴
61	51	30	第4号竪穴住居(SI4)	Q1　1層	石製品	紡錘車							長さ 6.6	幅 7.0	厚さ 1.2	重さ66.02g	石英安山岩　奥羽山脈
62	51	30	第5号竪穴住居(SI6)	埋土	土師器	坏	胴	－	－	－	N	－	－	－	(2.9)	AⅠ	体部に段あり
63	51	30	第5号竪穴住居(SI6)	PP3	土師器	甕	口縁部	Y	－	Y→N	－	－	－	－	(4.9)	AⅠ	住居に伴う柱穴
64	51	30	第5号竪穴住居(SI6)	埋土	土師器	鉢	胴～底部	－	N	－	－	－	－	(5.2)	(4.6)	AⅠ	
65	51	30	第6号竪穴住居(SI7)	埋土	土師器	高坏	底部	－	－	－	－	－	－	－	－	AⅠ	底部内外面にヘラナデ
66	51	30	第6号竪穴住居(SI7)	Q4	須恵器	坏	口縁部	R	R	R	R	－	－	－	－	B	
67	51	30	第6号竪穴住居(SI7)	Q1	須恵器	坏	胴～底部	－	R	－	R	回転糸切	－	(6.4)	(2.7)	BⅡa	焼成不良
68	51	30	第6号竪穴住居(SI7)	土器集中部(取り上げNoC他)	土師器	甕	口～胴部	Y→N	－	Y→N	－	－	(21.2)	－	(11.3)	AⅠ	
69	51	30	第6号竪穴住居(SI7)	土器集中(取り上げNoB)	土師器	甕	口～胴部	Y→N	N	Y	N	－	(17.2)	－	(6.5)	AⅠ	
70	52	30	第6号竪穴住居(SI7)	土器集中部	土師器	甕	口～胴部	Y	N	Y	N	－	(14.6)	－	(8.0)	AⅠ	
71	52	30	第6号竪穴住居(SI7)	土器集中部(取り上げNoE)	土師器	甕	胴～底部	－	N	－	K	－	－	(7.6)	(2.2)	AⅠ	
72	52	30	第6号竪穴住居(SI7)	Q1	土師器	甕	胴～底部	－	－	－	－	－	－	(8.0)	(3.3)	AⅠ	
73	52	30	第6号竪穴住居(SI7)	1号土坑	土師器	甕	底部	－	－	－	H?	－	－	8.4	(1.3)	AⅠ	
74	52	30	第6号竪穴住居(SI7)	NSベルト	土師器	甕	底部	－	－	－	－	－	－	(8.6)	(1.6)	AⅠ	
75	52	30	第6号竪穴住居(SI7)	1号土坑	土師器	甕	底部	－	－	－	－	－	－	(8.0)	(0.9)	AⅠ	
76	52	30	第6号竪穴住居(SI7)	Q1	石器	石棒?							長さ(9.5)	幅(2.7)	厚さ(1.5)	重さ42.43g	粘板岩　北上山地
77	52	30	第7号竪穴住居(SI8)	床面西側他	土師器	坏	口～胴部	R	R	R	R	－	(12.8)	－	(3.0)	AⅡ	
78	52	30	第7号竪穴住居(SI8)	PP2	土師器	坏	底部	－	R	－	R	回転糸切→K	－	(7.2)	(1.9)	AⅡb2	住居に伴う柱穴
79	52	30	第7号竪穴住居(SI8)	床面西側	土師器	高坏	底部	－	－	－	－	－	－	(9.0)	(4.5)	AⅠ	底部外面にヘラナデ
80	52	30	第7号竪穴住居(SI8)	床面中央他	土師器	甕	胴～底部	－	－	－	K	木葉痕	－	10.7	(10.5)	AⅠ	
81	52	30	第7号竪穴住居(SI8)	南床面	土師器	甕	胴～底部	－	N	－	－	－	－	6.2	(2.7)	AⅠ	
82	52	30	第7号竪穴住居(SI8)	南床面	土師器	甕	胴～底部	－	N	－	N	－	－	5.2	(4.0)	AⅠ	
83	52	30	第7号竪穴住居(SI8)	埋土	土師器	甕	胴～底部	－	－	－	－	－	－	(7.6)	(2.5)	AⅠ	
84	52	30	第7号竪穴住居(SI8)	埋土	土師器	甕	底部	－	N	－	N	－	－	8.2	(1.8)	AⅠ	
85	52	30	第7号竪穴住居(SI8)	埋土	土師器	甕	底部	－	－	－	N?	木葉痕	－	5.8	(1.6)	AⅠ	
86	52	30	第7号竪穴住居(SI8)	埋土	縄文土器	深鉢	胴部										LR縄文
87	52	30	第7号竪穴住居(SI8)	埋土	縄文土器	深鉢	胴部										撚糸文
88	52	31	第7号竪穴住居(SI8)	埋土	石器	敲石							長さ 9.2	幅 6.8	厚さ 5.7	重さ436.57g	安山岩　奥羽山脈
89	52	31	第7号竪穴住居(SI8)	埋土	石器	敲石							長さ 8.3	幅 5.7	厚さ 5.1	重さ425.44g	安山岩　奥羽山脈
90	53	31	第8号竪穴住居(SI9)	1－溝付近	土師器	坏	口～底部	R	R	R	R	回転糸切	(13.0)	6.0	4.3	AⅡa1	放射状のミガキ
91	53	31	第8号竪穴住居(SI9)	Q3　ベルト脇	須恵器	坏	口～底部	R	R	R	R	回転糸切	14.0	(6.2)	5.2	BⅡa	
92	53	31	第8号竪穴住居(SI9)	PP6	須恵器	坏	口～底部	R	R	R	R→N	回転糸切	(14.2)	(5.4)	6.6	BⅡa	住居に伴う柱穴
93	53	31	第8号竪穴住居(SI9)	Q2	須恵器	坏	口～胴部	R	R	R	R	－	(15.1)	－	(2.8)	B	口唇部折縁気味に張り出す

No.	図番	写番	遺構名	出土地点・層位	種類	器種	部位	内面調整(口縁部)	内面調整(胴部)	外面調整(口縁部)	外面調整(胴部)	外面調整(底部)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	土器分類	備考
94	53	31	第8号竪穴住居(SⅠ9)	10号土坑	土師器	甕	口～胴部	R	R	R	R	－	(25.4)	－	(8.9)	AⅡ	
95	53	31	第8号竪穴住居(SⅠ9)	7号土坑埋土1層	土師器	甕	口～胴部	R	R	R	R	－	(17.0)	－	(4.6)	AⅡ	
96	53	31	第8号竪穴住居(SⅠ9)	Q2	土師器	甕	口～胴部	R	R	R	R	－	(14.0)	－	(6.0)	AⅡ	
97	53	31	第8号竪穴住居(SⅠ9)	PP14 (旧4号土坑)	土師器	甕	口～胴部	R	R	R	R	－	(15.4)	－	(5.2)	AⅡ	住居に伴う柱穴
98	53	31	第8号竪穴住居(SⅠ9)	カマド袖西側・6号土坑他	土師器	甕	胴～底部	－	N	－	N	－	－	9.1	(12.0)	AⅠ	
99	53	31	第8号竪穴住居(SⅠ9)	Q2	土師器	甕	胴～底部	－	R	－	R	回転糸切	－	(8.2)	(4.1)	AⅡ	
100	53	31	第8号竪穴住居(SⅠ9)	カマド埋土1層	土師器	甕	胴～底部	－	N	－	K	－	－	(6.4)	(3.5)	AⅠ	
101	53	31	第8号竪穴住居(SⅠ9)	Q2	土師器	甕	底部	－	N	－	－	木葉痕	－	(10.0)	(2.6)	AⅠ	
102	53	31	第8号竪穴住居(SⅠ9)	Q3　ベルト脇	土師器	甕	底部	－	R	－	R	回転糸切	－	(7.0)	(2.4)	AⅡ	
103	53	32	第8号竪穴住居(SⅠ9)	Q4－B	須恵器	長頸壺	口～頸部	R	－	R	－	－	9.4	－	(4.6)	B	
104	54	32	第8号竪穴住居(SⅠ9)	PP2	須恵器	甕	口縁部	R	－	R	－	－	(14.2)	－	(3.0)	B	住居より新しい柱穴か
105	54	32	第8号竪穴住居(SⅠ9)	7号土坑埋土1層	須恵器	甕	口縁部	R	－	R	－	－	－	－	(2.2)	B	
106	54	31	第8号竪穴住居(SⅠ9)	土器A	須恵器	甕	胴部	－	A (平行)	－	T (平行)	－	－	－	－	B	
107	54	32	第8号竪穴住居(SⅠ9)	Q4他	須恵器	甕	胴部	－	A (平行)	－	T (平行)	－	－	－	－	B	
108	54	32	第8号竪穴住居(SⅠ9)	3号土坑	石製品	砥石							長さ 5.1	幅 2.4	厚さ 1.1	重さ21.46g	
109	54	32	第8号竪穴住居(SⅠ9)	煙出埋土3層	石製品	砥石							長さ 3.8	幅 3.5	厚さ 1.2	重さ15.40g	
110	54	32	第8号竪穴住居(SⅠ9)	6号土坑	石製品	砥石							長さ 5.1	幅 3.5	厚さ 2.1	重さ34.33g	凝灰岩　奥羽山脈
111	54		第8号竪穴住居(SⅠ9)	PP13 (旧2号土坑) 付近	土製品	鋳型							－	－	－	重さ40.05g	
112	54	32	第9号竪穴住居(SⅠ10)	SⅠ9との重複部分	土師器	坏	口～底部	－	M	－	－	－	(12.0)	－	3.5	AⅠb1	
113	54	32	第9号竪穴住居(SⅠ10)	1号土坑	土師器	甕	口～胴部	Y	－	Y	N	－	(18.0)	－	(4.7)	AⅠ	
114	54	32	第9号竪穴住居(SⅠ10)	PP1	土師器	甕	口縁部	Y	－	Y	－	－	－	－	(3.8)	AⅠ	住居より新しい柱穴か
115	54	32	第9号竪穴住居(SⅠ10)	3号土坑	土師器	甕	胴～底部	－	N	－	N	－	－	(9.0)	(2.4)	AⅠ	
116	55	32	第9号竪穴住居(SⅠ10)	PP2	土師器	甕	胴～底部	－	N	－	N	－	－	(7.7)	(4.2)	AⅠ	住居より新しい柱穴か
117	55	32	第9号竪穴住居(SⅠ10)	PP5	石製品	硯							長さ(8.7)	幅 (5.2)	厚さ 1.7	重さ63.78g	粘板岩　北上山地　　住居より新しい柱穴
118	55	32	第9号竪穴住居(SⅠ10)	SⅠ9との重複部分	土製品	土錘							長さ 4.8	幅 1.5	厚さ 1.5	重さ9.44g	孔径0.5cm
119	55	32	第10号竪穴住居(SⅠ11)	一括土器	土師器	甕	口～胴部	Y	N	Y	N	－	23.0	－	(12.1)	AⅠ	球胴甕
120	55	32	第10号竪穴住居(SⅠ11)	カマド	土師器	甕	胴～底部	－	N	－	H・N	－	－	(7.0)	(15.5)	AⅠ	球胴甕
121	55	32	第1号竪穴状遺構(SⅠ5)	埋土	土師器	坏	底部	－	R	－	R	回転糸切→N	－	7.4	(1.7)	AⅡb2	摩滅
122	55	32	第1号竪穴状遺構(SⅠ5)	埋土	須恵器	坏	胴～底部	－	R	－	R	回転糸切	－	6.1	(1.8)	BⅡa	
123	55	32	第1号竪穴状遺構(SⅠ5)	埋土	土師器	甕	口～胴部	Y	N	Y	N・K	－	－	－	(6.3)	AⅠ	
124	55	32	第1号竪穴状遺構(SⅠ5)	埋土	須恵器	壺	口縁部	R	－	R	－	－	－	－	(2.2)	B	
125	55	33	第1号竪穴状遺構(SⅠ5)	埋土	須恵器	甕	胴部	－	A (放射状)	－	T (平行)	－	－	－	－	B	
126	55	32	第1号竪穴状遺構(SⅠ5)	埋土	須恵器	甕	胴部	－	－	－	T (平行)	－	－	－	－	B	
127	55	32	第1号竪穴状遺構(SⅠ5)	埋土	須恵器	甕	胴部	－	－	－	T (平行)	－	－	－	－	B	
128	55	33	第1号竪穴状遺構(SⅠ5)	埋土	磁器	深皿	口～胴部	－	－	－	－	－	－	－	(2.8)		瀬戸・美濃産　19c　　1号堀跡からの流れ込み
129	56	33	第3号土坑(SK3)	埋土	磁器	鉢	底部	－	－	－	－	－	－	－	(1.8)		中国産　明末
130	56	33	第4号土坑(SK4)	埋土下部	土製品								長さ 2.9	幅 2.8	厚さ 1.6	重さ8.23g	孔径0.8cm
131	56	33	第4号土坑(SK4)	1層	縄文土器	深鉢	胴部										RL縄文
132	56	33	第10号土坑(SK10)	埋土　取り上げNoB他	土師器	坏	口縁部	R	R	R	R	－	(15.0)	－	(3.3)	AⅡ	焼成不良
133	56	33	第10号土坑(SK10)	埋土	須恵器	坏	口～胴部	R	R	R	R	－	(16.8)	－	(3.4)	B	
134	56	33	第10号土坑(SK10)	埋土	須恵器	坏	口縁部	R	R	R	R	－	(17.0)	－	(2.2)	B	
135	56	33	第10号土坑(SK10)	埋土　取り上げNoB他	土師器	甕	口～胴部	R	R・N	R→T (平行)	R	－	(21.8)	－	(11.2)	AⅡ	
136	56	33	第10号土坑(SK10)	埋土　取り上げNoB他	土師器	甕	口～胴部	R	R	R	R→N	－	(22.0)	－	(10.1)	AⅡ	
137	56	33	第10号土坑(SK10)	埋土	土師器	甕	口～胴部	R	R	R	R	－	(16.0)	－	(7.3)	AⅡ	
138	56	33	第10号土坑(SK10)	埋土	土師器	甕	胴～底部	－	N	－	K	－	－	6.7	(26.1)	AⅠ	
139	56	33	第10号土坑(SK10)	埋土	土師器	甕	胴～底部	－	R	－	R	K	－	(6.4)	(8.9)	AⅡ	
140	56	33	第10号土坑(SK10)	埋土	土製品	炉壁							－	－	－	重さ347.80g	
141	57	33	第11号土坑(SK11)	埋土　取り上げNoB	土師器	甕	口～胴部	Y	N	Y	N	－	(17.0)	－	(7.8)	AⅠ	コシキ

No.	図番	写番	遺構名	出土地点・層位	種類	器種	部位	内面調整（口縁部）	内面調整（胴部）	外面調整（口縁部）	外面調整（胴部）	外面調整（底部）	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	土器分類	備考
142	57	33	第11号土坑（ＳＫ11）	埋土　取り上げNo B	土師器	甕	胴～底部	－	－	－	－	－	－	9.6	(6.2)	ＡＩ	
143	57	33	第11号土坑（ＳＫ11）	1層	土師器	甕	胴～底部	－	－	－	－	網代痕	－	9.0	(3.0)	ＡＩ	
144	57	33	第11号土坑（ＳＫ11）	1層	縄文土器	深鉢	胴部										ＬＲ縄文
145	57	34	第12号土坑（ＳＫ12）	埋土	土師器	甕	口縁部	Y→K？	－	Y	－	－	－	－	(2.9)	ＡＩ	
146	57	34	第12号土坑（ＳＫ12）	埋土	土師器	甕	口縁部	Y	－	Y	－	－	－	－	(3.1)	ＡＩ	
147	57	34	第12号土坑（ＳＫ12）	埋土	土師器	甕	底部	－	－	－	K	－	－	(6.2)	(1.2)		
148	57	34	第13号土坑（ＳＫ13）	埋土	須恵器	坏	胴部	－	R	－	R	－	－	－	－	ＡＩ	
149	57	34	第14号土坑（ＳＫ14）	１層	土師器	坏	口～胴部	R	R	R	R→M	－	(13.5)	(5.8)	4.5	B	内黒　切り離し不明・再調整あり（ナデorケズリ）　摩滅
150	57	34	第14号土坑（ＳＫ14）	埋土	須恵器	坏	口～胴部	R	R	R	R→N	回転糸切	(12.4)	(4.6)	5.2	ＡⅡａ１	
151	57	34	第14号土坑（ＳＫ14）	埋土	須恵器	甕	胴部	－	A（平行）	－	T（平行）	－	－	－	－	ＢⅡａ	
152	57	34	第16号土坑（ＳＫ16）	２層底面	土師器	甕	口～胴部	Y	H	Y	N	－	(19.6)	－	(8.4)	B	
153	57	34	第16号土坑（ＳＫ16）	埋土	土師器	甕	底部	－	N	－	－	N？	－	(7.2)	(1.5)	ＡＩ	
154	57	34	第16号土坑（ＳＫ16）	埋土	須恵器	甕	口～胴部	R	－	T(平行)→R	R	－	(22.8)	－	(4.5)	ＡＩ	色調白橙色
155	57	34	第23号土坑（ＳＫ23）	１．２層	土師器	甕	胴～底部	－	N	－	K	－	－	(7.0)	－	B	
156	57	34	第２号溝跡（ＳＤ３）	埋土	土師器	坏	口～胴部	R	R	R	R	－	－	－	(3.8)	ＡＩ	内黒
157	57	34	第４号溝跡（ＳＤ９）	埋土	須恵器	壺	肩部	－	R	－	R	－	－	－	－	ＡⅡａ	
158	57	34	第１号堀跡（ＳＤ２）	埋土	土師器	高坏	胴～底部	－	M	－	K	－	－	－	(5.0)	B	
159	57	34	第１号堀跡（ＳＤ２）	埋土	土師器	甕	口縁部	Y	－	Y	－	－	－	－	(3.8)	ＡＩ	
160	58	34	第１号堀跡（ＳＤ２）	埋土	土師器	甕	胴～底部	－	－	－	K	－	－	(7.4)	(2.7)	ＡＩ	
161	58	34	第１号堀跡（ＳＤ２）	埋土	土師器	甕	底部	－	N	－	K	－	－	5.6	(2.0)	ＡＩ	
162	58	34	第１号堀跡（ＳＤ２）	埋土	須恵器	甕	口縁部	R	－	R	－	－	－	－	(1.4)	ＡＩ	
163	58	34	第１号堀跡（ＳＤ２）	埋土	弥生土器	鉢	口縁部									B	粘土溜　波状口縁　弥生前期
164	58	34	第１号堀跡（ＳＤ２）	埋土	弥生土器	鉢	胴部										変形工字文　弥生前期
165	58	34	第１号堀跡（ＳＤ２）	埋土	陶器	丸皿	口縁部	－	－	－	－	－	－	－	(1.8)		瀬戸・美濃産　灰釉　16ｃ前　大窯編年第２段階
166	58	34	第１号堀跡（ＳＤ２）	埋土	陶器	端反皿or丸皿	底部	－	－	－	－	－	－	(6.2)	(1.0)		瀬戸・美濃産　灰釉　16ｃ前　大窯編年第１or２段階
167	58	34	第１号堀跡（ＳＤ２）	埋土	磁器	徳利	胴部	－	－	－	－	－	－	－	(4.0)		有田産　18ｃ
168	58	34	第１号堀跡（ＳＤ２）	埋土	磁器	小型皿	底部	－	－	－	－	－	－	(6.6)	(1.4)		中国産　明末
169	58	34	第１号堀跡（ＳＤ２）	埋土	磁器	皿	口～胴部	－	－	－	－	－	－	－	(3.2)		中国産　明末
170	58	34	第１号堀跡（ＳＤ２）	埋土	土製品	炉壁							－	－	－		コシキ　外径41cm、内径37cm
171	58	35	第１号堀跡（ＳＤ２）	埋土	土製品	炉壁							－	－	－	重さ338.40ｇ	コシキ
172	58	35	第１号堀跡（ＳＤ２）	埋土	土製品	炉壁							－	－	－	重さ227.27ｇ	コシキ
173	58	35	第１号堀跡（ＳＤ２）	埋土	土製品	炉壁							－	－	－	重さ354.11ｇ	コシキ
174	58	35	第１号堀跡（ＳＤ２）	埋土	土製品	炉壁							－	－	－	重さ273.17ｇ	コシキ
175	59	35	第１号堀跡（ＳＤ２）	埋土	土製品	炉壁							－	－	－	重さ214.91ｇ	コシキ
176		35	第１号堀跡（ＳＤ２）	埋土	土製品	炉壁							－	－	－	重さ140.71ｇ	コシキ
177		35	第１号堀跡（ＳＤ２）	埋土	土製品	炉壁							－	－	－	重さ 75.50ｇ	コシキ
178		35	第１号堀跡（ＳＤ２）	埋土	土製品	炉壁							－	－	－	重さ107.93ｇ	コシキ
179		35	第１号堀跡（ＳＤ２）	埋土	土製品	炉壁							－	－	－	重さ 76.30ｇ	コシキ
180		35	第１号堀跡（ＳＤ２）	埋土	土製品	炉壁							－	－	－	重さ 72.46ｇ	コシキ
181		35	第１号堀跡（ＳＤ２）	埋土	土製品	炉壁							－	－	－	重さ 60.67ｇ	コシキ
182	59	35	第１号堀跡（ＳＤ２）	埋土	土製品	炉壁							－	－	－	重さ187.38ｇ	コシキ　羽口もしくは羽口装着孔
183	59	36	第１号堀跡（ＳＤ２）	埋土	土製品	炉壁							－	－	－	重さ296.16ｇ	炉鉢　37と同一個体
184	59	36	第１号堀跡（ＳＤ２）	埋土	土製品	炉壁							－	－	－	重さ402.80ｇ	炉鉢　36と同一個体
185		36	第１号堀跡（ＳＤ２）	埋土	土製品	鋳型							－	－	－	重さ 43.66ｇ	
186		36	第１号堀跡（ＳＤ２）	埋土	土製品	鋳型							－	－	－	重さ 28.21ｇ	
187	59	36	第１号堀跡（ＳＤ２）	埋土	土製品	鋳型							長さ(12.2)	幅(8.0)	厚さ 7.0	重さ275.91ｇ	黒味が塗られる
188	59	36	第１号堀跡（ＳＤ２）	埋土	土製品	鋳型							長さ(9.0)	幅(11.0)	厚さ 2.5	重さ184.09ｇ	推定径13.2cm
189	59	36	第１号堀跡（ＳＤ２）	埋土	土製品	坩堝							長さ(17.4)	－	厚さ 2.1	重さ112.61ｇ	

No.	図番	写番	遺構名	出土地点・層位	種類	器種	部位	内面調整(口縁部)	内面調整(胴部)	外面調整(口縁部)	外面調整(胴部)	外面調整(底部)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	土器分類	備考
190	59	36	第1号塀跡(SD8)	埋土	須恵器	甕	胴部	−	−	−	−	−	−	−	−	B	
191	60	36	第1号円形周溝	Q3	土師器	坏	口〜胴部	R	R	R	R	−	−	−	(3.4)	AⅡ	
192	60	36	第1号円形周溝	Q3	須恵器	坏	口縁部	R	R	R	R	−	(16.0)	−	(3.0)	B	
193	60	36	第1号円形周溝	Q4直上	須恵器	坏	底部	−	R	−	R	回転糸切	−	(6.4)	(1.2)	BⅡa	
194	60	36	第1号円形周溝	Q1	土師器	甕	口縁部	Y	−	Y	−	−	−	−	(3.0)	AⅠ	
195	60	36	第1号円形周溝	Q4直上	土師器	甕	口〜胴部	R	R	R	R	−	(19.4)	−	(3.8)	AⅡ	煤付着
196	60	36	第1号円形周溝	Q4直上	土師器	甕	口〜胴部	R	R	R	R→N	−	(17.6)	−	(8.0)	AⅡ	煤付着
197	60	36	第1号円形周溝	Q4直上	須恵器	甕	胴部	−	A(平行)	−	T(平行)	−	−	−	−	B	
198	60	36	第1号円形周溝	Q4直上	須恵器	甕	胴部	−	A(平行)	−	T(平行)	−	−	−	−	B	
199	60	36	第1号円形周溝	Q4直上	須恵器	甕	胴部	−	A(平行)	−	T(平行)	−	−	−	−	B	
200	60	37	P12	埋土	陶器	筒型香炉	胴〜底部	−	−	−	−	−	−	(10.0)	(3.0)		美濃産　灰釉　18c前
201	60	37	P38	埋土	石製品	砥石							長さ(19.5)	幅 9.1	厚さ 5.5	重さ1501.10g	石英安山岩　奥羽山脈　　柱穴列2号
202	60	37	P70	埋土	磁器	端反皿	口〜胴部	−	−	−	−	−	−	−	(2.3)		中国産　明代
203	60	37	P189	埋土	磁器	端反皿	口〜胴部	−	−	−	−	−	−	−	(2.4)		明産　明末　　第1号掘立柱建物跡
204	60	37	P400	埋土	陶器	大型壺	口縁部	−	−	−	−	−	−	−	(3.4)		渥美産　口縁直立　12c後半　　第2号掘立柱建物跡
205	60	37	P409	埋土	須恵器	甕	胴部	−	A(平行)	−	T(平行)	−	−	−	−		柱穴列3号
206	61	37	P430	埋土	縄文土器	深鉢	胴部							2.2			RL縄文　磨消　　第7号掘立柱建物跡
207	60	37	P438	埋土	土製品	土錘							長さ 5.4	−	厚さ 2.0	重さ 15.89g	孔径0.5〜0.6cm
208	60	37	P442	埋土	土製品	炉壁							−	−	−	重さ 56.98g	コシキ　　第1号掘立柱建物跡
209	60	37	P453	埋土	磁器	皿	口〜胴部	−	−	−	−	−	−	8.1	(2.9)		産地・時期不明　　第1号掘立柱建物跡
210	61	37	P454	埋土	鉄製品	鉄塊							9.8	(10.4)	2.9	重さ275.82g	第3号掘立柱建物跡
211	61	37	P467	埋土	土師器	甕	胴〜底部	−	R	−	R	−	−	−	(4.8)	AⅡ	外面摩滅
212	61	37	P475	埋土	磁器	碗	口〜胴部	−	−	−	−	−	−	幅 6.4	(2.6)		産地・時期不明
213	61	37	P515	埋土	土製品	坩堝							長さ 11.7	幅 6.7	厚さ 5.4	重さ231.35g	第3号掘立柱建物跡
214	61	38	P515	埋土	石製品	砥石							長さ 13.4	−	厚さ 4.5	重さ605.42g	石英安山岩　奥羽山脈　　第3号掘立柱建物跡
215	61	38	P578	埋土	土製品	炉壁							−	−	−	重さ111.08g	コシキ
216	61	38	P578	埋土	土製品	炉壁							−	−	−	重さ140.04g	コシキ
217	61	38	P578	埋土	土製品	炉壁							−	−	−	重さ124.47g	コシキ
218	61	38	P591	埋土	土製品	鋳型							−	−	−	重さ 41.77g	第4号掘立柱建物跡
219	62	38	P712	埋土	土師器	坏	口〜底部	−	−	−	−	−	(17.0)	−	4.4	AⅠb1	摩滅　　柱穴列4号
220	62	38	P750	埋土	土製品	鋳型							−	−	−	重さ357.37g	外径17.8cm　内径14.0cm、孔径3.0cm、厚さ2.7〜3.2cm
221	62	38	P750	埋土	土製品	鋳型							−	−	−	重さ243.19g	
222	62	38	P750	埋土	土製品	鋳型							−	−	−	重さ131.36g	
223		38	P773	埋土	土製品	炉壁							−	(7.4)	−	重さ154.16g	コシキ
224	63	39	遺構外	BⅡa6　Ⅲ層	土師器	坏	胴〜底部	−	R	−	R	回転糸切→K	−	(6.6)	2.6)	AⅡa2	内黒
225	63	39	遺構外	BⅡc1　Q4　Ⅲ層	土師器	坏	底部	−	R	−	R	回転糸切	−	−	(0.9)	AⅡ	
226	63	39	遺構外	AⅡa0　Ⅳ層下	須恵器	坏	口〜胴部	R	R	R	R→N	−	(13.2)	(4.4)	(4.6)	BⅡ	
227	63	39	遺構外	AⅡg3　Ⅲ層	須恵器	坏	胴〜底部	−	R	−	R	回転糸切	−	(6.0)	(1.2)	BⅡa	
228	63	39	遺構外	BⅡe1　Q1　Ⅲ層	須恵器	坏	胴〜底部	−	R	−	R	回転糸切	−	(6.4)	(1.5)	BⅡa	
229	63	39	遺構外	BⅡa4　Ⅲ層	須恵器	高台付坏	胴〜底部	−	R	−	R	回転糸切	−	−	(1.7)	BⅡc	高台の高さ0.7cm
230	63	39	遺構外	BⅡb1　Q3　Ⅲ層 or　1住	土師器	甕	口〜胴部	Y	N	Y	N	−	(19.0)	−	(6.8)	AⅠ	
231	63	39	遺構外	AⅡa0　Ⅳ層下	土師器	甕	口〜胴部	R	R	R	R	−	(19.8)	−	(7.1)	AⅡ	
232	63	39	遺構外	南西隅　撹乱	土師器	甕	口〜胴部	Y	N	Y	N	−	(15.7)	−	(4.9)	AⅠ	
233	63	39	遺構外	BⅡa5　表土中	土師器	甕	口〜胴部	Y	N	Y	−	−	(16.0)	(9.0)	(7.1)	AⅠ	
234	63	39	遺構外	BⅡb1　Q3　Ⅲ層 or　1住	土師器	甕	胴〜底部	−	N	−	N	−	−	(8.0)	(3.6)	AⅠ	
235	63	39	遺構外	BⅡb3　Ⅳ層上面	土師器	甕	胴〜底部	−	N	−	N	−	−	−	(1.8)	AⅠ	
236	63	39	遺構外	AⅡi4　Ⅲ層	須恵器	甕	肩部	−	R→N	−	K	−	−	−	−	B	
237	64	39	遺構外	AⅡj2　Ⅳ層下	須恵器	甕	胴部	−	N	−	T(平行)	−	−	−	−	B	

No.	図番	写番	遺構名	出土地点・層位	種類	器種	部位	内面調整(口縁部)	内面調整(胴部)	外面調整(口縁部)	外面調整(胴部)	外面調整(底部)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	土器分類	備考
238	64	39	遺構外	ＡⅡｆ４　Ⅲ層	須恵器	甕	胴部	－	A（平行）	－	T（平行）	－	－	－	－	B	
239	63	39	遺構外	ＢⅡａ４　Ⅲ層	須恵器	甕	胴部	－	N	－	T（平行）	－	－	－	－	B	
240	64	39	遺構外	ＢⅡｆ２　Ⅲ層	須恵器	甕	胴部	－	A（放射状）	－	?	－	－	－	－	B	
241	64	39	遺構外	ＢⅡｂ１　Ｑ２　Ⅲ層	須恵器	甕	胴部	－	A（放射状）	－	T（平行）	－	－	－	－	B	
242	64	39	遺構外	ＢⅡｂ１　Ｑ２　Ⅲ層	縄文土器	深鉢	口縁部										
243	64	39	遺構外	１号土坑直上層	縄文土器	深鉢	口縁部										口縁部山形
244	64	39	遺構外	ＡⅠｊ０　Ⅳ層下	縄文土器	深鉢	口縁部										沈線
245	64	39	遺構外	ＡⅠｊ０　Ⅳ層下	縄文土器	深鉢	口縁部										沈線　波状口縁
246	64	39	遺構外	ＡⅡｇ４　Ｑ１　Ⅲ層	縄文土器	深鉢	胴部										沈線　波状口縁
247	64	39	遺構外	ＡⅡｆ８　Ｑ４　Ⅳ層	縄文土器	深鉢	胴部										ＬＲ縄文
248	64	39	遺構外	ＡⅡｇ４　入口Ｂ　Ⅱ層	縄文土器	深鉢	胴部										ＬＲ縄文
249	64	39	遺構外	ＢⅡａ４　Ⅲ層	縄文土器	深鉢	底部										ＲＬ縄文　沈線
250	64	39	遺構外	ＢⅡｄ１　Ⅳ層	弥生土器	甕か	口縁部										
251	64	39	遺構外	風倒木痕跡	弥生土器	鉢	胴～底部										交互刺突文か　弥生後期
252	64	39	遺構外	ＡⅡｇ４　Ⅲ層	かわらけ	ロクロ	胴～底部	R	R	R	R	回転糸切	(8.4)	(6.8)	1.5		変形工字文　弥生前期
253	64	39	遺構外	ＢⅡａ４　Ⅲ層	かわらけ	手づくね	胴～底部	N	N	N	N	－	(13.0)	－	2.0		胎土緻密　12ｃ後半以降
254	64	40	遺構外	ＢⅠｂ０　Ⅲ層	石器	石鏃							長さ 2.2	幅 1.0	厚さ 0.6	重さ 0.93ｇ	12c後半　手づくね
255	64	40	遺構外	ＢⅡｄ１　Ｑ４　Ⅲ層	石器	石鏃							長さ 2.3	幅 7.8	厚さ 0.4	重さ 1.16ｇ	黒曜石　平基有茎鏃
256	64	40	遺構外	土捨て場採取	石器	凹石							長さ 8.9	幅 7.8	厚さ 2.7	重さ425.84ｇ	頁岩　産地？　凸基有茎鏃
257	65	40	遺構外	ＢⅡｅ１　Ⅲ層	石製品	石包丁							長さ(19.7)	幅 5.2	厚さ 1.2	重さ194.73ｇ	安山岩　奥羽山脈
258	65	40	遺構外	ＡⅡｇ１　Ｑ１　Ⅳ層下	石器	フレイク							長さ 3.3	幅 3.9	厚さ 0.7	重さ 11.47ｇ	ホルンフェルス　北上山地　石刀の可能性あり
259	65	40	遺構外	ＢⅡａ４　Ⅲ層	陶器	甕	頸部	－	－	－	T	－	－	－	－		頁岩　奥羽山脈
260	65	40	遺構外	ＢⅡａ３　Ⅳ層	陶器	甕	胴部	－	－	－	－	－	－	－	－		常滑産　12ｃ後　15～18は同一個体か
261	65	40	遺構外	ＢⅡａ３　Ⅲ層	陶器	甕	胴部	－	－	－	－	－	－	－	－		常滑産　12ｃ後　15～１８は同一個体か
262	65	40	遺構外	ＡⅡｊ３付近　表土	陶器	甕	胴部	－	－	－	－	－	－	－	－		常滑産　12ｃ後　15～18は同一個体か
263	65	40	遺構外	ＡⅡｇ４　Ｑ１　Ⅲ層	陶器	甕	胴部	－	－	－	－	－	－	－	－		常滑産　12ｃ後　15～18は同一個体か
264	65	40	遺構外	不明	陶器	皿	口縁部	－	－	－	－	－	－	－	(1.5)		常滑産　12ｃ後
265	65	40	遺構外	ＢⅡａ４	陶器	端反皿or丸皿	底部	－	－	－	－	－	－	(6.0)	(1.0)		美濃産　折縁菊皿　灰釉　16c末　大窯編年第３段階後
266	65	40	遺構外	文トレ１　粗堀ｃ	陶器	碗	底部	－	－	－	－	－	－	(4.8)	(2.1)		瀬戸・美濃産　灰釉　16ｃ前　大窯編年第１or２段階
267	65	40	遺構外	ＢⅡｂ３　Ⅲ層下	陶器	碗	胴部	－	－	－	－	－	－	－	(2.7)		肥前産　17ｃ末～18ｃ
268	65	40	遺構外	ＡⅡｊ９　Ⅳ層下	陶器	碗？	胴部	－	－	－	－	－	－	－	(2.0)		波佐見産　18ｃ
269	65	40	遺構外	ＡⅡｉ３竪穴直上　or　Ⅳ層下	陶器	鉢？	胴～底部	－	－	－	－	回転糸切	－	－	(2.2)		産地・時期不明
270	65	40	遺構外	ＡⅡｆ４　Ⅱ層	陶器	瓶？	胴部	－	－	－	－	－	－	－	－		在地産か　時期不明
271	65	40	遺構外	ＢⅡｂ４　Ⅳ層	磁器	端反碗	胴～底部	－	－	－	－	－	－	(2.4)	(2.0)		在地産か　時期は古代？　細かく丁寧な造り
272	65	40	遺構外	不明	磁器	碗	胴部	－	－	－	－	－	－	－	(2.7)		中国産　明代か
273	65	40	遺構外	ＡⅡｉ２　Ⅲ層	磁器	碗	胴部	－	－	－	－	－	－	－	－		有田産　菊花文　18ｃ　大橋編年Ⅳ期ないしⅤ期
274	65	40	遺構外	ＡⅡｉ５付近　Ⅱ～Ⅲ層	磁器	碗	胴部	－	－	－	－	－	－	－	－		不明
275	65	40	遺構外	ＢⅡｂ３　Ⅲ層	磁器	碗	底部	－	－	－	－	－	－	(5.5)	(1.0)		産地・時期不明
276	65	40	遺構外	ＢⅡｂ３　Ⅲ層上面	磁器	猪口？	胴部	－	－	－	－	－	－	－	(3.1)		産地・時期不明
277	65	40	遺構外	ＡⅠｆ０　Ⅳ層下	土製品	鋳型							－	－	厚さ 5.6	重さ329.97ｇ	産地・時期不明
278	65		遺構外	ＡⅠｆ１　Ⅳ層下	土製品	鋳型							－	－	－	重さ 61.35ｇ	外径24.5cm、内径22.0cm、還元面高低差0.7cm

※表中のアルファベットについては、Y→ヨコナデ、R→ロクロナデ、N→ヘラナデ、H→ハケメ、K→ヘラケズリ、M→ヘラミガキ、T→タタキ、A→アテグによる調整を示す。

Ⅵ．まとめ

1．奈良・平安時代の遺構と遺物

(1) 遺構

①竪穴住居跡

〈平面形・規模〉

削平の他、他の遺構に切られていたり、調査区にかかるため全体形が分かるものは少ない。かろうじて第1号、4号竪穴住居跡でおよそ全体形及び規模が確認できる。第1号竪穴住居跡は5.6×5.2mの隅丸方形、第4号竪穴住居跡は約5.1×4.8mのやや不整な隅丸方形である。その他、全体形は不明であるものの一辺ないし二辺の長さが分かっている竪穴住居跡も幾つかある。第2号竪穴住居跡は北東壁で3.2m、第7号竪穴住居跡は南壁で3.1m、第8号竪穴住居跡は南東壁で3.7m、北西壁で推定3.7m、第9号竪穴住居跡は南西壁で5.3mである。

〈カマド〉

カマドは第1号、2号、4号、8号、10号竪穴住居跡の計5棟で構築されているのが確認された。それぞれのカマドの位置は、第1号竪穴住居跡が北西壁中央部、主軸N－20°－Wで、第2号竪穴住居跡北西壁中央部、主軸N－46°－W、第4号竪穴住居跡北東壁やや北寄り、主軸N－77°－E、第8号竪穴住居跡は北東壁中央部、主軸N－80°－E、第10号竪穴住居跡は北東壁、主軸N－69°－Eである。構築方法は、袖部に芯材を用いずに壁の削り出しによるものと思われる。円礫等芯材と思われるものは検出されていない。煙道部は第8号竪穴住居跡で刳り貫き式（トンネル式）が見られる。煙道の長さは約110cmあり、約36°の勾配で煙出に下る。その他3棟は、残存状態が悪く、燃焼部と煙道の一部が残っている程度である。

燃焼部は、上記5棟で確認されている他、第9号竪穴住居跡の西壁中央付近で焼土が検出されている。第1号堀跡に切られているため定かではないが、燃焼部の可能性がある。

以上のことから、カマドの構築位置に関して2つのグループ分けが可能である。

A：北西壁にカマドを構築する（西へ20～46°傾く）…第1号、2号竪穴住居跡

B：北東壁にカマドを構築する（東へ69～80°傾く）…第4号、7号、10号竪穴住居跡、

これら竪穴住居跡については、後述の土器分類形式から実年代を推定しているが、第1号、2号、10号竪穴住居跡は第Ⅰ期（8世紀代）第4号竪穴住居跡は第Ⅲ期（9世紀後半）、第7号竪穴住居跡は第Ⅱ期（9世紀初頭～前半）となる。したがって本遺跡においては、第10号竪穴住居は例外となるが、8世紀代の竪穴住居跡はA群に属し北西壁にカマドを構築し、9世紀代の竪穴住居跡はB群に属し北東壁にカマドを構築する傾向が概ね窺える。

〈壁・床〉

壁は概ね外傾しながら立ち上がる。壁高の残存高は最大で第3号竪穴住居跡の32cmである。概ね数cm～10数cmである。第7号、10号竪穴住居跡は削平のため、壁の立ち上がりは一部分でのみ確認されるにとどまった。床面はほぼ平坦で固くしまっているものが多い。第1号、4号竪穴住居跡では壁溝を検出した。第1号竪穴住居跡はは全周に巡り、上端幅15～45cm、深さ2～14cmを測る。一部で壁柱穴と思われる小柱穴を10基検出した、第4号竪穴住居跡は南壁沿いに巡り、上端幅42cm、深さ14cmを測る。第9号竪穴住居跡では東辺～南辺にかけて最大7cmの掘り込みが見られたが、これは建て替え前の住居の輪郭の可能性がある。

〈主柱穴〉

第１号、８号、９号竪穴住居跡で検出された。第１号竪穴住居は４基（PP５、PP６、PP９、PP10）からなり、開口部径38～46㎝、深さ42～61㎝である。また、支えと思われる柱穴（PP11）も検出されている。第８号竪穴住居も４基（PP2、PP6、PP13、PP14）からなり、開口部径45～69㎝、深さ11～22㎝である。第９号竪穴住居は遺構が第１号堀跡に切られているため３基（PP3、PP9、PP8…第８号住居で登録）の検出で、開口部径34～52㎝、深さ29～70㎝である。また、第４号竪穴住居においてはPP10、PP11、PP16、PP18の４基がその可能性もある。開口部径28～42㎝、深さ11～24㎝である。

②円形周溝

調査区中央やや南寄りで１条検出された。第４号竪穴住居跡と重複しており、切り合い関係から本遺構が旧いことが確認されている。削平により中央部の盛り上がりや墳墓の痕跡は確認されなかった。平面形は馬蹄形を呈し、規模は北西－南東方向で外径3m78㎝、内径2m82㎝、北東－南西方向で外径3m63㎝、内径2m63㎝を測る。溝の開口部幅36～54㎝、底部幅15～30㎝、深さ約20㎝である。断面形は逆台形状を呈する。岩手県内では古墳時代末から平安時代の遺跡で同種の遺構が検出された例が比較的多く、末期古墳（８世紀頃）の周湟から円形周溝、そして方形周溝へと至る系譜が把握されている。本遺跡の東0.6㎞の地点にある仙人東遺跡では、平安時代の周溝が13条検出されている。

(2) 遺物

竪穴住居跡及び竪穴状遺構、土坑等から奈良・平安時代の土師器及び須恵器等の土器類、石鏃や敲石、砥石等の石器・石製品、土錘等の土製品等が出土している。ここでは、最も出土量の多い土器について若干の分析を行うこととする。

①分類

今回の調査で本遺跡から出土した土器は、成形にロクロを使用したものとロクロを使用しないものがある。器種では坏、高坏、高台付坏、甕、壺等が出土している。土器の分類にあたっては、器種及び焼成方法（酸化炎焼成と還元炎焼成）、ロクロ成形か否かを主要な識別形式とし、これに調整技法を付加する形で分類した。分類基準は下記のとおりである。

・分類基準

〈坏〉

Ａ群：酸化炎焼成されているもの

Ⅰ類：ロクロによって成形されていないもの（所謂、土師器）。

ａ種：ロクロ不使用で底部が丸底のもの。

１：体部に段を有するもの。

２：体部に段が無いもの。

ｂ種：ロクロ不使用で底部が平底のもの。

１：体部に段を有するもの。

２：体部に段が無いもの。

Ⅱ類：ロクロによって成形されるもの。

ａ種：内面にミガキ、黒色処理が施されるもの（所謂、土師器）。

1：底部の切り離し技法が回転糸切りで、再調整が施されないもの。

2：切り離し後に再調整されるもの。

3：再調整のため切り離し技法が不明なもの。

b種：内外面ともロクロ痕以外の調整を持たないもの。

1：底部の切り離し技法が回転糸切りのもの（所謂、赤焼き土器）。

2：切り離し後に再調整されるもの。

3：切り離し技法が不明なもの。

B群：還元炎焼成されているもの。（所謂、須恵器）

Ⅰ類：底部の切り離し技法が回転ヘラ切りによるもの。

a種：再調整が施されないもの。

b種：切り離し後再調整されるもの。

Ⅱ類：底部の切り離し技法が回転糸切りによるもの。

a種：再調整が施されないもの。

b種：切り離し後再調整されるもの。

c種：回転糸切り後、高台が付けられるもの。

〈高坏・高台付坏〉

A群：酸化炎焼成されているもの。

Ⅰ類：ロクロによって成形されていないもの。

Ⅱ類：ロクロによって成形されているもの。

B群：還元炎焼成されているもの。

〈甕〉

A群：酸化炎焼成されているもの。

Ⅰ類：ロクロによって成形されないもの。

Ⅱ類：ロクロによって成形されているもの。

B群：還元炎焼成されているもの。

〈壺〉

A群：酸化炎焼成されているもの。

B群：還元炎焼成されているもの。

②出土量の割合

器種は坏、高坏、高台付坏、甕、壺、鉢が出土した。坏は48点、高坏３点、高台付坏１点、甕は118点、壺２点、鉢１点を実測し、掲載した。

坏についてはA群（酸化焔焼成）は28点、B群（還元焔焼成）は20点である。各群における出土数は、A群Ⅰ類でAⅠa1が３点、AⅠa1が２点、AⅠb1が４点、A群Ⅱ類でAⅡa1が２点、AⅡa2が２点、AⅡa3が６点、AⅡb2が２点である。B群Ⅱ類でBⅡaが９点、BⅡbが１点、BⅡcが１点である。B群Ⅰ類は出土していない。

甕についてはA群は89点、B群は29点である。A群Ⅰ類（非ロクロ成形）は61点、A群Ⅱ類（ロクロ成形）は28点である。

その他、A群ではⅠ類の高坏が３点、鉢が１点出土しており、B群では長頸壺が２点出土している。

③遺構別の組成

遺構毎の出土土器分類は第5表に示したとおりである。それをもとにさらに細分し、奈良時代、平安時代に該当すると思われる遺構について組成を見ることとする。

第１号竪穴住居跡…ＡⅠa1・ＡⅠb1・B群の坏、ＡⅠ類の甕が出土した。

第２号竪穴住居跡…ＡⅠa1・ＡⅠa2・ＡⅠ類の甕が出土した。

第３号竪穴住居跡…B群の壺が出土した。

第４号竪穴住居跡…ＡⅡａ種・ＡⅡa2・ＡⅡa3、B群・BⅡａ・BⅡｂの坏、ＡⅡ類・B群の甕、B群の長頸壺が出土した。

第５号竪穴住居跡…ＡⅠ類の坏・ＡⅠ類の甕が出土した。

第６号竪穴住居跡…ＡⅠ類の高坏・B群・BⅡａ種の坏、ＡⅠ類の甕が出土した。

第７号竪穴住居跡…ＡⅠ類の高坏・ＡⅡ類・ＡⅡb２の坏、ＡⅠ類の甕が出土した。

第８号竪穴住居跡…ＡⅡａ１・B群・BⅡａ種の坏、ＡⅠ・ＡⅡ・B群の甕、B群の長頸壺が出土した。

第９号竪穴住居跡…ＡⅠｂ種の坏、ＡⅠ類の甕が出土した。

第10号竪穴住居跡…ＡⅠ類の甕が出土した。

第１号竪穴状遺構…ＡⅡb２・BⅡａの坏、ＡⅠ類・B群の甕が出土した。

第10号土坑…ＡⅡ類・B群の坏、ＡⅠ類・ＡⅡ類の甕が出土した。

第11号土坑…ＡⅠ類の甕が出土した。

第12号土坑…ＡⅠ類の甕が出土した。

第13号土坑…B群の坏が出土した。

第14号土坑…ＡⅡａ１・BⅡa種の坏、B群の甕が出土した。

第16号土坑…ＡⅠ類の甕、B群の甕が出土した。

第23号土坑…ＡⅠ類の甕が出土した。

第１号円形周溝…ＡⅡ類・B群・BⅡａ種の坏、ＡⅠ・ＡⅡ・B群の甕が出土した。

(3) 小結

(2)において得られた資料をもとに、次の第Ⅰ～Ⅲ期に大きく分類した。出土点数が少ない遺構についても極力分類に努めた。但し、第３号竪穴住居跡及び第16号土坑、第１号円形周溝については出土資料が僅少であるため分類から除外した。

〈第Ⅰ期〉

ＡⅠ類の坏・甕が出土する時期である。第１号・２号・５号・６号・９号・10号竪穴住居跡、第11号・12号土坑がこの時期に相当する。

〈第Ⅱ期〉

ＡⅠ類・ＡⅡ類・BⅡ類の坏、ＡⅠ類・ＡⅡ類・B群の甕が出土する時期である。第７号・８号竪穴住居跡、第１号竪穴状遺構、第10号・14号・16号土坑がこの時期に相当する。

〈第Ⅲ期〉

ＡⅡ類・BⅡ類の坏、ＡⅡ類・B群の甕が出土する時期である。第４号竪穴住居跡がこの時期に該当する。

第５表　遺構別出土土器分類表

	A群（酸火焔焼成）									B群（還元焔焼成）						合計
	坏		高坏		甕		壺・鉢類		小計	坏類			甕	壺類	小計	
	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅰ類	Ⅱ類		Ⅰ類	Ⅱ類	その他				
第１号住居（ＳＩ１）	2				13				15			1			1	16
第２号住居（ＳＩ２）	3				4				7						0	7
第3号住居（ＳＩ3）									0						0	0
第4号住居（ＳＩ4）		10				14			24		2	2	5	1	10	34
第5号住居（ＳＩ6）	1				1		1		3						0	3
第6号住居（ＳＩ7）			1		8				9		1	1			2	11
第7号住居（ＳＩ8）		2	1		6				9						0	9
第8号住居（ＳＩ9）		1			3	6			10		2	1	4	1	8	18
第9号住居（ＳＩ10）	1				4				5						0	5
第10号住居（ＳＩ11）					2				2						0	2
第１号竪穴状遺構（ＳＩ5）		1			1				2		1		4		5	7
第10号土坑（ＳＫ10）		1			1	4			6			2			2	8
第11号土坑（ＳＫ11）					3				3						0	3
第12号土坑（ＳＫ12）					3				3						0	3
第13号土坑（ＳＫ13）									0			1			1	1
第14号土坑（ＳＫ14）		1							1		1		1		2	3
第16号土坑（ＳＫ16）					2				2				1		1	3
第23号土坑（ＳＫ17）					1				1						0	1
第２号溝（ＳＤ3）		1							1				1		1	2
第４号溝（ＳＤ9）									0				1		1	1
第１号堀跡（ＳＤ2）			1		3				4				1		1	5
第１号塀跡（ＳＤ8）									0				1		1	1
第１号円形周溝		1			1	2			4		1	1	3		5	9
Ｐ409									0				1		1	1
Ｐ467						1			1						0	1
Ｐ712	1								1						0	1
遺構外		2			5	1			8		3	1	6		10	18
合計	8	20	3	0	61	28	1	0	121	0	11	10	29	2	52	173

※底部が残存しておらずⅠ類・Ⅱ類に分類できない者は、その他として登録した。

以上の結果から、実年代を想定する。該期の土器編年研究は相原康二氏（1981）、高橋信雄氏（1982）、八木光則氏（1992）、伊藤博幸氏（1998）等のものがあるので、これらを参考としたい。

〈第Ⅰ期〉は、相原編年Ⅶ群、高橋編年Ⅱ－２群、八木編年Ｄ・Ｅ群、伊藤編年ｆ・ｇ・ｈ群に相当するものと思われる。時期は８世紀代とするが、中葉～後半が中心であろう。

〈第Ⅱ期〉は、相原編年Ⅷ群、高橋編年Ⅲ－１群、八木編年Ｆ群、伊藤編年ｉ・ｊ群に相当するものと思われる。時期は９世紀初頭～前半とする。

〈第Ⅲ期〉は、相原編年Ⅸ群、高橋編年Ⅲ－２群、八木編年Ｇ群、伊藤編年ｋ群に相当するものと思われる。時期は９世紀後半とする。

さらに、細分をすれば、第Ⅰ期については、第９号竪穴住居が最も古く８世紀第２四半期～中葉、第１号、６号竪穴式住居、第11号土坑が８世紀中葉～第３四半期、第２号、５号竪穴住居跡、第12号土坑が８世紀第４四半期、第10号竪穴住居跡は広く８世紀中頃～後半代と捉えている。第Ⅱ期については、第７号竪穴住居跡、第１号竪穴状遺構、第10号、16号土坑が９世紀第１四半期、第８号竪穴住居跡が９世紀第２四半期、第14号土坑は広く９世紀前半代と捉えている。

なお、出土資料が少ないため分類から除外した第１号円形周溝であるが、甕がロクロ成形のみであることを重視し、また切り合い関係から第Ⅲ期に属する第４号竪穴住居跡より旧いこと等を考え併せる第Ⅱ期、９世紀前半代に該当することが予想される。

以上、実年代の想定を行ったが、資料数が少ない中で敢えて時期決定を行ったものも少なくないため、時期にはある程度の幅があるものと思われる。

第66図　奈良・平安時代の遺構変遷図

2．中世の遺構と遺物

(1) 遺構

①掘立柱建物跡

10棟検出されており、そのうち間尺、埋土、出土遺物等から第1号、2号、3号、4号、5号、6号掘立柱建物跡6棟が中世に属するものと思われる。

〈平面形式・規模〉

第1号掘立柱建物跡は桁行3間×梁行3間に桁行両側に廂が付く建物で、面積は65.8㎡（19.9坪）である。第2号掘立柱建物跡は桁行3間×梁行2間の建物で、面積は22.1㎡（6.7坪）、第3号掘立柱建物跡は桁行4間×梁行2間の建物で、面積は45.0㎡（13.6坪）、第4号掘立柱建物跡は桁行6間×梁行1間建物で、面積は39.5㎡（12.0坪）、第5号掘立柱建物跡は桁行3間×梁行1間の建物で、面積は22.3㎡（6.7坪）、第6号掘立柱建物跡は桁行3間×梁行1間の建物で、面積は20.1㎡（6.1坪）である。また、第1号掘立柱建物跡については南側に柱筋の一致する柱穴が検出されており、桁行は4間となる可能性がある。

〈重複・新旧関係〉

掘立柱建物跡同士の遺構の重複は、第1号掘立柱建物跡と第2号掘立柱建物跡、第3号掘立柱建物跡と第4号掘立柱建物跡、第5号掘立柱建物跡と第6号掘立柱建物跡に見られる。新旧関係が分かるものは第1号掘立柱建物跡と第2号掘立柱建物跡で、第1掘立柱建物跡が旧い。その他については柱穴の切り合いがなく、不明である。

〈建物の性格〉

第1号掘立柱建物跡は、可能性として御堂的な性格があるものと思われる。その根拠として、まず第1に方3間の平面形式であることが挙げられる。一般に御堂は方3間であることが多く、金ヶ崎町本宮遺跡調査報告書では、現存する本宮十一面観音堂が紹介されている。この建物は1600年代中頃まで遡ると見られるが、やはり方3間である。第2に建て替えの痕跡がなく、柱の掘り方も大きいことが挙げられる。御堂であれば、一般の建物と違って最初から建て替えを想定しないであろうから、一般に柱の掘り方の規模が大きくなるようである。実際、他の建物と違い柱の堀方桁行の内柱で48～72㎝と大きく、深さも49～72㎝ある。

しかしながら一方で、柱筋の一致する柱穴4基（P191、P450、P453、P809）が南側で検出されている。これを同一建物と見ると、方3間ではなくなる。これら柱穴は掘り方及び埋土とも非常に似ている。また、仮に方3間の建物と無関係とすると逆にこれらの柱穴に関連する建物が存在しないことになる。因みに金ヶ崎町柏山館跡では、桁行3間×梁行1間の建物に東側、西側、北側に廂を持つ建物（第3グループC1号掘立建造物跡）が検出されている。柏山館においては建て替えが行われた建物群が主流を占めるが、この建物は痕跡がない。報告書においては、建物の性格に関する記述はないが、平面形式及び建て替えの痕跡がない点は共通する。いずれ更に検討を要する建物と言えよう。

第4号掘立柱建物跡は桁行6間×梁行1間の検出である。主軸はN－30°－Eである。同時期に存在していたかどうかは不明であるが塀跡と考えている遺構にほぼ平行すること、また細長い平面形式から、この建物跡は馬屋の可能性があるものと思われる。馬を1頭ずつ分ける間仕切りの柱痕跡は検出されていないが、間仕切り程度であれば浅い柱穴でも構わないため、その後の削平によりなくなったものと考えている。

第5号、6号掘立柱建物跡は大きさからともに付属小屋と思われる。新旧関係は不明であるが、建物規模及び柱の位置が似通っていることから、建て替えが行われたものと思われる。

②堀跡

調査区北端部沿い及び北西端で２条検出した。第１号堀跡は、調査区外に延びるため全体形は不明であるが、概ね線状を呈する。検出長は約47.2ｍで、軸線方向はＮ－58°－Ｗである。開口部幅は遺構全体が検出されていないため不明である。また、北東部付近では池状の広がりを持つ。深さは池状部分で45㎝前後で、東に向かって徐々に傾斜し、深さは70～80㎝程度になる。

第２号堀跡は　第１号堀跡にほぼ直交するように検出された。ほぼ真っ直ぐの線状を呈し、軸線方向はＮ－33°－Ｅである。検出長は６ｍ28㎝で、開口部幅は168㎝～280㎝、深さは約100㎝ある。 断面形はＶ字状を呈し、壁は底面から埋土中頃までやや急に外傾し立ち上がるが、検出面までは緩やかな立ち上がりとなる。また、第２号堀跡の西側すぐ傍により大きな堀が平行して現存しており、第2号堀跡は内堀としての機能も想定される。

遺構の新旧関係については、第１号堀跡が第２号堀跡にぶつかるようにして終わっていることから、第２号堀跡構築後に第１号堀跡が構築され、同時存在していたものと思われる。

なお、第１号、２号堀跡とも埋土の様相から水堀であったと考えられ、防御機能の他、灌漑施設（堰）としての機能を果たしていたものと思われる。

③橋脚跡

第１号堀跡の西端で検出された。遺構が調査区外に延びるため全体形は不明である。検出された柱穴は８基で、陸が４基、堀の法面３基、堀の底面１基である。規模は陸4基が深さ８～15㎝、法面が43～47㎝、底面が26㎝となり、法面が深くなっている。深さの違いは橋の構造に関連するものと思われる。また、橋の幅は柱の間隔から約412㎝前後あったものと推定される。

④塀跡

調査区西側で１条検出された。ほぼ真っ直ぐな溝状の布掘りに一定間隔で柱穴が並ぶ。軸線方向はＮ－35°－Ｅである。検出長は推定部分も含め約18ｍ50㎝で、布掘りの開口部幅は24～44㎝、深さは２～７㎝である。柱痕跡は11基を数えたが、北側部分がP586・P587に続くのか、P717・P720に続くのか判断しかねた。柱穴の規模は開口部径20～44㎝、深さは10～53㎝である。柱間寸法は215㎝（7.1尺）～235㎝（7.4尺）が主となる。柱間の板材及び板痕跡は検出されておらず、詳細な構造は不明である。

(2)　遺物

①陶磁器

東舘が城館として機能していたと思われる16世紀代に該当する陶磁器は、全部で10点が出土している。内訳は中国産、すなわち明代の染付磁器が6点、瀬戸・美濃産の陶器が4点である。

遺構内と遺構外に分けて見ていくと、遺構内から７点出土している。内訳は中国産が５点、瀬戸・美濃産が２点である。中国産は129、168、169、202、203で、器種は129は鉢、168は小型皿、169は皿、202、203は端反皿である。時期は明末と思われる。出土地点は、129は第３号土坑からの出土であるが、近現代の碗も出土していることから流れ込みによるものと思われる。168、169は第1号堀跡からの出土である。202はP70から、203はP189から出土した。P189は第１号掘立柱建物跡を構成する柱穴である。瀬戸・美濃産は165、166で、器種は165が丸皿、166が端反皿もしくは丸皿である。165は大窯編年第２段階、166は大窯編年代１ない

し第２段階に該当する。ともに第１号堀跡からの出土である。

遺構外からは３点の出土である。中国産の磁器が１点、瀬戸・美濃産の陶器が２点である。271は中国産明代の端反碗である。264は美濃産の折縁皿で大窯編年第３段階後半（16世紀末）に該当する。265は瀬戸・美濃産の端反碗ないし丸皿で大窯編年第１段階もしくは第２段階（ともに16世紀前半）に該当する。

②鋳物関連遺物

調査区全体で鋳造炉の炉壁、鋳型が大コンテナ１箱強の他、坩堝（取瓶）、鉄塊が出土した。掲載点数は炉壁21点、鋳型11点、坩堝２点、鉄塊１点である。

遺構別でみると、第１号堀跡からが最も多く、炉壁15点、鋳型４点、坩堝１点、第８号竪穴住居跡から鋳型１点、第10号土坑から炉壁１点１、P442から炉壁１点、P454から鉄塊１点、P515から坩堝１点、P578から炉壁３点、P591から鋳型１点、P750から鋳型３点、P773から炉壁１点、遺構外から鋳型２点である。この内、第８号竪穴住居及び第10号土坑から出土したものに関しては、概述のとおり直接遺構に伴わないものと思われる。

〈炉体・羽口〉

溶解炉を構成する炉壁は21点掲載した。166は最も大きい破片である。推定胴径41㎝、内径37㎝である。内面はガラス化した鉄も付着しておらず、コシキの上部と思われる。これは水沢市鹿野遺跡で出土した18世紀後半代の炉体と同じ内径である。

178、215は炉体の口唇部と考えられる。熱はほとんど受けていない。215は輪積み成形する際の指圧痕が残る。

182は羽口もしくは羽口装着孔である。推定径約８㎝である。羽口本体と想定すると、推定径から足踏みによる送風装置が用いられたものと思われる。また、羽口装着孔と想定すると、さらに羽口が装着されることになるため、羽口の内径は細くなるであろう。残念ながら、羽口と思われる遺物は出土していない。炉体への挿入角度は30～40°前後と思われるが、不明である。

37は炉鉢である。内面に黒褐色のガラス化した鉄滓が付着する。木炭の噛み込みも見られる。

〈鋳型〉

全部で11点の出土であるが、鋳造された製品が何であるかは不明である。

277は円形状を呈し、推定外径24.5㎝ある。粗真土、中真土、仕上げ真土（上真土）の鋳物土が明瞭に確認できる。また、湯を流した還元面があり、実際に使用されたものであることが分かる。平釜のつばの可能性もあるが、不明である。187は鋳物の型離れや肌合いをよくするために、木炭粉や黒鉛を水や粘土汁（はじろ）で溶いた黒味が塗られている。188は粗真土の段階で製作を放棄したものであろうか。円形状を呈し、推定径は13.2㎝である。

〈坩堝〉

２点の出土である。189は推定口径17.4㎝、厚さは2.1㎝である。213は坩堝（取瓶）である。長さ11.7㎝、幅6.4㎝、凹部分は径6.8×5.2㎝、深さ3.6㎝である。重さは231.35ｇある。内面は鉄（湯）が流し込まれたため還元しており、先端部には鉄錆が付着する。

〈鉄塊〉

210は碗型状を呈する。上面は直径9.8㎝の円形で、底面は直径8.1㎝でほぼ平らである。最大厚は2.9㎝である。表面は赤錆に覆われ、いたるところに大きな亀裂が見られる。重さは275.82ｇである。分析鑑定の結果、

操作の素材として使われた可能性が指摘されている。

なお、工房跡と考えられる遺構については検出されていない。第14号土坑は底面に焼土が検出され、第17号土坑ではボウル状を呈した底面に炭化物が多量に混入していたが、鋳物関連遺物の出土が埋土及び周辺からないため、確証を得るに至っていない。

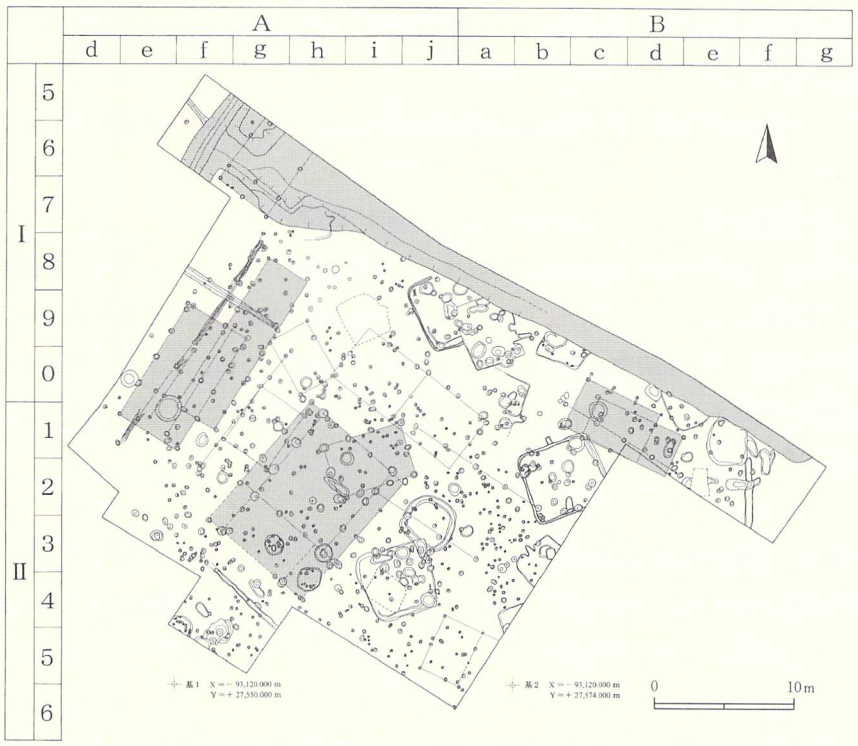
(3) 小結

①東舘の内部構造について（軸線方向から）

東舘は、概述のとおり安永風土記に記述されている城館ではあるが、詳細についてはこれまで不明であった。『岩手県中世城館分布調査報告書』によると、付近一帯を東舘と呼び、西郭は主郭で「内館」といい、東郭を「東館」という。西郭・東郭を含めた全体の規模は東西200m、南北180mとされている。

今回の調査は舘内東郭部分の調査であり、検出された遺構の中で中世と考えられる遺構は次のとおりである。また、軸線方向も併記した。

第１号掘立柱建物跡　N－40°－E
第２号掘立柱建物跡　N－75°－E
第３号掘立柱建物跡　N－31°－E
第４号掘立柱建物跡　N－30°－E
第５号掘立柱建物跡　N－16°－E
第６号掘立柱建物跡　N－15°－E
第１号堀跡　N－58°－W
第２号堀跡　N－33°－E



第67図　中世遺構分布図

第１号塀跡　　N－35°－E

第１号橋脚跡　　N－38°－E

これらから軸線は概ね東へ30°前後傾いているものが多いことが分かる。とりわけ第３号、４号掘立柱建物跡第２号堀跡、第１号橋脚跡、第１号塀跡（以上網掛け部分）は30～38°内の極僅かな範囲に収まる。

さらに、第２堀跡、第１号橋脚跡、第１号塀跡に限ってみてみることにする。仮に第２堀跡を真っ直ぐ延長した場合、塀跡との間隔は約６ｍとなるが、これは道路跡の可能性もあると思われる。その間の検出された柱穴数が僅かであることもその可能性を示唆していると言えよう。しかしながら、同一時期存在していたことを裏付けることは非常に困難であり、あくまで可能性の一つとして捉えておきたい。

②存続年代及び性格

今回発掘調査を行った東舘跡の存続年代を、出土した遺物の中で年代観の推測できるものとして国産の瀬戸・美濃窯陶器と中国産の時期がある。国産の瀬戸・美濃窯陶器は大窯編年では第1段階～3段階に相当し、概ね16世紀前半～末頃の製品として差し支えあるまい。中国産は白磁と染め付け磁器が出土しているが、流通品として市場から入手した品と推測すると、生産年代から遺跡年代の上限を推測する資料とはなりうるが遺跡の実年代の決定資料とはなり得ない。したがって、総合的に判断すると、東舘跡が中世城館として機能したのは国産陶器の年代観から16世紀前半～末期に位置づけられる。これは、西郭である内舘西側に曹洞宗の光明山安養寺の開創年永禄元（1558）年とも合致する。

また、今回調査された東舘の東郭の特徴として、中世代の陶磁器の出土点数が10点と少なく、また総じて掘立柱建物跡の建て替えの形跡があまり見受けられなかったことが挙げられる。このことは、もともと主郭は西郭の内舘であり、今回の調査範囲は主郭に対する東郭であることを物語り、また、その性格及び役割を示すものとは言えまいか。

３．おわりに

今回の発掘調査の結果、東舘Ⅱ遺跡は奈良時代中頃～平安時代前半の集落跡及び中世城館跡を主体とする遺跡であること明らかになった。竪穴式住居は８世紀中頃～９世紀代で、主に８世紀後半が多い。その占地から集落はさらに広く分布していたものと思われる。中世では、掘立柱建物跡や堀跡の他、塀跡や橋脚跡と想定される遺構が検出され、これまで詳細不明であった東舘の構造の一端を窺い知ることができた。また、鋳物関連の遺物が出土したことにより、16世紀代に溶銑を作り、鋳型に注ぎ込んで鋳造鉄器を造る操作が行われていたことが確実になった。

今後、周辺地域及び近隣の中世城館跡が調査されることにより、本遺跡の特徴及び性格がより明確化するものと思われる。

〈参考文献〉

相原康ニ（1981）：「岩手県南部における古代の土器編年試案」『岩手県文化財発掘調査報告書第60集』岩手県教育委員会

高橋信雄・小田野哲憲・熊谷常正（1982）：『岩手の土器』岩手県立博物館

八木光則（1992）：「古代斯波群と爾薩体の土器様相」第18回古代城柵官衙遺跡検討会資料集

伊藤博幸（1998）：「東北地方の古代集落　北上盆地南部の様相」第24回古代城柵官衙遺跡検討会資料集

瀬戸市（1993）：『瀬戸市史　陶磁史篇四』瀬戸市史編纂委員会

㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1999）：『芋田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第304集

㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1999）：『台太郎遺跡第15次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第309集

㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1996）：『小幅遺跡第４次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第265集

㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1996）：『小幅遺跡第２次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第244集

㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1999）：『熊堂Ｂ遺跡第５次・台太郎遺跡第16次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第293集

㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1999）：『本宮熊堂Ｂ遺跡第４次・鬼柳Ａ遺跡第４次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第308集

㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1999）：『上尾田の館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第300集

㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1996）：『松本館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第256集

㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1996）：『龍ヶ馬場遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第243集

㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1996）：『沢田・仙人東遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第230集

㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1997）：『白井坂Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第248集

㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1988）：『石田Ⅱ・寺領・西光田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第130集

㈶岩手県埋蔵文化財センター（1982）：『金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書（Ⅲ）』岩手県埋文センター文化財調査報告書第44集

㈶水沢市埋蔵文化財調査センター（1996）：『杉の堂遺跡』水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書第７集

㈶水沢市埋蔵文化財調査センター（1997）：『杉の堂遺跡群』水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書第９集

㈶水沢市埋蔵文化財調査センター（1998）：『杉の堂遺跡群』水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書第10集

㈶水沢市埋蔵文化財調査センター（1998）：『鹿野遺跡』水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書第11集

水沢市教育委員会（1979）：『林前遺跡』岩手県水沢市文化財報告書第３集

水沢市教育委員会（1982）：『杉の堂遺跡』岩手県水沢市文化財報告書第５集
水沢市教育委員会（1983）：『杉の堂遺跡』岩手県水沢市文化財報告書第10集
水沢市教育委員会（1987）：『水沢遺跡群範囲確認調査』岩手県水沢市文化財報告書第16集
水沢市教育委員会（1987）：『柳沢館遺跡』岩手県水沢市文化財報告書第28集
水沢市教育委員会（1995）：『水沢遺跡群範囲確認調査』岩手県水沢市文化財報告書第29集
水沢市教育委員会（1997）：『水沢遺跡群範囲確認調査』岩手県水沢市文化財報告書第31集
水沢市教育委員会（1998）：『水沢遺跡群範囲確認調査』岩手県水沢市文化財報告書第32集
江刺市教育委員会（1997）：『宮地Ⅱ遺跡発掘調査報告書（Ａ～Ｄ区）』岩手県江刺市埋蔵文化財調査報告書第15集
江刺市教育委員会（1996）：『平成７年度市内遺跡発掘調査報告書』岩手県江刺市埋蔵文化財調査報告書第14集
江刺市教育委員会（1997）：『平成８年度市内遺跡発掘調査報告書』岩手県江刺市埋蔵文化財調査報告書第16集
金ヶ崎町教育委員会（1990）：『柏山館跡遺跡』岩手県金ヶ崎町文化財調査報告書第18集
金ヶ崎町教育委員会（1991）：『揚場古墳・五葉館跡遺跡』岩手県金ヶ崎町文化財調査報告書第21集
金ヶ崎町教育委員会（1993）：『妻根遺跡』岩手県金ヶ崎町文化財調査報告書第27集
金ヶ崎町教育委員会（1996）：『本宮遺跡』岩手県金ヶ崎町文化財調査報告書第34集
金ヶ崎町教育委員会（1997）：『八幡館跡遺跡』岩手県金ヶ崎町文化財調査報告書第37集
金ヶ崎町教育委員会（1999）：『揚場94遺跡』岩手県金ヶ崎町文化財調査報告書第42集
金ヶ崎町中央生涯教育センター（1994）：『金ヶ崎の城・館・柵』平成５年度企画展図録
岩手県教育委員会（1993）：『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成４年度）』岩手県文化財調査報告書第93集　※寺田遺跡
㈶福島県文化センター（1989）：『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅰ』福島県文化財調査報告書第215集
㈶福島県文化センター（1997）：『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅴ』福島県文化財調査報告書第333集
仙台市教育委員会（1983）：『富沢水田遺跡１』仙台市文化財調査報告書第67集
仙台市教育委員会（1987）：『南小泉遺跡　第14次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第109集
仙台市教育委員会（1990）：『南小泉遺跡　第16～18次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第140集
仙台市教育委員会（1998）：『南小泉遺跡　第26次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第225集
宮城県教育委員会（1993）：『上野館跡』宮城県文化財調査報告書第156集
福島県立博物館（1993）：『企画展　発掘ふくしま』
北九州市立考古博物館（1988）：『北九州の中国陶磁－出土品にみる古代の日中交流－』
窪田蔵郎（1983）：『考古学ライブラリー15　製鉄遺跡』ニュー・サイエンス社
平井勝（1991）：『考古学ライブラリー64　弥生時代の石器』ニュー・サイエンス社
大橋康二（1989）：『考古学ライブラリー55　肥前陶磁』ニュー・サイエンス社
五十川伸矢（1996）：「古代から中世前半における鋳鉄鋳物生産」『季刊考古学第57号』雄山閣出版
赤沼英男（1996）：「城館跡出土遺物の組成からみた鉄器製作とその流通」『季刊考古学第57号』雄山閣出版
高橋與右衛門（1990）：「掘立柱建物跡の間尺と時代性」『紀要Ⅸ』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
秋田県埋蔵文化財センター（1999）：「堂の下遺跡　現地説明会資料」
大阪府教育委員会（1993）：『河内平野遺跡群の動態Ⅵ』

付篇

分析・鑑定

東舘Ⅱ遺跡出土鉄関連遺物の金属考古学的調査結果

岩手県立博物館　赤沼　英男

1　はじめに

岩手県水沢市に立地する東舘遺跡は、中世城館跡といわれている。1999年に行われた発掘調査によって、奈良および平安時代の竪穴住居跡、平安時代の竪穴状遺構、円形周溝が検出された。さらに、遺跡内の溝跡（堀と推定されている）からは、16世紀代と推定される美濃産陶器とともに鉄滓や炉壁が確認され、溝跡に近接するピットからは鋳型や坩堝、および取瓶が出土した。考古学の発掘調査結果をとおして、16世紀代に鋳造が実施されていた可能性の高いことが明らかとなったわけである[1)]。

出土した鉄関連遺物を金属考古学的に調査した結果、粘土状物質に植物繊維を混ぜ合わせて築炉した平面が円形の溶解炉を用いて溶銑を造り、それを取瓶に受け鋳型に流し込む鋳造操作が行われていたものと解釈された。以下では金属考古学的調査によって得られた知見について述べる。

2　調査資料

金属考古学的調査を行った資料は、SD２溝跡出土鉄滓・炉壁（分析番号No.１、No３）、454ピット内出土椀形滓（分析番号No.２）、750ピット内出土鋳型（分析番号No.４）、515ピット内出土取瓶（分析番号No.５）の合計５点の遺物である。資料の肉眼観察結果は表１に示すとおりであるが、特に注目すべき点として以下の３点を挙げることができる。

1)　No.１鉄滓はゆるやかな曲率を有する。凸部分には灰褐色を呈する粘土状物質が付着しており、その内部に黒褐色のガラス化した鉄滓が付着している。鉄滓のところどころに赤錆が固着しており、木炭の噛み込みもみられた。残存する粘土状物質は被熱によって発泡し部分溶融していたが、植物繊維が混在しているという点で資料No.３とよく似ており、炉の一部と推定された。

2)　No.２椀形滓は全体としてるつぼ状を呈する。底面はほぼ平滑な直径8.1cm、上面は直径が9.8cmの円形で底面よりも広く、中心に向かって窪んでいる。厚さは 2.9cm、資料表面はほぼ一様に赤錆で覆われ、いたるところに大きな亀裂がみられた。後述するとおり、金属考古学的調査の結果この資料は鉄塊であることが判明したが、以下ではその判定が確定するまでの間、考古学の肉眼観察結果に基づき鉄滓と呼ぶことにする。

3)　No.３炉壁は灰褐色を呈し、ゆるやかに湾曲している。凹面にはところどころに薄い赤錆層があり、炉材には植物繊維の混在が確認された。植物繊維を混ぜ合わせて築炉された炉壁の一部と推定される。顕著な発砲や部分溶融がみられなかったため、炉内反応部分から遠いところにあったとみることができる。

上述の肉眼観察によって、粘土状物質に植物繊維を混ぜ合わせたものを素材として、平面が円形もしくはそれに近い構造となるような炉を造り、木炭の燃焼熱を熱源とした銑鉄の溶解と鋳造操作が行われていたものと推測された。以下では、No.１鉄滓に残存する粘土状物質とNo.３炉壁、およびNo.２椀形滓の組成に着目しつつ、金属考古学的調査とその考察を進めることとする。

3　調査方法

No. 1鉄滓については凸部表面に残存する粘土状物質とその凹部に付着する黒褐色の鉄滓部分から、No. 3炉壁、No. 4鋳型、およびNo. 5取瓶についてはダイヤモンドカッターを使って図1、図2、および図4に示す位置より0.5～1gの試料片を摘出した。一方、No. 2椀形滓についてはまずX線透過観察によって内部構造を確認し、均一な資料かどうかを確かめた後、同様にして図3に示した部分から試料片を切り出した。

No. 1およびNo. 2椀形滓から摘出した試料片については2分し、一方を組織観察に、もう一方をX線回折、化学成分分析に、No. 3炉壁、No. 4鋳型、No. 5取瓶については化学成分分析と示唆熱・熱重量同時分析に供した。組織観察用試料は樹脂に埋め込みダイヤモンドペーストを使って研磨した後、金属顕微鏡で観察し、さらに残存する鉱物をエレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー（EPMA)で分析した。

X線回折、化学成分分析、および示唆熱・熱重量分析については表面に付着する土砂等を除去し、メノー乳鉢を使って粉砕した後分別し、それぞれの調査に付した。なお、化学成分分析は表2～表4に示す13成分を誘導結合プラズマ発光分光分析法（ICP-AES法)、M.Feを鉄鉱石-金属鉄定量法、Fe0を鉄鉱石-鉄（Ⅱ）酸可溶性滴定法により求めた。

4　調査結果

4－1　No. 1鉄滓およびNo. 2椀形滓の組織観察結果ならびにX線回折結果

No. 1鉄滓（図1a）凹部に固着する黒褐色の鉄滓から摘出した試料片（図1aSm_1）は、その全域がガラス化し、ところどころに鉄粒が観察された（図1b$_1$)。マクロ組織の領域R1内部のEPMAによる組成像(COMP）と定性分析結果によって、基質は酸化鉄を微量に含むK_2O-CaO-Al_2O_3-MgO-SiO_2系のガラス質けい酸塩(S)であることがわかった（図1b$_2$）に示す。X線回折パターンには石英（Q)のピークが検出されたため(図3a)、石英が残存していたことは確実である。領域R2にも鉄粒がみられ、EPMAによる組成像によってレーデブライト組織と推定された2）（図1b$_3$)。

No. 1鉄滓凸部表面に残存する粘土状物質から摘出した試料片（図1c$_1$）には、ガラス化した基質の中に鉄粒ととに暗灰色鉱物（Q）が観察され、EPMAによる分析によって石英と判定された（図1c$_2$)。図3bのX線回折パターンにも明確な石英のピークが確認され、他にアルバイト（A）と思われるピークが認められた。組織観察結果とよく整合する結果である。 図2aのX線透過写真像（図2b）によると、No. 2椀形滓には幾筋かの大きな亀裂がみられるが、球形の空隙はみられず、ほぼ均一な資料とみることができる。摘出した試料片は緻密な錆で構成されていた（図2c)。図3cのX線回折パターンには、ゲーサイト(FeOOH)のピークが確認され、通常鉄滓に起因するウスタイト（化学理論組成FeO)、鉄かんらん石〔2FeO・SiO_2〕、ウルボスピネル（Fe_2TiO_4）やイルメナイト(FeTiO2）等の鉄チタン酸化物は未検出にあった。肉眼観察結果によって、No. 2は椀形滓とされたが、金属考古学的調査の結果、錆化が進んだ鉄塊であることが明らかとなったわけである。以下ではNo. 2を鉄塊と呼ぶことにする。

4－2　摘出した試料片の化学組成

No. 1鉄滓をはじめとする5点の資料から摘出した10試料片の化学組成を表2から表4に示す。No. 1鉄滓黒褐色部のT.Feは4.93%、Si、Alはそれぞれ31.0%、10.2%含有されている。T.Feの多くは、鉄滓中に混在する鉄粒または錆に起因すると推定される（表2)。黒褐色部分に残存する錆を分別し分析した結果、35.41%のT.Fe、0.477%のPが検出された。操作に使用された鉄には相当量のPが含有されていた可能性が

高い。一方、No. 2鉄塊から摘出した2つの試料片のT.Feはそれぞれ44.28、51.26％、Pは0.149、0.249％、Si、Alはそれぞれ3.80～6.94％、0.919～2.36％にあった。鉄塊が錆化したものであるとした組織観察結果とよく整合する（表3）。

No. 1鉄滓凸部表面に残存する粘土状物質ならびにNo. 3炉壁のT.Feはいずれも3～5％、Si、Alはそれぞれ26～32％、10％程度にあり、化学組成が近似している。No. 4鋳型ならびにNo. 5取瓶はSi、Alを主成分とし、数％のT.Feが含まれていた（表4）。

4－3　示差熱・熱重量変化曲線の測定

No. 3炉壁から摘出した試料片の示差熱・熱重量変化曲線には800℃から始まり1500℃におわるブロードな吸熱のピークが、No. 4取瓶ならびにNo. 5鋳型から摘出した試料片では、それぞれ1200～1600℃に、1000～1300℃にやはりブロードな吸熱のピークがみられた（図4）。図4に従うと、No. 3炉壁は1200℃近辺、No. 4取瓶は1350℃近辺、No. 5鋳型にあっては1100℃近辺で溶融もしくは部分溶融状態となったものと推定される。

5　考察

No. 1鉄滓凸部に残存する粘土状物質は灰褐色を呈し、ところどころに植物繊維の混在が確認された。熱の影響によって発泡し、部分溶融している。摘出した試料片はほとんどがガラス化しており、わずかに石英の残存が確認された。この試料とNo. 3炉壁とは、外観形状がよく似ている。No. 3炉壁にも薄い錆層が付着していること、およびそれぞれの資料から摘出した試料片の化学組成も非常に近似していることを考え合わせると、粘土に砂と植物繊維を混ぜて造った素材で築炉した炉壁材の一部であったとみることができる。なお、岩手大学教育学部土屋信高博士により別途行われた岩石・鉱物学的研究によって、No. 1鉄滓付着粘土状物質、No. 3炉壁はともに粘土に安山岩質火山灰起源の砂を混ぜたものを素材とした可能性のあることが指摘されている。また、それぞれの資料の外観形状から炉の平面は円形を呈しているものと推定された。

資料No. 1凹部に固着する鉄滓はほぼガラス化し黒褐色を呈していた。摘出した試料片にはところどころに石英がみられ、錆とともにレーデブライトからなる鉄粒も観察された。鉄滓はSi、Alを主成分としており、微量成分についても凸部に残存する粘土状物質、あるいはNo. 3炉壁とほぼ同レベルにある。以上の点をふまえると、ガラス化した鉄滓は炉材の一部が溶融することによって生成したものである可能性が高い。No. 1鉄滓の炉壁材は2.5cm厚、No. 3炉壁は3cm厚で後者に比べ5mm程度薄い。このことも炉壁内壁の一部が溶融したとする見方を支持している。

以上の調査結果を総合すると、粘土に少量の安山岩質火山灰起源の砂と植物繊維を混ぜ、平面が円形もしくはそれに近い形状の炉を造り、炉内に銑鉄を挿入して溶銑の生成を計った可能性が高いと判断される。No. 3炉壁の示差熱・熱重量変化曲線には、1200℃近辺にブロードな吸熱反応のピークが認められた。炉壁材の溶融もしくは部分溶融状態となる温度がこの付近、もしくはそれ以上にあったとみることができる[3)]。4.26％Cの融点は1153℃であり[2)]、炉内温度をそれ以上に維持できれば溶銑を蓄えることが可能である。示差熱・熱重量変化曲線は、炉材が複数回にわたる溶解操作に十分耐え得ることを示している。

ところで、出土遺物の中には、曲率を有し凸部が黒褐色に溶融した資料が見いだされている（図5）。羽口を装着した孔の可能性がある。凸部が熱の影響を受けているため、装着孔自体が炉内にあったとみなければならない。炉壁を貫通して、羽口装着孔が設備され、そこに外径約8cmの羽口が設置されたものと思わ

れる。これに該当する羽口が発見されれば、その可能性が高まるであろう。

No. 4 鋳型から摘出した試料片は、No. 3 炉壁同様Si、Alを主成分としており、数％のFeを含有していた。化学組成はNo. 3 炉壁ならびにNo. 1 鉄滓粘土状物質と近似する。No. 5 取瓶から摘出した試料片もNo. 4 とほぼ同じである。No. 4 、No. 5 の示差熱・熱重量変化曲線には、それぞれ1200～1600℃、1000～1300℃にブロードな吸熱のピークが認められた。溶銑を入れるのに十分耐えうる素材であったとみることができる。

以上の考察によって、東館Ⅱ遺跡では16世紀代に、溶銑を造り鋳型に注ぎ込んで鋳造鉄器を造る操作が行われていたことが確実となった。最後に問題となるのが、製作された製品と素材となった銑鉄の入手方法である。

出土した鋳型に完形品はなく、鋳込み面が円形を呈し平滑な鋳型（No. 4 ）の他に、鋳込み面が凹凸を有する鋳型（図 6 ）も検出されている。No. 5 に示すように、小型の取瓶も確認されていることをふまえると、形状の異なる数種の鋳造鉄器が製作されていた可能性がある。この点についてはほぼ同時代に比定される館跡から出土した鋳造鉄器の形状と鋳型の比較を行い、製作された鉄器の器形を推測する必要がある。

一方、素材となった銑鉄の入手方法については以下の二つが想定される。一つは遺跡内もしくはその近傍で生産された、もう一つは他地域からの供給である。金属考古学的調査によって鉄塊であることが確認された資料No. 2 はその形状を考慮すると、銑鉄であった可能性がある。錆化が進んでいて健全な地金の状態を推定できる組織を見いだすことができなかったため、鋼塊か銑鉄塊かの識別は困難であった。No. 1 鉄滓中に残存する鉄錆、No. 2 鉄塊にはともに相当量のPが含有されており、Ｎｉ、Coといった微量成分もほぼ同レベルにあることをふまえると、No. 2 鉄塊が操作の素材として使用された可能性がある。最近発見されている他の鋳造遺跡から検出された銑鉄塊の形状や組成と比較し、まずその点について明確にする必要があろう。そのうえで遺跡内およびその周辺に賦存する製鉄原料の有無とその組成を比べ、遺跡内、もしくはその周辺での生産の可能性を検討することが不可欠である。ただし、西日本において確認された中世の鋳造遺跡において、銑鉄の供給を他地域に依存していた可能性が高いという調査結果が得られていること[4)]、銑鉄の流通が中世初頭にまで遡る可能性があるという最近の文献史学の調査結果[5)]を考慮すると、銑鉄の広域的流通という要素を視野に入れてその問題の解明を計る必要があると筆者は考える。今後の研究の進展に期待したい。

註

1) 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　朝倉雄大氏からのご教授による。

2) 『鉄鋼便覧Ⅰ基礎』丸善株式会社、1983、p.79。

3) 調査した試料片は実際に使用され部分溶融していた。未使用の試料片を使って分析すれば調査結果よりも溶融開始温度は上がるものと思われる。

4) 五十川伸矢「古代から中世前半における鋳鉄鋳物生産」季刊考古学、57、1996年、ｐ.57-60。

5) 福田豊彦「近世前期,和鉄の生産と流通の基本形態」たたら研究、39、1999年、ｐ.15-24。

表１　東舘Ⅱ遺跡出土資料の概要

No.	資料名	検出遺跡構		外観上の特徴
1	鉄滓	ＳＤ２	溝跡中段	ゆるやかな曲率を有する厚さ約2.5㎝の粘土状物質（植物繊維を含む）の凹面に、黒褐色の鉄滓が付着している。鉄滓にはところどころに木炭と錆が混在している。木炭を熱源とする操作に伴って生成した資料と推定される。
2	椀形滓	Ｐ454	埋土	外径約9.5㎝、深さ約2.8㎝の容器の中にあった金属が錆化したものと思われる。
3	炉壁	ＳＤ２	溝跡中段	植物繊維を含む粘土状物質で製作されており、厚さは約３㎝、緩やかに湾曲する。凸面は灰褐色、凹面は灰褐色～黒褐色を呈している。部分溶解しところどころ気孔がみられ、一方の面には薄い鉄錆層も付着している。
4	鋳型	Ｐ750	埋土	円形の板状製品を製作する際に使用されたものと思われる。厚さは約３㎝で鋳込み面に細かい砂と粘土を混ぜて作ったと思われる物質が薄く塗布されている。外面にはところどころに籾殻跡が見られる。鋳型を製作する際に籾殻を混ぜた可能性がある。
5	取瓶	Ｐ515	埋土	外面に鉄錆が付着している。少量の溶銑をわけとる際に使用したものと思われる。

表２　No.１鉄滓の分析結果

資料名	化学成分（mass％）														
	T.Fe	FeO	M.Fe	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V	K	鉱物組織
鉄滓黒褐色部	4.93	0.28	0.44	<0.001	0.069	0.044	0.002	0.004	0.631	31.0	1.68	10.2	1.13	0.018	2.25	Q
鉄滓混在部	35.41	-	-	<0.001	0.023	0.477	0.002	0.002	0.154	11.2	0.404	3.38	0.316	0.015	-	-

注１）FeOは鉄鉱石－酸可溶性鉄（Ⅱ）法、M.Feは鉄鉱石－金属鉄定量法、他はICP-AES法による。

注２ Qは石英

表3　化学組成

	化学成分（mass%）												
資料名	T.Fe	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V	K
椀形滓内側	44.28	<0.001	0.021	0.149	0.003	0.005	0.077	6.94	0.105	2.36	0.166	0.007	-
椀形滓外側	51.26	0.001	0.008	0.249	0.008	0.010	0.036	3.80	0.121	0.919	0.074	0.010	0.027

注）分析はICP-AES法による。

表4　粘土状物質の化学組成

		化学成分（mass%）													
No.	資料名	T.Fe	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V	K	Igloss
1	鉄滓粘土	3.12	<0.001	0.083	0.065	0.006	0.004	0.908	31.8	3.07	10.4	1.56	0.018	-	-
3	炉壁内側	3.45	<0.001	0.024	0.278	0.002	0.003	0.399	27.9	0.632	10.2	0.590	0.016	-	-
3	炉壁外側	4.47	<0.001	0.020	0.242	0.004	0.003	0.314	26.7	0.668	9.97	0.642	0.014	1.17	10.2
4	鋳型内側	4.47	<0.001	0.058	0.074	0.004	0.003	0.347	28.8	1.55	9.41	1.30	0.015	-	-
4	鋳型外側	3.33	<0.001	0.028	0.047	0.004	0.003	0.276	29.3	0.878	10.7	0.897	0.014	1.53	2.49
5	取瓶	6.25	<0.001	0.062	0.044	0.005	0.003	0.364	28.4	1.59	9.59	1.35	0.014	-	1.46

注）分析はICP-AES法による。

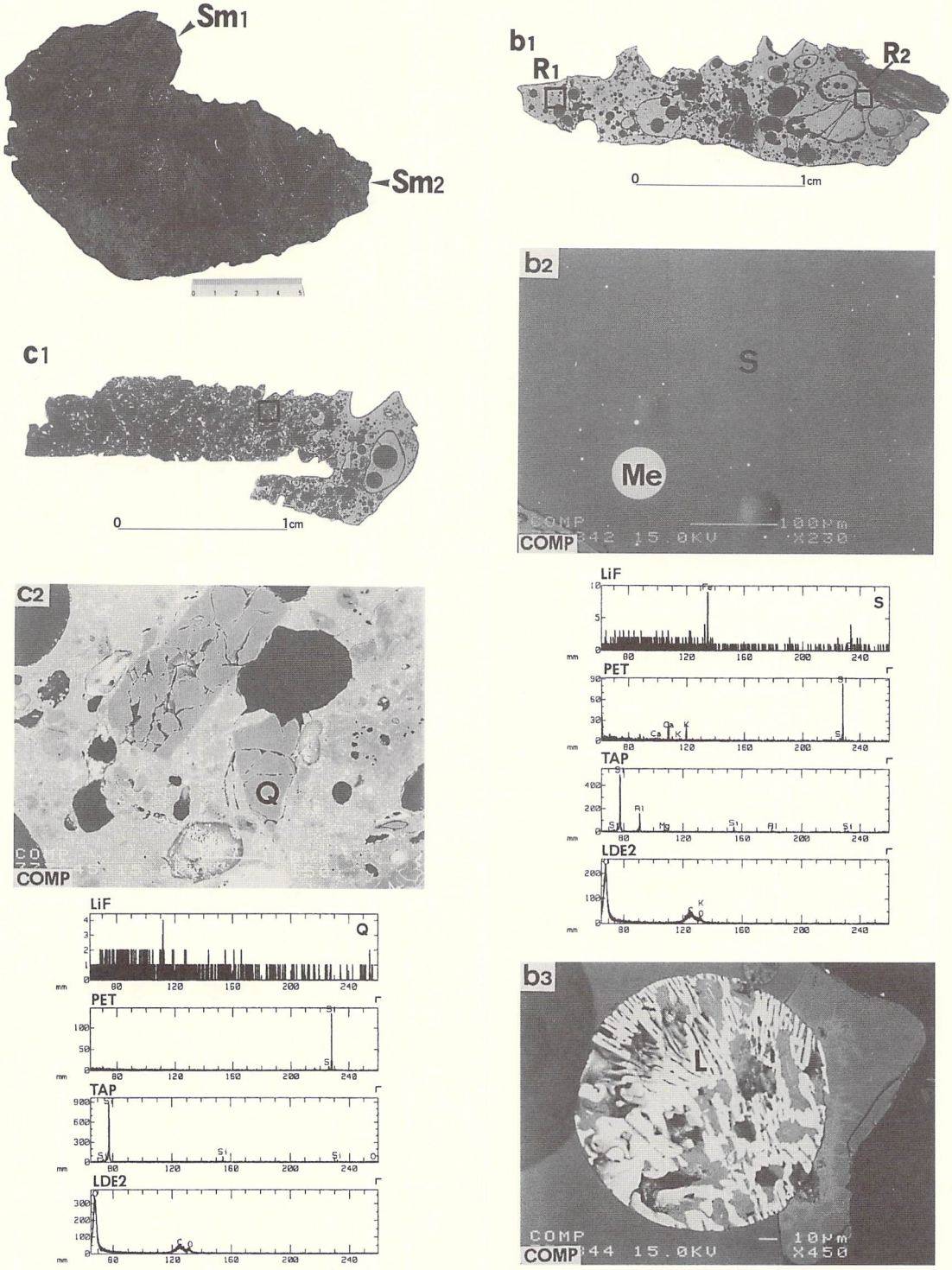


図１　No.1鉄滓の外観と摘出した試料片の組織観察結果
　a；外観、矢印は試料片摘出位置。b_1・c_1；aのSm_1、Sm_2のマクロ組織。b_2・b_3；b_1領域R_1、R_2内部のEPMAによる組成像(COMP)。Sはガラス質けい酸塩。Meは鉄粒。Lはレーデブライト組織。c_2；c_1領域R_1内部のEPMAによる組成像(COMP)、Qは石英。

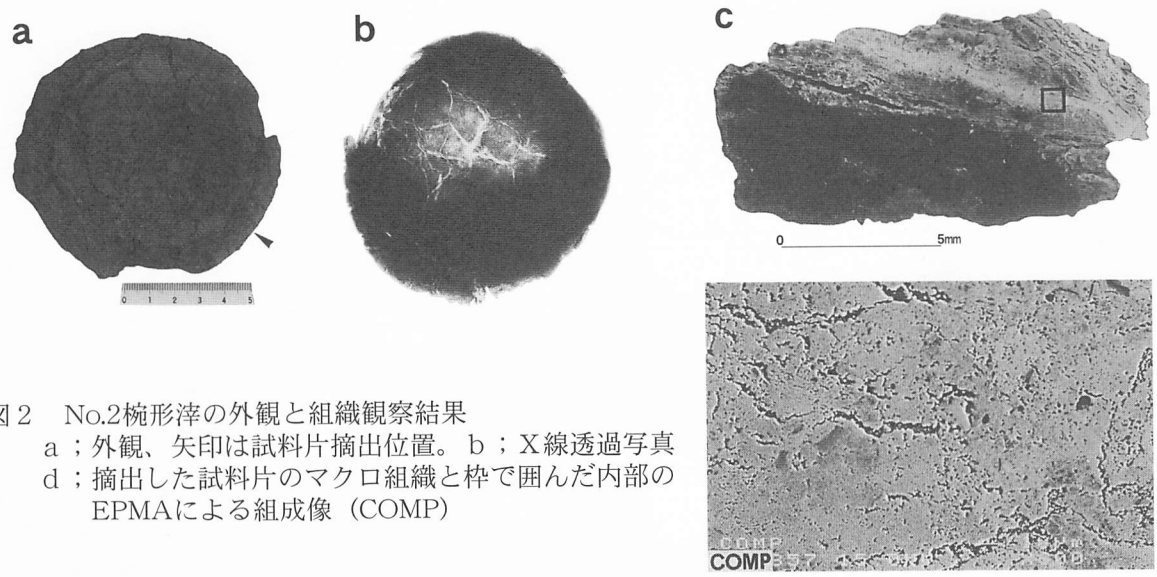


図２　No.2椀形滓の外観と組織観察結果
ａ；外観、矢印は試料片摘出位置。ｂ；Ｘ線透過写真
ｄ；摘出した試料片のマクロ組織と枠で囲んだ内部の
EPMAによる組成像（COMP）

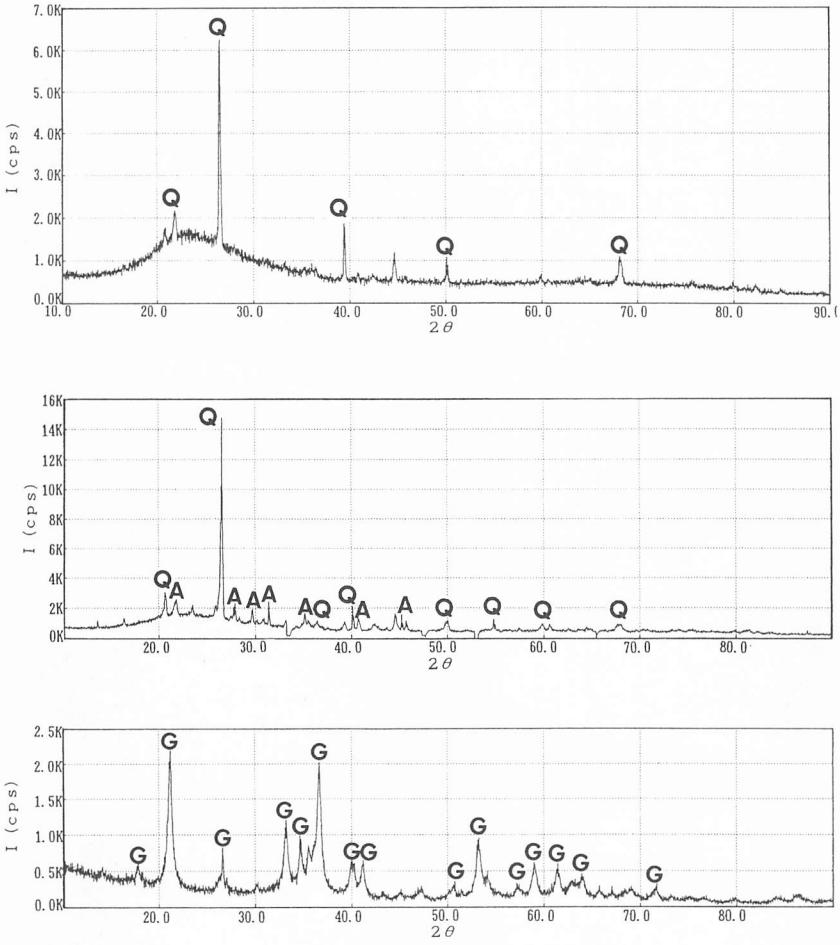


図３　No.1鉄滓ならびにNo.2椀形滓から摘出した試料片のＸ線回折像
ａ；No.1黒褐色部分、ｂ；No.1凸部残存粘土状物質、ｃ；No.2椀形滓
Ｑ；石英、Ａ；アルバイト、Ｇ；ゲーサイト（FeOOH）

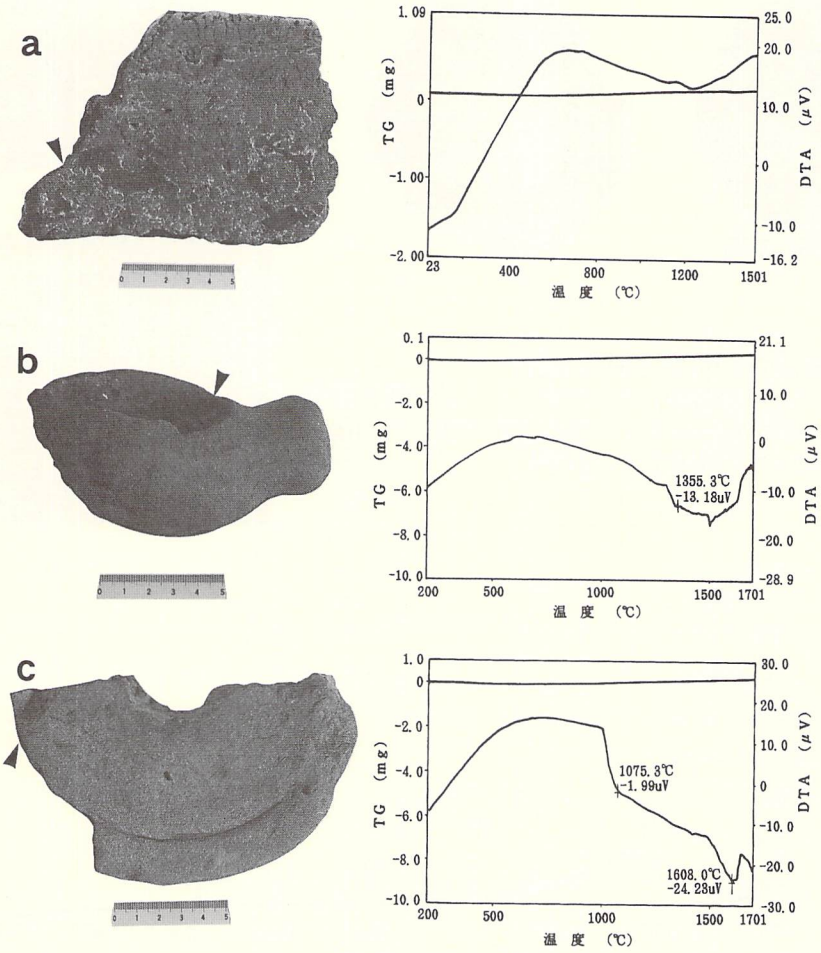


図４　摘出した試料片の示差熱・熱重量変化曲線
ａ；No.3炉壁、ｂ；No.4取瓶、
ｃ；No.5鋳型。測定はアルゴンガス気流下で実施。
矢印は試料片摘出位置。

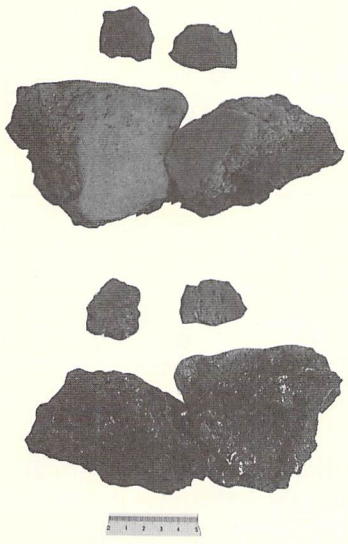


図5　羽口装着孔と思われる遺物の外観

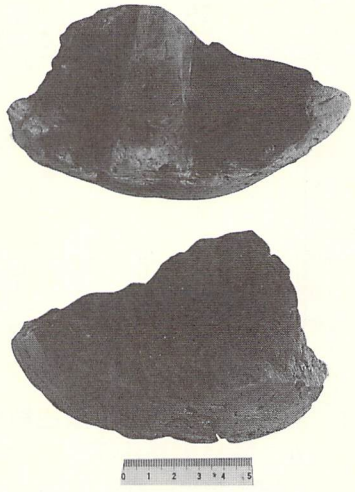


図６　鋳型の外観

写　真　図　版

遺　跡　遠　景

遺 跡 全 景 ①

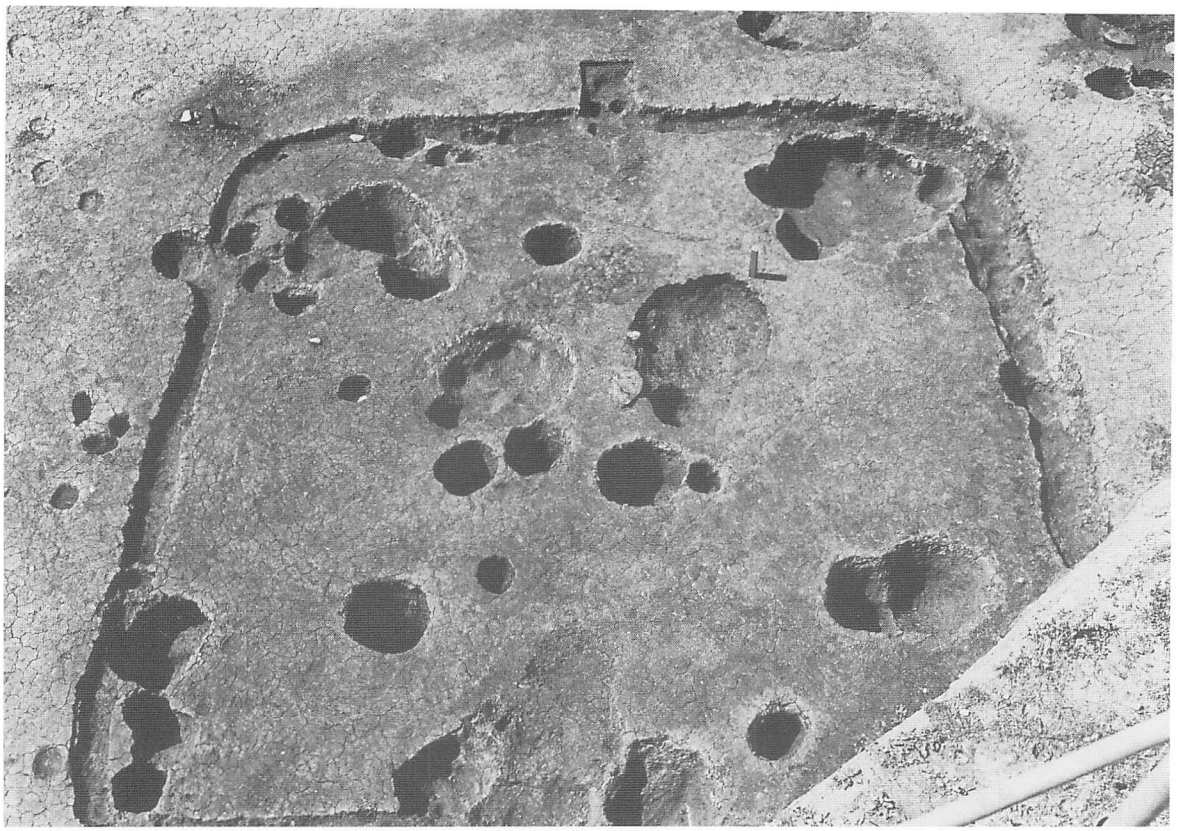
写真図版1　遺跡遠景・遺跡全景①

遺 跡 全 景 ②

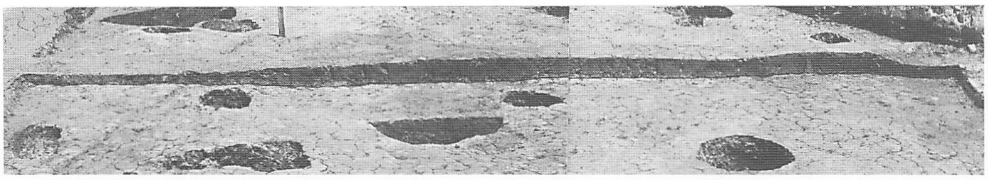
基本土層①(A－A′)

基本土層②(B－B′)

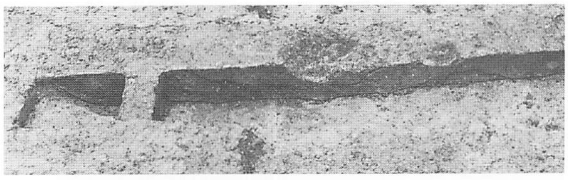
写真図版2　遺跡全景②・基本土層



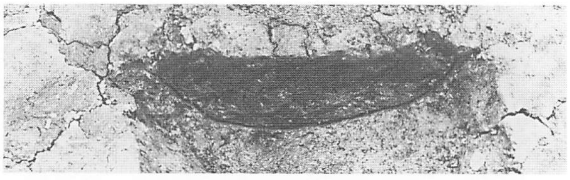
平　　面



土層断面



煙道部断面



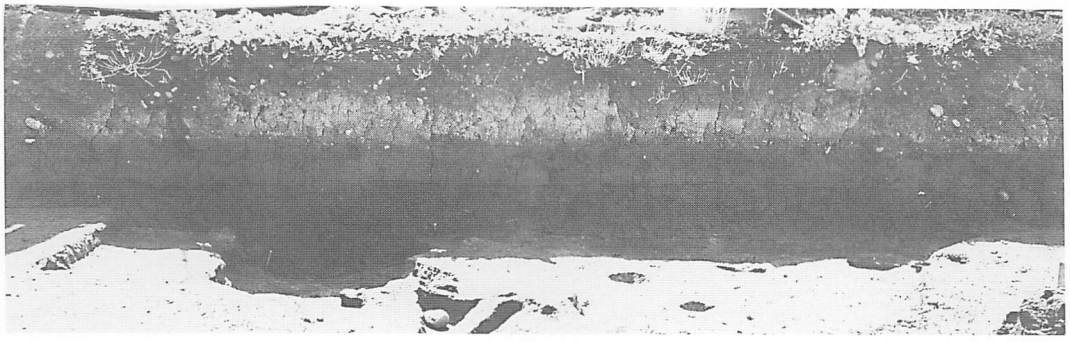
周溝断面

1号土坑平面

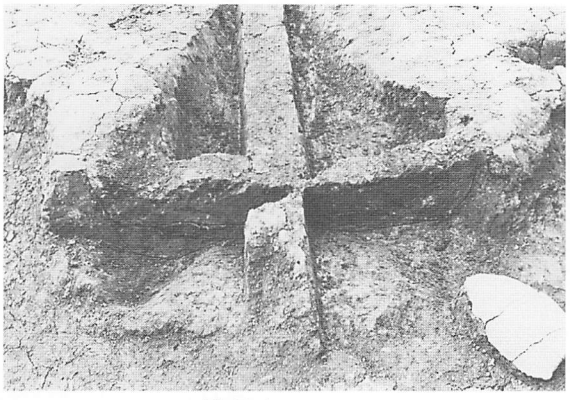
PP10平面

写真図版3　第1号竪穴住居跡

平　　面



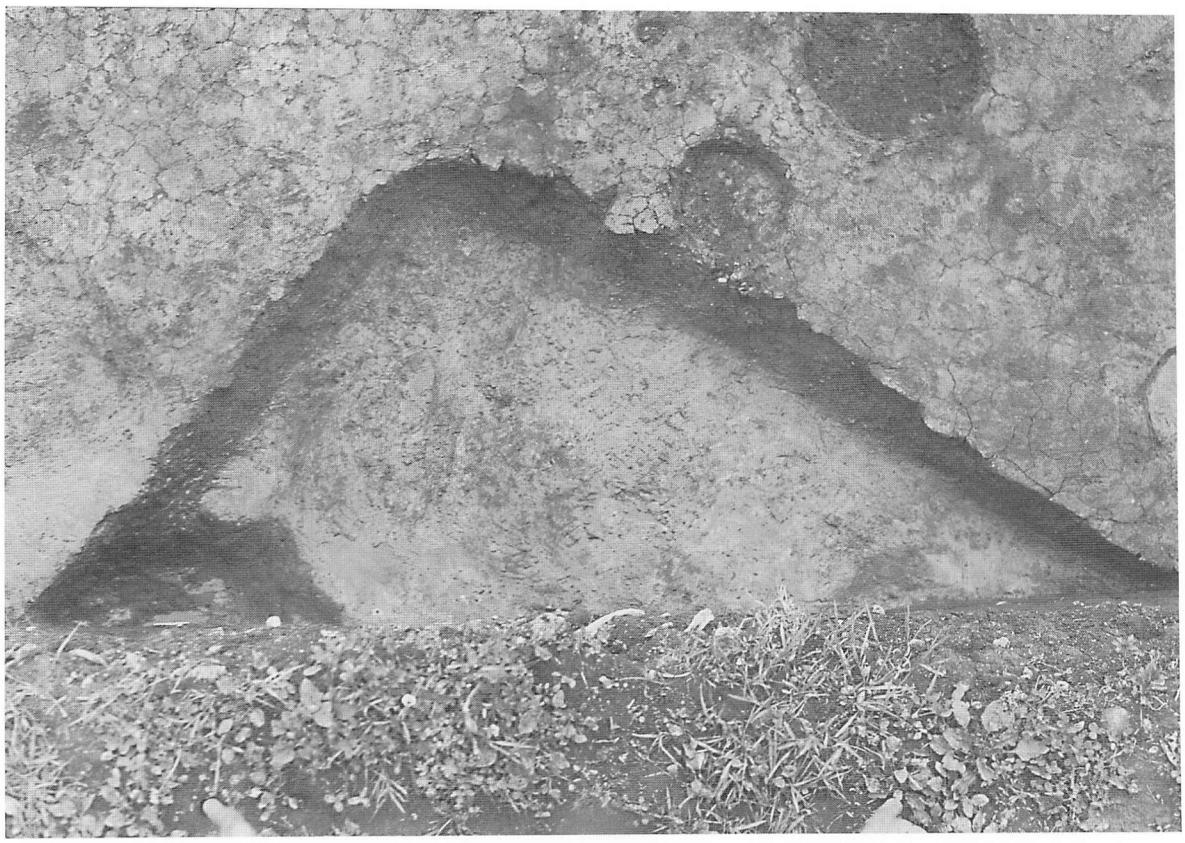
土層断面



燃焼部断面

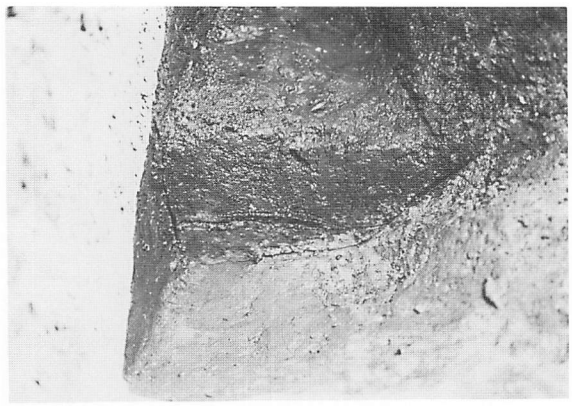
1号土坑平面

写真図版4　第2号竪穴住居跡



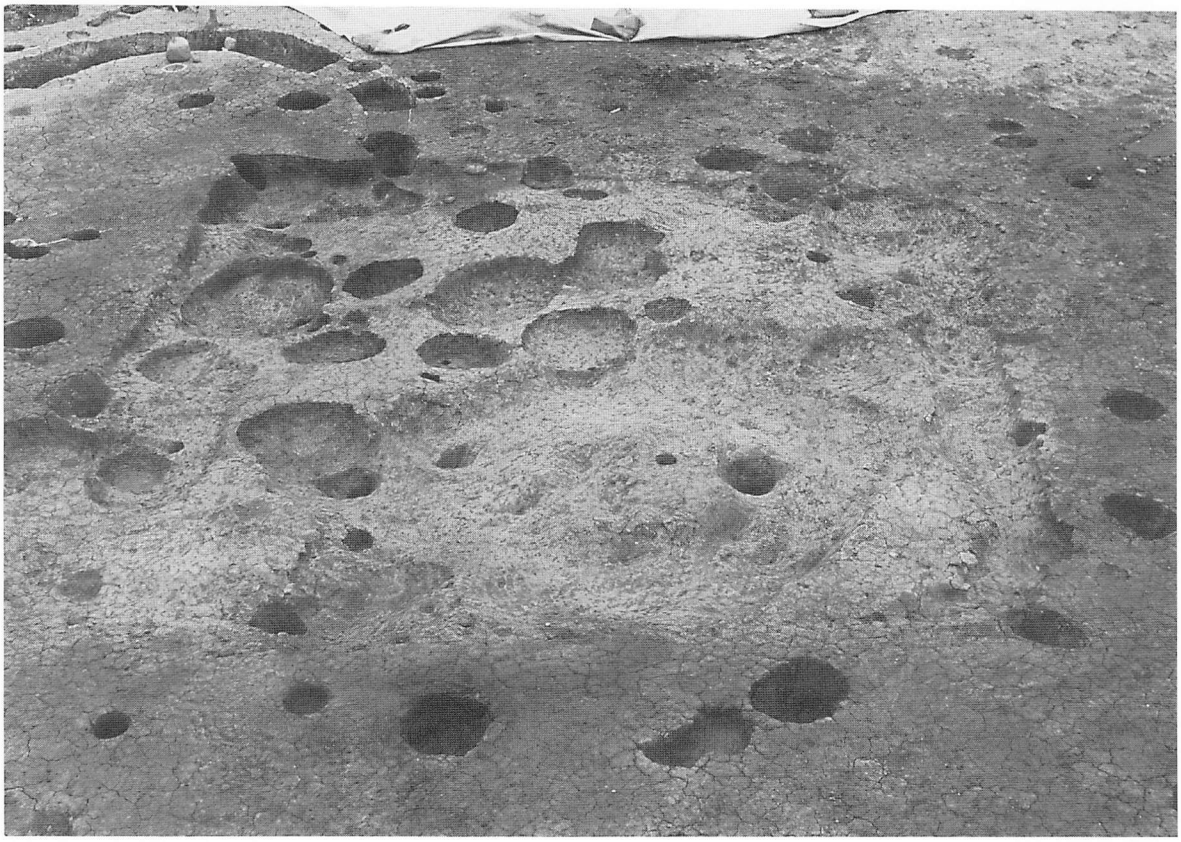
平　　面

土層断面

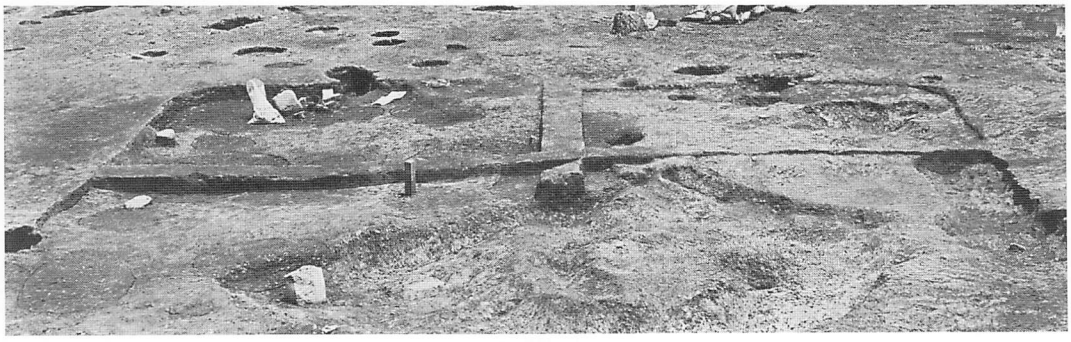


1号土坑断面

写真図版5　第3号竪穴住居跡



平　　面



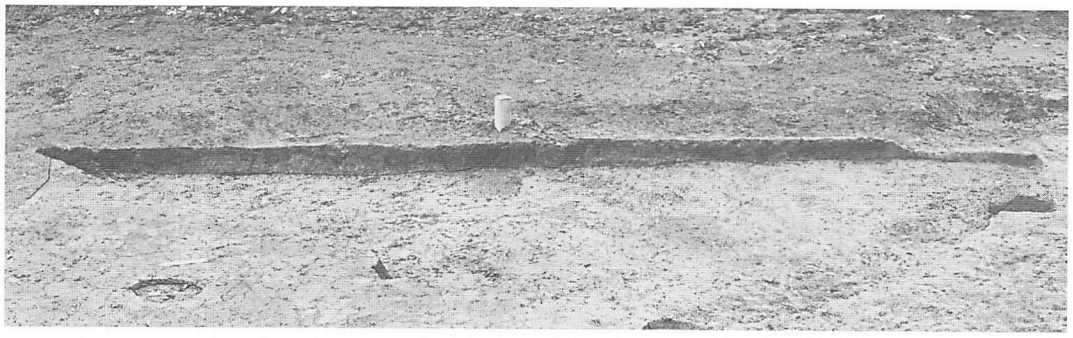
土層断面

燃焼部断面

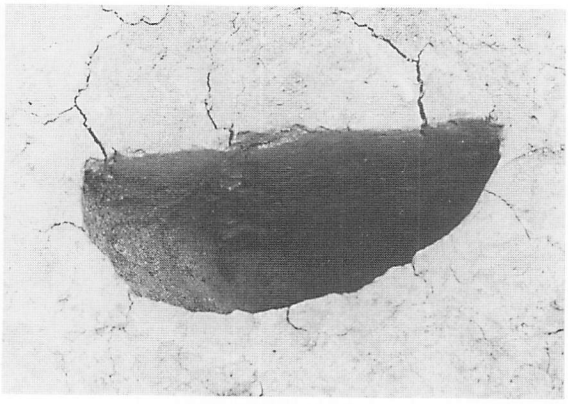
遺物出土状況

写真図版6　第4号竪穴住居跡

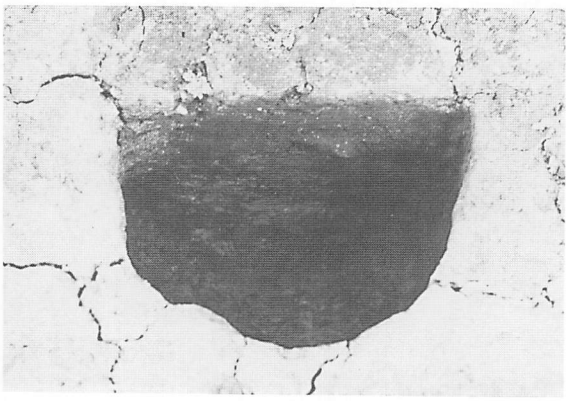
平　　面



土層断面

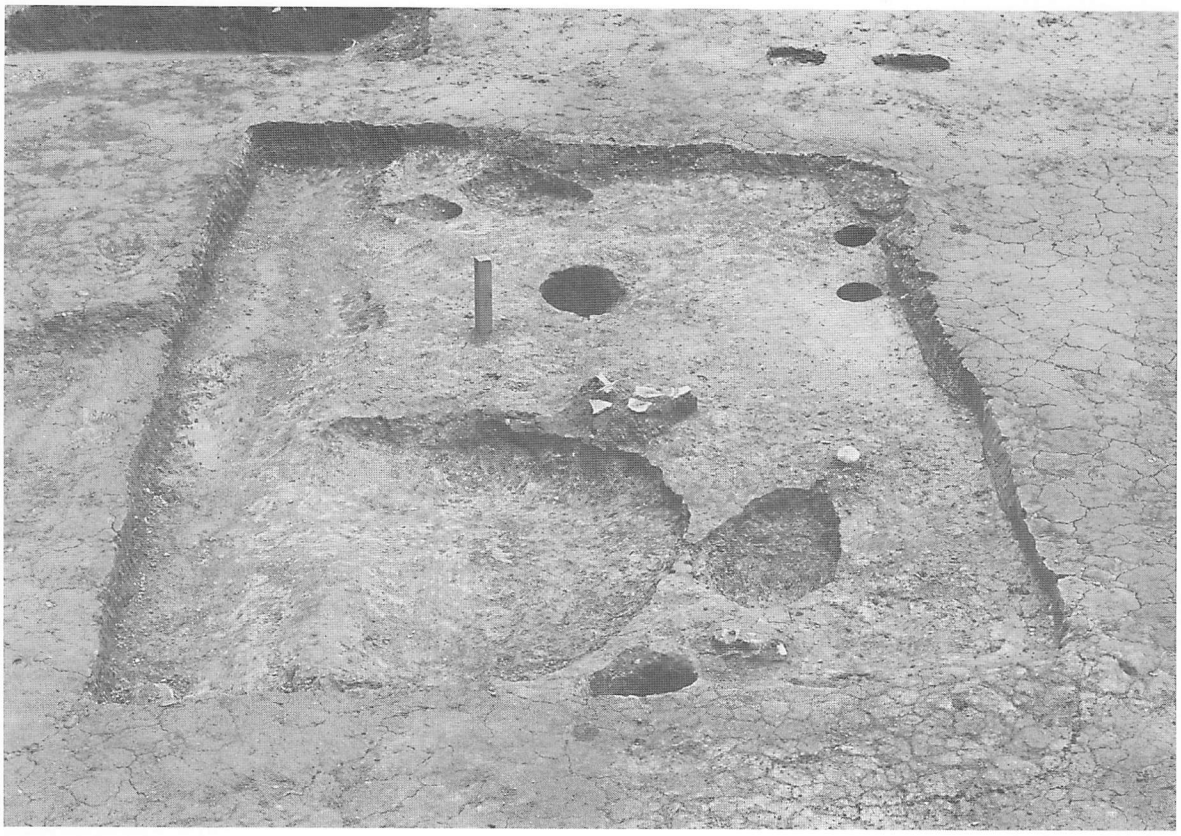


PP1断面



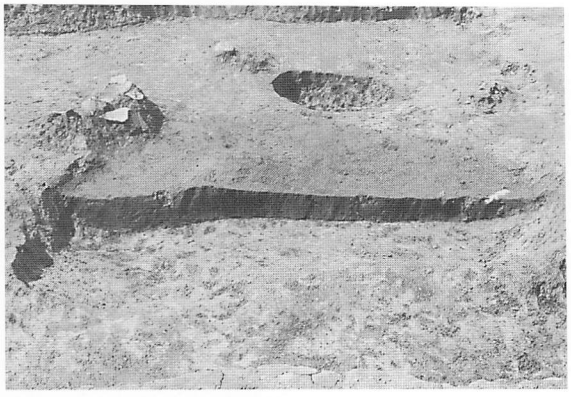
PP2断面

写真図版7　第5号竪穴住居跡



平　　面

土層断面

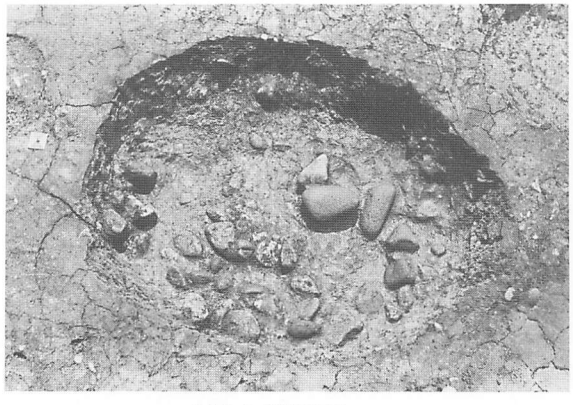


1号土坑断面

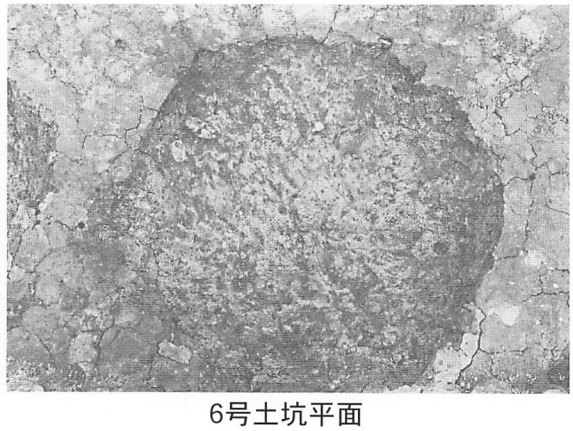
遺物出土状況

写真図版8　第6号竪穴住居跡

平　　面

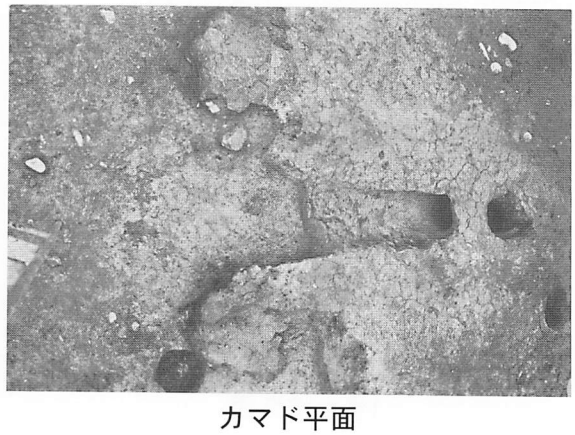


1号土坑平面



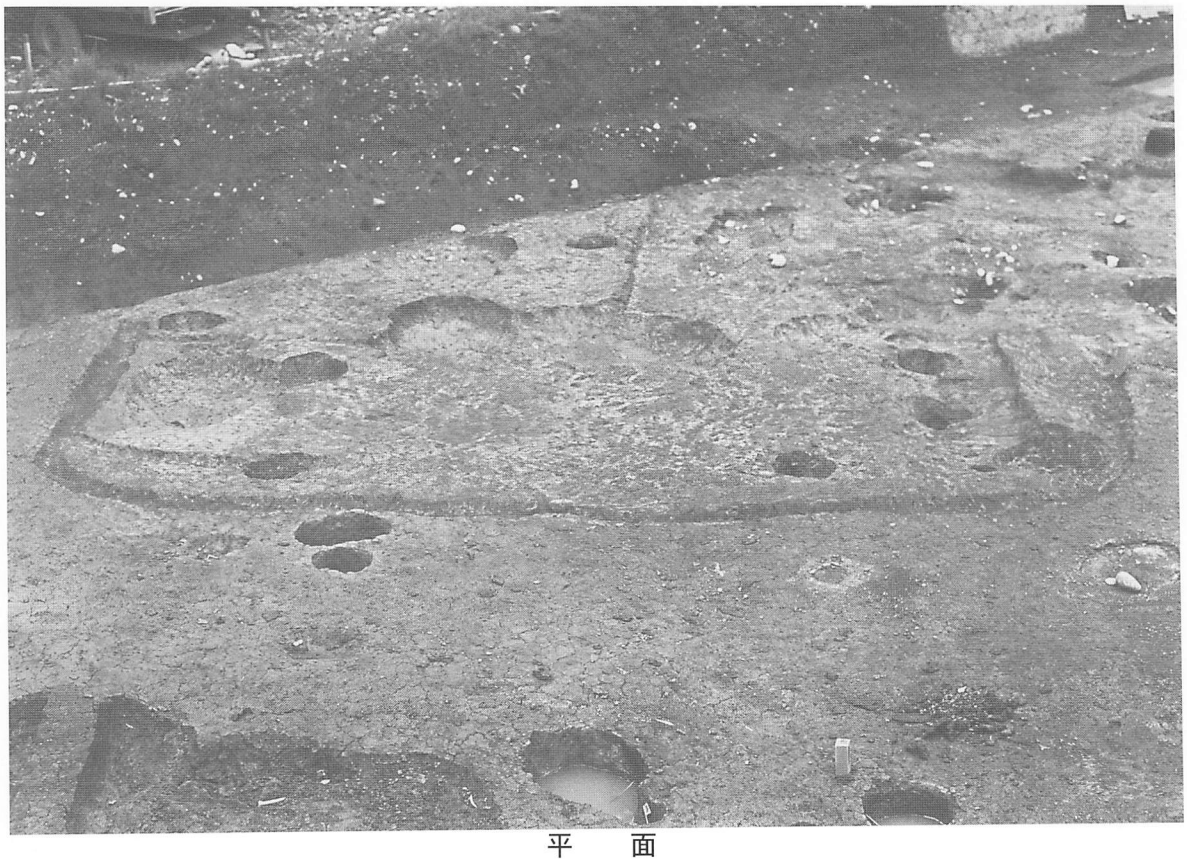
6号土坑平面

燃焼部断面



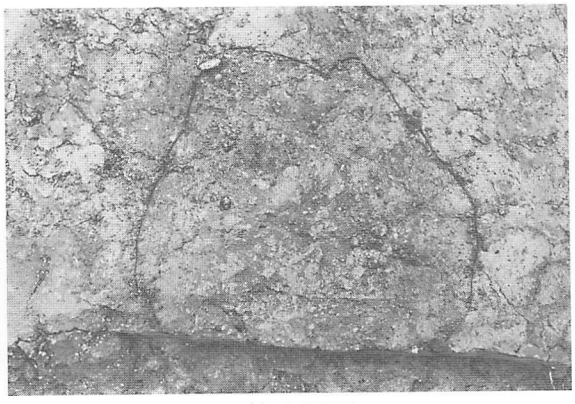
カマド平面

写真図版9　第8号竪穴住居跡

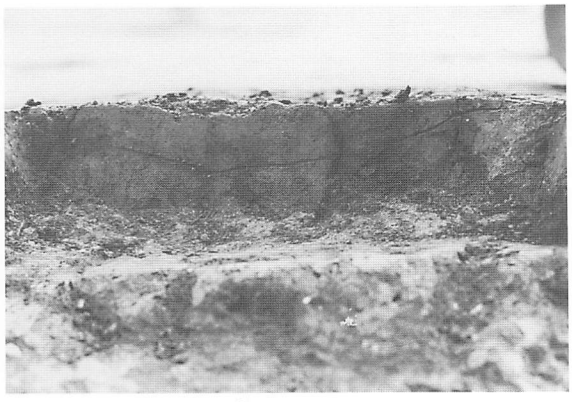


平　　面

1号土坑平面



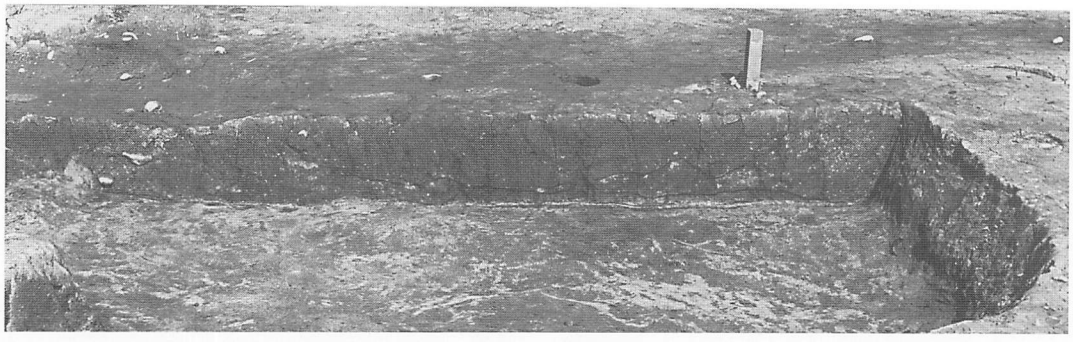
焼土平面



焼土断面

写真図版10　第9号竪穴住居跡

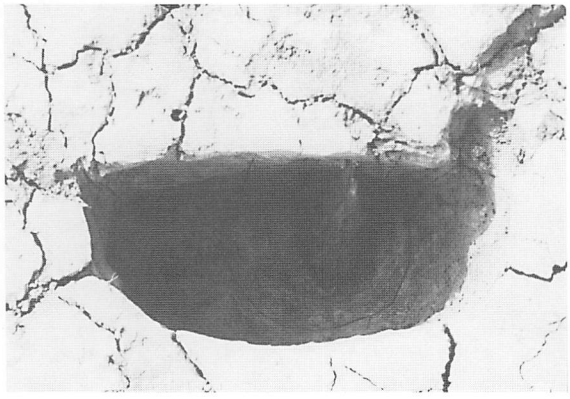
平　　面



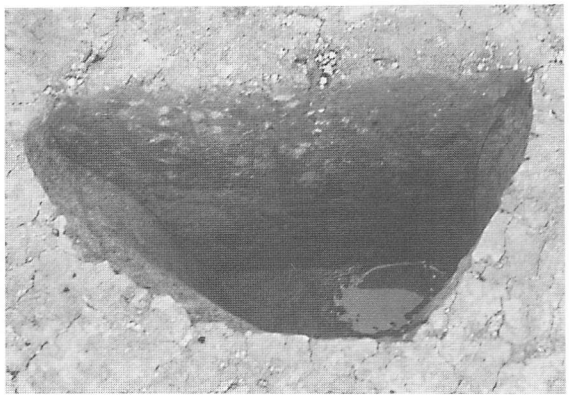
土層断面

写真図版11　第1号竪穴状遺構

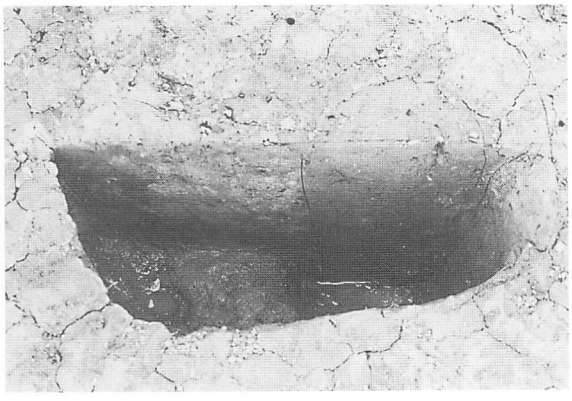
平　　面



P632断面



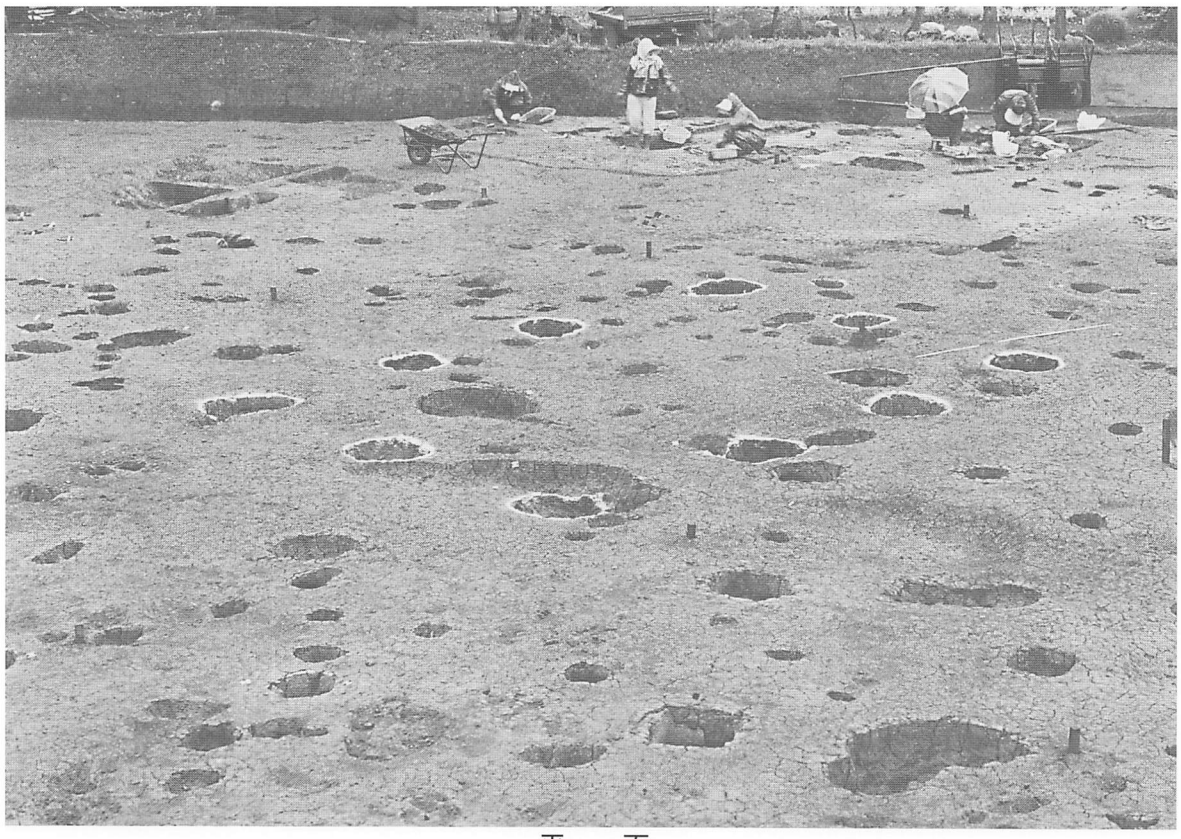
P442断面



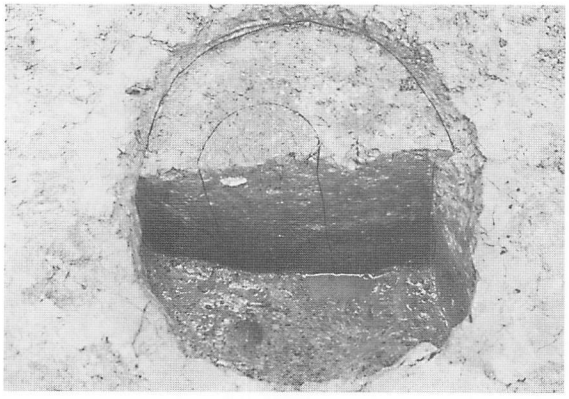
P443断面

P447断面

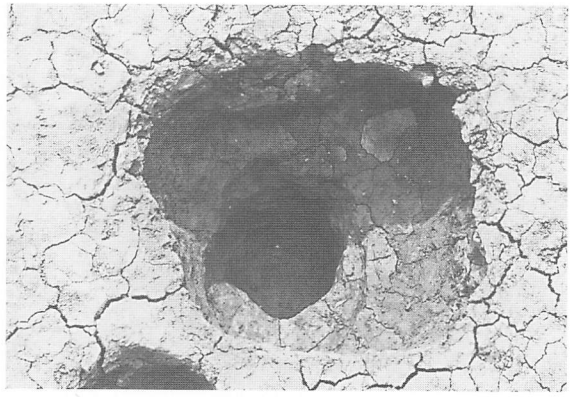
写真図版12　第1号掘立柱建物跡



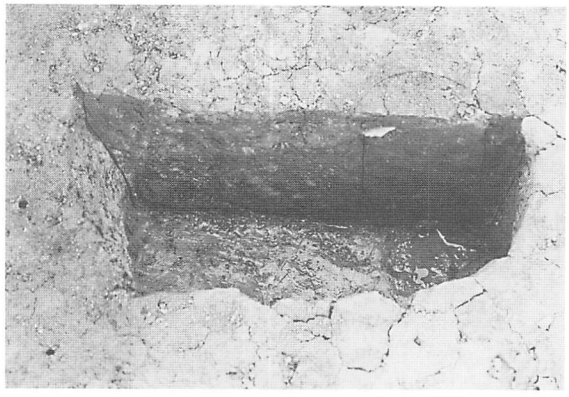
平　　面



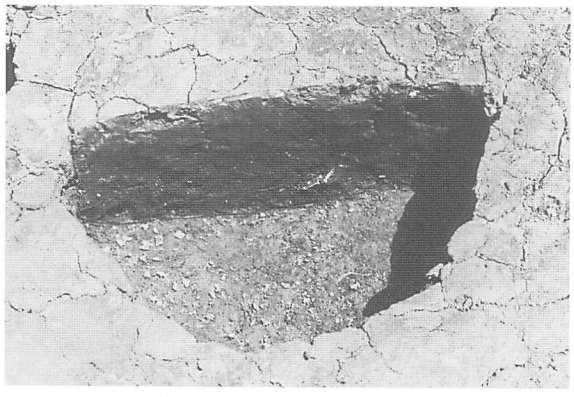
P264断面



P385断面

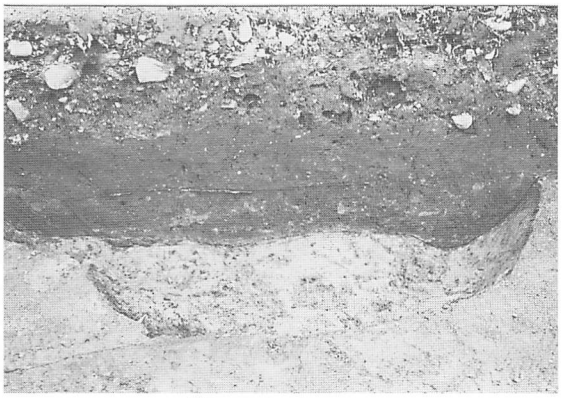


P400断面



P449断面

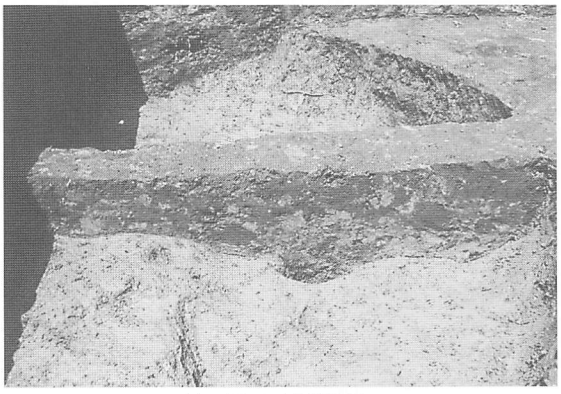
写真図版13　第2号掘立柱建物跡



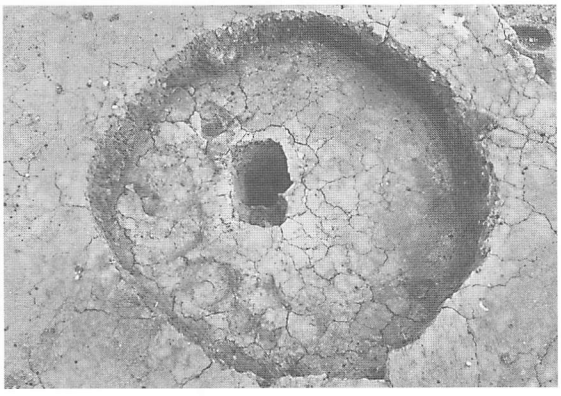
第1号土坑平面

第1号土坑断面

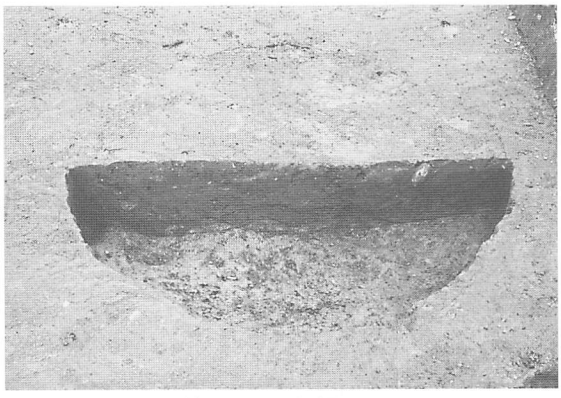
第2号土坑平面



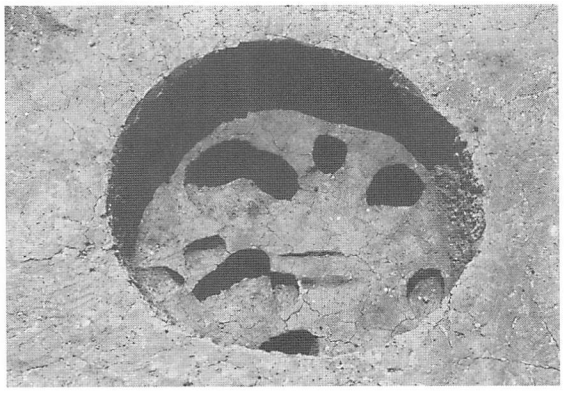
第2号土坑断面



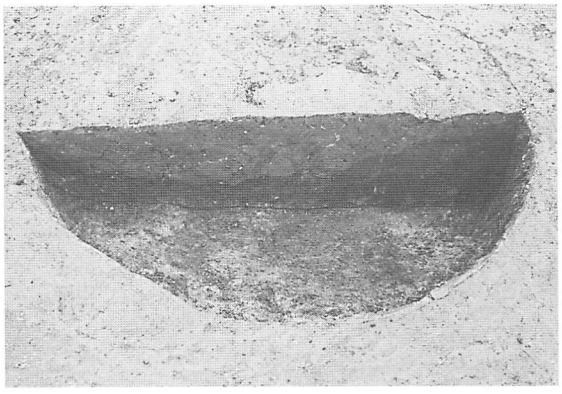
第3号土坑平面



第3号土坑断面

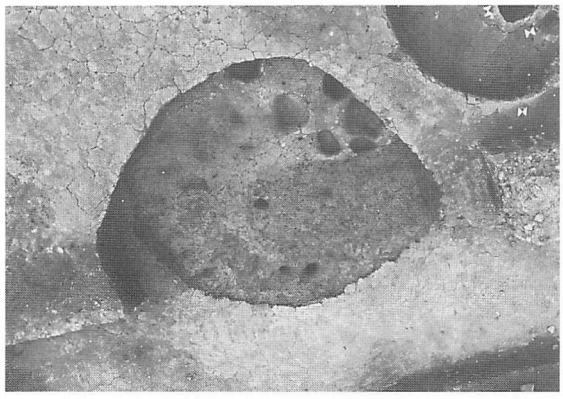


第4号土坑平面

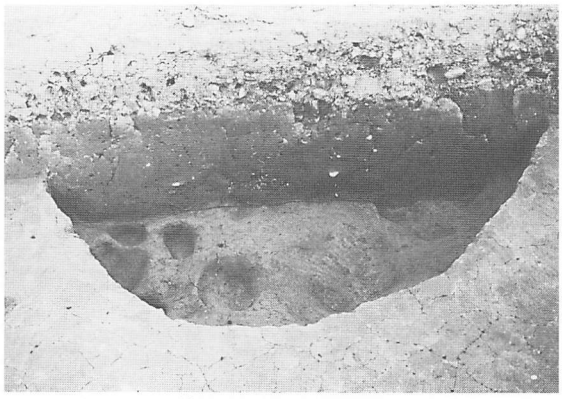


第4号土坑断面

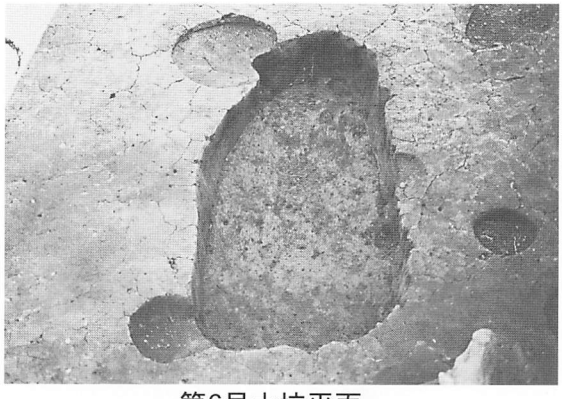
写真図版14　土坑(1)



第5号土坑平面



第5号土坑断面

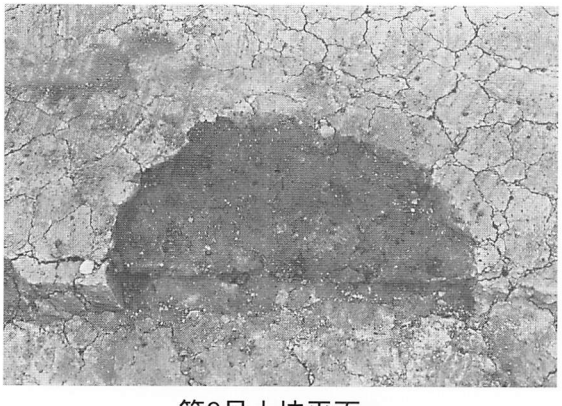


第6号土坑平面

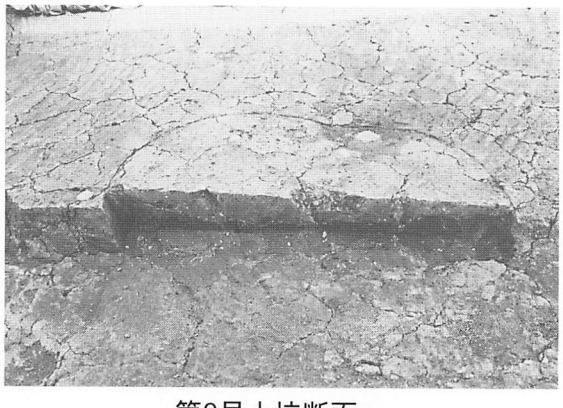
第6号土坑断面

第7号土坑平面

第8号土坑断面



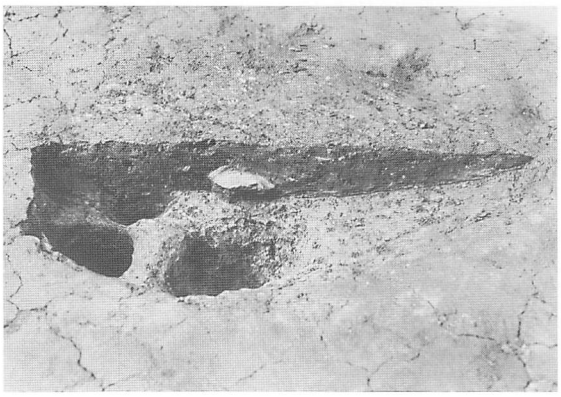
第9号土坑平面



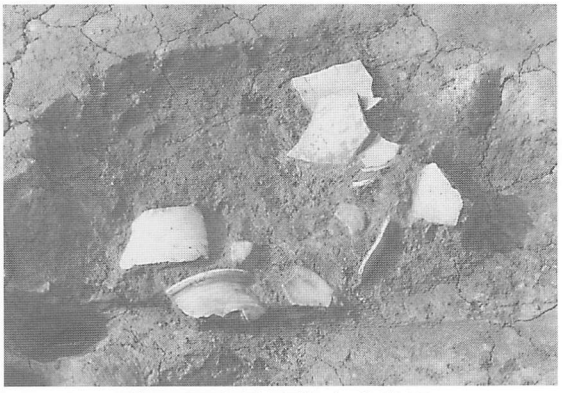
第9号土坑断面

写真図版15　土坑(2)

第10号土坑平面

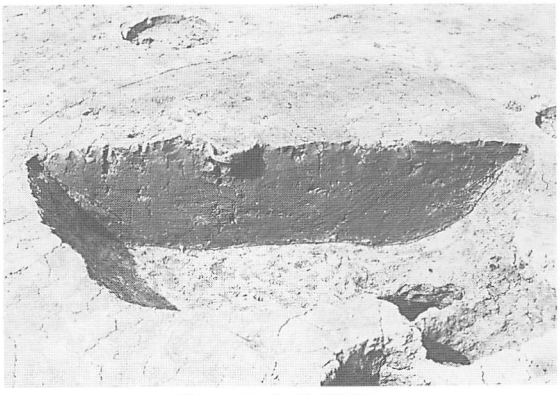


第10号土坑断面

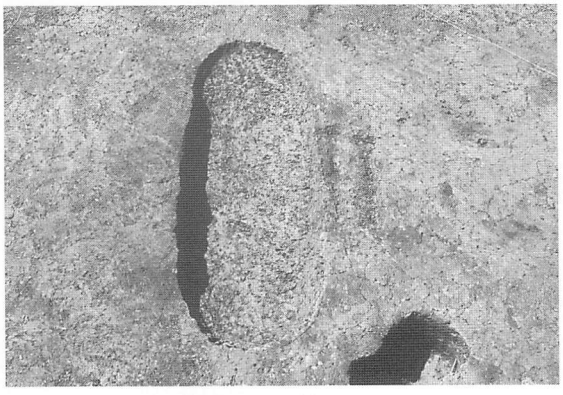


第10号土坑遺物出土状況

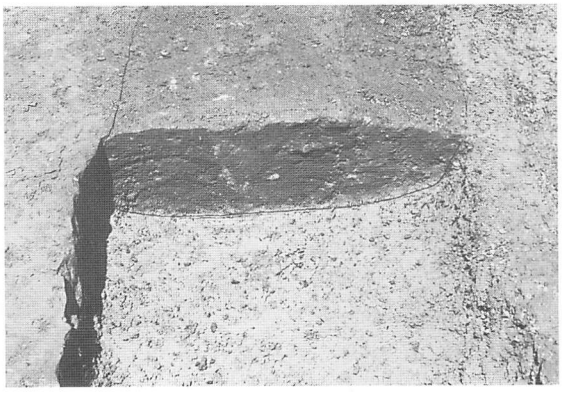
第11号土坑平面



第11号土坑断面



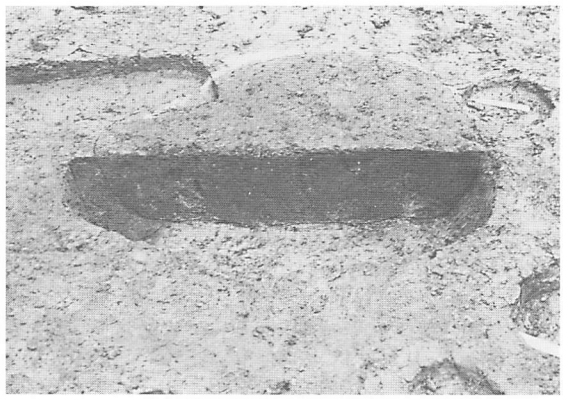
第12号土坑平面



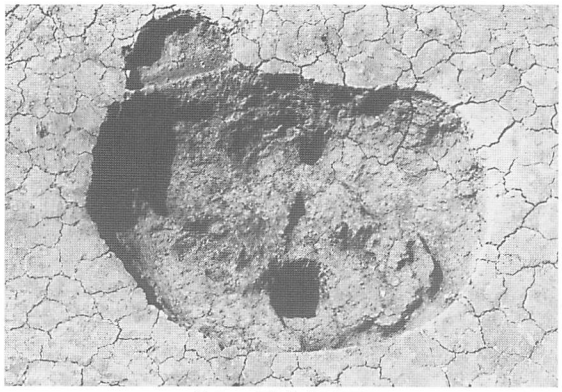
第12号土坑断面

写真図版16　土坑(3)

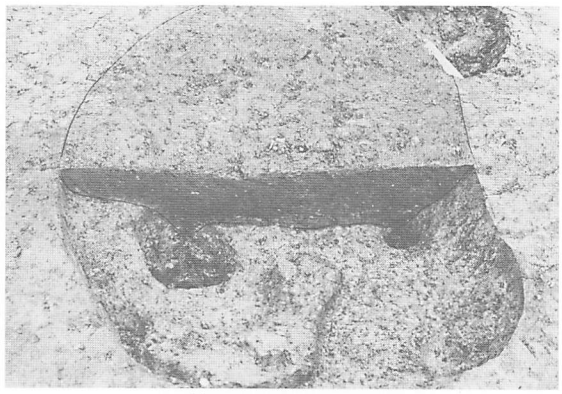
第13号土坑平面



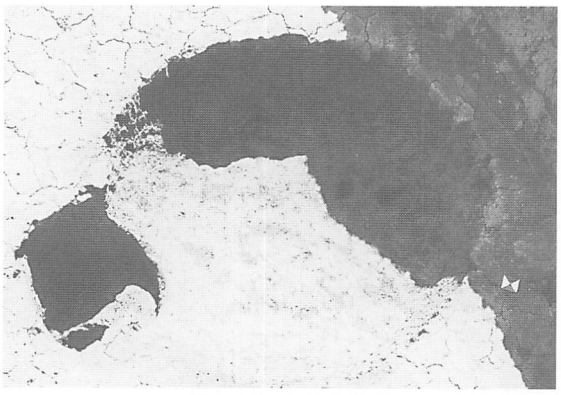
第13号土坑断面



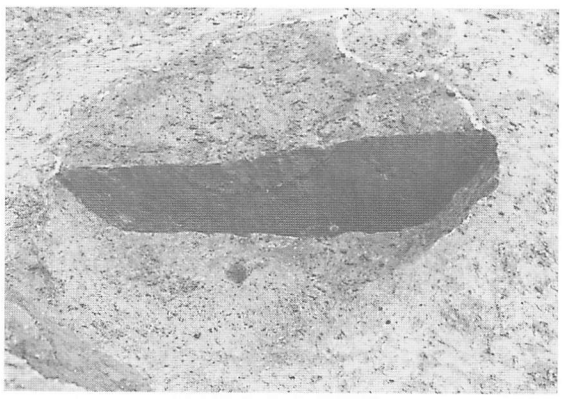
第14号土坑平面



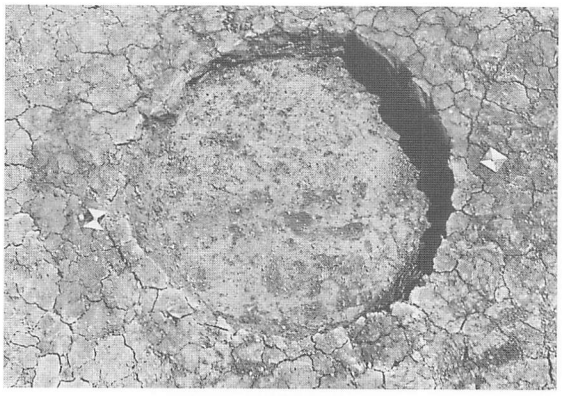
第14号土坑断面



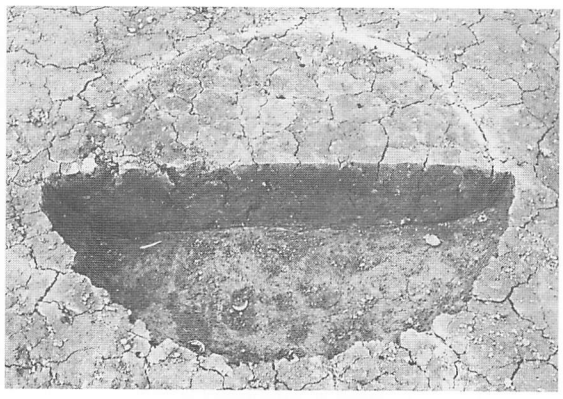
第16号土坑平面



第16号土坑断面

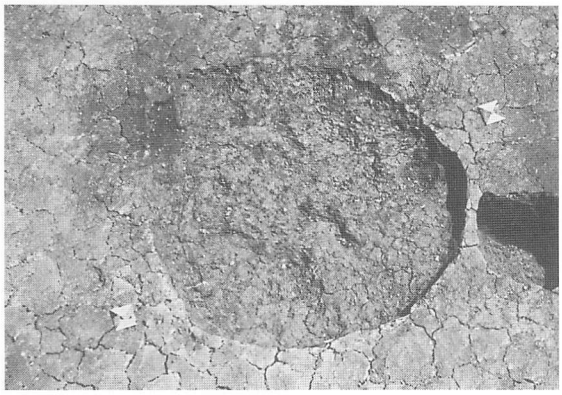


第20号土坑平面

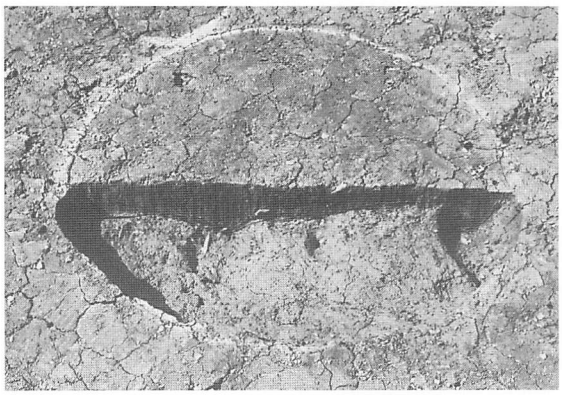


第20号土坑断面

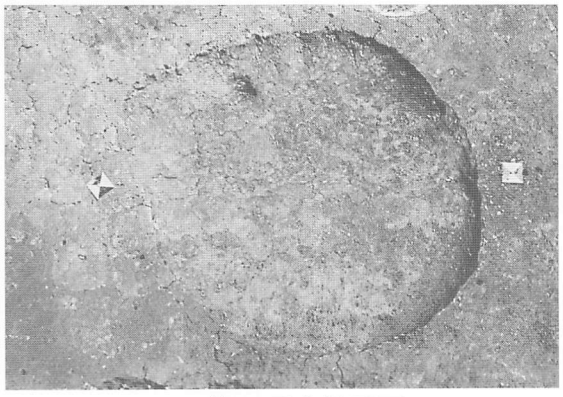
写真図版17　土坑(4)



第21号土坑平面

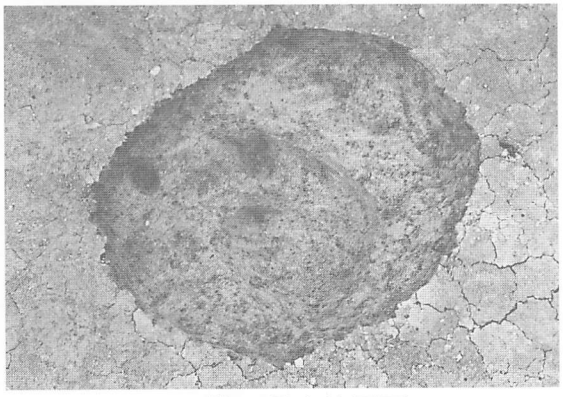


第21号土坑断面

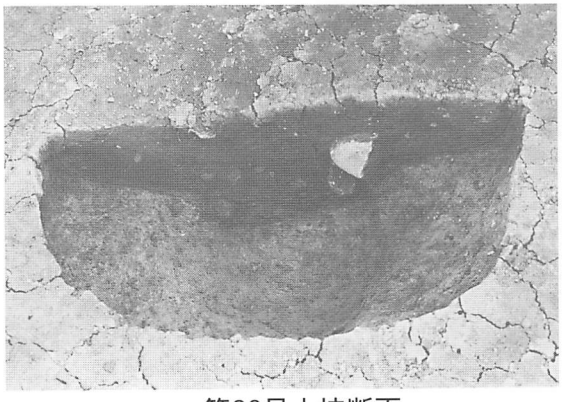


第22号土坑平面

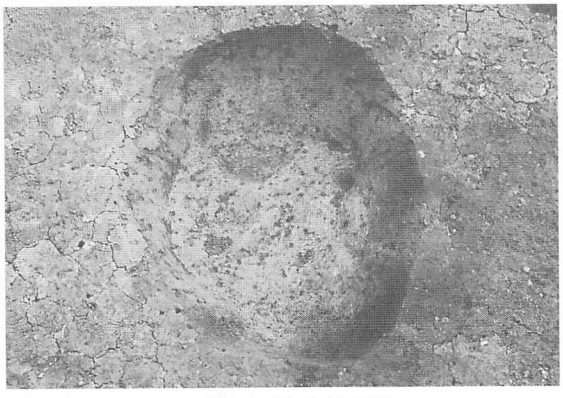
第22号土坑断面



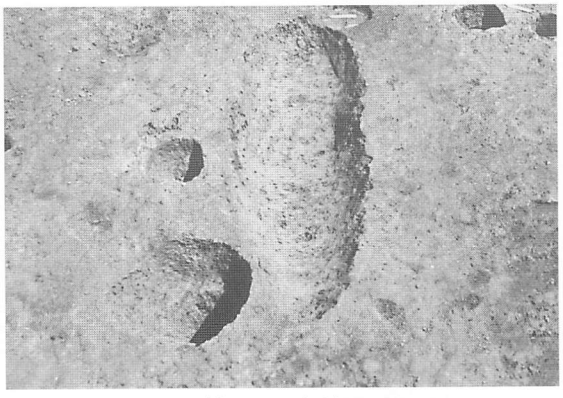
第23号土坑平面



第23号土坑断面

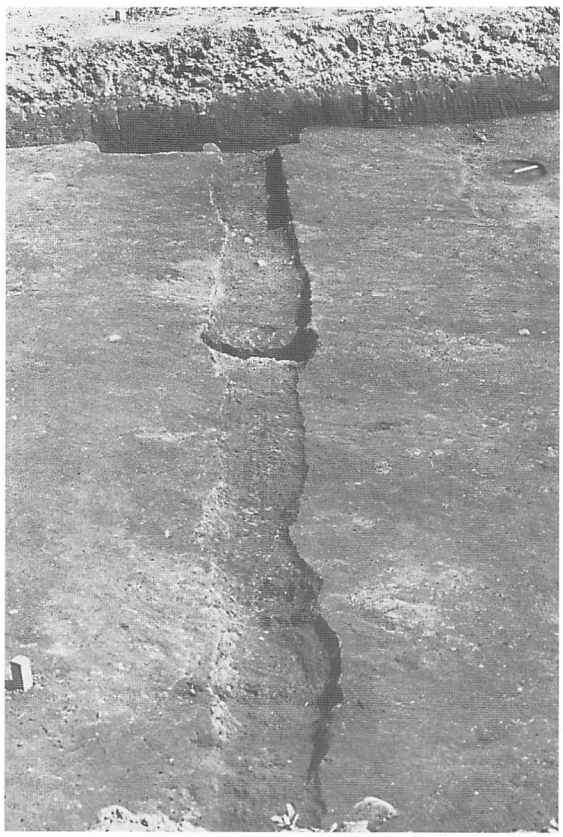


第24号土坑平面

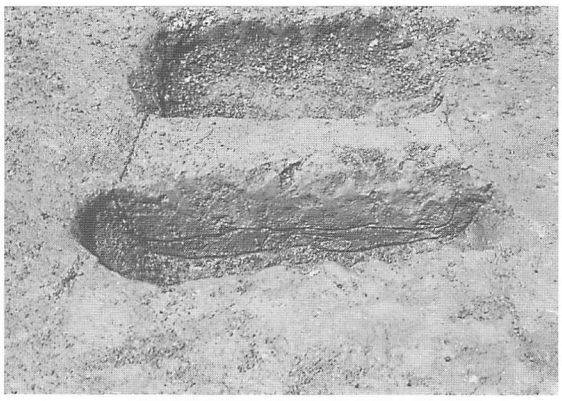


第25号土坑平面

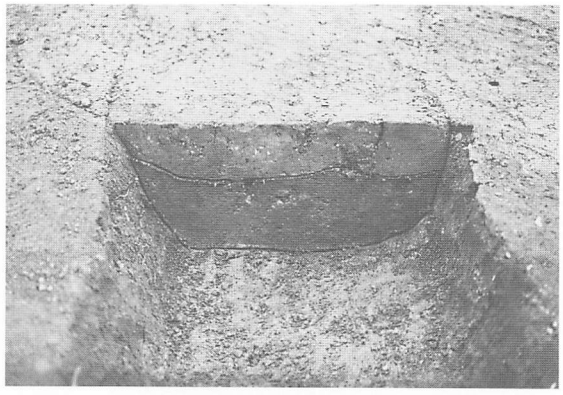
写真図版18　土坑(5)



第1号溝跡平面

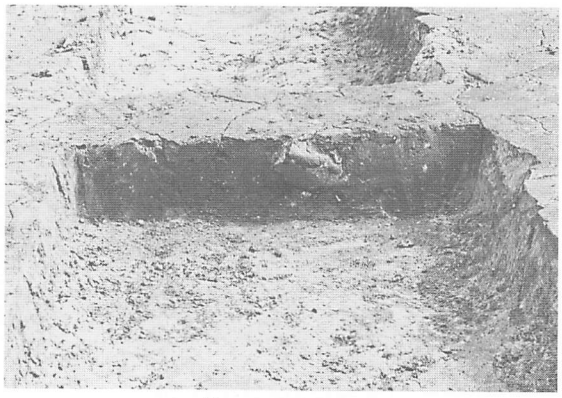


第1号溝跡断面（A－A′）

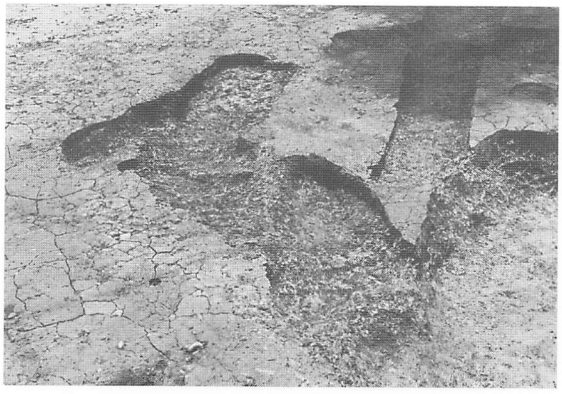


第1号溝跡断面（B－B′）

第2号溝跡平面



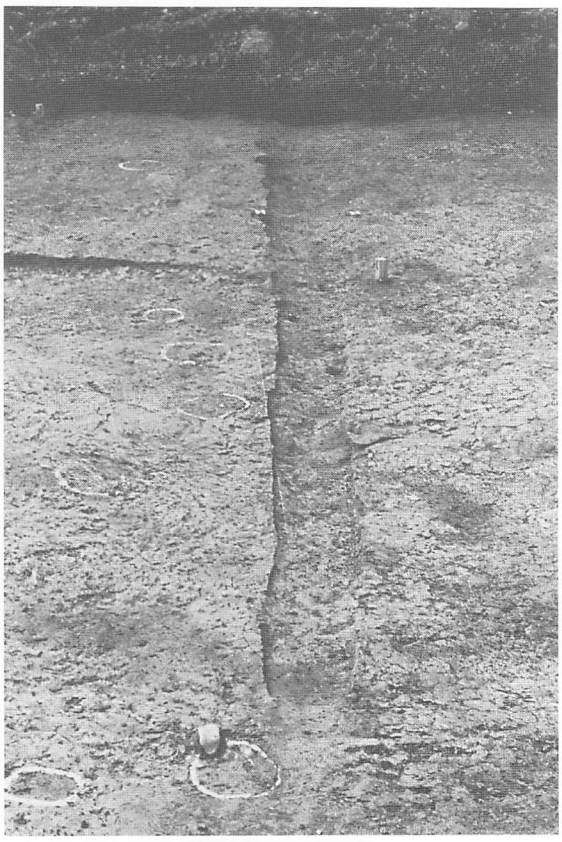
第2号溝跡断面



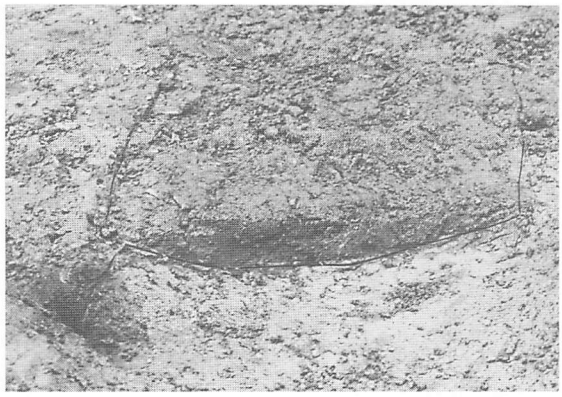
第1号・第2号溝状遺構平面

第1号溝状遺構断面（A－A′）

写真図版19　溝跡(1)・溝状遺構



第3号溝跡平面



第3号溝跡断面

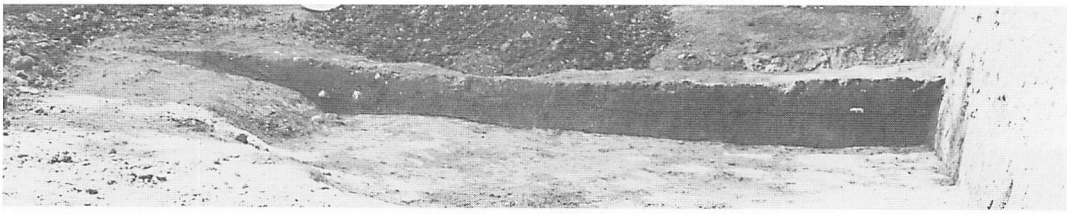
第4号溝跡平面

第4号溝跡断面

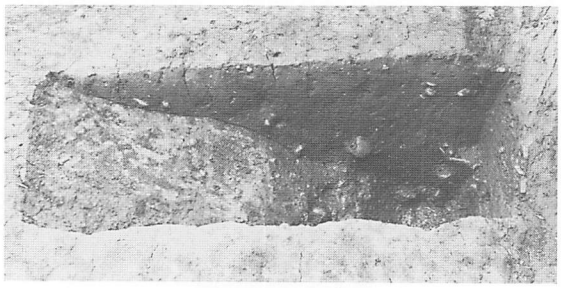
作業風景

写真図版20　溝跡(2)

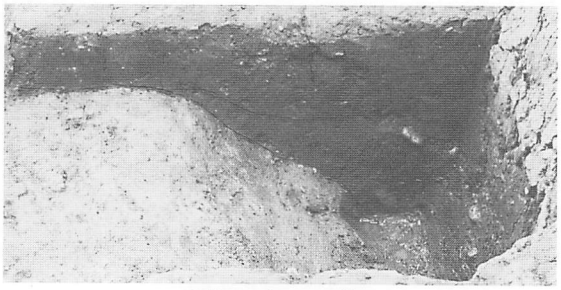
平　　面



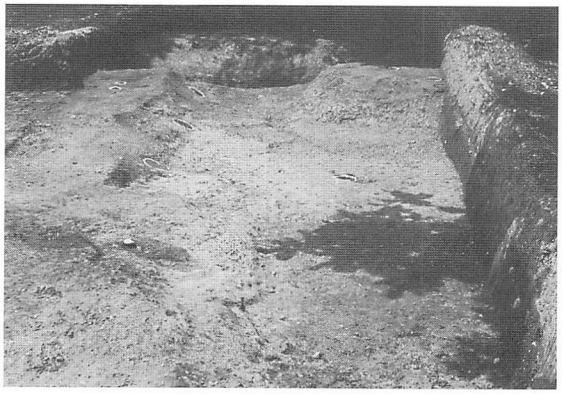
断面（A－A′）



断面（B－B′）

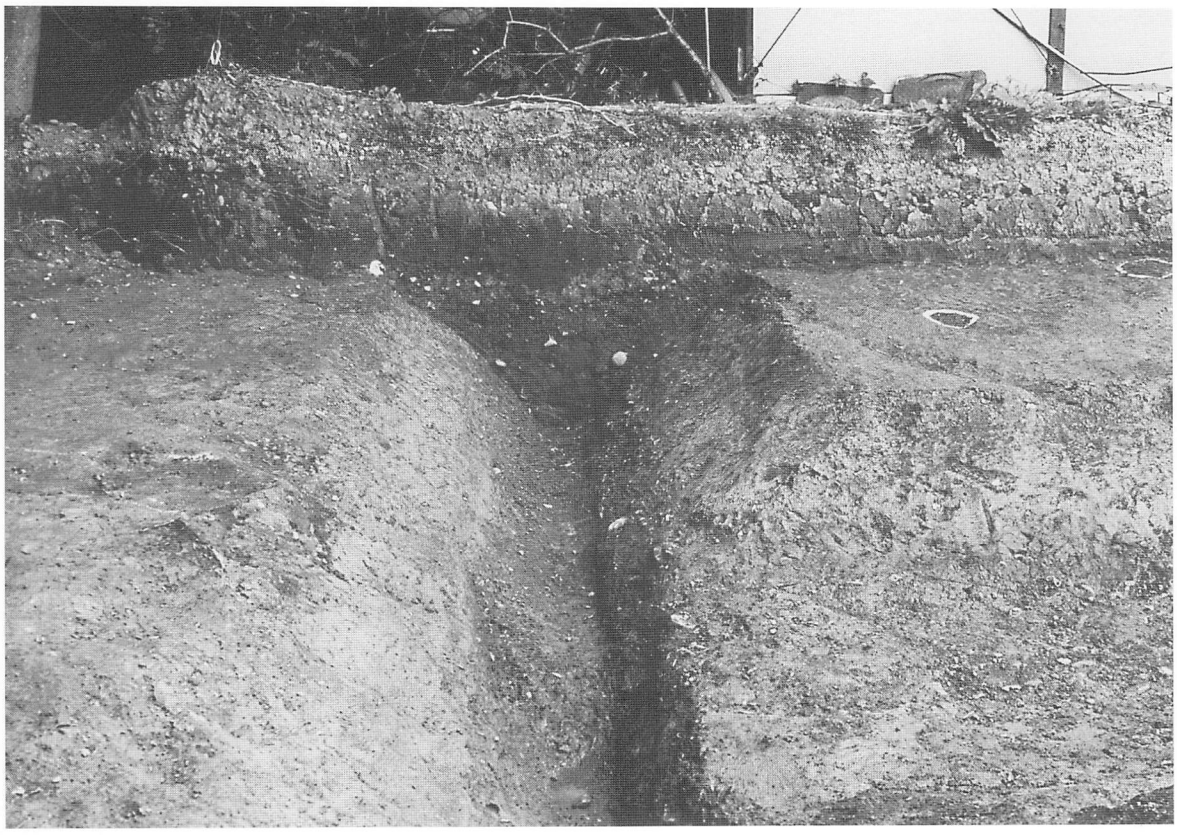


断面（C－C′）

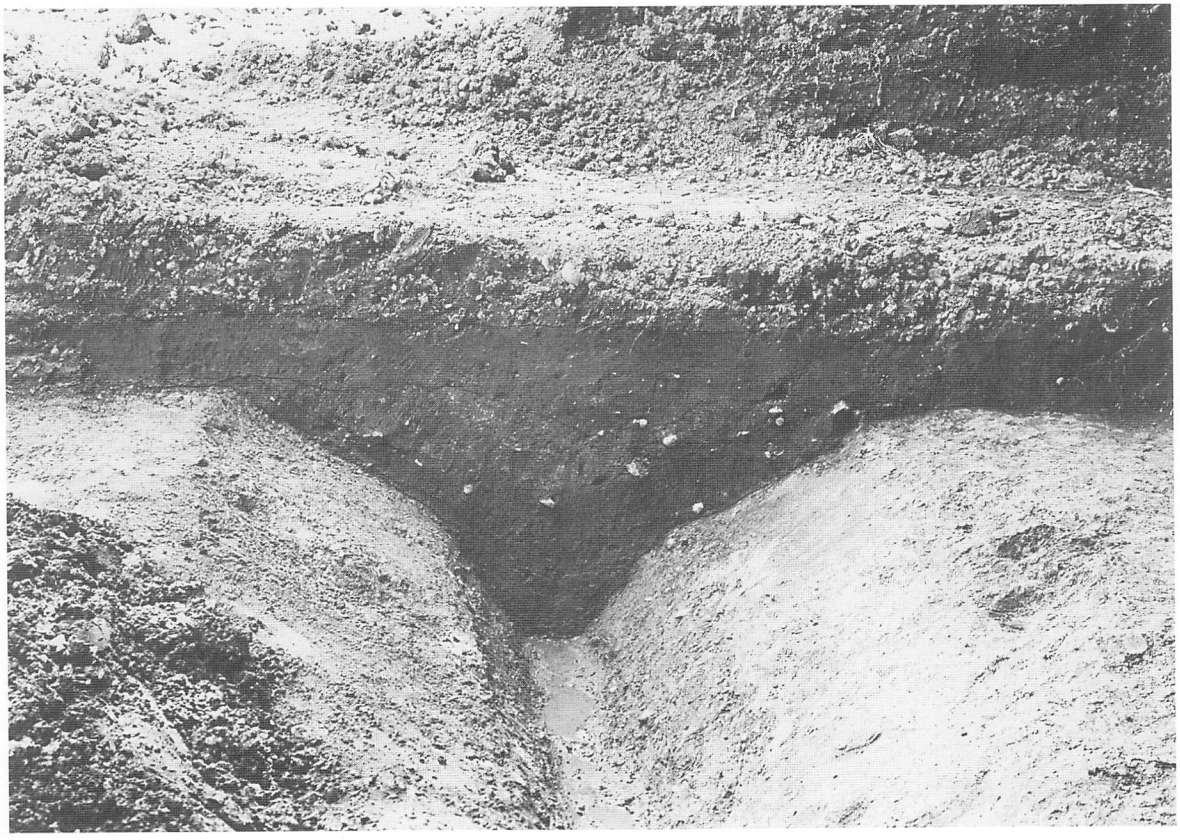


池状部分平面

写真図版21　第1号堀跡

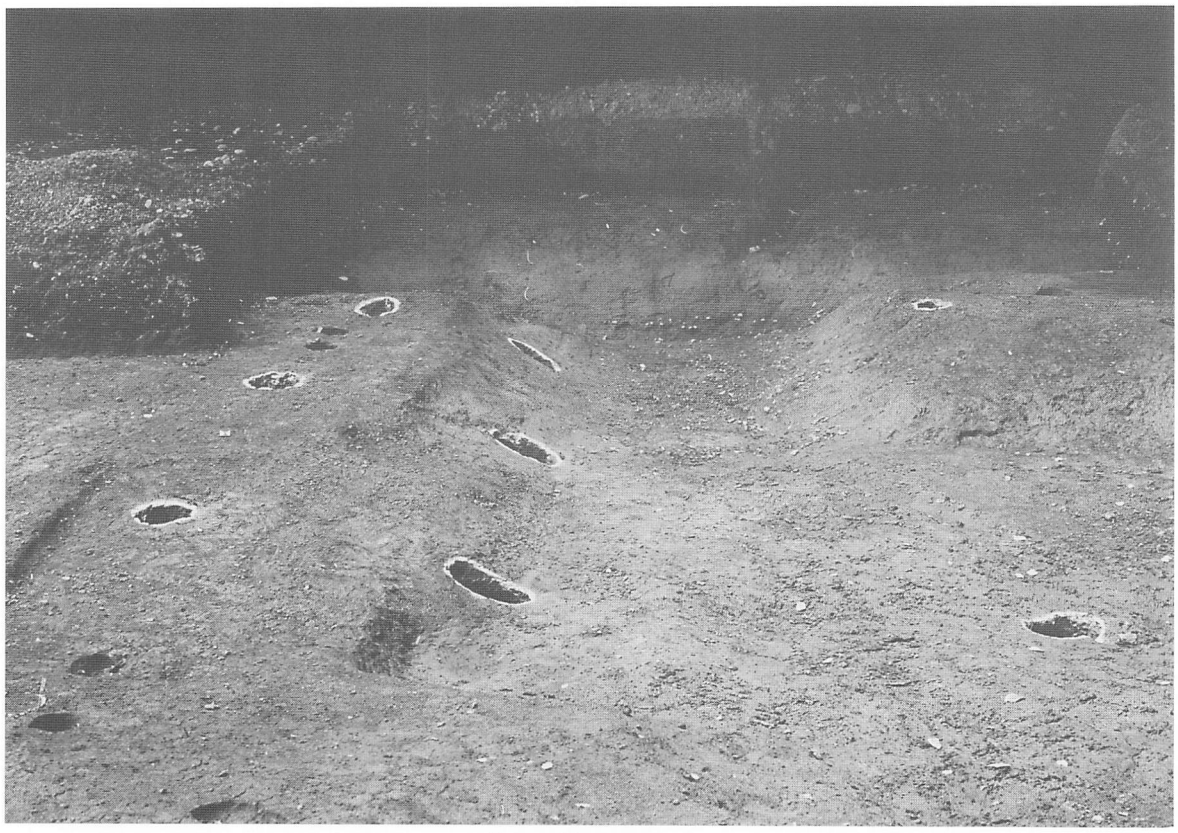


平　　面

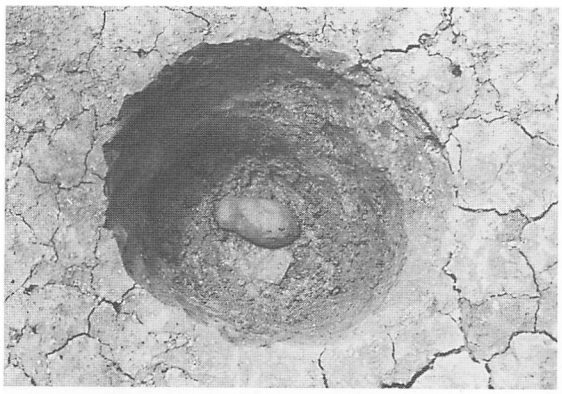


断　　面

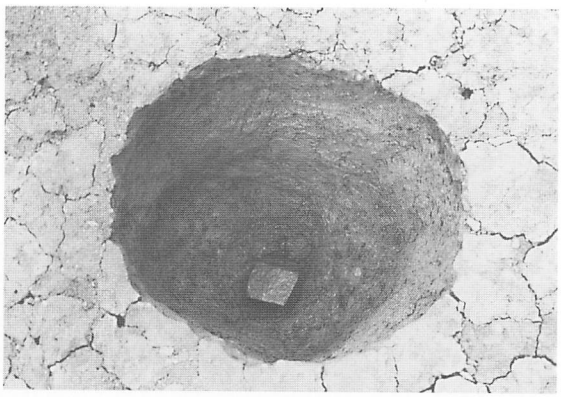
写真図版22　第2号堀跡



第1号橋脚跡平面



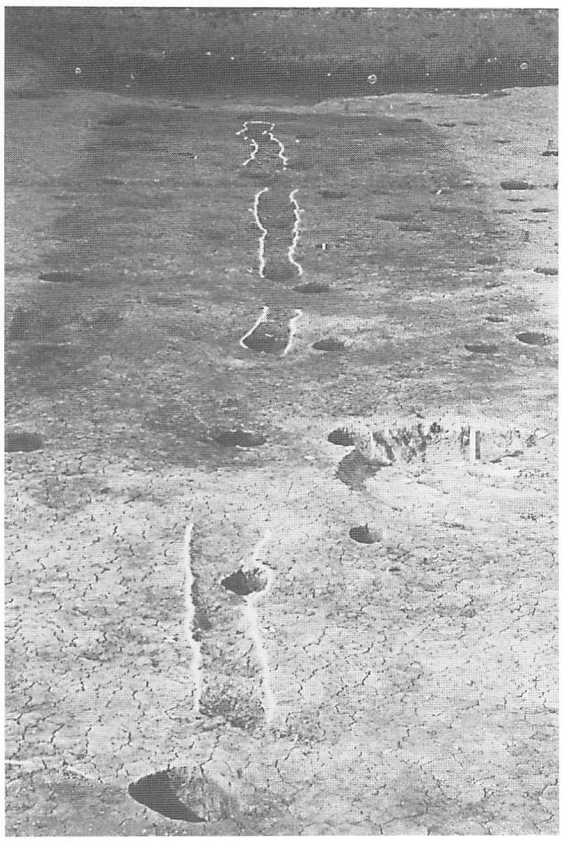
P515遺物出土状況



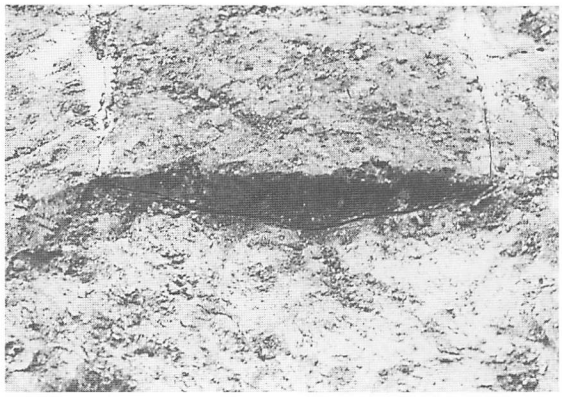
P515遺物出土状況

P38遺物出土状況

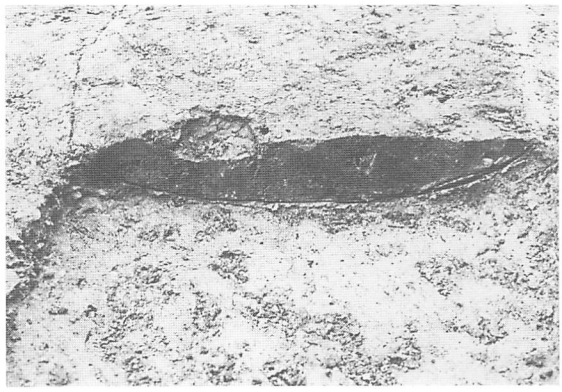
写真図版23　第1号橋脚跡・柱穴遺物出土状況



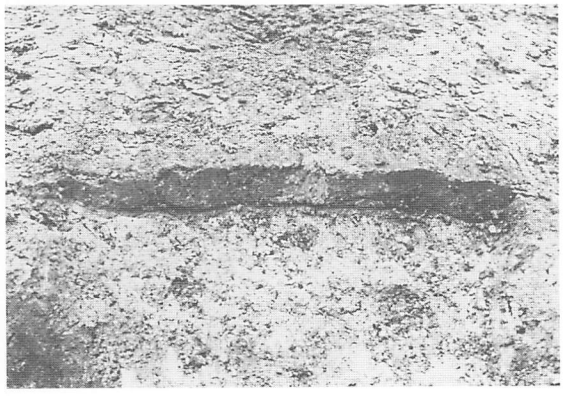
平　　面



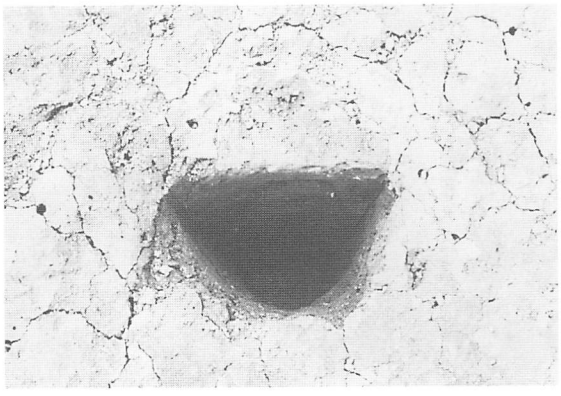
断面（A－A′）



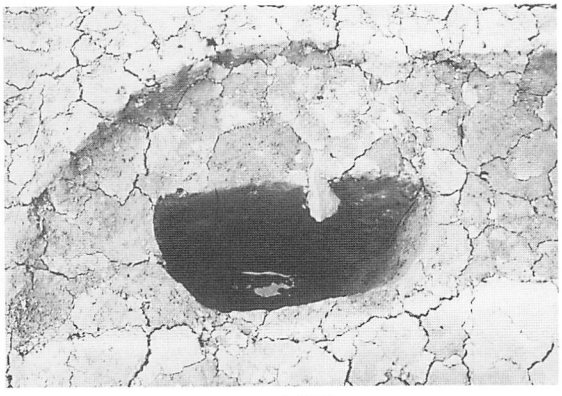
断面（B－B′）



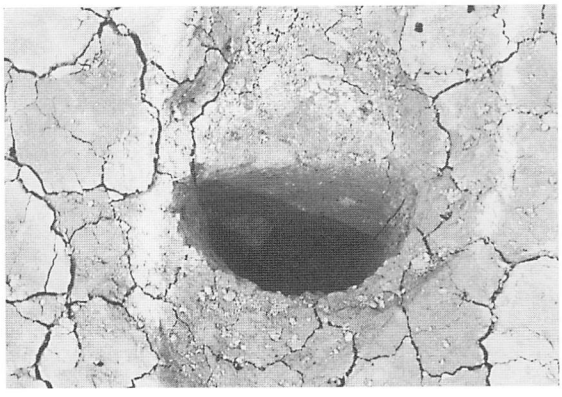
断面（C－C′）



P581断面

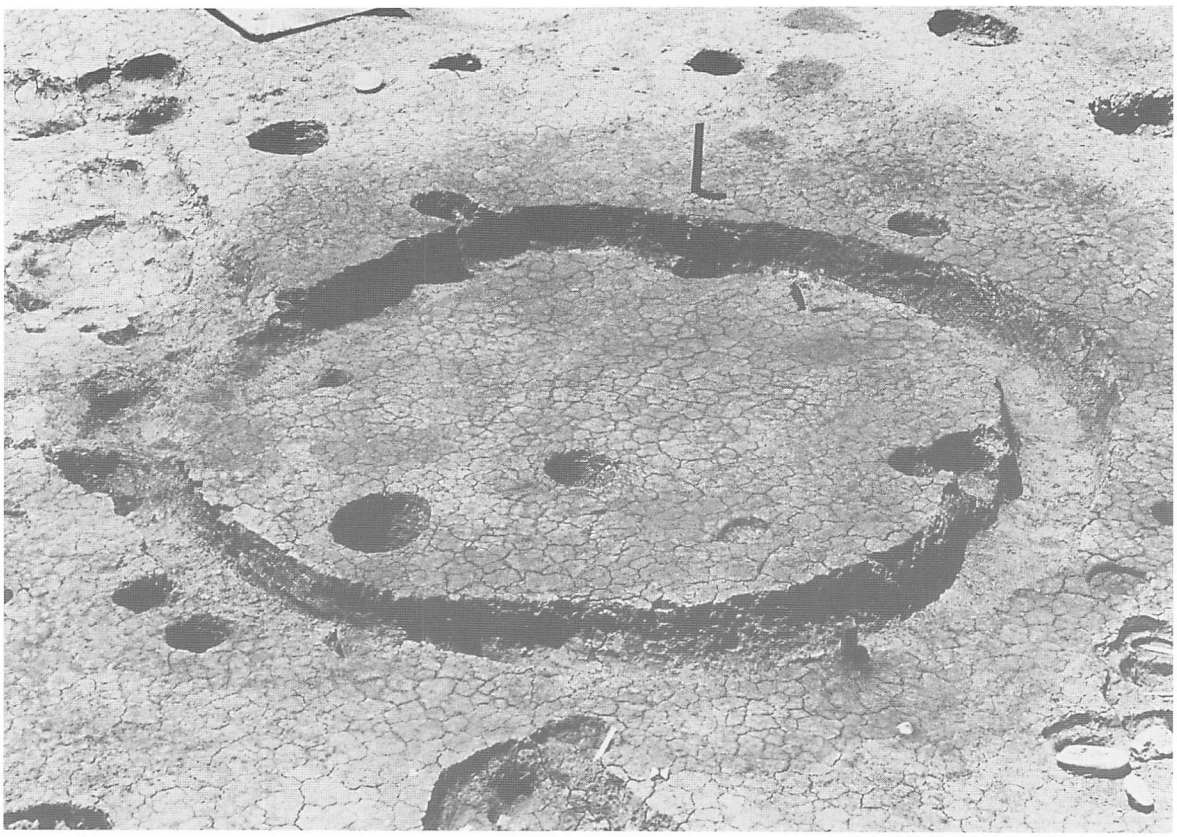


P582断面

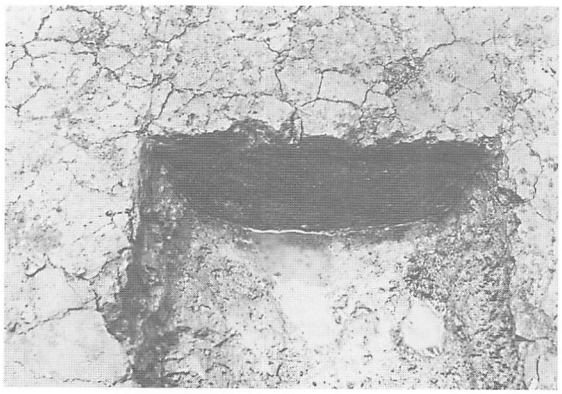


P583断面

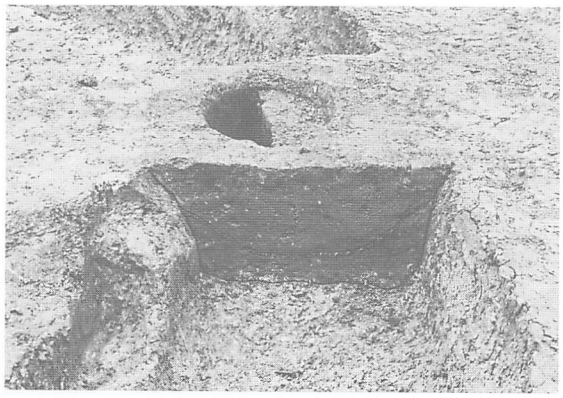
写真図版24　第1号塀跡



平　　面



断面（A－A′）



断面（B－B′）

作業風景

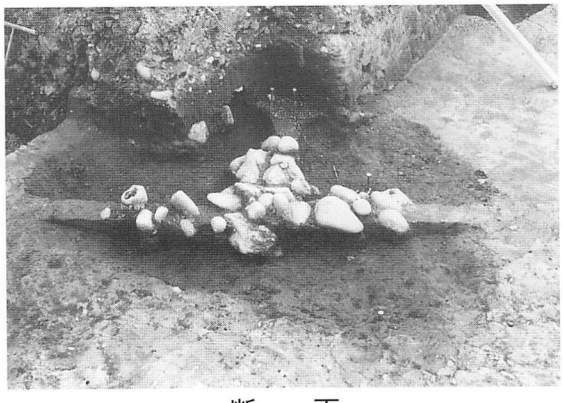
写真図版25　第1号円形周溝

第1号集石遺構平面

第1号集石遺構焼土平面

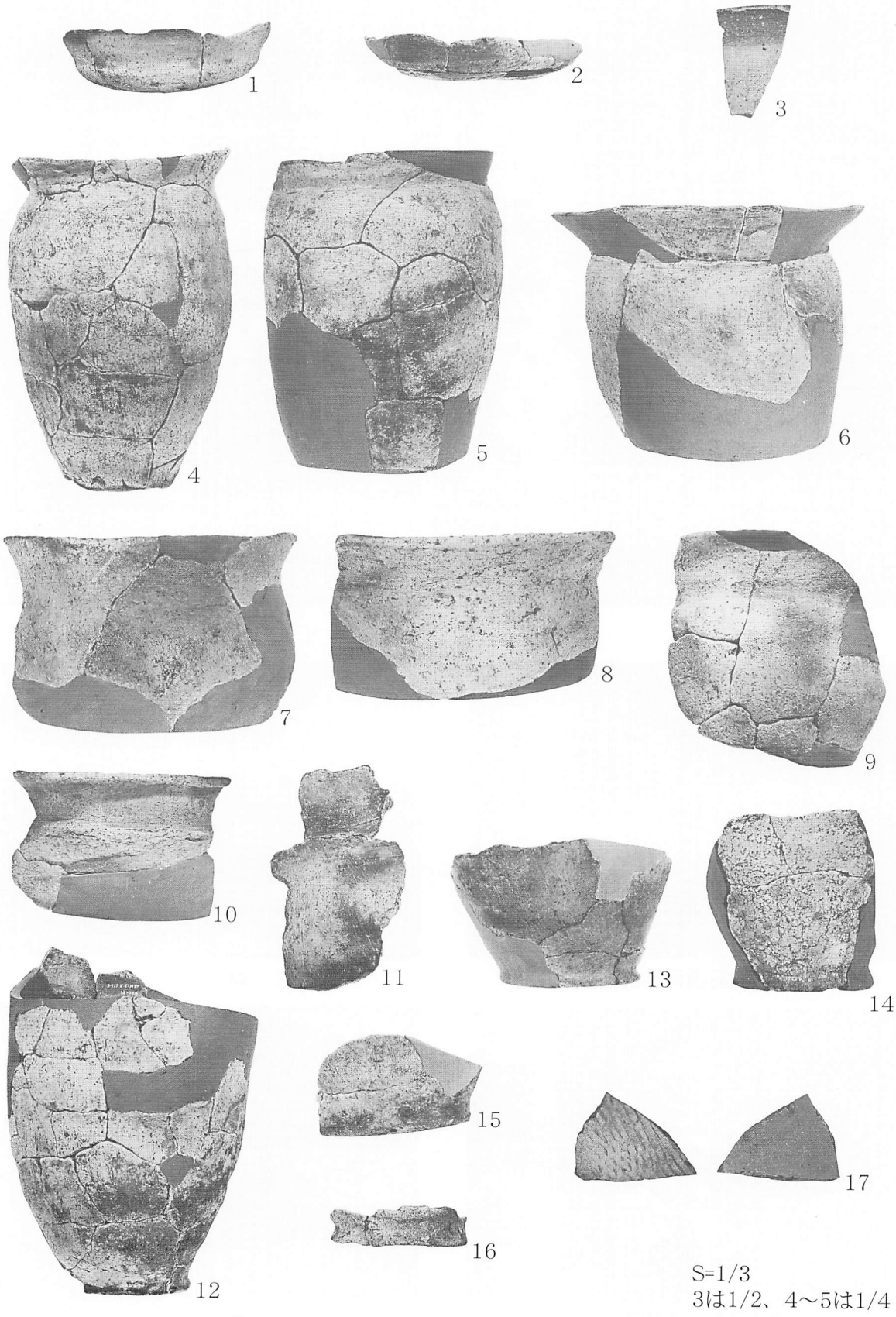
断　　面

第2号集石遺構平面

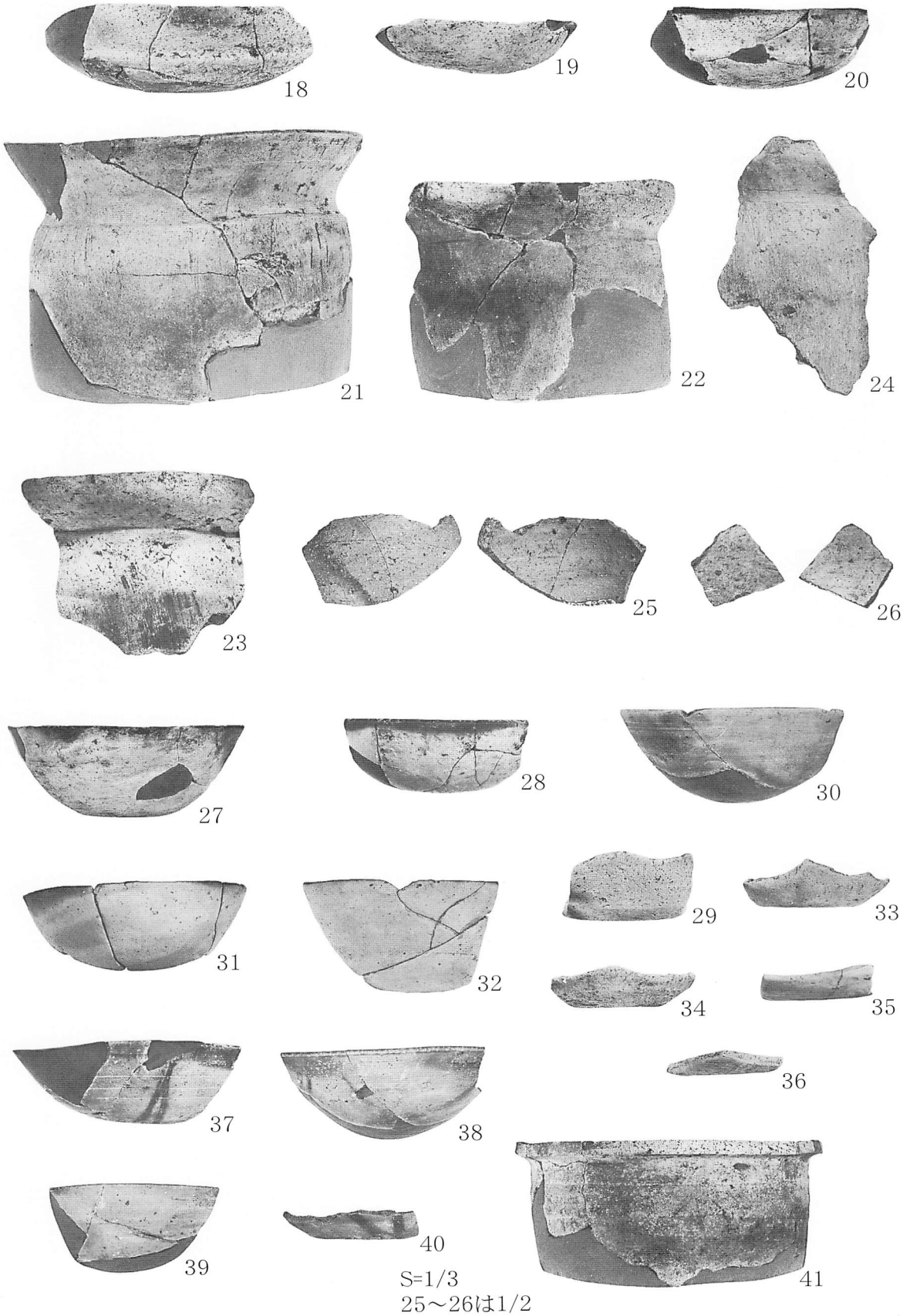


断　　面

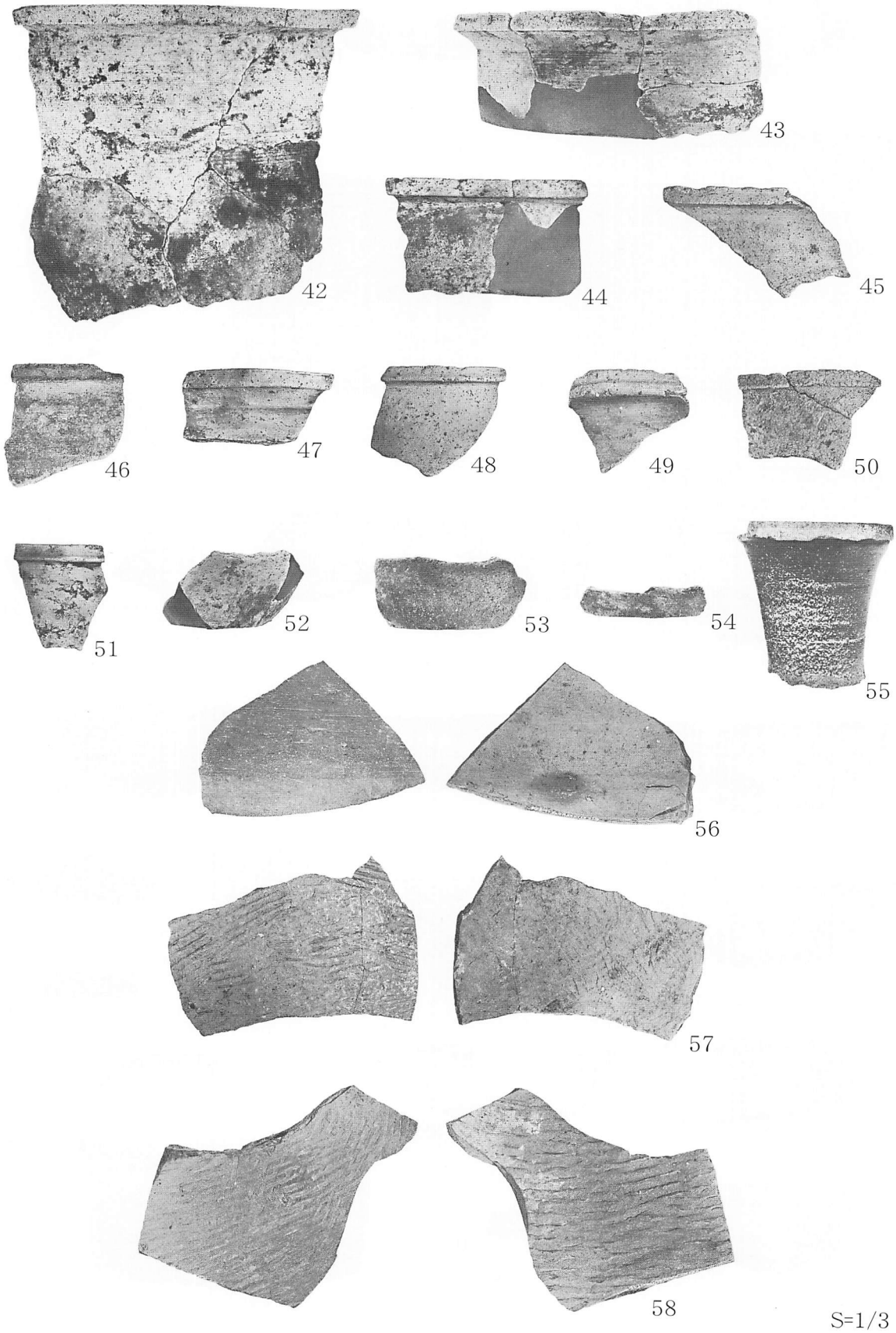
写真図版26　集石遺構



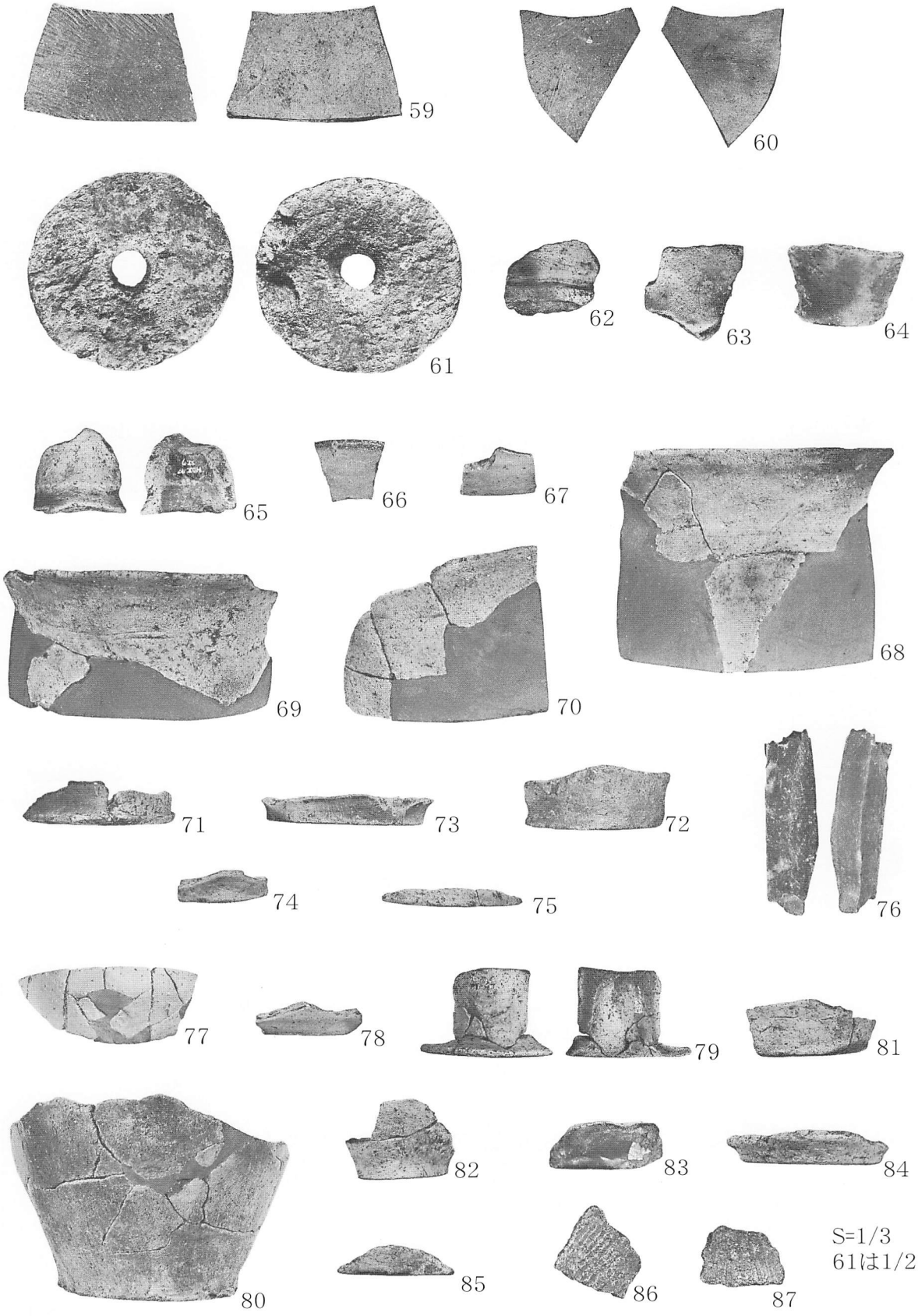
写真図版27　遺構内出土遺物(1)



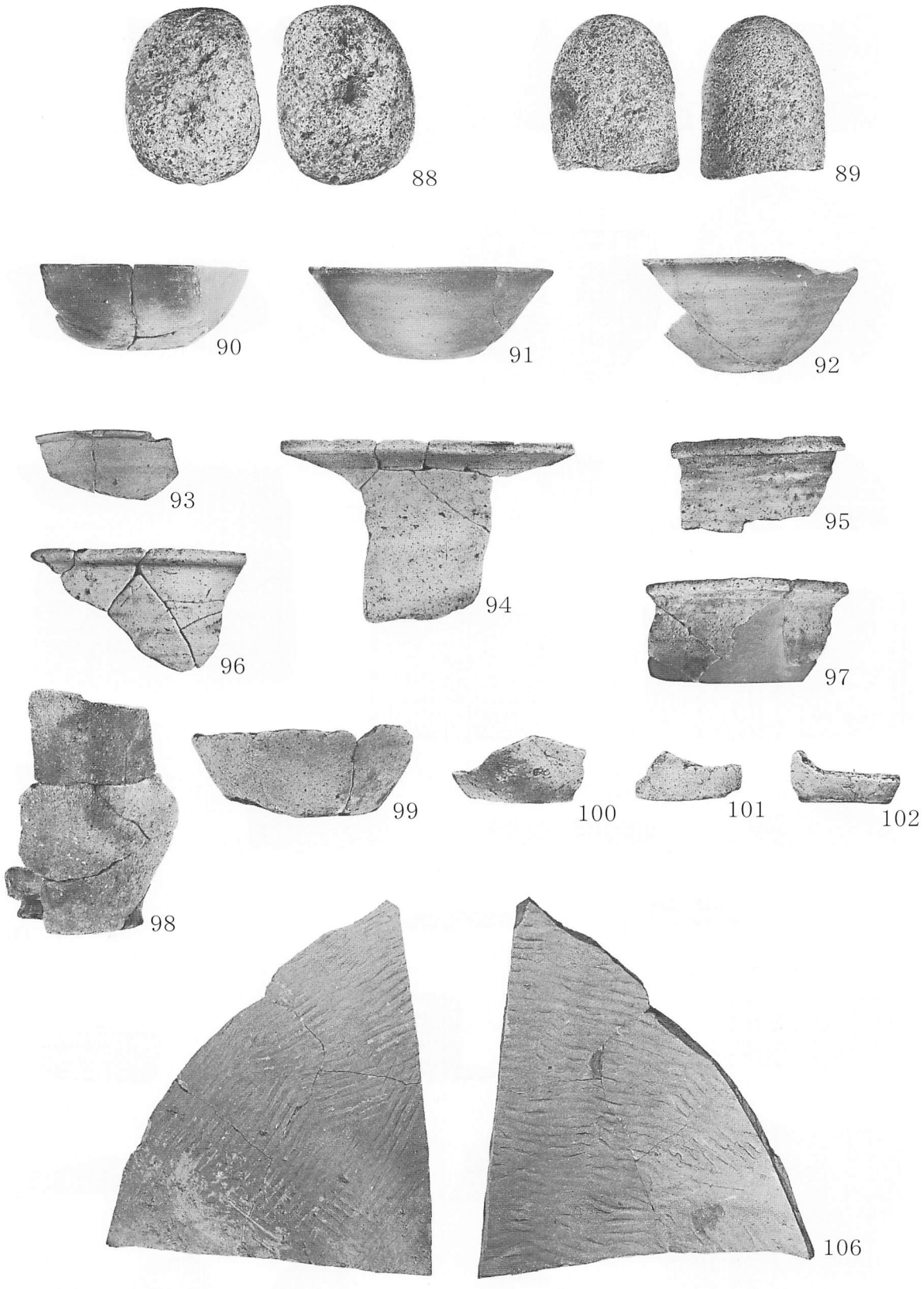
写真図版28　遺構内出土遺物(2)



写真図版29　遺構内出土遺物(3)

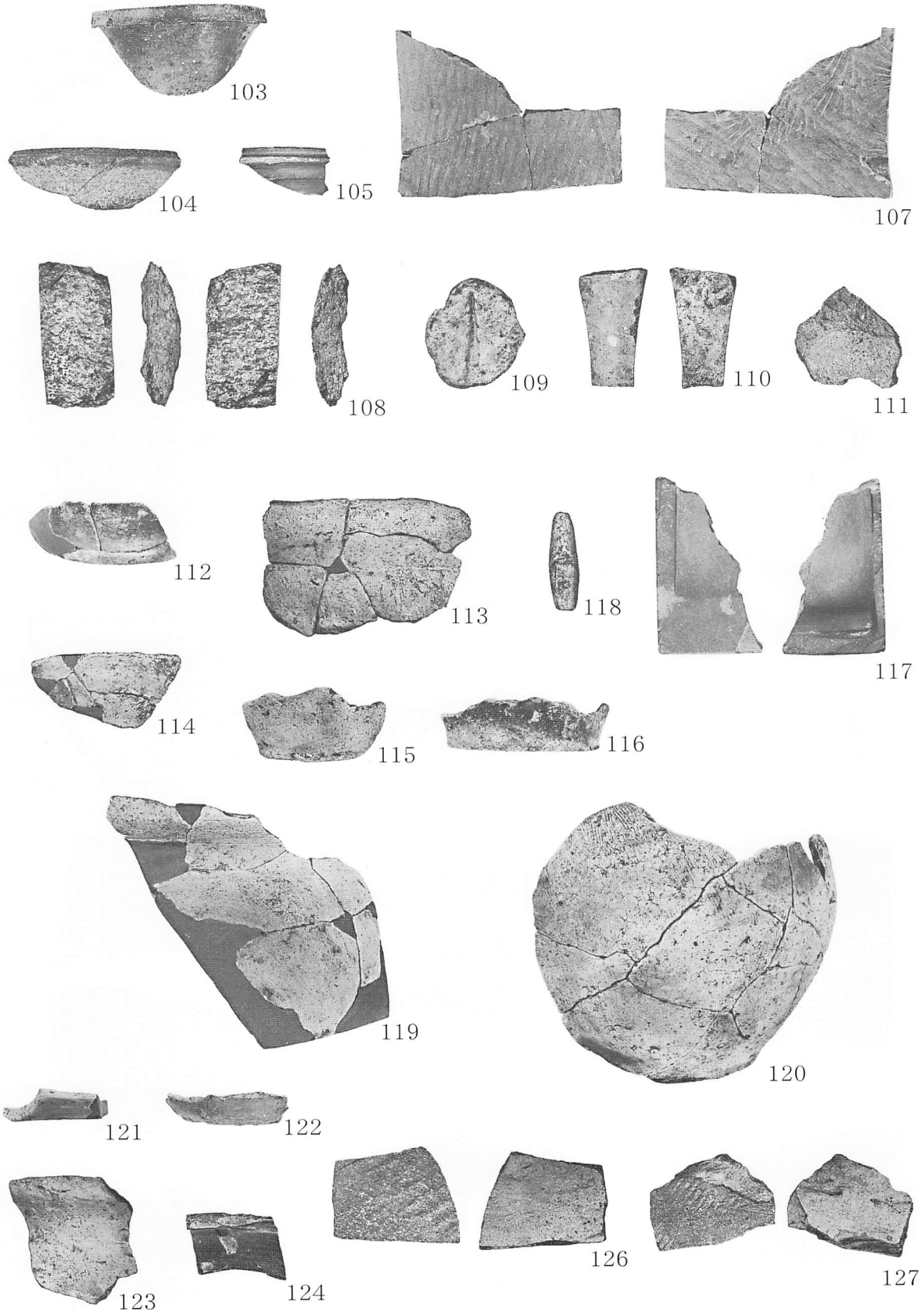


写真図版30　遺構内出土遺物(4)



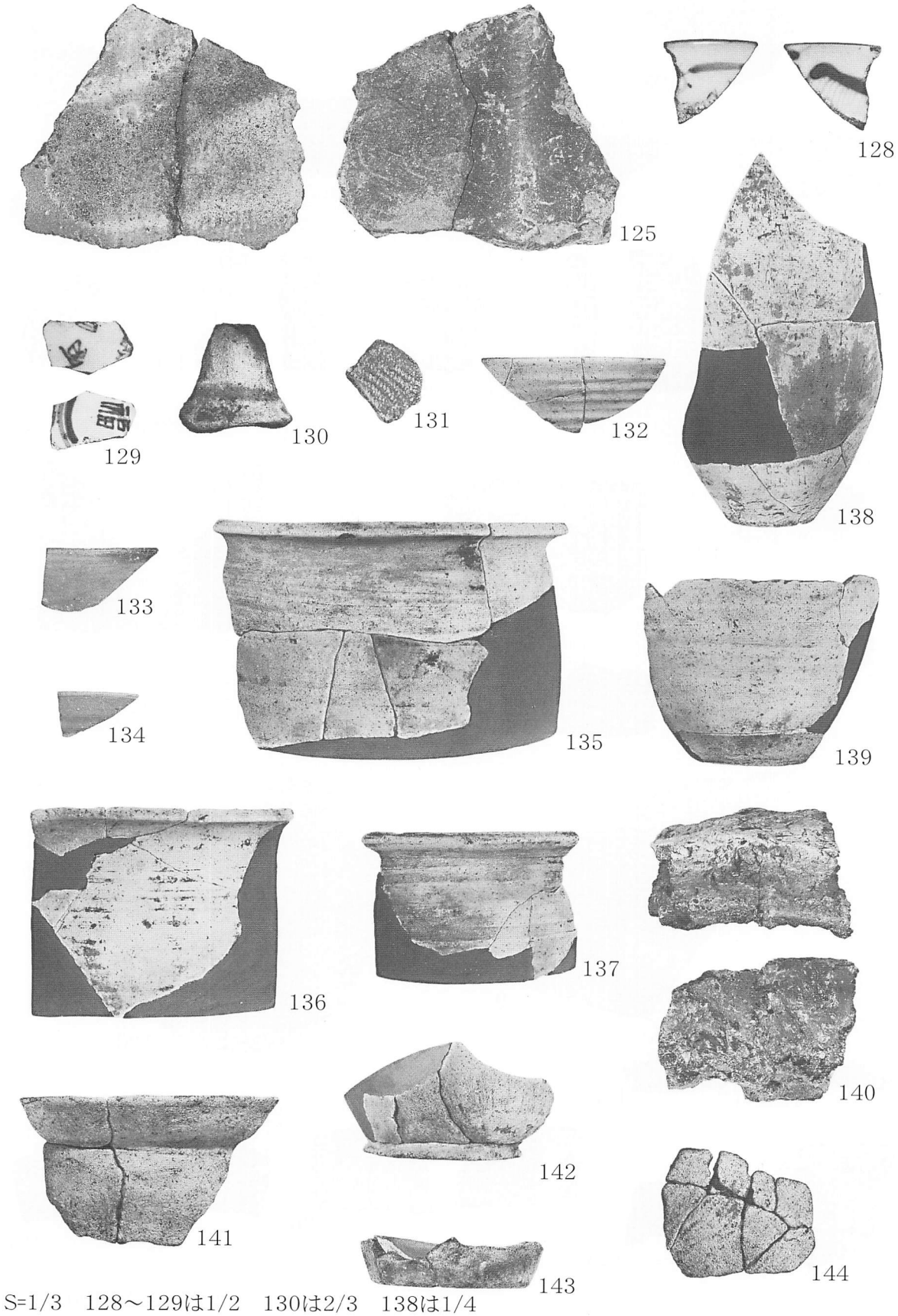
S=1/3

写真図版31　遺構内出土遺物(5)



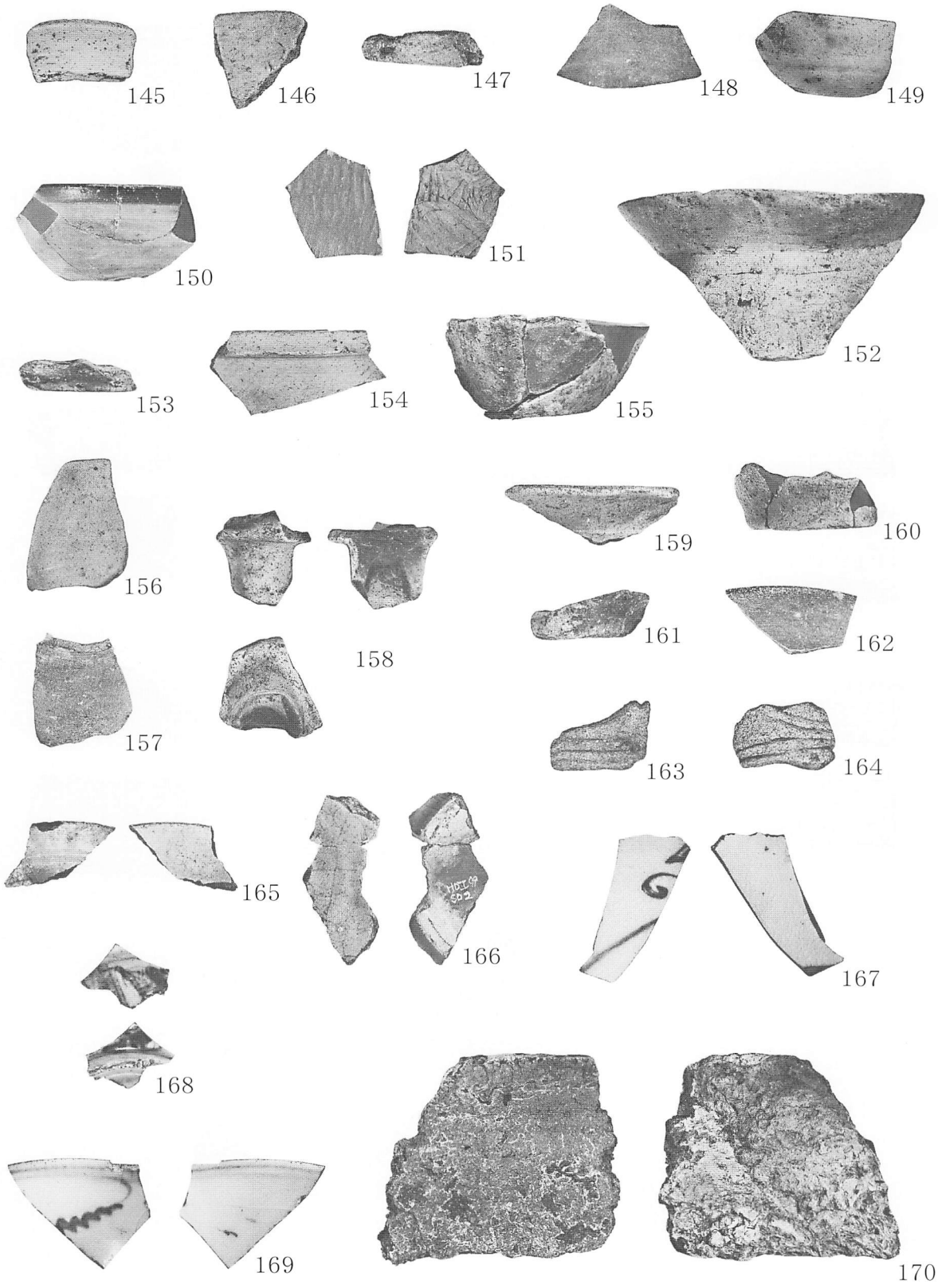
S=1/3　108～109、124は1/2

写真図版32　遺構内出土遺物(6)



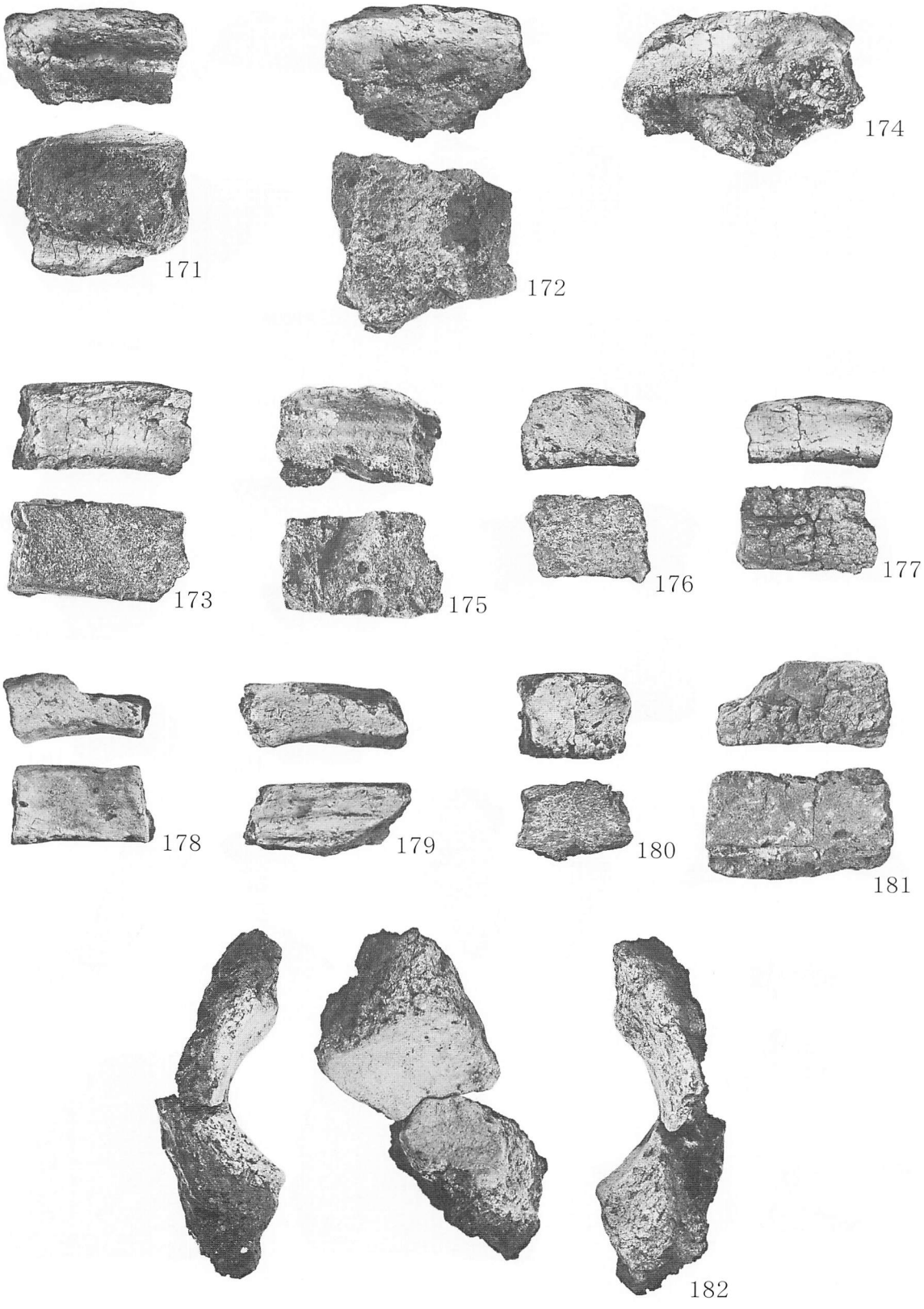
S=1/3　128～129は1/2　130は2/3　138は1/4

写真図版33　遺構内出土遺物(7)



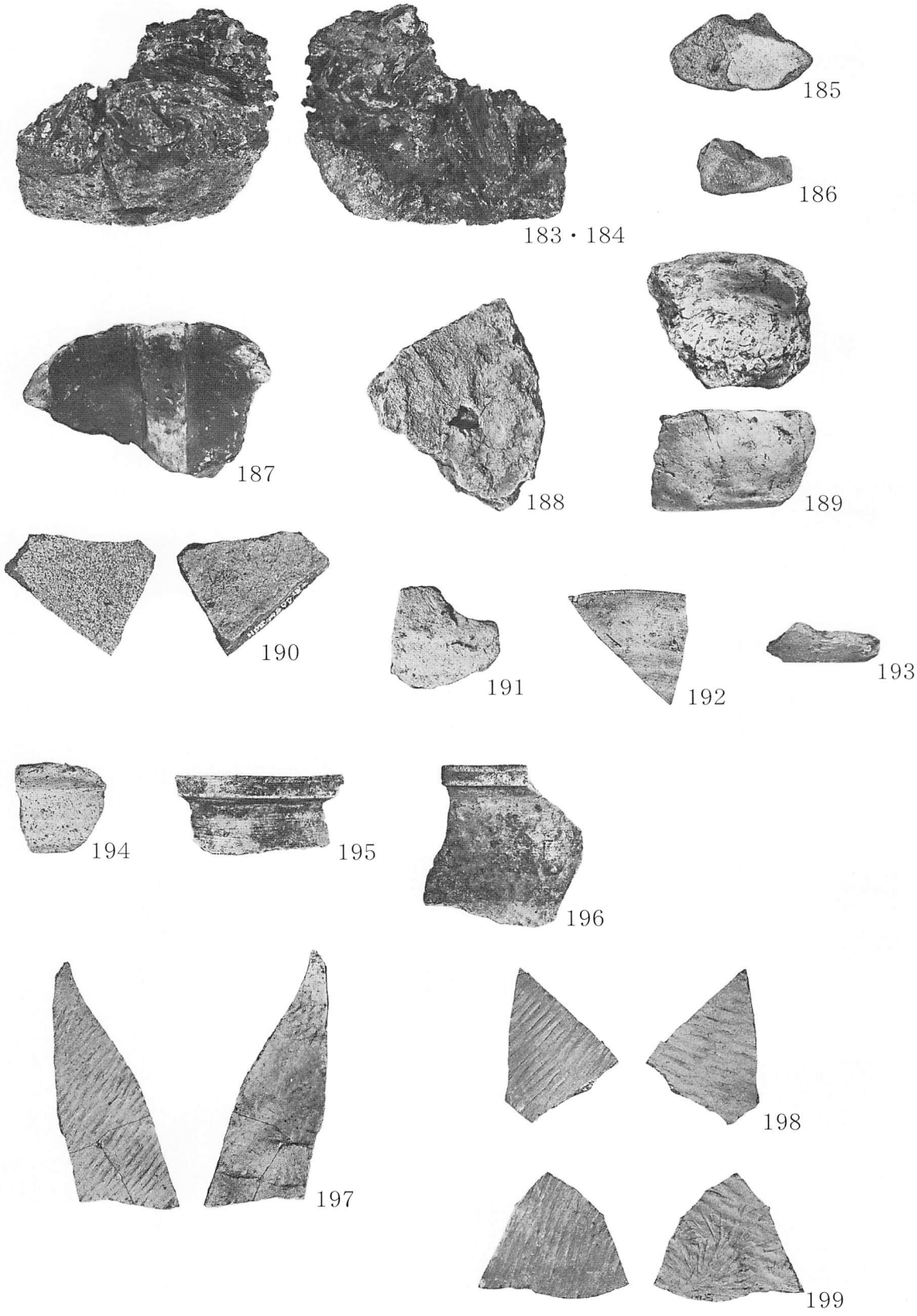
S=1/3　146～148,162,165～169は1/2

写真図版34　遺構内出土遺物(8)



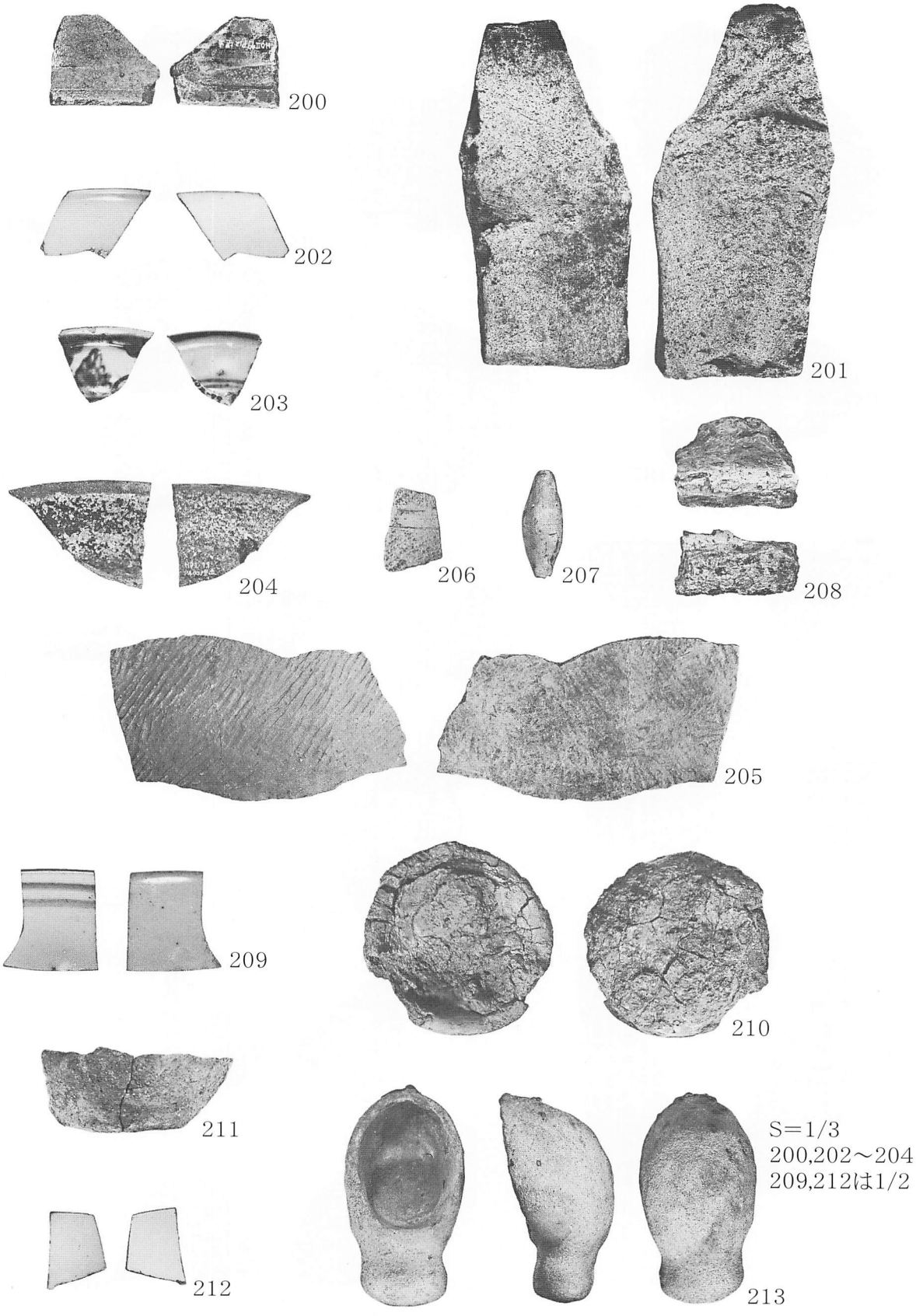
S=1/3

写真図版35　遺構内出土遺物(9)

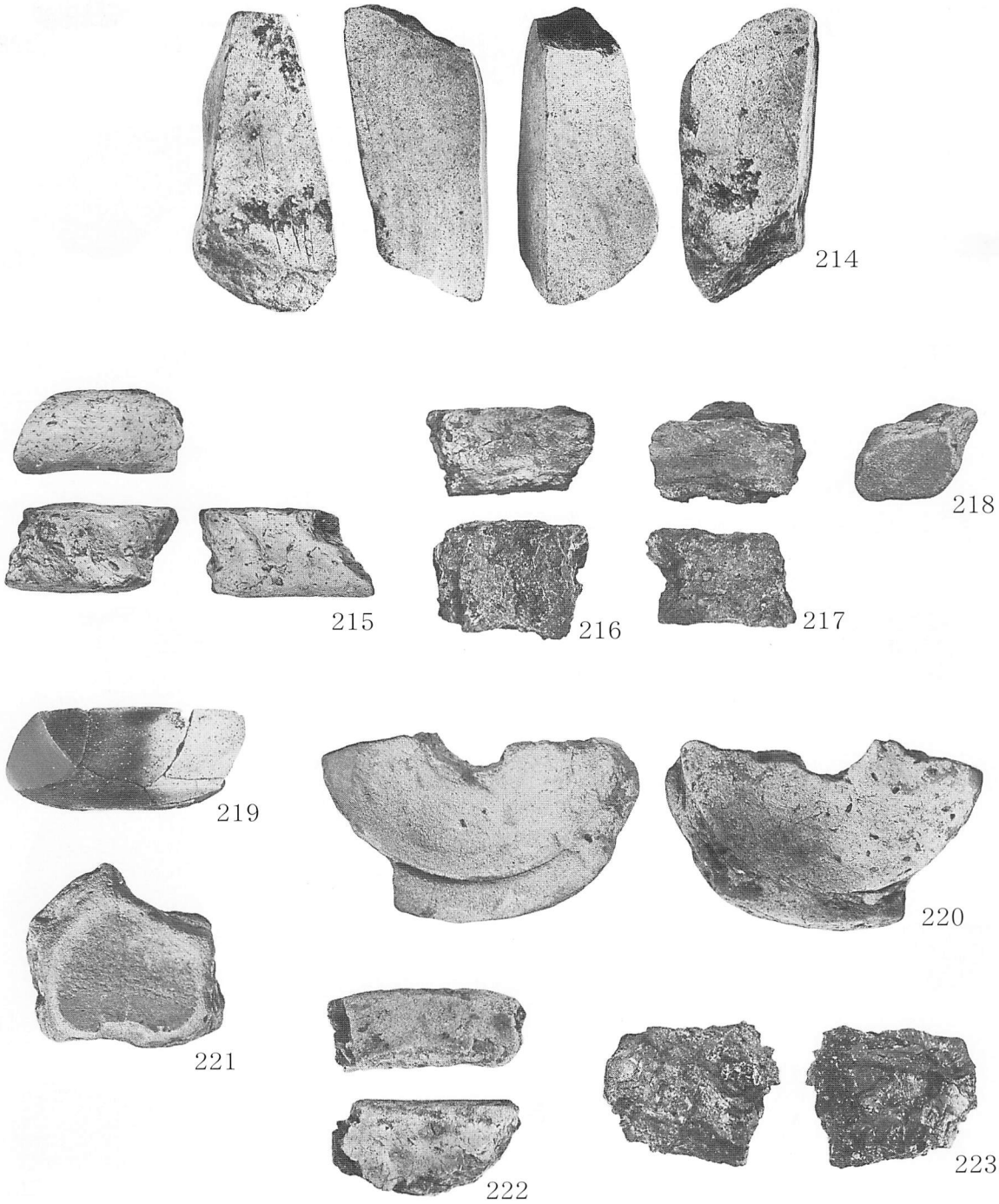


S=1/3　190～192,194は1/2

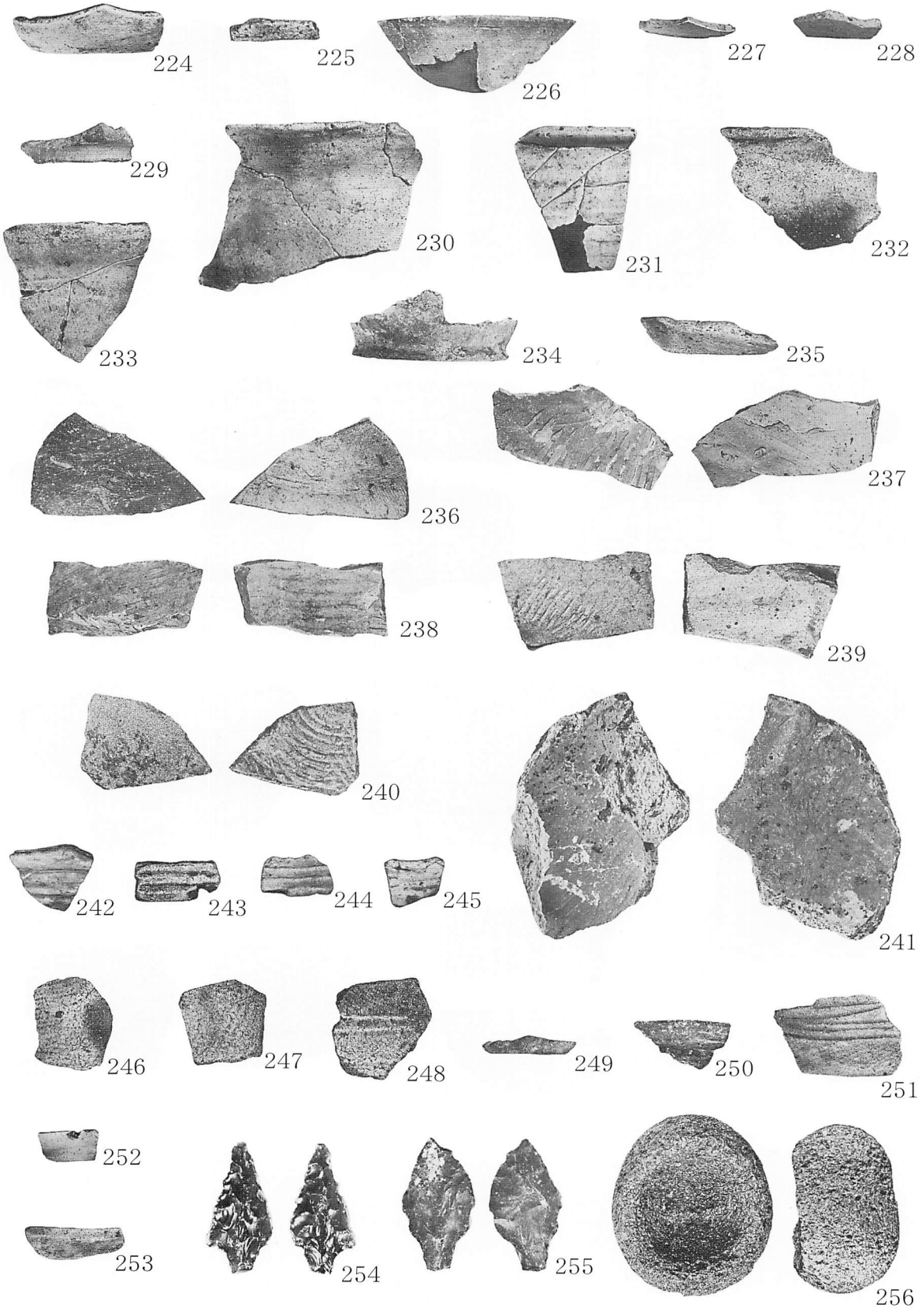
写真図版36　遺構内出土遺物(10)



写真図版37　遺構内出土遺物(11)

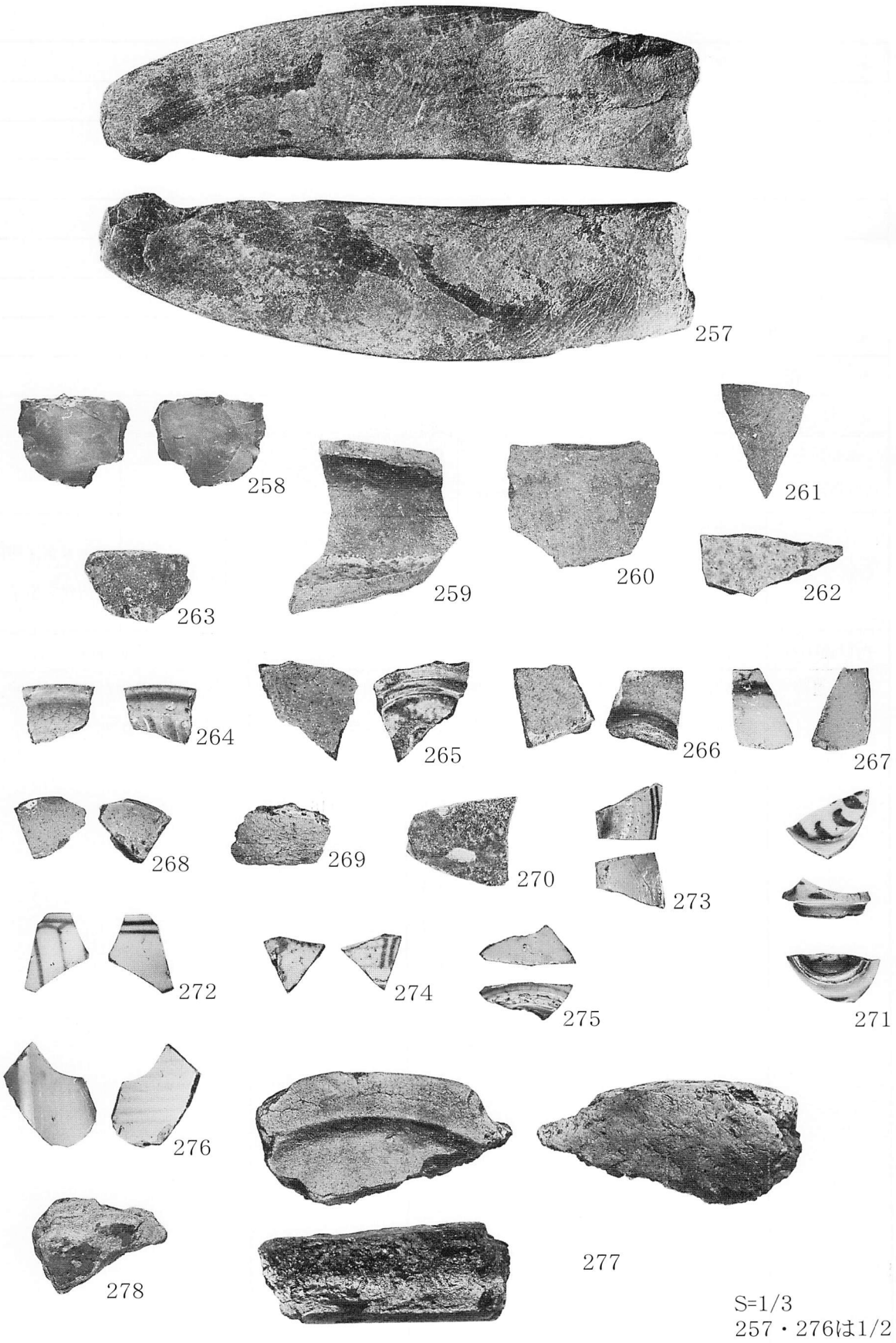


写真図版38　遺構内出土遺物(12)



S=1/3　254,255は1/1

写真図版39　遺構外出土遺物(1)



写真図版40　遺構外出土遺物(2)

報告書抄録

ふりがな	ひがしだてⅡいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	東舘Ⅱ遺跡発掘調査報告書
副書名	水沢家畜保健衛生所建設事業関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第366集
編集者名	朝倉雄大
編集機関	財団法人　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11-185　TEL（019）638-9001
発行年月日	西暦　2000年10月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
東舘（ひがしだて）Ⅱ遺跡	岩手県（いわてけん）水沢市（みずさわし） 佐倉河（さくらかわ）字東舘（あざひがしだて） 39番地他（ばんちほか）	03207	NE16-0315	39° 09′ 38″	141° 09′ 07″	1999. 4.9～6.28	1,340	水沢家畜保健衛生所建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東舘Ⅱ遺跡	集落跡 中世城館跡	奈良時代 平安時代 中世	竪穴住居跡　10棟 竪穴状遺構　1棟 掘立柱建物跡10棟 柱穴列　6基 土坑　25基 溝跡　4条 堀跡　2条 橋脚跡　1基 塀跡　1条 円形周溝　1条 溝状遺構　2条 集石遺構　2基 柱穴　約800基	土師器・須恵器（8世紀中頃～9世紀） 陶磁器（16世紀代の中国産出及び瀬戸・美濃産他） 石器・石製品（石鏃、紡錘車、砥石他） 土製品（土錘他） 鋳物関連遺物（炉壁、鋳型、坩堝、鉄塊ほか） 縄文土器 弥生土器 かわらけ	・鋳物関連遺物が出土（炉壁、鋳型、坩堝、鉄塊ほか）

平成12年度(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

【職員】

所長	伊藤民也	副所長	櫻田次男

〔管理課〕

管理課長	川浪清徳	嘱託	千葉芳夫
管理課長補佐	山崎善光	〃	藤島恵子
主査	立花多加志	〃	新田トヨ
主事	日影睦夫	〃	佐々木光重

〔調査第一課〕

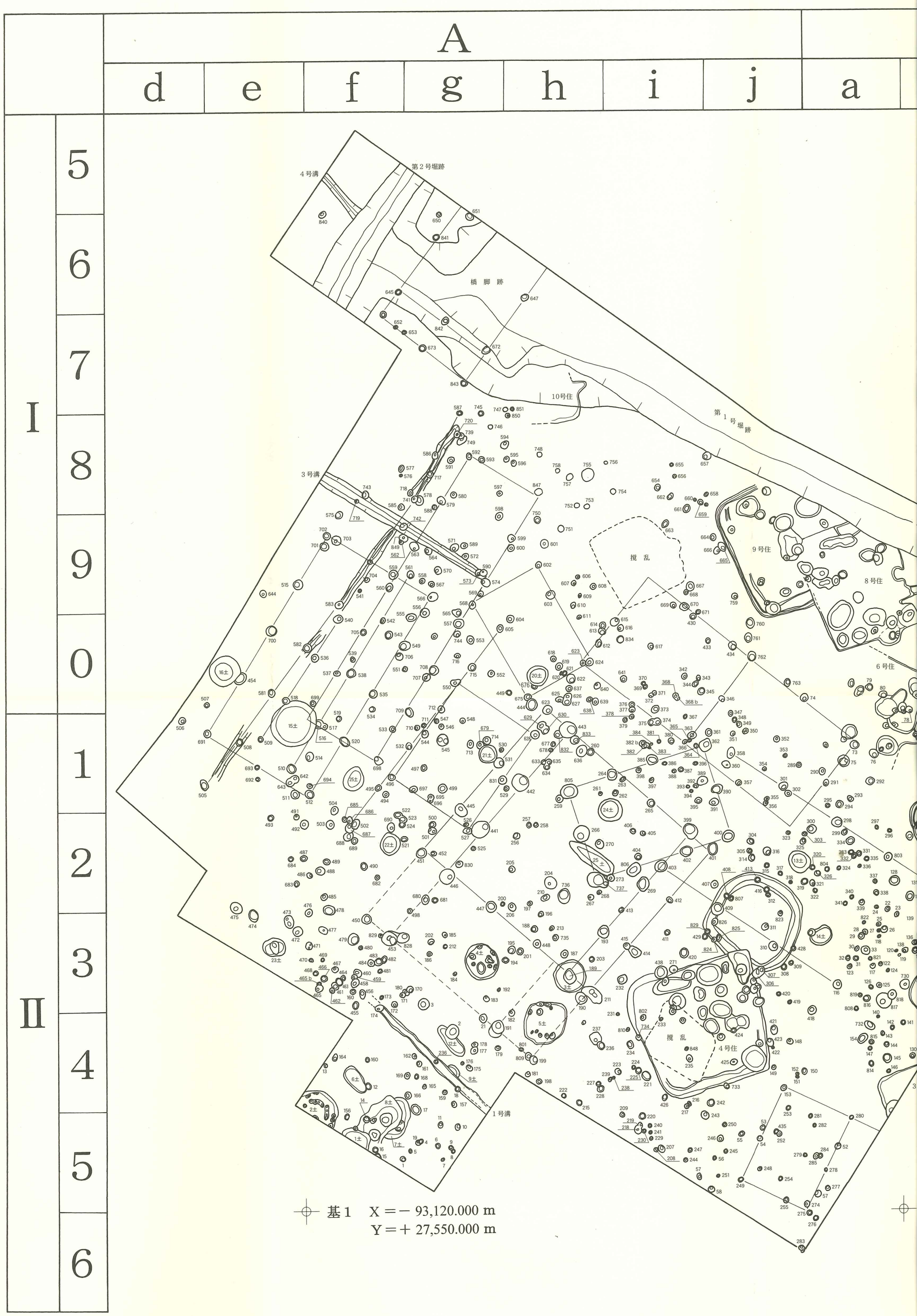
調査第一課長	佐々木勝
調査第一課長補佐	佐々木清文
主任文化財専門調査員	小山内透
文化財専門調査員	赤石登
〃	吉田充
〃	小原眞一
〃	小笠原健一郎
〃	金野進
〃	鳥居達人
〃	金子昭彦
〃	東海林淳美
〃	阿部勝則
〃	羽柴直人
〃	小野寺正之
〃	菅原靖男
〃	長村克稔
〃	溜浩二郎
〃	菊池貴広
〃	村上拓
〃	本多準一郎
〃	北村忠昭
〃	丸山浩治
〃	村木敬
期限付専門職員	小林弘卓
〃	江藤敦
〃	藤原賢徳（6月退職）
〃	菊池賢
〃	井上信介
〃	川又晋
〃	吉田真由美
〃	北田博義

〔調査第二課〕

調査第二課長	高橋與右衛門
調査第二課長補佐	中山重紀
主任文化財専門調査員	高橋義介
〃	金子佐知子
文化財専門調査員	中田迪
〃	工藤道孝
〃	古舘貞身
〃	阿部眞澄
〃	松尾芳幸
〃	工藤徹
〃	前田稔
〃	岩渕計
〃	早坂悟
〃	濱田宏
〃	安藤由紀夫
〃	高木晃
〃	千葉正彦
〃	佐藤淳一
〃	半澤武彦
〃	杉沢昭太郎
〃	中村直美
〃	星雅之
期限付専門職員	鈴木聡
〃	吉川徹
〃	北田勲
〃	吉田里和
〃	原美津子
〃	齋藤麻紀子
〃	島原弘征

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第366集
東舘Ⅱ遺跡発掘調査報告書
水沢家畜保健衛生所建設事業関連遺跡発掘調査
印刷　平成12年10月25日
発行　平成12年10月31日
発　行　（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11-185
ＴＥＬ　(019) 638－9001
ＦＡＸ　(019) 638－8563
印　刷　小松総合印刷株式会社
〒020-0827　岩手県盛岡市鉈屋町15-4
ＴＥＬ　(019) 624－1374
ＦＡＸ　(019) 623－6719

©（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2001


A
d
e
f
g
h
i
j
a
I
II
5
6
7
8
9
0
1
2
3
4
5
6
4号溝
第2号堀跡
橋脚跡
10号住
第1号堀跡
3号溝
9号住
8号住
6号住
撹乱
4号住
1号溝
基1 X＝－93,120.000 m
Y＝＋27,550.000 m

付図　東舘Ⅱ遺跡遺構配

			B						
	i	j	a	b	c	d	e	f	g

図　東舘Ⅱ遺跡遺構配置図